

茨城県教育財団文化財調査報告第19集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 8

平 台 遺 跡

昭和 58 年 3 月

住宅・都市整備公団 茨城開発局  
財団法人 茨城県教育財団

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 8

正 誤 表

ページ	行	誤	正
PL4	上 段		天地逆
PL30	上 段		天地逆



210.231  
R 98  
(NK)

茨城県教育財団文化財調査報告第19集

寄贈	昭和
茨城県教育財団氏	年
	月
	日

# 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書 8

ひら だい  
平 台 遺 跡

昭和 58 年 3 月

住宅・都市整備公団 茨城開発局  
財団法人 茨城県教育財団

83602113

# 序

龍ヶ崎市の北部台地には、住宅・都市整備公団により龍ヶ崎ニュータウンの建設が進められており、その地域内にいくつかの埋蔵文化財が存在することが確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、これらの埋蔵文化財を記録保存するため、住宅・都市整備公団と埋蔵文化財発掘調査事業について委託契約を結び、発掘調査を実施いたしました。

昭和56年度は平台遺跡ほか7遺跡の調査を行い、多くの成果を上げることができました。

昭和57年度には、平台遺跡を整理し、調査結果の報告書を刊行するはこびとなりました。本書が教育・文化の向上の一環として広く活用されますことを希望いたしてやみません。

調査・整理を進めるにあたり、種々御協力・御指導をいただいた住宅・都市整備公団、地元関係者、龍ヶ崎市教育委員会、茨城県教育委員会の各位に心から感謝をいたします。

昭和58年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 大金新一



# 例 言

1. 本書は、住宅・都市整備公団と茨城県教育財団との委託契約に基づいて、昭和56年度に記録保存のための発掘調査を実施した茨城県龍ヶ崎市府馬町所在の平台遺跡の発掘調査報告書である。

なお、町田遺跡、南三島遺跡については、57年度継続調査、仲根台B遺跡は58年度報告書刊行予定である。また、仲根台塚群（3号・4号）、般若塚、薄倉古墳、稻荷峰古墳については昭和56年度刊行の年報Ⅰに委ね、報告にかえることにした。

2. 住宅・都市整備公団の開発地域内平台遺跡にかかわる発掘調査の当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事長	竹内藤男 大金新 一	～昭和56年11月30日 昭和56年12月1日～
副理事長	古橋 靖	
常務理事	川野辺 四郎 綿引 一夫	～昭和57年3月31日 昭和57年4月1日～
事務局長	小林 義久	
調査課長	寺内 寛	
企画管理班	班 長	～昭和57年5月31日 昭和57年6月1日～
	主任調査員	
	主 事	
	〃	
調査第二班	班 長	昭和56年度調査・昭和57年度執筆
	主任調査員	〃
	〃	〃
	調 査 員	〃
	主任調査員 調 査 員	〃 〃

3. 本書での遺構は次のとおりで、記号をもって表示することとした。

SI—住居跡      SK—土壌      P—ピット

4. 本書における土層及び土器の色相は、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社昭和42年発行を用いた。

5. 遺構実測図中においては、炉跡・焼土など下記のように表示した。

炉跡       焼土 



# 目 次

序

例言

目次

第1章 調査の経緯	1
1 調査にいたる経過	1
2 調査の経過	3
(1) 調査方法	3
(2) 調査経過	3
第2章 位置と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
第3章 遺構と遺物	8
1 住居跡	9
2 土 壙	149
第4章 まとめ	159
図 版	P L 1

# 第1章 調査の経緯

## 1 調査にいたる経過

龍ヶ崎ニュータウン建設計画は、昭和46年1月に「龍ヶ崎牛久都市計画事業」として市街地開発事業に関する都市計画が決定され、事業名を「北竜台及び龍ヶ岡特定土地区画整理事業」と称し、当初、日本住宅公団が計画した。しかし昭和51年4月、宅地開発公団茨城開発局の設立により事業を引継ぎ実施することになった。なお宅地開発公団は、昭和56年10月1日付をもって日本住宅公団と統合し、新たに「住宅・都市整備公団」として発足した。これに伴い従来の契約がそのまま同公団に承継されることになった。事業面積は671.5ha、その現況は、北竜台においては山林原野が約70%、畑および水田等の耕地は約24%を占め、龍ヶ岡において山林原野は約50%、畑・水田等の耕地は40%以上を占めている。

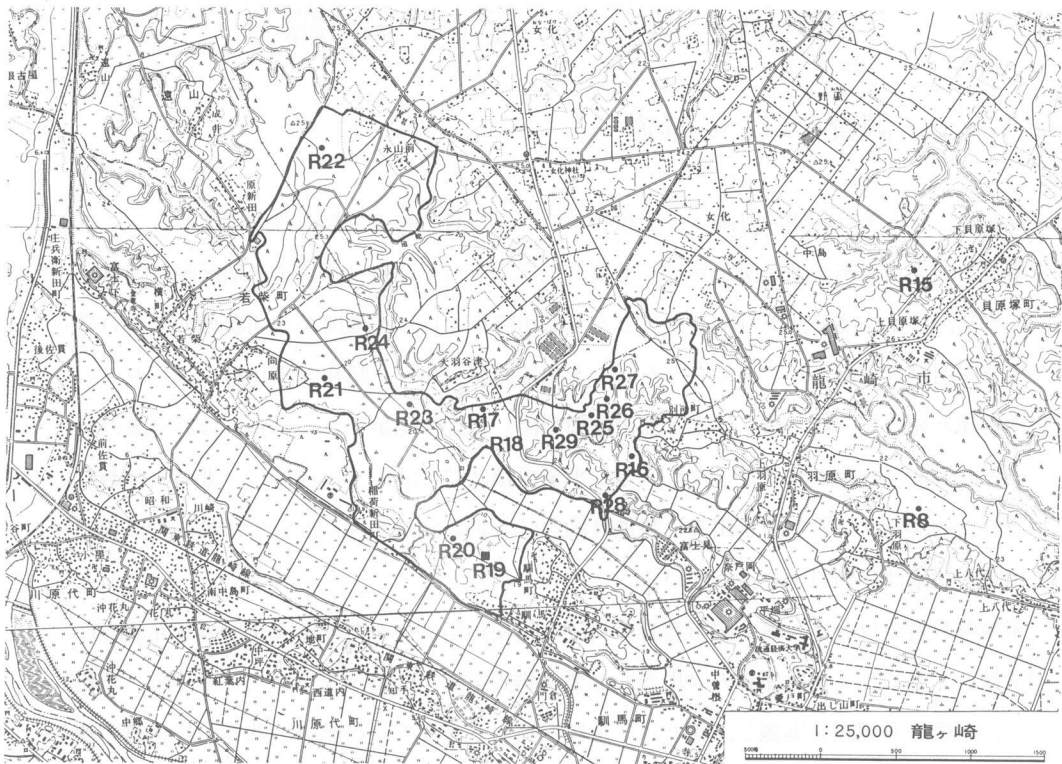
茨城県教育委員会は、龍ヶ崎市教育委員会と昭和45年に行った埋蔵文化財の分布調査に基づき22遺跡について、文化財保護の立場から必要な措置を講ずる協議を重ねた。その後、昭和51年7月に、再度分布調査を実施し、新たに7遺跡が追加された。その結果、北竜台15遺跡・龍ヶ岡14遺跡について関係機関で再協議を行い、29遺跡のうち26遺跡については、現状維持が困難なので記録保存の措置を講ずることになった。

茨城県教育財団は、茨城県教育委員会の指導により、県内各地の大規模開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査の需要の増加に対応するため、昭和52年4月、本部に調査課を新設し、「北竜台及び龍ヶ岡土地区画整理事業の施行に係る埋蔵文化財発掘調査」の業務委託契約を当時の宅地開発公団と締結し、龍ヶ崎ニュータウン計画区域内の埋蔵文化財発掘調査を継続して進めてきた。

昭和56年度の発掘調査業務は、北竜台で平台遺跡・仲根台B遺跡・仲根台塚群（3号・4号）、龍ヶ岡地区において町田遺跡・南三島遺跡（1区・2区）・般若塚、龍ヶ岡工業団地造成予定地内薄倉古墳・稻荷峰古墳の発掘調査を行った。このうち平台遺跡（1区）はグリット方式による遺構確認調査（25%）を進めてきたが、遺構等の確認がなされなかったため6月末日をもって調査を終了した。

仲根台B遺跡については、昭和58年度整理及び報告書刊行とし、町田遺跡・南三島遺跡については昭和57年度継続して発掘調査を行うことになった。また、仲根台塚群等の調査結果については昭和56年度刊行年報Ⅰに掲載した。なお、発掘調査は調査第2班が担当した。





第1図 遺跡分布図

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	発掘調査	備考
R 8	南三島遺跡	羽原町南三島	集落跡	縄文	昭和56・57年度調査	
R15	町田遺跡	貝原塚町町田	集落跡	縄文	昭和56・57年度調査	
R16	行部内遺跡	別所町行部内	集落路・貝塚	縄文	現状保存	
R17	大羽谷津遺跡	若柴町大羽谷津	集落跡	古墳	昭和54年度調査	昭和55年度整理・報告書刊行
R18	廻り地A遺跡	駒馬町廻り地	集落跡	縄文・古墳	昭和54・55年度調査	昭和56年度整理・報告書刊行
R19	平台遺跡	駒馬町平台	集落跡	縄文・古墳	昭和56年度調査	昭和57年度整理・報告書刊行
R20	成沢遺跡	駒馬町成沢	集落跡	縄文・古墳	昭和55年度調査	昭和56年度整理・報告書刊行
R21	松葉遺跡	若柴町松葉	集落跡・塚群	古墳・中世以降	昭和52年度調査	昭和53年度整理・報告書刊行
R22	庚申塚遺跡	若柴町庚申塚	集落跡	縄文・古墳	消滅	
R23	沖餅遺跡	若柴町沖餅	集落跡	先・縄文・古墳	昭和53年度調査	昭和54年度整理・報告書刊行
R24	赤松遺跡	若柴町赤松	集落跡	縄文・古墳・近世	昭和53・54年度調査	昭和54年度整理・報告書刊行
R25	打越A遺跡	別所町打越	集落跡	縄文	昭和54年度調査	昭和55年度整理・報告書刊行
R26	打越C遺跡	別所町打越	集落跡	縄文	昭和54年度調査	昭和55年度整理・報告書刊行
R27	ウツプタ遺跡	別所町ウツプタ	集落跡	縄文	昭和54年度調査	昭和55年度整理・報告書刊行
R28	仲根台塚群	駒馬町仲根台	塚(1.2.3号)群	縄文・中世以降	昭和54年度調査	昭和55年度整理・報告書刊行
	仲根台B塚群	〃	塚(4.5.6号)群		昭和56年度調査	
	仲根台B遺跡	〃	集落跡	縄文	昭和56年度調査	
R29	廻り地B遺跡	駒馬町廻り地	集落跡	縄文	昭和54年度調査	昭和55年度整理・報告書刊行

## 2 調査の経過

### (1) 調査方法

平台遺跡（第1次調査区）の調査対象面積は20,000㎡で、昭和56年4月1日から発掘調査を開始した。

遺構確認のためグリッド方式による発掘（25%）を行ったが遺構等の検出がなされなかったため、6月末日をもって調査を終了した。

11月16日から平台遺跡（第2次調査区）の調査を開始した。当遺跡は、平台遺跡（第1次調査区）の南側に位置しており調査対象面積は11,588㎡で現況は畑である。

1次・2次調査区の発掘調査に際しての調査区設定の基準杭は、平面直角座標系・第Ⅸ座標、X軸－8.900km、Y軸＋30.540kmの交点を通る軸線を基準（C3）にして、東西、南北、各々40mずつ平行移動して、大調査区を設定した。さらに大調査区を4m四方の小調査区に分割した。大調査区の名称は、北から「A」、「B」、「C」……として西から東へ「1」、「2」、「3」……とした。

小調査区は北から南へ「a」、「b」、「c」……「i」、「j」とし、西から東へ「1」、「2」、「3」……「9」、「0」の数字で表し、小調査区の名称を「A1a1」・「B2b2」のように表記した。調査方法は、茨城県教育財団の調査要項に基づいて実施した。以下発掘調査の経過について記していきたい。

### (2) 調査経過

#### （第1次調査区）

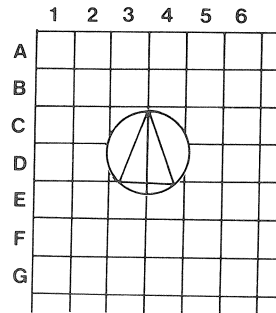
昭和56年4月1日～4月21日

調査区域の確認、作業員募集、雑木伐開、測量、現場事務所の設置等、発掘調査における事前準備を進める。

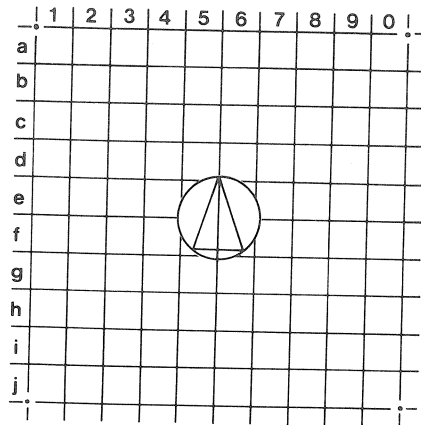
4月22日～4月27日

地鎮祭（仲根台・平台・南三島合同）、調査杭打ち、草刈り、全景の写真撮影、鉄骨タワー組立て等諸準備を行う。

4月28日～6月30日



第2図 大調査区名称図



第3図 小調査区名称図



表土除去（グリット方式）開始，4 m 四方グリット（25.6%）方式による発掘調査をしたが遺構が検出されなかったため，調査を終了した。

（第2次調査区）

11月16日～12月8日

佐野・鈴木両調査員，第2次調査区エリアの確認に入る。草刈り・伐開作業及びテストピットを設定する位置を検討後，掘り込みを開始する。また，土層セクションの実測等を併せて行う。

12月10日～1月28日

重機導入による表土除去作業，遺構の確認（グリット発掘）作業を進める。住居跡の精査に入る。石井・渡辺調査員，平台遺跡調査に合流する。

昭和57年1月28日～3月16日

住居跡，土壌の精査は順調に進む。2月中旬から，中沢・人見調査員南三島遺跡から平台遺跡調査に合流する。

3月18日～3月31日

土器洗浄・注記・全景写真撮影等を含め，遺構精査のまとめの段階に入る。31日をもって全調査を終了する。なお，各遺構の調査分担については次表のとおりである。

調査員	住居跡	土 壙
石井 ・ 渡辺	第1号～第24号 第27号 第43号 第45号～第47号	第1号～第14号 第16号
中沢 ・ 人見	第35号～第42号 第44号	第15号
佐野 ・ 鈴木	第25号・第26号 第28号～第34号	
渡辺	遺構写真撮影者	

## 第2章 位置と環境

### 1. 地理的環境

平台遺跡は、茨城県龍ケ崎市馴馬町平台214番地の1ほかに所在する。

龍ケ崎市は、茨城県の南端部に位置し、千葉県印西町と利根川をはさみ対岸の関係にある利根町に隣接している。国鉄常磐線佐貫駅から私鉄関東鉄道龍ケ崎線が東へ延び、その終点が龍ケ崎市の中心市街地となっている。また、市街地及びその周辺は、低地（標高約5m）で、幅約10kmの沖積地となっており県内有数の穀倉地帯をなしている。

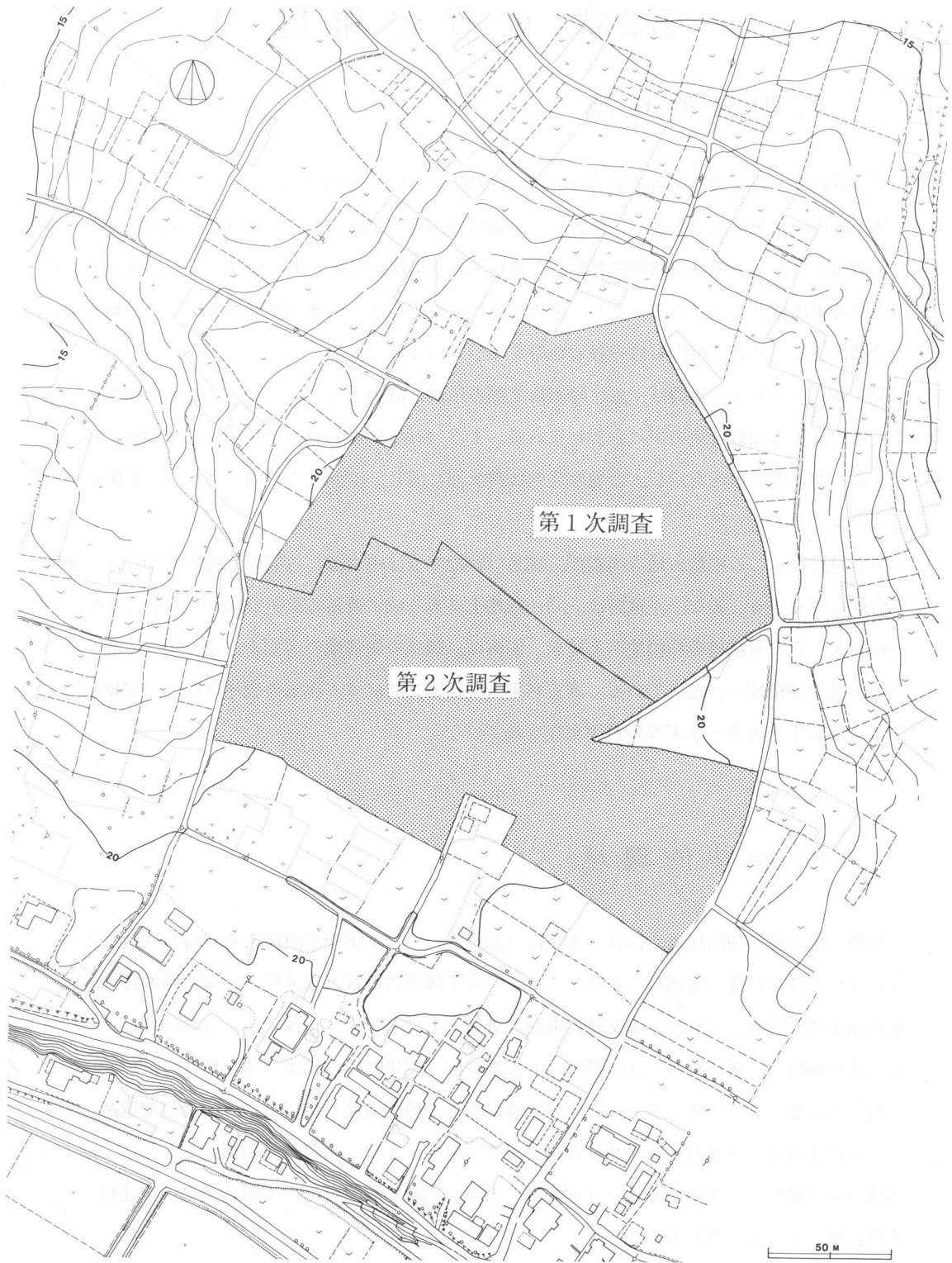
龍ケ崎ニュータウン建設は、龍ケ崎市街北部の地域に計画されているが、この一帯は筑波台地から東に延びる稲敷台地の中に含まれている。また、台地の標高はほぼ20～30mの平地であるが、東に高く西に低い形状を示し、台地の北側は霞ケ浦に面し、南側は小貝川・利根川をも眼下に見ることができる。

平台遺跡は、この稲敷台地の南端部、馴馬の台地のほぼ中央部に位置し、標高約20mほどの舌状台地に所在する。また、本遺跡は、同一台地上にある成沢遺跡の東方280mと近接し、北側はやや傾斜をしながら馴馬の沖積地へと続き、南側は、馴馬の集落地の南端から急傾斜して龍ケ崎市街地を含む沖積地へと続いている。調査対象区域は31,588㎡で、現況の大半は畑で一部雑種地である。落花生・大麦・小麦等の耕作がなされていた。

### 2. 歴史的環境

稲敷台地の霞ケ浦沿岸近くには、東京都（品川区）にある国指定史跡大森貝塚に匹敵して周知されている陸平貝塚（美浦村）をはじめとし、舟子塚原古墳群（美浦村）・阿波崎城跡（東村）県指定史跡が所在している。縄文時代遺跡の著名なものとして、椎塚貝塚（江戸崎町）・明神貝塚（江戸崎町）・蓮沼貝塚（江戸崎町）・広畑貝塚（桜川村）・福田貝塚（東村）・坂本遺跡（牛久町）等が知られている。なお、弥生時代遺跡では、殿内遺跡（桜川村）・尾島祭祀遺跡（桜川村）・宮本遺跡（美浦村）・小馬様台遺跡（牛久町）、また、古墳時代の遺跡としては、富士塚古墳（江戸崎町）・大神山古墳（江戸崎町）・大形古墳（阿見町）・木原古墳群（美浦村）・愛宕脇古墳（牛久町）等もある。

龍ケ崎ニュータウン建設に伴って、昭和53年度当教育財団が発掘調査した沖餅遺跡からは、先土器時代の遺物が出土したほか、縄文時代中期及び古墳時代前期の遺構が検出されており、昭和



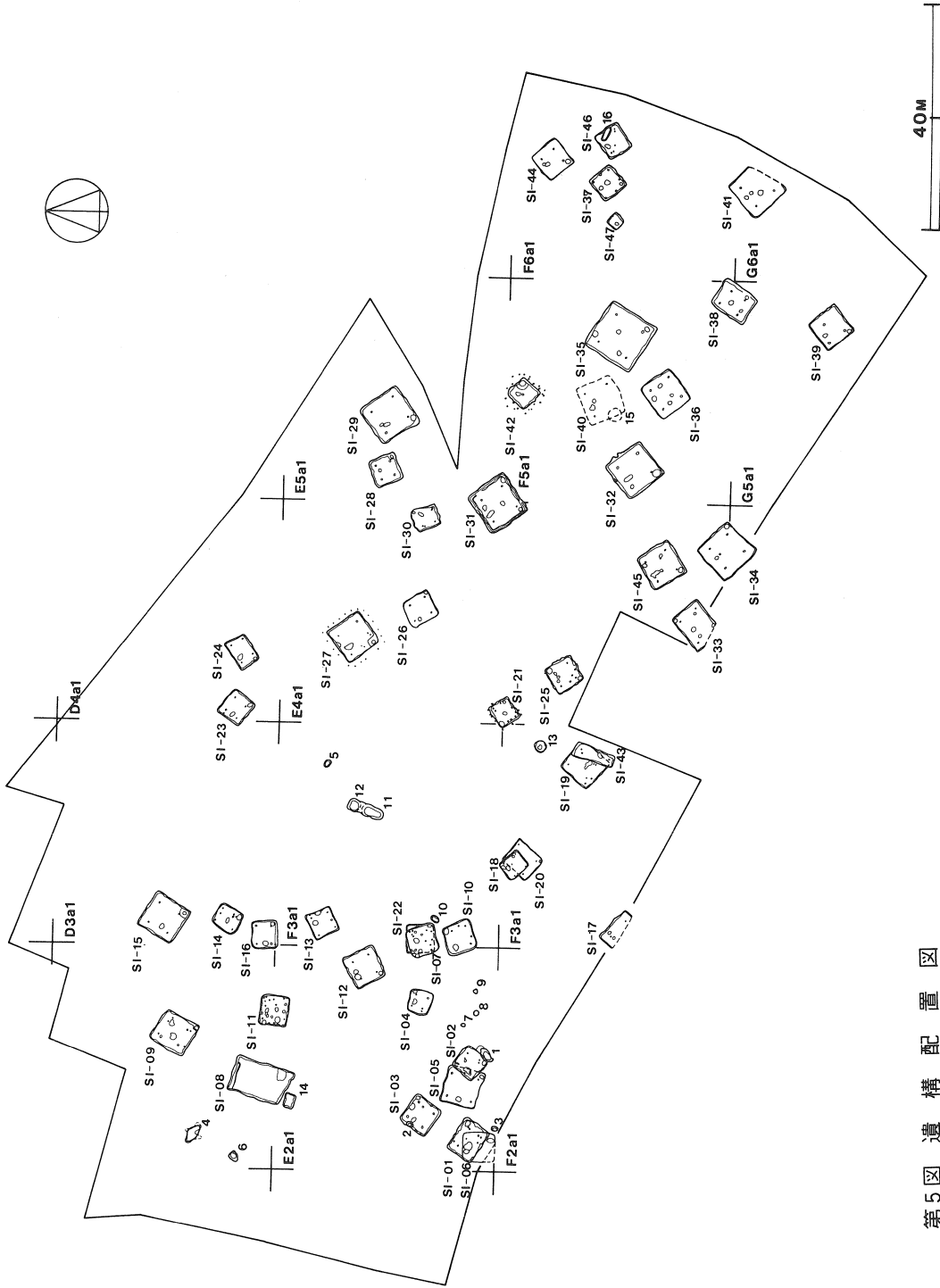
第4図 平台遺跡地形図

54年度調査した赤松遺跡からは、縄文時代中期のフラスコ状土壙を伴う集落跡が検出されている。また、同年調査した打越A遺跡・打越C遺跡・ウツブタ遺跡も縄文時代にかかわる集落跡であり、昭和54・55年調査した廻り地A遺跡は、地点貝塚を伴う縄文時代（中期末から後期初頭）の集落を考える上で、考古学上注目された遺跡である。

弥生時代から奈良・平安時代にかけての集落跡の遺跡としては、外八代遺跡が周知されている。古墳時代にあっては、今回の平台遺跡が該当するが、土師式土器（和泉期）を多量に伴う遺構が検出されている。また、松葉遺跡が古墳時代前期の集落を伴っていた。このほかにも、中世の城館跡として知られている馴馬城跡（県指定史跡）・若柴城跡・屋代城跡・貝原塚城跡・外八代城跡・泉城跡・龍ヶ崎城跡・長峯城跡・高井城下城跡・七曜城跡等の存在が明らかである。また、このニュータウン予定地の内外には「塚」と呼ばれる墳丘が多数発見されており、本年度発掘調査分5基を含め10基に余る数の調査を行った。その性格及び築造の年代については、遺構・遺物の検出がなされず不明であった。しかしながら、民俗学的見地からも「塚」の外形・伝承・古文書等の資料をもとに今後広い視野から考察することも大切であろう。

以上、龍ヶ崎市内の北部につらなる台地には原始・古代・中世と数々の遺跡が横たわり、当時をしのぶ文化遺産をいだいているのである。これら、文化財を将来にわたり保護・保存することがわれわれ現代人の責務であることはいうまでもない。

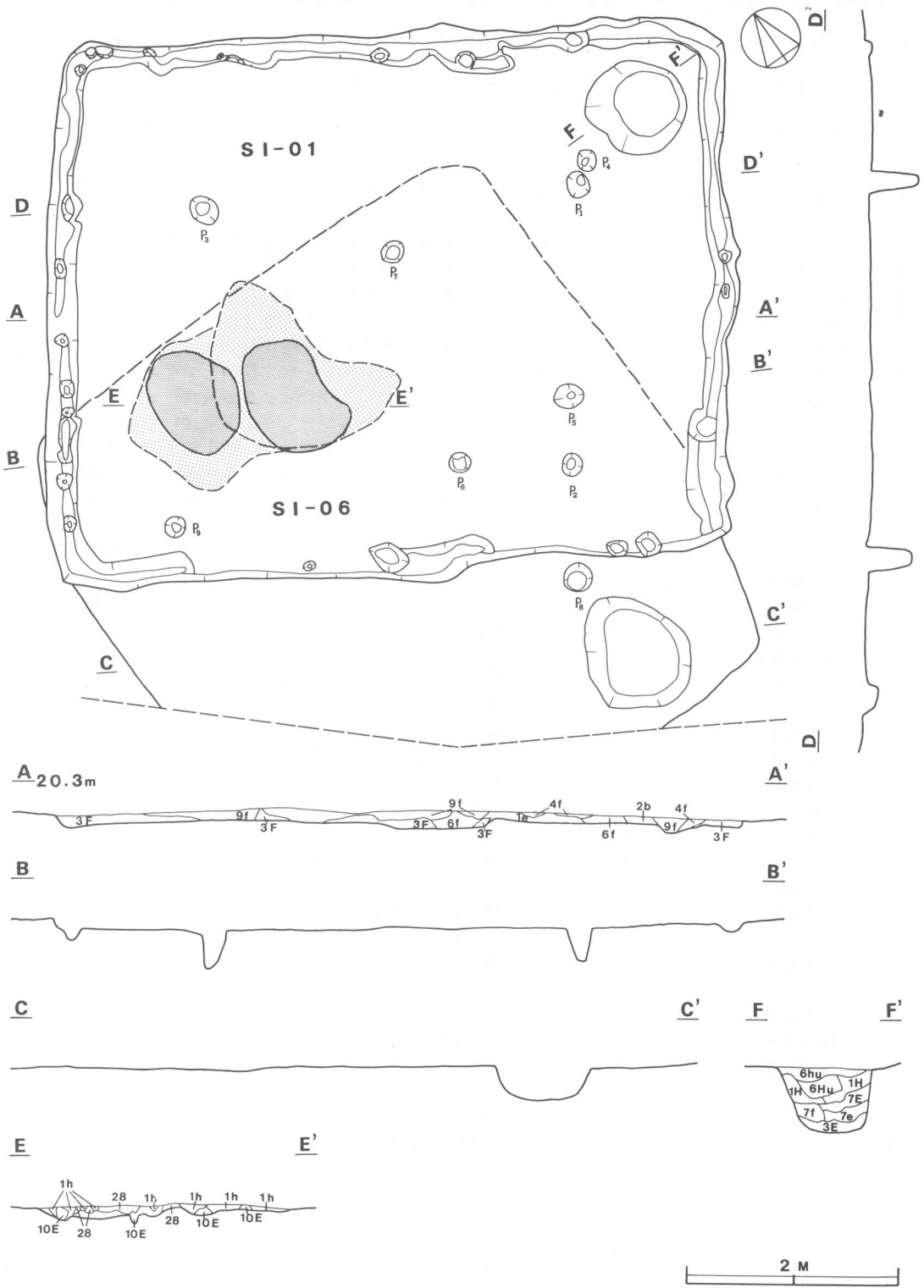
# 第3章 遺構と遺物



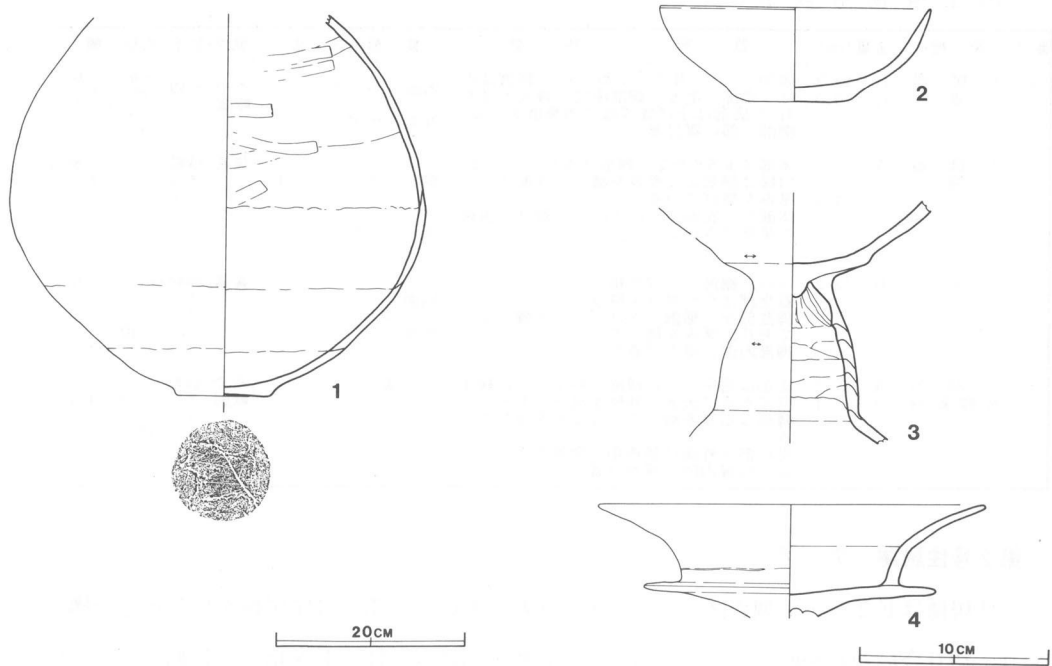
第5図 遺構配置図

本遺跡の中で検出された住居跡・土壌の土層観察は、「新版標準土色帖」を使用した。その後、整理の段階で土層を次のように分類して、図中にアラビア数字とアルファベットで表現した。土層の締り・粘性等については、遺構の説明文の中で述べることにした。

色	調	含	有	物
1. 暗褐色土	Hue7.5YR3/4	A	ローム粒子を多量含む	
2. 暗褐色土	〃 3/3	a	ローム粒子を少量含む	
3. 褐色土	〃 4/4	B	ローム粒子・焼土粒子を多量含む	
4. 褐色土	〃 4/3	b	ローム粒子・焼土粒子を少量含む	
5. 褐色土	〃 4/6	C	ローム粒子・炭化粒子を多量含む	
6. 極暗褐色土	〃 2/3	c	ローム粒子・炭化粒子を少量含む	
7. 黒褐色土	〃 2/2	D	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を多量含む	
8. 黒褐色土	〃 3/2	d	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を少量含む	
9. 黒褐色土	〃 3/1	E	ローム粒子・ロームブロックを多量含む	
10. 明褐色土	〃 5/8	e	ローム粒子・ロームブロックを少量含む	
11. 明褐色土	〃 5/6	F	ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を多量含む	
12. にぶい褐色土	〃 5/3	f	ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子を少量含む	
13. 灰褐色土	〃 4/2	G	ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を多量含む	
14. 黒色土	〃 2/1	g	ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子を少量含む	
15. 黒赤褐色土	Hue 5YR 3/6	H	ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を多量含む	
16. 暗赤褐色土	〃 3/4	h	ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子を少量含む	
17. 暗赤褐色土	〃 3/3			
18. 暗赤褐色土	〃 3/2			
19. 極暗赤褐色土	〃 2/4	I	焼土粒子・炭化粒子を多量含む	
20. 極暗赤褐色土	〃 2/3	i	焼土粒子・炭化粒子を少量含む	
21. にぶい赤褐色土	〃 4/4	J	焼土を多量含む	
22. 赤褐色土	〃 4/8	j	焼土を少量含む	
23. 赤褐色土	〃 4/6	K	焼土・炭化粒子を多量含む	
24. 明赤褐色土	〃 5/8	k	焼土・炭化粒子を少量含む	
25. 灰褐色土	〃 4/2	L	焼土・ロームブロックを多量含む	
26. 赤褐色土	Hue2.5YR4/6	l	焼土・ロームブロックを少量含む	
27. 赤褐色土	〃 4/8	M	焼土ブロックを多量含む	
28. 暗赤褐色土	〃 3/6	m	焼土ブロックを少量含む	
29. 暗赤褐色土	〃 3/4	N	焼土粒子を多量含む	
30. 暗赤褐色土	〃 3/3	n	焼土粒子を少量含む	
31. 暗赤褐色土	〃 3/2	O	焼けたローム土	
32. にぶい赤褐色土	〃 4/4	P	ロームブロックを多量含む	
33. 明赤褐色土	〃 5/8	p	ロームブロックを少量含む	
34. 極暗赤褐色土	〃 2/2	q	炭化物を含む	
35. 極暗赤褐色土	〃 2/4	r	腐敗土	
		s	暗褐色土混入	
		t	極暗褐色土混入	
		u	灰褐色土混入	
		v	黒褐色土混入	
		w	黒色土混入	
		X	ソフトローム	
		Y	攪乱	
		Z	焼土	



第6图 第1号·6号住居跡実測図



第7図 第1号住居跡出土遺物実測図

### 第1号住居跡 (第6図)

本住居跡はE2i<sub>2</sub>・j<sub>2</sub>調査区を中心に確認されたもので、第6号住居跡を切り込んで構築しており、切り合いから判断して本跡が新しいと思われる。長軸方向はN-55°Wを指し、長軸6.48m・短軸5.02m・面積32.53㎡を測り、平面形は長方形を呈している。壁高は4~14cmを測り概して浅いが、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には壁溝が検出され、壁柱穴が多数確認された。床面は凹凸状で総じて軟弱ではあるが、炉跡付近は割合固くしまっている。

炉跡は、本跡の西側に長径2m・短径1.4mの楕円形を呈して検出され、確認面から約10cm掘り窪められた地床炉となっている。炉内には炭化粒子等が多量に堆積し、炉床のロームが赤く焼けている。柱穴が4か所確認され、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は深さ34cm~45cmを有し支柱穴と思われる。北東コーナー部には、深さ62cm・径70cmを測る深いU字状を呈する貯蔵穴が検出され、平面形がほぼ円形を呈している。その覆土の色調は、主に暗褐色でローム粒子・焼土粒子等を含有し、ややしまりを帯びている。

本跡の覆土は、全体的に暗褐色・褐色でローム粒子・焼土粒子等を含有し、一部攪乱を受けているが自然堆積の状態を示している。また、床面の中央部及び南西・南東の壁近くには炭化物が多量に検出され、火災にあったものと思われる。遺物は土師式土器等が床面から検出されている。



出土遺物解説表

SI-1

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器壺	B 40.9 C 10.0	頸部上位を欠損する土器である。胴部は内彎し底部に至る。胴部中位に最大の径をもつ。底部は上げ底で底に木葉痕をみる。胴部一部に媒附着	内面—ヘラナデ 外面—ナデ	やや・砂粒・灰褐 軟弱 橙 にぶい 赤褐	60% P L34-1
2	土師器壺	A 14.2 B 5.1 C 4.9	体部はまるやかな半球形状を呈している。口縁は胴部より厚みを減じ、底部はより厚みを帯びている。体部から底部にかけて所々に焼けた痕跡が見受けられる。	胴—ヘラケズリのと ヘラナデ 底—ヘラケズリ	普通・砂粒・橙 スコ リア (小)	80% P L34-2
3	土師器高環	B 12.2	環部と裾部の一部欠損。器受部はやや厚みを帯びている。脚柱部から裾部にかけてやや内彎を呈しており、厚みを持っている。脚部内側に媒が付着している。	内面—ナデ 外面—ナデ	普通・砂粒・橙 スコ リア (小) 灰褐 にぶい 橙	60%
4	土師器台 装飾器台	A 20.5 B 6.1	底部は扁平で、口縁部は外反し、口縁中位でさらに大きく外反を見せており、口唇部は器厚を減じやや尖がりを帯びている。受け部は外面に装飾用の突帯をもっている。口縁内側に媒が付着している。	口—横ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 スコ い橙 リア 灰褐 橙	環部 80% P L34-3

第2号住居跡 (第8図)

本住居跡はE 2 is・j<sub>5</sub>調査区を中心に確認されたもので、第5号住居跡を切り込んで構築しており、切り合いから判断して本跡が新しい。長軸方向はN-41°-Eを指し、長軸4.86m・短軸4.82m・面積約23.43m<sup>2</sup>を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は12~18cmを測り、壁は外反して立ち上がる。壁溝が本跡をとりまくように検出され、あわせて壁柱穴が確認されている。床面は凹凸状で全体的に軟かく攪乱を受けている。第1号土壌が床面に検出されたが、土層からみて本跡の方が古いと思われる。

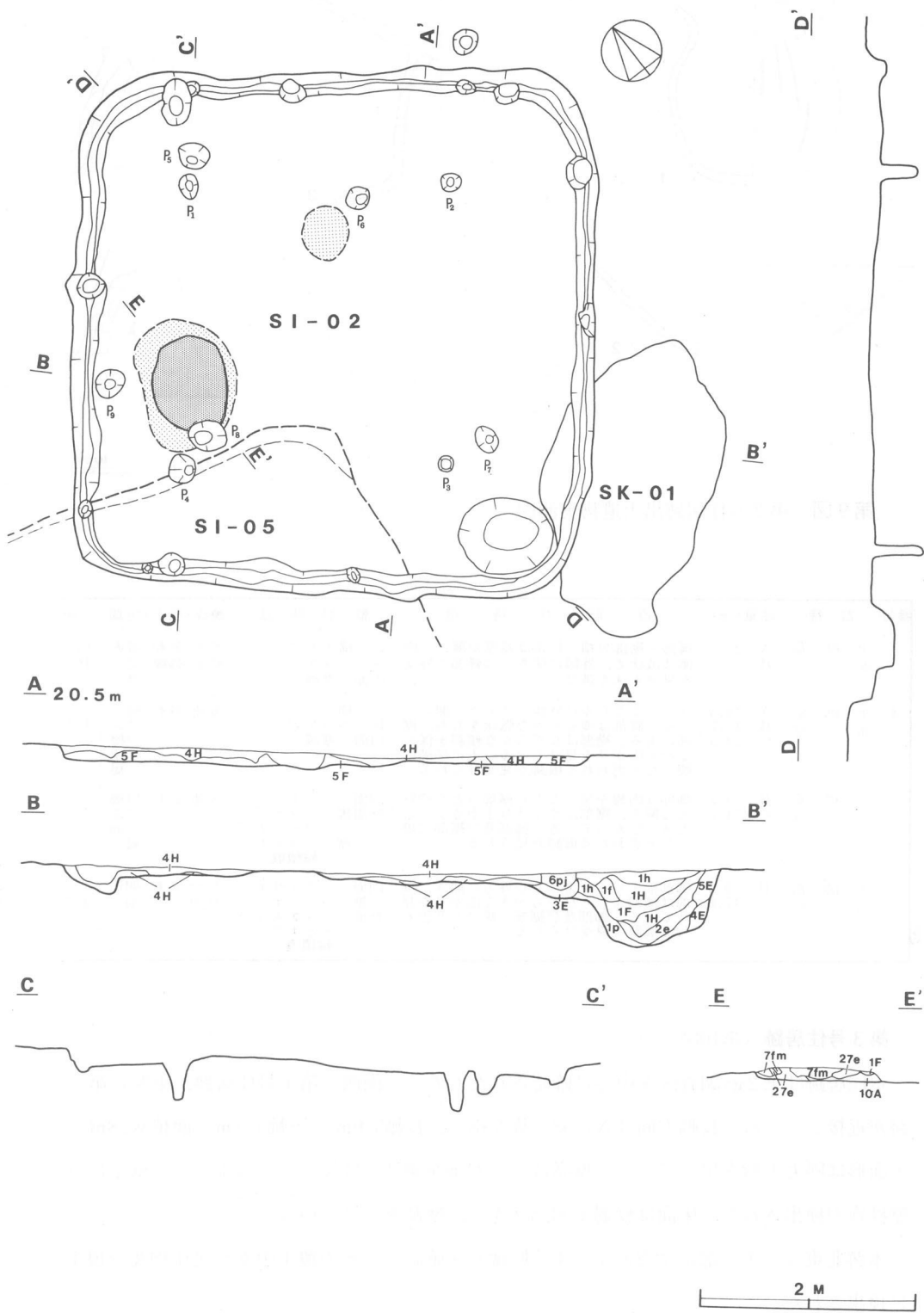
炉は床面の西側に長径120cm・短径90cmの楕円形を呈し、確認面から約15cmを掘り窪めた地床炉である。炉床は固くしまっており燃焼部がはっきりとし、焼土・炭化物・炭化粒子が多量に含まれている。柱穴は4か所確認されており、主柱穴と思われる。南東コーナー部には深さ110cm・径86cmを測る円形の貯蔵穴を検出し、その内部からは土師式土器を検出した。その覆土の色調は主に暗褐色・褐色で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子等が混入しており、全体的にしまりを帯びている。

本跡の覆土は暗褐色で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含み、ややしまりを帯びている。遺物は土師式土器が検出されている。

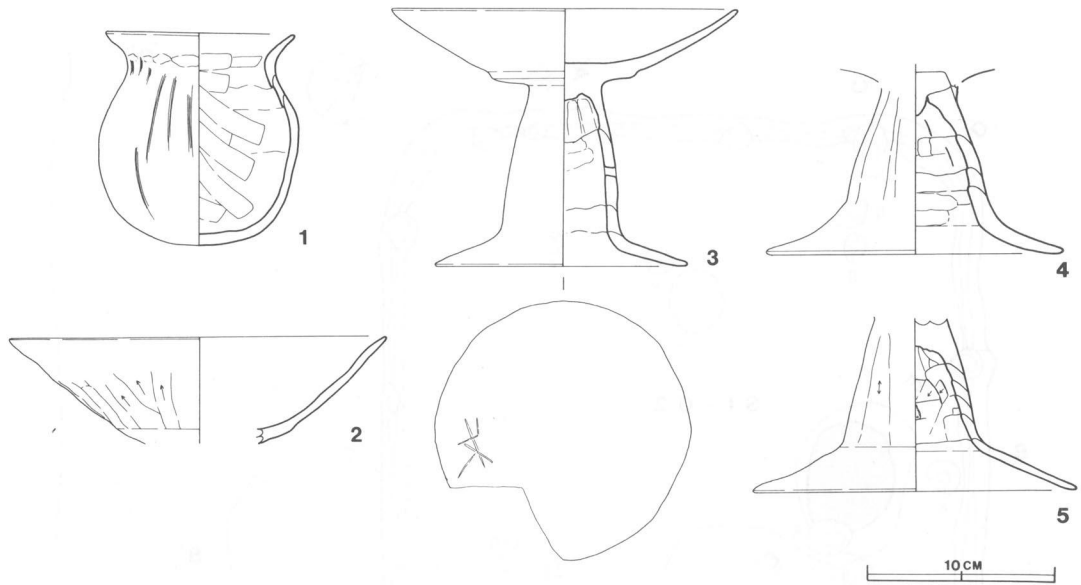
出土遺物解説表

SI-2

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器小型壺	A 10.0 B 11.4	頸はゆるく外傾。口縁は大きく外反し、先端はやや薄さを呈している。胴部は内彎し半球形状を呈し、底部はやや平底である。胴部の一部は媒が付着している。	内面—ヘラナデ 外面—文様に縦 にハケ目 底—ヘラケズリ	良好・砂粒・にぶ い橙	100% P L34-4



第8图 第2号住居跡実測図



第9図 第2号住居跡出土遺物実測図

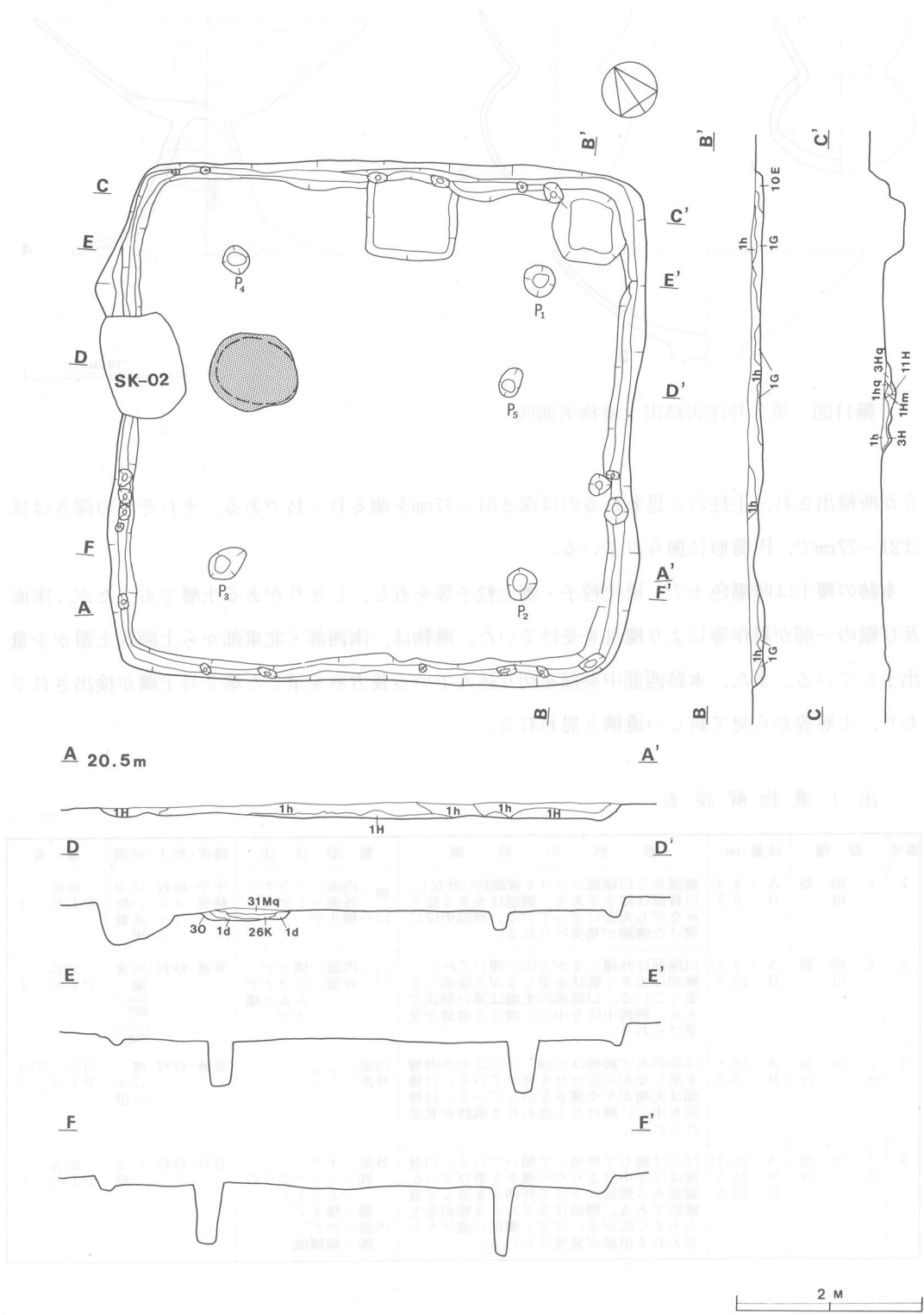
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	土師器 高環	A 20.0 B 5.6	脚部・裾部欠損。環部は器厚が薄く、内側は波状で、外傾に開き、口唇部で外反を見せ丸味を帯びている。	口ー横ナデ 環ーヘラケズリ 内面ー摩滅	やや・砂粒・明赤 軟弱 砂礫 褐 橙	環部 50% P L 34-5
3	土師器 高環	A (18.3) B 13.7 C 13.3	環部はなだらかに外傾して大きく開いている。脚部はゆるやかな弧状をもち、裾部に至る。裾部はなだらかな傾斜を保ちながら広がりを見せている。主に環部に焼けたと思われる痕跡が見受けられる。	口ー横ナデ 環ーヘラケズリ 内面ー摩滅	普通・砂粒・橙 にぶい橙 にぶい褐	70% P L 34-6
4	土師器 高環	B 9.7 C 14.7	脚部は内彎を呈しながら裾部へとやや外方に開き、裾部はややそり上がるように大きく広がっている。脚部及び裾部に焼けたと思われる痕跡が見られる。	内面ーヘラナデ 外面脚ーヘラケズリ のあとナデ 裾ーヘラナデ 輪積痕	普通・砂粒・明褐 にぶい赤 褐	60% P L 35-1
5	土師器 高環	B 9.2 C 17.0	脚部はまるみを帯びやや外方に開き、裾部は傾斜をもちながら大きな広がりを見せている。脚部及び裾部に焼けたと思われる痕跡が見受けられる。	内面ーヘラオサエ 裾ーヘラナデ 外面ーヘラケズリ のあとナデ 輪積痕	やや・砂粒・明赤 軟弱 褐	60% P L 35-2

### 第3号住居跡 (第10図)

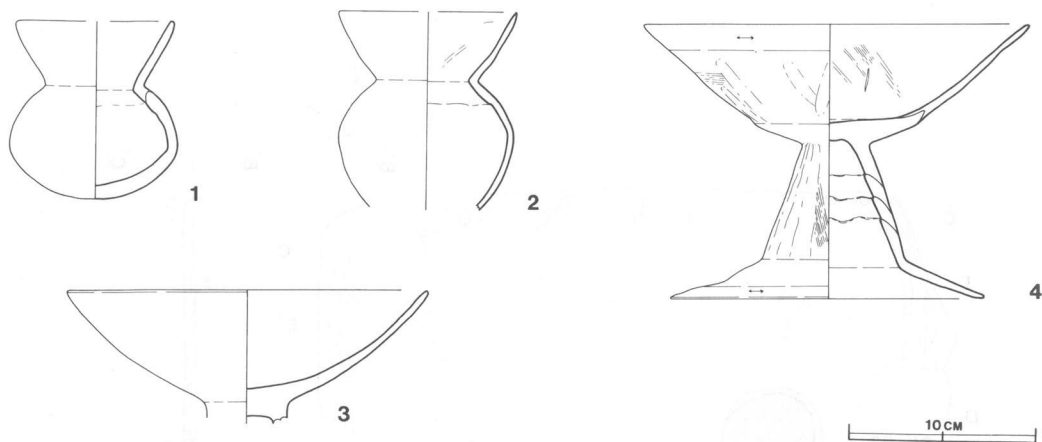
本住居跡はE2g3調査区を中心に確認されたもので、南側に第1号住居跡、東側に第5号住居跡が近接している。長軸方向はN-53°-Wを指し、長軸5.6m・短軸5.5m・面積30.8㎡を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は5~20cmを測り、外反して立ち上がる。壁下に壁溝及び壁柱穴が検出された。床面は軟弱で凹凸状を呈し、攪乱を受けている。

本跡北東コーナー部に長方形を呈する貯蔵穴を確認し、その覆土中から炭化物及び焼土が多量に検出された。

炉跡は、本跡の北西部の近くに検出されている。また、壁際には壁溝がめぐっている。柱穴は



第10図 第3号住居跡実測図



第11図 第3号住居跡出土遺物実測図

5か所検出され、支柱穴と思われるのは深さ51~77cmを測るP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>である。それぞれの深さはほぼ21~77cmで、円筒形に掘られている。

本跡の覆土は暗褐色土で、炭化粒子・焼土粒子等を有し、しまりがある土層であったが、床面及び壁の一部が耕作等により攪乱を受けていた。遺物は、南西部・北東部から土師式土器が少量出土している。また、本跡西部中央部を切り込んでいる長方形を呈した第2号土壌が検出されており、土層等から見て新しい遺構と思われる。

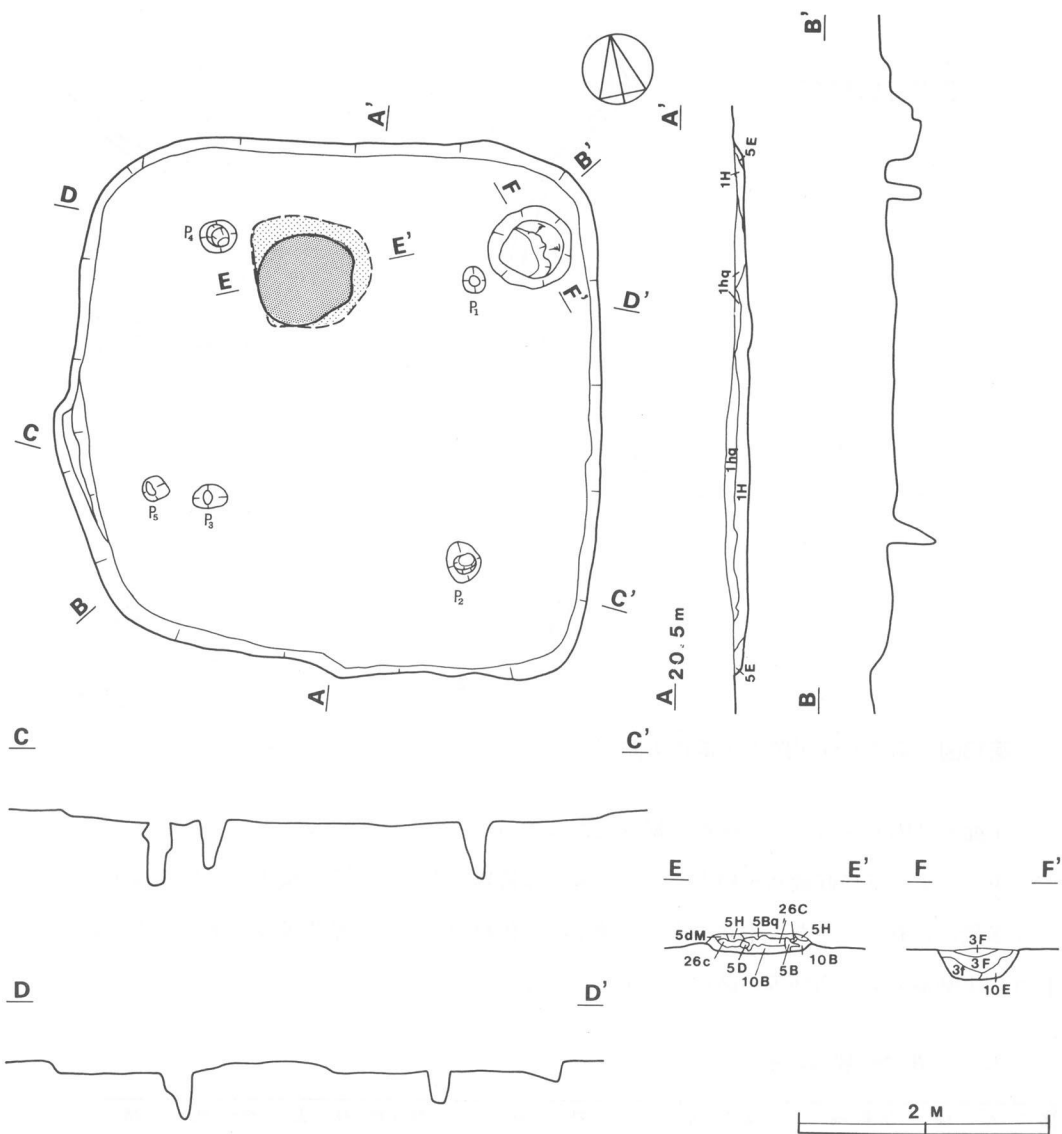
### 出土遺物解説表

SI-3

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 罎	A (8.4) B 9.3	頸部から口縁部にかけて直線的に外反し、口唇部は薄手である。胴部は大きく膨らみながら丸底に至っている。胴部中位に焼けた痕跡が見受けられる。	胴〈内面-ヘラナデ 外面-ナデ 口-横ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 スコ い橙 リア 灰黄 褐	60% P L35-3
2	土師器 罎	A (9.3) B 10.4	口縁部は外傾しながら広く開いており、胴部は大きく弧状を呈しながら底部へと至っている。口唇部の先端は薄い形状である。胴部中位を中心に焼けた痕跡が見受けられる。	口〈内面-横ナデ 外面-ヘラナデ のあと横 ナデ	普通・砂粒・灰黄 褐 にぶ い黄 橙 にぶ い赤 褐	50% P L35-4
3	土師器 高環	A 18.8 B 6.8	坏部のみで脚部は欠損 坏部はやや内彎を呈しながら広がりを見せている。口唇部は先端がやや薄さを示している。口唇部を中心に焼けたと思われる痕跡が見受けられる。	内面) ナデ 外面)	普通・砂粒・橙 にぶ い橙	坏部 70% P L35-5
4	土師器 高環	A (20.4) B 14.5 C 16.6	坏部は絶じて外傾して開いている。口唇部は坏部中位よりやや薄さを帯びている。脚部から裾部にかけて外開きを呈して直線的である。裾部はなだらかな傾斜をもち大きく広がる。坏部・脚部に焼けたと思われる痕跡が見受けられる。	外面-ナデ 脚-ヘラケズリの あとナデ 裾-横ナデ 内面-ナデ 脚-輪積痕	良好・砂粒・にぶ い橙	80% P L35-6

### 第4号住居跡 (第12図)

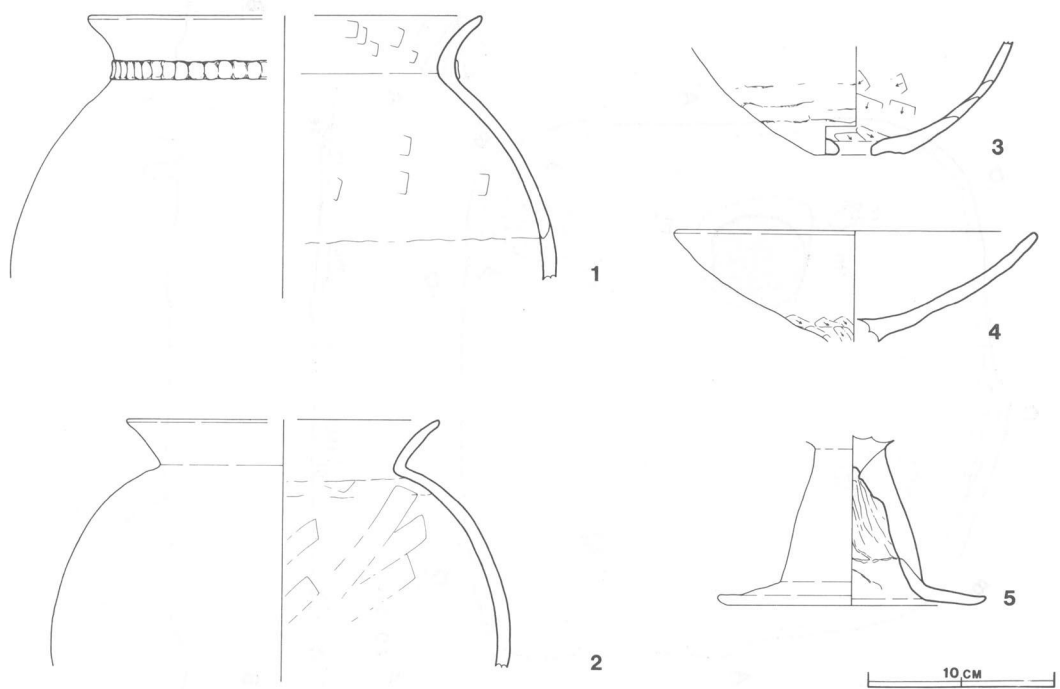
本住居跡はE2g<sub>8</sub>調査区を中心に確認されたもので、遺跡の南西部中央に位置し、長軸方向は



第12図 第4号住居跡実測図

N-74°Wを指す。規模は長軸4.25m・短軸4.23m・面積17.97㎡を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は5~10cmを測り、壁は外反してなだらかに立ち上がっている。本跡の覆土は主に暗褐色の色調で、ローム粒子・ソフトロームブロック・焼土粒子・炭化粒子等が混入し、やや締りを帯びている。床面はロームで比較的やわらかく、西側の床面がやや高くなっているが、全体として平坦である。本跡は耕作等により一部削平されており、遺存度が悪く、壁溝は有していない。

炉跡は地床炉で北壁側に検出され、周囲の床は割合硬いロームでしまっている。柱穴は5か所検出され、1か所はきわめて浅い。P1~P4が主柱穴と思われる。それぞれの深さは40~50cmを測



第13図 第4号住居跡出土遺物実測図

り、平面形は円形を呈し、円筒形に掘り込まれている。

北東コーナー部に貯蔵穴を検出したが、遺物は皆無であった。その覆土は、炭化粒子・焼土粒子を多量に含有していた。本跡の床には焼土・炭化材が分布し、焼失家屋であると思われる。遺物は、土師器の甕・高坏等の破片が出土している。

出土遺物解説表

SI-4

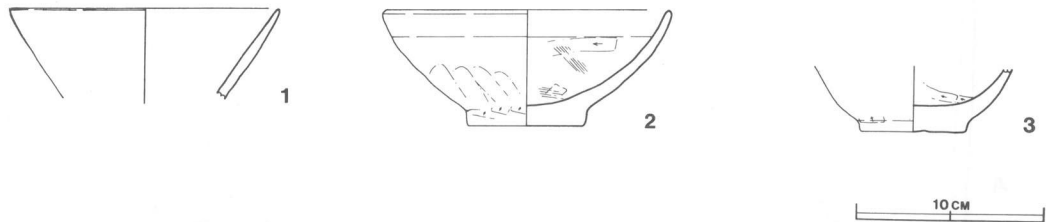
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器壺	A (20.8) B 14.1	頸部はほぼ「く」の字状にくびれ、紐状の装飾がほどこされている。口唇部はやや直線的に広く開いた状況を示している。胴部は内彎しながら底部に至ると思われる。胴部中位より下は欠損。	内面－ヘラナデ 外面－ナデ 口－ヘラナデのあと横ナデ	やや・砂粒・赤 軟弱	10%
2	土師器甕	A (16.3) B 13.1	口縁部はやや直線的に開き、口唇部近くはさらに外傾する。肩部から胴部中央にかけて、なめらかに内彎している。胴部中位より下は欠損。焼けたと思われる痕跡がある。	内面－ヘラナデ 外面－ヘラケズリ 口－横ナデ	良好・砂粒・にぶ い橙	30%
3	土師器甕	B 5.9 C 4.7	体部は内彎しながら底部に至る。底部はやや厚みを持ち平底である。外面に輪積痕を残している。	内面－ヘラナデ 外面－指押え 底－指押え	やや・砂粒・明赤 軟弱(石英)にぶ スコリア 灰褐	40%
4	土師器高坏	A (19.4) B 5.9	坏部は僅かに内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや直線的な外傾で開いている。先端部はやや丸味をもっている。脚部は欠損	内面－摩滅 外面－ナデ ヘラナデ 口－横ナデ	良好・砂粒・橙 スコリア 砂礫(石英)	坏部 30%
5	土師器高坏	A 8.7 C (14.3)	脚部はやや内彎するように裾部に至っており、裾部は外に開く形態をみせている。坏部は欠損している。	外面－ナデ 内面－絞り痕	普通・砂粒・橙 スコリア にぶい黄 褐	脚部 70%

### 第5号住居跡 (第15図)

本住居跡はE2i<sub>4</sub>・i<sub>5</sub>調査区を中心に確認されたもので、長軸方向はN-16°Eを指し、規模は長軸6.54m・短軸6.36m・面積41.51m<sup>2</sup>を有し、平面形はほぼ方形を呈している。壁高は耕作により削平され、1~12cmを測るのみである。床面はやわらかいロームで西側がやや高くなっているが、全体としては平坦である。本跡の東側は第2号住居跡と切り合っており、本跡が古いと思われる。柱穴の検出は見られない。

炉跡は西壁近くに楕円形を呈する地床炉が検出され、炉内には焼土粒子・炭化粒子等を含有した褐色土・暗褐色土が交互に堆積している。炉床は凹凸をして、ややしまった状態である。

南東コーナー部から、長径70cm・短径53cm・深さ30cmの楕円形を呈する貯蔵穴が検出され、その覆土は、おおむね三層からなっている。主に暗褐色で、炭化粒子が少量混入し、締りを帯びて、自然堆積の様相を示している。遺物は埴・鉢の土師式土器片を少量出土している。



第14図 第5号住居跡出土遺物実測図

### 出土遺物解説表

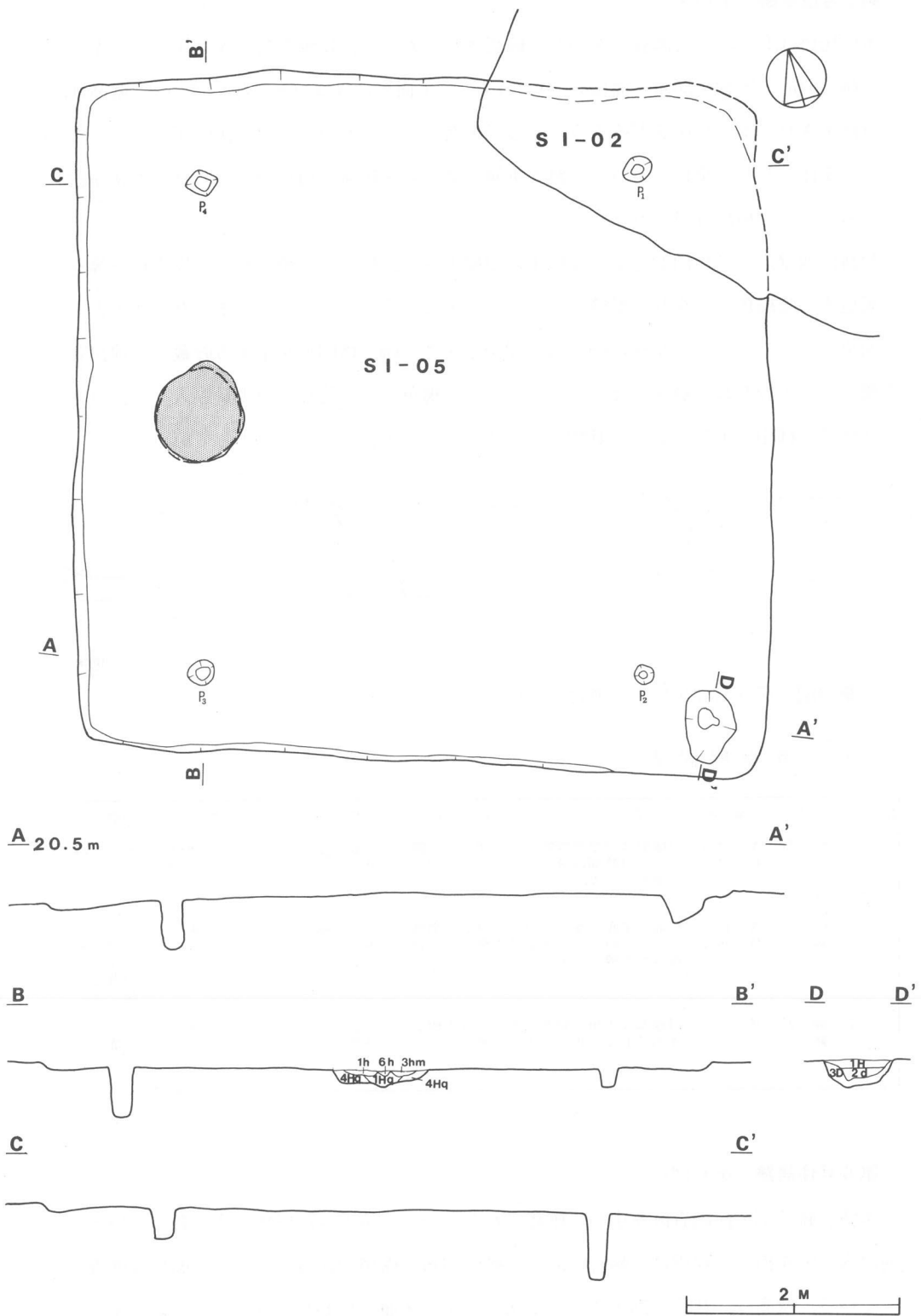
SI-5

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 埴	A (14.1) B 4.7	口縁部はやや直線的に広く開いた形態を示し、口唇部は薄くなっている。胴部は欠損している。	内面→横ナデ 外面→横ナデ	普通・砂粒・橙 スコ リア	口縁部50%
2	土師器 鉢	A (15.0) B (6.2)	底部は平底で厚手を呈し、胴部は半球状を示している。口縁部は内彎し、口唇先端はやや薄手である。	内面→横ナデ 外面→ヘラナデ 底(外面)→ナデ	普通・砂粒・にぶ い橙 にぶ い黄 橙	60% PL 36-1
3	土師器 鉢	B 3.5 C (5.6)	口縁部は欠損。胴部の中位下は内彎して底部に至る。底部は平坦である。	内面→ヘラナデ 外面→ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い赤 褐	30%

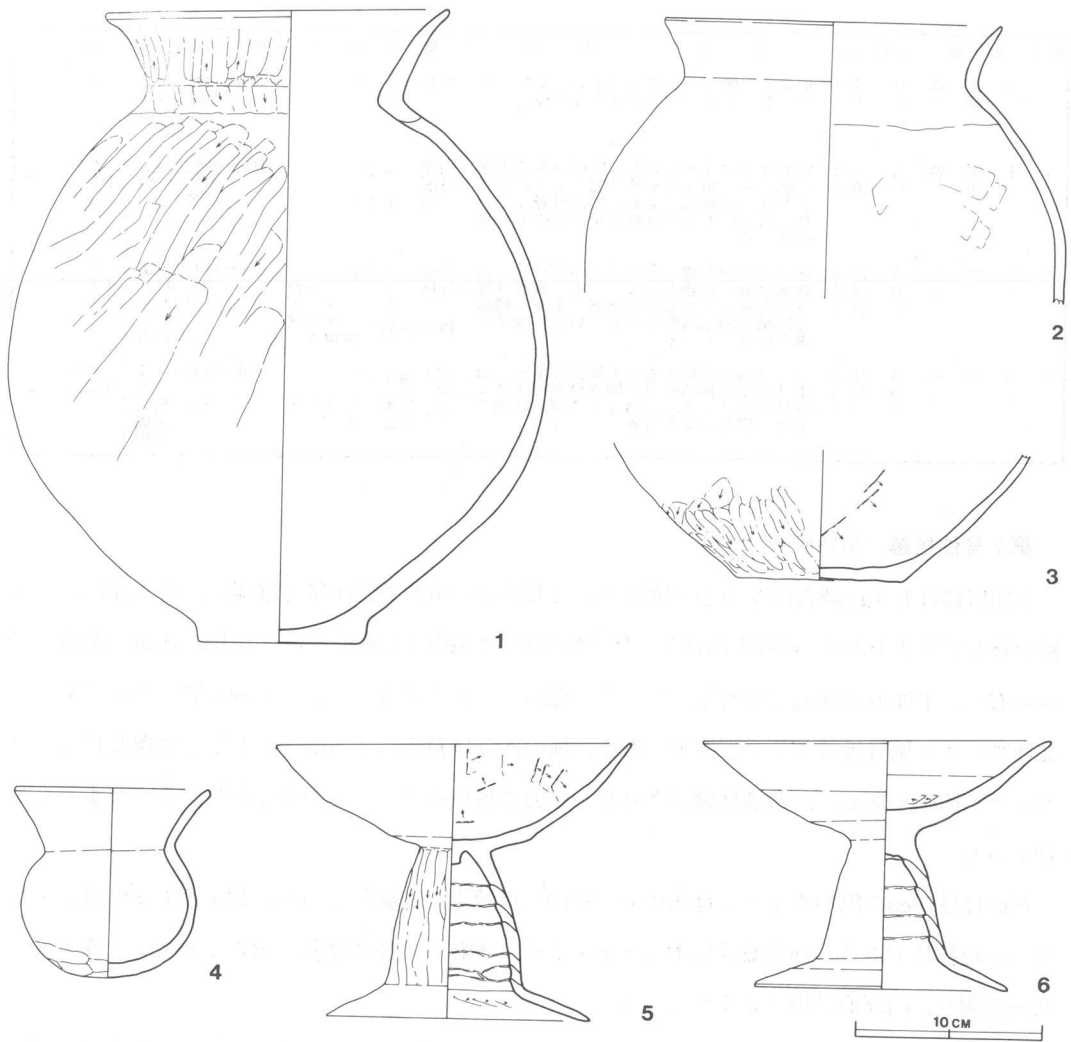
### 第6号住居跡 (第6図)

本住居跡はE2j<sub>2</sub>調査区を中心に確認されたもので、第1号住居跡と切り合っている。長軸方向はN-0°を指し、規模は長軸5.65m・短軸5.43m・面積30.67m<sup>2</sup>を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は、耕作で削平されて不明である。床面と思われる所はロームが露出し、ロームブロックが全面に見られる。炉は確認されずエリア外の部分にあると思われる。柱穴は、径26cm・





第15图 第5号住居跡実測図



第16図 第6号住居跡出土遺物実測図

深さ43cmの円形の平面形を呈するものが1か所検出されている。南東コーナー部に、深さ36cmの楕円形を呈する貯蔵穴が検出され、その覆土は暗褐色土・黒褐色土で、炭化粒子・焼土粒子が混入し、自然堆積土である。また、この貯蔵穴内からは完形の高杯・甕・埴等の遺物が検出された。

出土遺物解説表

SI-6

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 壺	A 18.0 B 33.7 C 8.7	底部は平底で外反しながら立ちあがり、胴部中央に最大径をもち、弧を描くように内彎しながら頸部に至る。口縁は外に大きく開く様相を示し、口唇部は器厚が薄くなる。火災に遭遇したと思われる痕跡がある。	内面－ヘラナデ 外面－ヘラケズリ 口－横ナデ	良好・砂粒・にぶい黄橙にぶい橙	100% PL 36-3
2	土師器 甕	A 18.0 B 14.6	胴部中位下は欠損。胴部中央から口縁部にかけて内彎し、口唇部にかけては「く」の字形に外傾して広がり呈している。焼けたと思われる痕跡が見受けられる。	内面－ヘラナデ 外面－ナデ 口－横ナデ	普通・砂粒・黒にぶい褐	30%

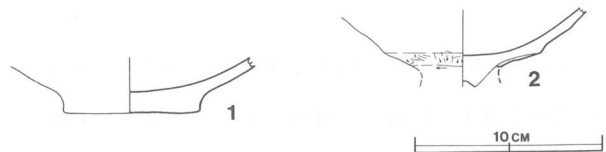
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	土師器 甕	B 6.9 C 9.0	胴部は内彎し、底部は平底で、器厚はやや一定である。胴部中位上は欠損	内面－ヘラナデ	普通・砂粒・黒明褐 砂礫 明赤褐	30%
4	土師器 埴	A 10.3 B 10.0	底部はやや丸味をもち、胴部中央で大きく膨らみ、頸はやや外に開くように立ち上がり、口唇部に至る。媒が付着しており、火災にあった痕跡が胴部を中心に見受けられる。	内面>ナデ 外面 口－横ナデ	良好・砂粒・にぶ スコ い橙 リア	97% PL 36-2
5	土師器 高 環	A 18.9 B 14.7 C 14.0	坏部はやや内彎しながら立ちあがり、口唇部は薄い状態を呈している。脚部は膨らみを若干もちながら裾部へ至る。裾部は外傾し開く状態を示している。全体に媒が付着している。	内面－ヘラナデ 外面－ヘラケズリの あとヘラナデ 脚部内面<しぼり痕 輪積痕	普通・砂粒・黒褐 スコ 橙 明赤褐 にぶい橙	80% PL 36-4
6	土師器 高 環	A 18.3 B 13.4 C 13.4	坏部は浅い弧状をもって底部に至る。脚部はやや直線的な外方に開き裾部で大きく外に開いている。口唇はやや薄い状態である。脚部に媒が付着している。	口底>横ナデ 坏<内面－ヘラナデ 外面－ナデ	普通・砂粒・にぶ スコ い赤 褐 灰褐 赤褐	90% PL 36-5

### 第7号住居跡（第18図）

本住居跡はE3g<sub>1</sub>調査区を中心に確認されたもので、第22号住居跡と重複し、切り合いから本跡が新しいと思われる。長軸方向はN-19°Wを指し、規模は長軸5.25m・短軸5.15m・面積27.03㎡を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高はきわめて浅く、2～8cmを測るのみである。北西コーナー壁付近はプランが明確である。他の部分は耕作による削平、もしくは攪乱によりプランが不明確であるが、壁溝は確認された。床面は褐色のロームで平坦であり、ややしまりを帯びている。

炉跡は径70cmの円形を呈する地床炉で、炉内には焼土が充満していた。炉床はあまり焼けていないのが特長である。柱穴数は12本をかぞえるが、本跡の主柱穴はR<sub>1</sub>～R<sub>4</sub>の4か所で、深さ30～35cmを測り、円筒形に掘り込まれている。

北西壁コーナーには径60cmの円形を呈した貯蔵穴が確認され、その覆土は主に褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が混入してよくしまりを帯び、自然堆積の様相を示している。遺物は、土師式土器片が少量検出された。

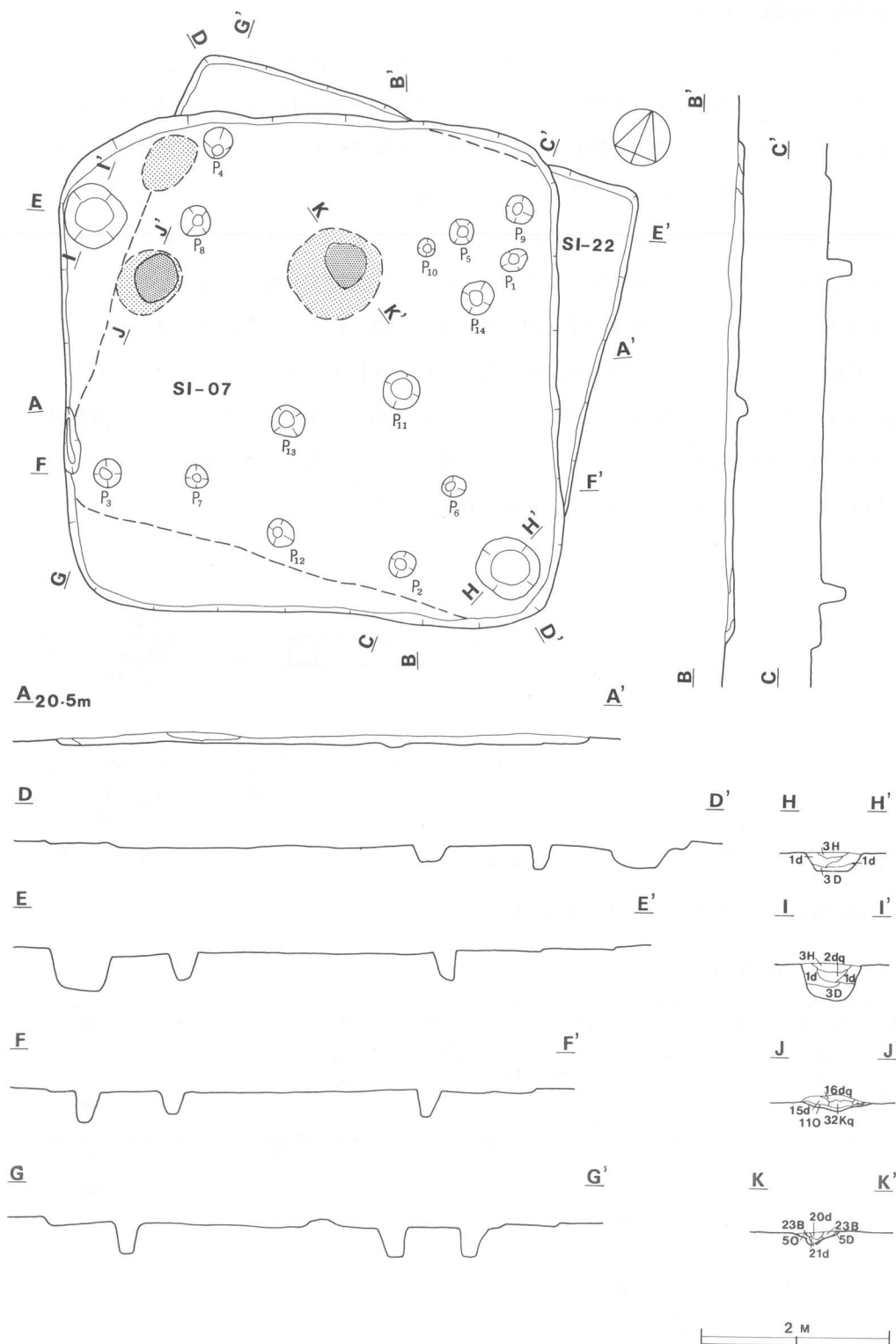


第17図 第7号住居跡出土遺物実測図

### 出土遺物解説表

SI-7

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 不明	B 2.4 C 7.2	底部は平坦で、胴部に向かい外反して立ち上がりを見せている。底部外面にけずり痕が見受けられる。	内面－ヘラナデ 外面－ナデ	普通・砂粒・橙 スコ 暗赤 リア 灰	底部 97%
2	土師器 高 環	B 4.2	坏部・脚部は欠損。坏部は外傾して立ち上がる。体部と底部の間に稜をもっている。	内面－ヘラナデ 外面<上－ナデ 下－ヘラナデ	普通・砂粒・灰褐 橙 黒褐	15%

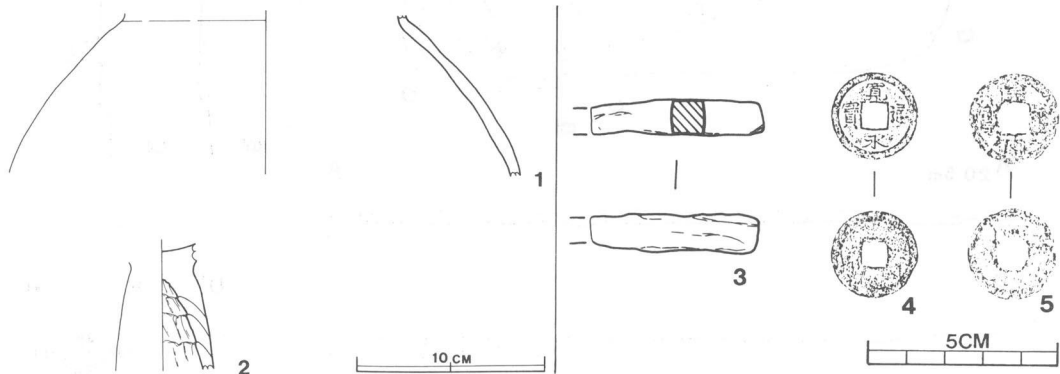


第18图 第7号·22号住居跡実測図

第8号住居跡 (第20図)

本住居跡はD2j<sub>4</sub>・j<sub>5</sub>調査区を中心に確認されたもので、長軸方向はN-18°-Eを指し、規模は長軸10.14m・短軸6.4m・面積64.89㎡を有し、平面形は長方形を呈している。壁高は10~30cmを測るが、南東コーナーの壁は攪乱を受けており、明確さを欠いている。東壁はなだらかな立ち上がりを見せ、西壁は二段に立ち上がっている。床面はほぼ平坦である。

本跡の覆土はロームブロック・炭化粒子・粘土等を含育し、自然堆積したものである。第2層は暗褐色土で、ローム粒子は少なく、焼土粒子・炭化粒子が極少量混入している。第2層も暗褐色土であるが、ローム粒子が多く混入し、また、焼土粒子・炭化粒子が見られる。第3層も同じ暗褐色土であるが、第1層・第2層に比べてローム粒子、及びロームブロックが多く混入し、攪乱を受けている。第2層・第3層のところどころに粘土のかたまりが見られる。遺物は少なく、土師式土器片・鉄製品の検出があった。また、覆土中から、古銭(寛永通宝)・宋銭(皇宋通宝)が出土している。本跡に係る柱穴及び炉跡の検出はなかった。

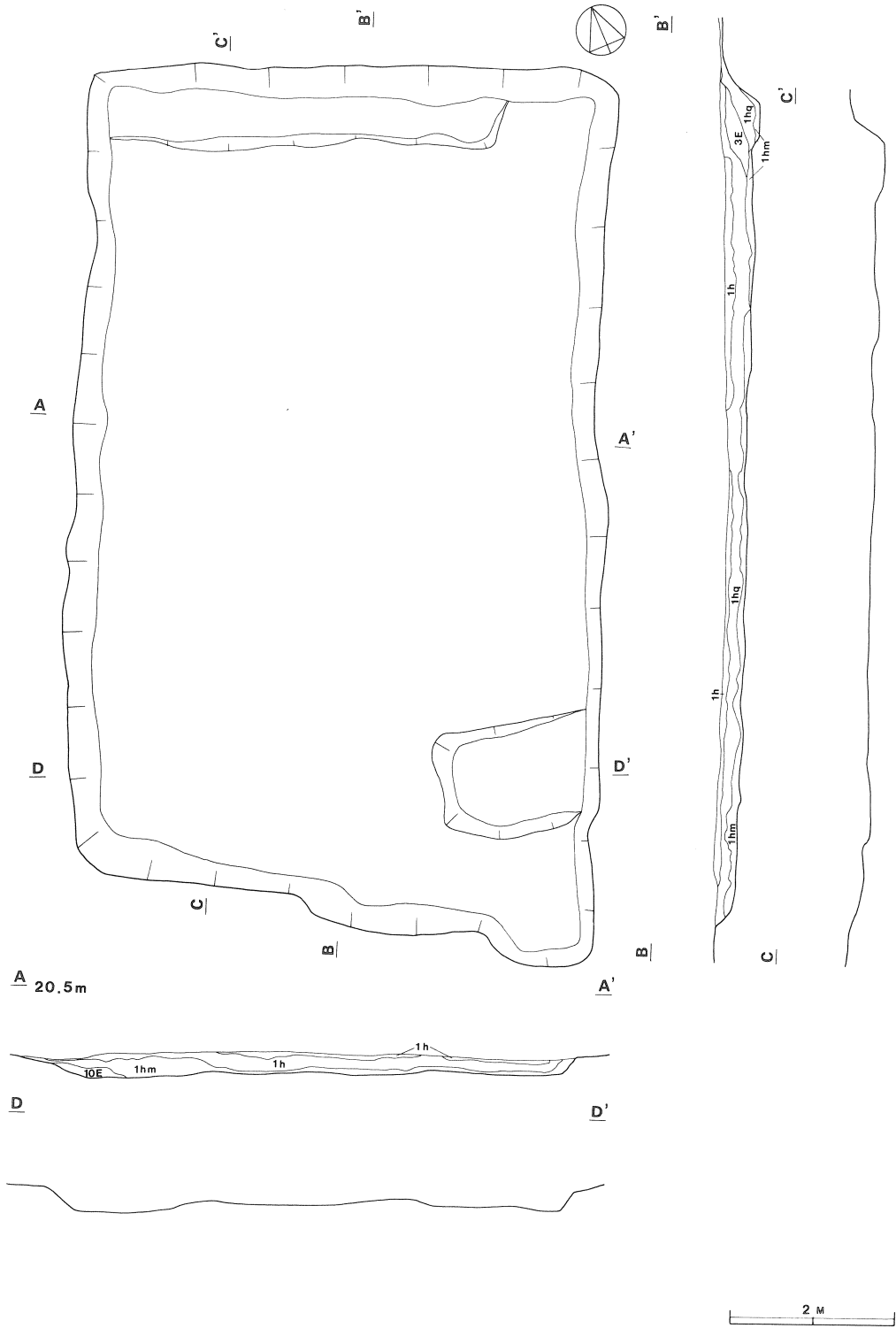


第19図 第8号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表

SI-8

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器壺	B 8.4	胴が球形を呈し、胴部中位に最大径をもつと思われる。媒が付着している。	内面-ナデ 外面<上-ナデ 下-ヘラケズリ	普通・砂粒・灰黄褐にぶい橙	10%
2	土師器坏	B 5.7	脚部はやや膨らみをもち裾部へと至る。	内面-輪積痕のあと 絞り痕 外面-ナデ	良好・砂粒・にぶい赤褐黒褐	脚部 40%
3	鉄製品	現寸 4.6 幅 1.0	一方の端が欠損し、断面方形の不明鉄製品。			PL 75-17
4	古銭		寛永通寶			
5	古銭		皇宋通寶			

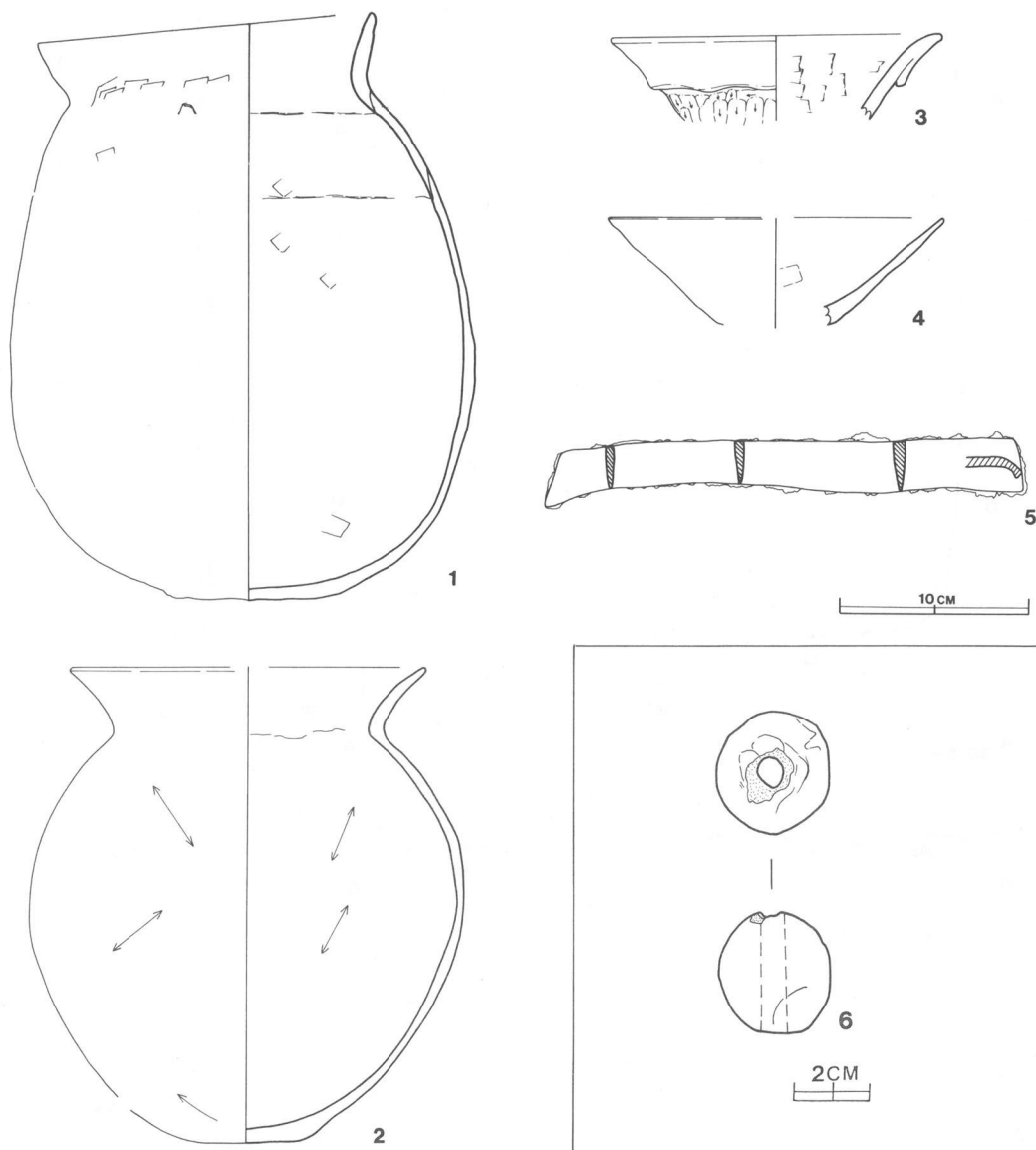


第20图 第8号住居跡実測図

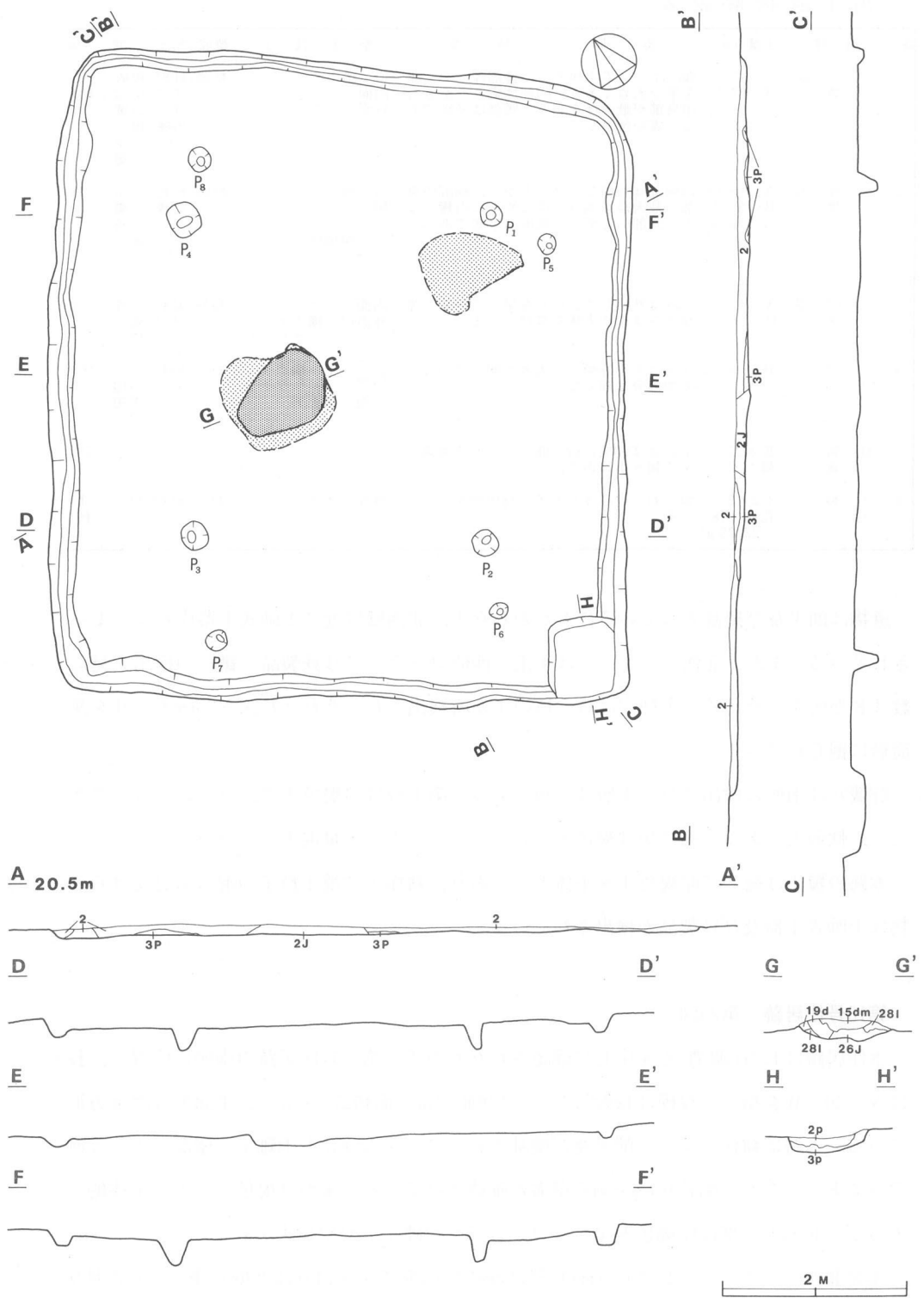
第9号住居跡 (第22図)

本住居跡はD2 g6・g7 調査区を中心に確認されたもので、長軸方向はN-27°-Eを指し、規模は長軸6.82m・短軸6.2m・面積42.28㎡を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は耕作等による削平がひどく3~10cm程度しか残存していない。床面は凹凸してやわらかく、耕作によって攪乱を受けている。また、焼土が多量に検出され、焼失した家屋であると思われる。

本跡の中央やや西側に、長径105cm・短径80cmの炉跡が検出された。炉床は硬くしまっており暗褐色・赤褐色で焼土ブロック・焼土粒子・炭化粒子を含有している。



第21図 第9号住居跡出土遺物実測図



第22图 第9号住居跡実測図



出土遺物解説表

SI-9

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 17.2 B 27.2	頸部は「く」の字状で、口唇部はやや丸味を帯び太めである。胴部は膨らみを持ち中央部が最大径を測る。底部は平底である。媒が付着している。	口ー横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	軟弱・砂粒・褐灰 スコリア 砂礫 (少) にぶい褐	50% P L37-1
2	土師器 甕	A (19.0) B 25.2 C 6.5	口縁部は外傾して立ち上がり、胴部中央部に最大径を測り、ゆるやかに内彎しながら底部へと至る。底部は平底である。	口ー横ナデ 胴ーヘラナデ 底ーケズリ 輪積痕	軟弱・砂粒・にぶい褐 砂礫 スコリア 灰黄褐	60%
3	土師器 壺	A 17.7 B 4.5	口縁は外反して広がり呈している。先端部分はやや丸味を帯びている。	内面ーナデ 外面口ー横ナデ ヘラケズリ	良好・砂粒・明赤 スコリア 橙	30%
4	土師器 高環	B 5.7	環部はやや外傾して大きく開いている。先端部分は細くなっている。	内面<上ー横ナデ 下ーヘラナデ 外面ー横ナデ	良好・砂粒・にぶい橙 黒褐 橙	環部 20%
5	鉄製品 鎌	長さ25.5 幅 2.8	端がほぼ90度に折れ曲がり、刃先端部がやや幅せまにある。			P L75-18
6	土製品 玉	3.2×3.0 孔径 0.8 27.75 g	幅に対して高さがある。楕円形を示している。	外面ーナデ	良好・砂粒・橙	100% P L75-4

遺物は削平及び攪乱されているにもかかわらず、北西壁付近に土師式土器片がまとまって検出されている。また、北側コーナーには土玉、西側コーナーには鉄製品（鎌）の検出を見た。柱穴数は8か所をかぞえる。支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4か所検出され、それぞれ深さ25cmあまりを測り、円筒形に掘られている。

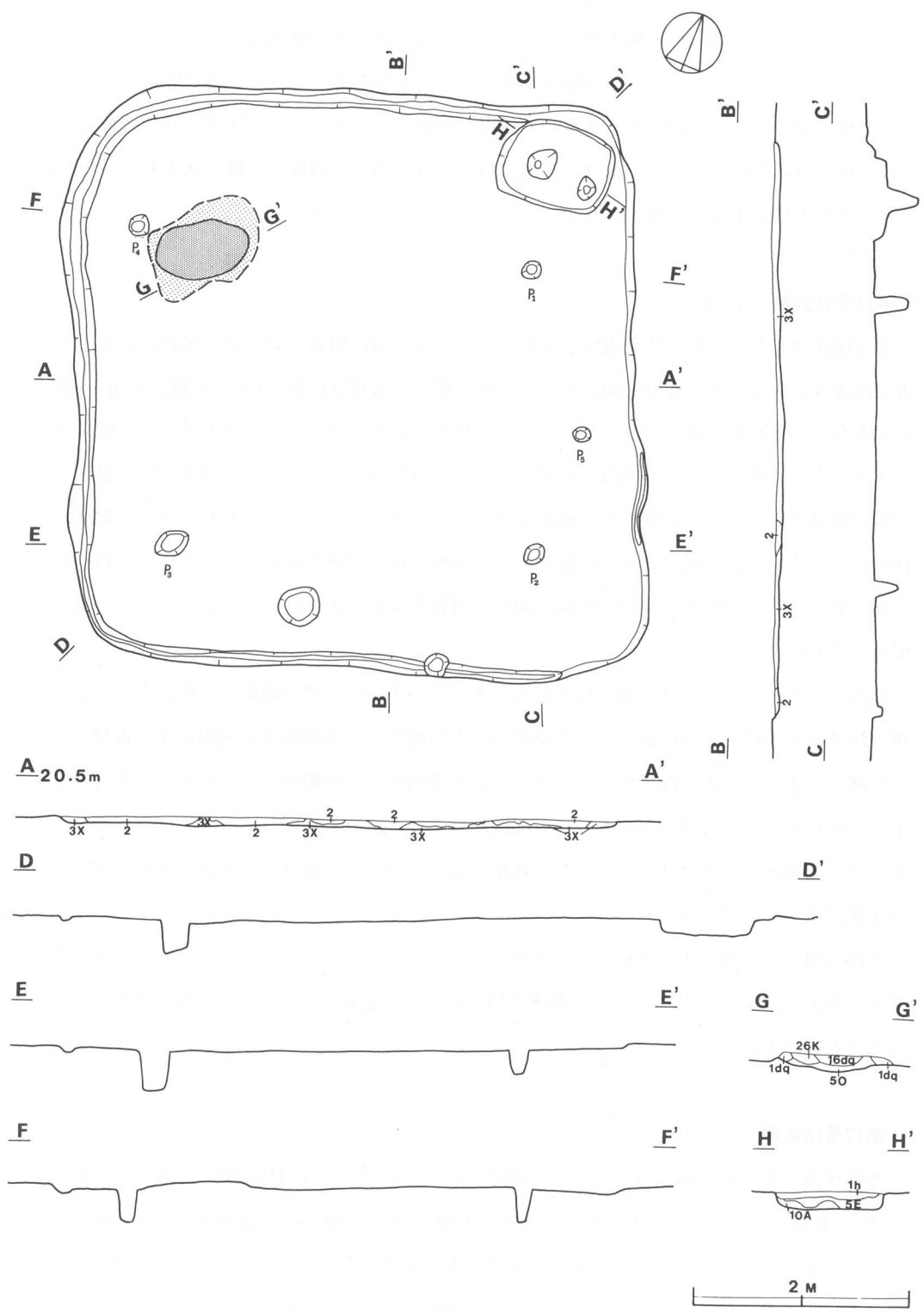
貯蔵穴は南側に検出され、土層は二層である。第1層は暗褐色土で、ロームブロックが少量混入し、軟弱土である。第2層は褐色土・ロームブロックが少量混入している。

本跡の覆土は総じて暗褐色土を主体としており、耕作土や焼土粒子の混入も見受けられる。遺物は土師式土器及び鉄製品が検出されている。

第10号住居跡（第23図）

本住居跡はE3i1調査区を中心に確認されたもので、第7号住居跡の南側に位置し、長軸方向はN-20°-Wを指す。規模は長軸5.34m・短軸5.2m・面積27.76㎡で、平面形は隅丸方形を呈している。本跡は耕作によって削平及び攪乱され、プランの確認も困難で、壁高も1～5cmを測るのみである。なお、幅約10cmを測る壁溝が確認されている。床面は褐色ロームで全体的に軟弱であるが、北側の一部は暗褐色を呈したロームでやや硬く、やや起伏がある。

本跡北西コーナーに、長径105cm・短径56cmの楕円形で深さ14cmほど掘り窪められた地床炉と思われる焼土域が検出された。その覆土は焼土粒子・炭化粒子を含む暗褐色・赤褐色をし、しまりを帯びていた。



第23图 第10号住居跡実測图

北東コーナー部に深さ28cmの貯蔵穴を有し、第1層は暗褐色土でややしまりを帯び、ローム粒子・ソフトロームブロック・焼土粒子を含有している。第2層は褐色土で、ローム粒子・ソフトロームブロック・ロームブロックを極少量混入し、しまりを帯びている。第3層は、ローム粒子を含む硬い層である。貯蔵穴からは遺物の検出が皆無であった。なお、柱穴は6か所数えられたが、支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4か所であり、深さは14～24cmを測って円筒形に掘り込まれていた。遺物は覆土中に土師式土器片が検出されている。

#### 第11号住居跡（第24図）

本住居跡はE1<sub>1</sub><sup>j</sup><sub>8</sub>・E2<sub>2</sub><sup>a</sup><sub>8</sub>調査区を中心として、第8号住居跡と第16号住居跡にはさまれる位置に確認されたもので、長軸方向はN-85°Wを指す。規模は長軸5.3m・短軸5.07m・面積26.87m<sup>2</sup>を有し、平面形は隅丸方形を呈している。耕作の影響で壁がほとんど削平され、確認が困難な状況であり、残存している個所でも壁高は2～5cmを測るのみである。壁溝が住居跡を一周する形で確認され、あわせて壁柱穴が検出されている。床面はロームでやや軟らかく、起伏を有し、耕作によって部分的に削平された状態である。多数の柱穴が確認されたが、支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4か所である。それぞれ深さ約12～36cmを測り、円筒形に掘り込まれていた。ピットの一部は、木根跡と思われる。

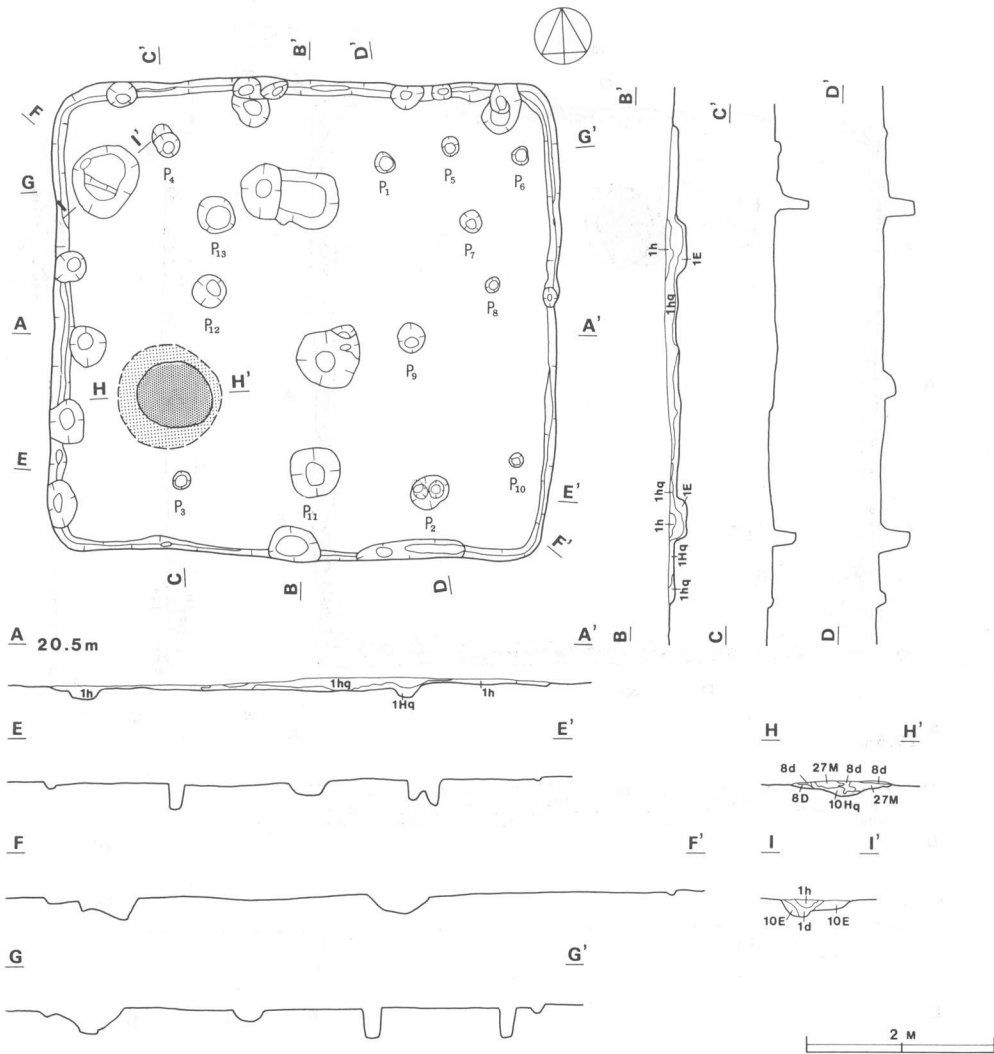
南西コーナーから、長径30cm・短径25cm・深さ21cmを測る円形の地床炉が検出され、炉内には焼土粒子・炭化粒子・ロームブロックが混入した黒褐色土・赤褐色土・明褐色土が堆積していた。

貯蔵穴は北西コーナー部に検出された。土層は暗褐色土・明褐色土に分かれ、それぞれ焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子が混入し、一部攪乱を受けた部分も見受けられる。床面付近はしまりがあり、上層近くは割合サクサクとした状態になっている。底面はやや起伏があり、立ち上がりは皿状にゆるやかである。

本跡の覆土の色調は主に暗褐色で、各層ともローム粒子・ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子等が混入し、よくしまっている。遺物は割合少なく、北東コーナーから小型土師式土器片の出土をみたのである。

#### 第12号住居跡（第25図）

本住居跡はE2<sub>2</sub><sup>d</sup><sub>9</sub>・d<sub>9</sub>調査区を中心に確認されたもので、第4号住居跡の北側約7.5m地点に位置し、長軸方向はN-64°Eを指す。規模は長軸6.04m・短軸5.82m・面積35.15m<sup>2</sup>を有し、平面形は方形を呈している。壁高は20～30cmを測り、壁は垂直に立ち上がる。壁下には壁溝が周り、壁柱穴も検出されている。床面はほぼ平坦で、全体的にかたく踏み固められてパリパリしており、南半分が褐色ロームで特に踏み固められている。さらに、東壁中央部には、壁に続いて一段と高

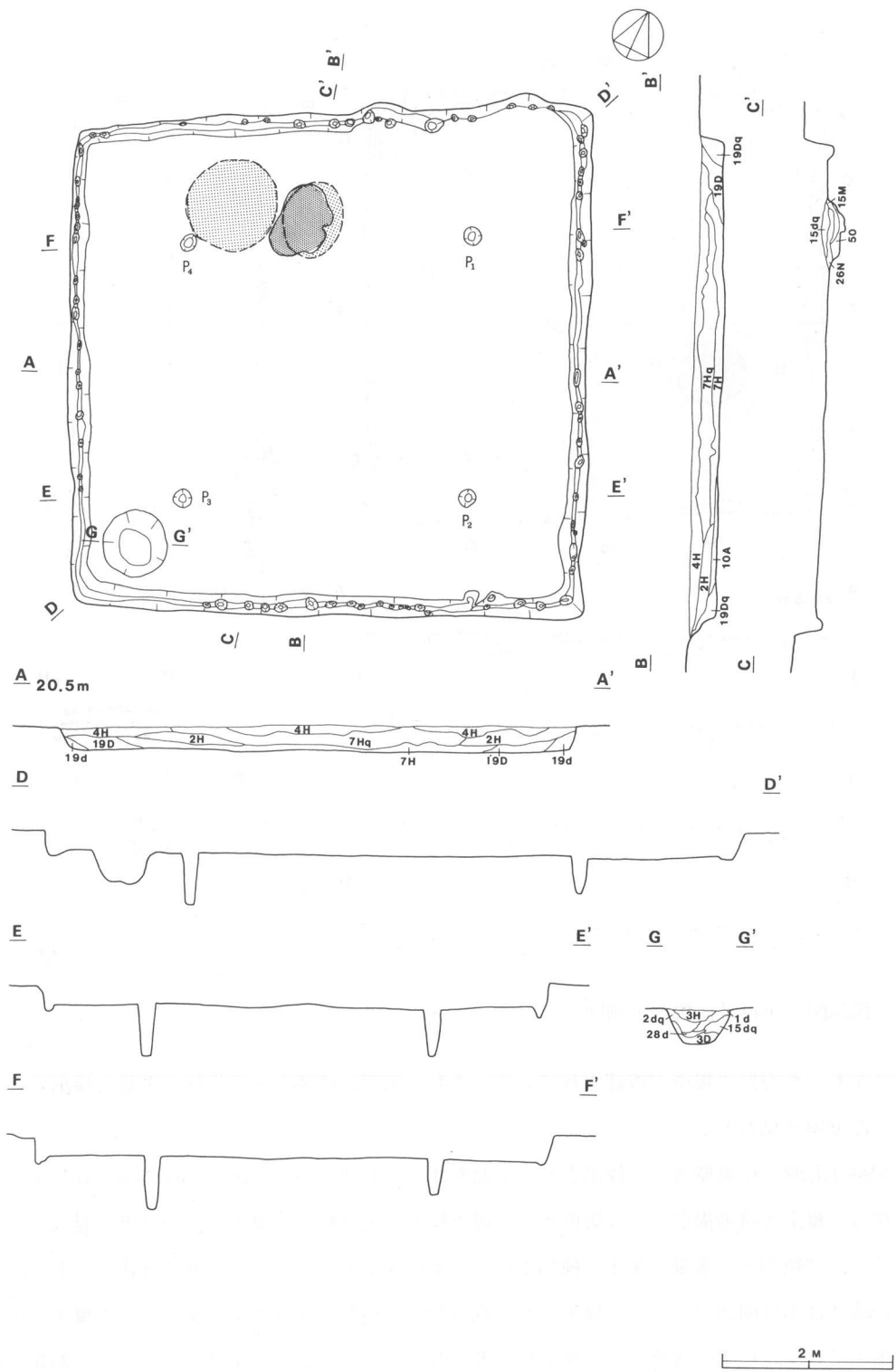


第24図 第11号住居跡実測図

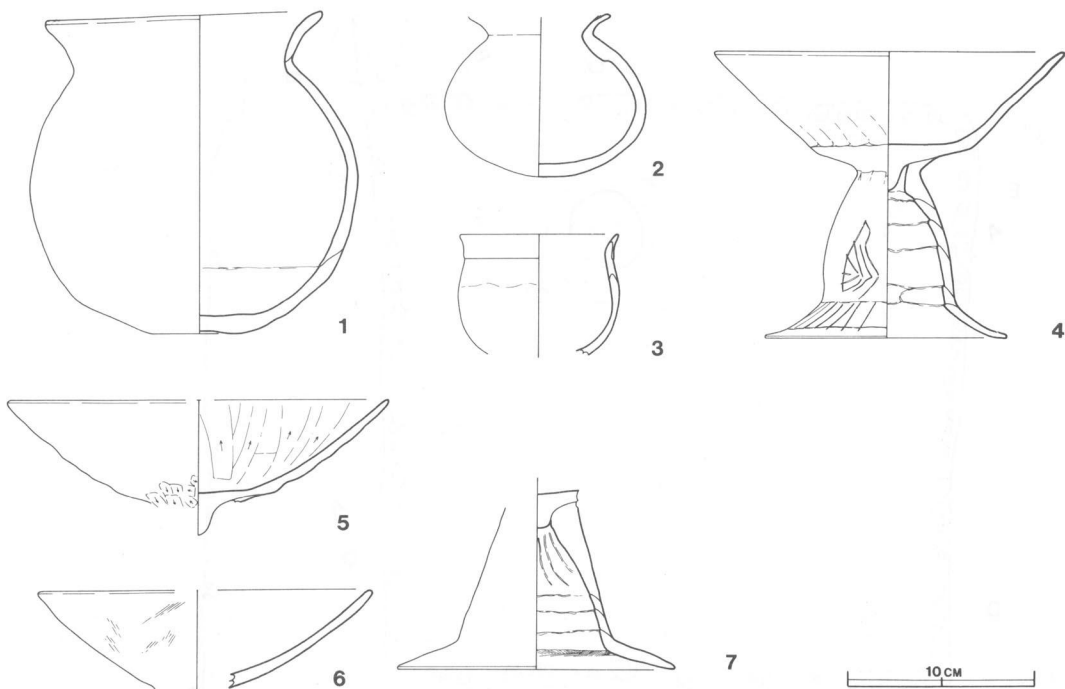
まりをもった方形の場所が確認されている。なお、床面には焼土・炭化材が多量に検出され、焼失した家屋と思われる。

炉跡は北側の中央壁寄りに検出され、平面形は不定形で、長径90cm・短径45cmを有し深さ30cmを測る。覆土は暗赤褐色土・赤褐色土で、焼土粒子・炭化粒子・焼土ブロック等が混入していた。さらに、燃烧部から多量の焼土が検出され、炉床も強く火を受けて赤く焼けた状態である。

貯蔵穴は本跡南西コーナーに検出され、直径50cmの円形で深さ39cmを測り、その覆土は総じて暗褐色でローム粒子・炭化粒子・焼土粒子等が混入し、ややしまりを帯びている。土器類は検出されていない。柱穴は主柱穴と思われるものが4か所確認され、深さ42~62cmで円筒形に掘り込まれている。遺物は、小型壺・高坏等土師式土器片が北壁・南西コーナーから検出されている。



第25图 第12号住居迹实测图

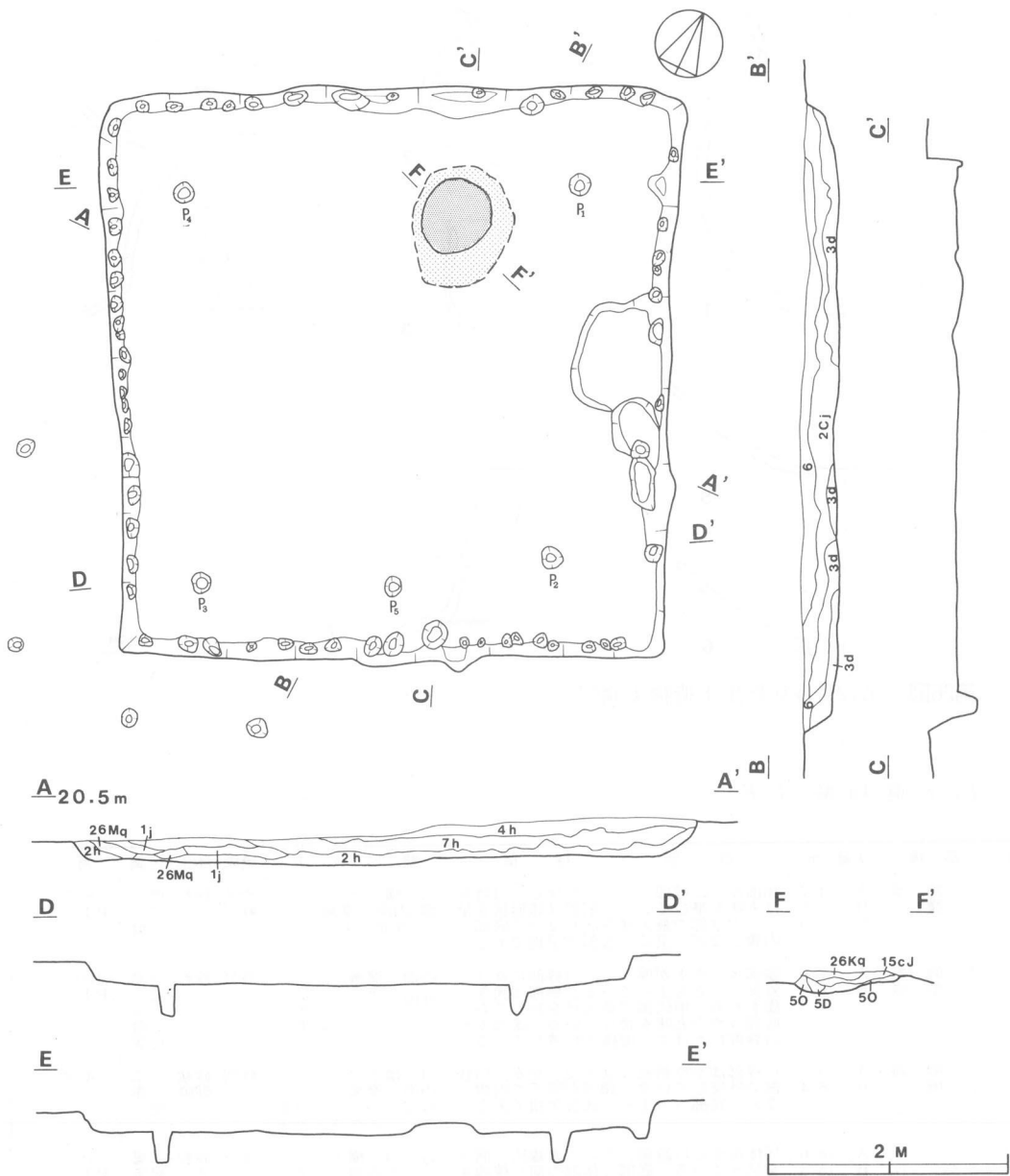


第26図 第12号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表

SI-12

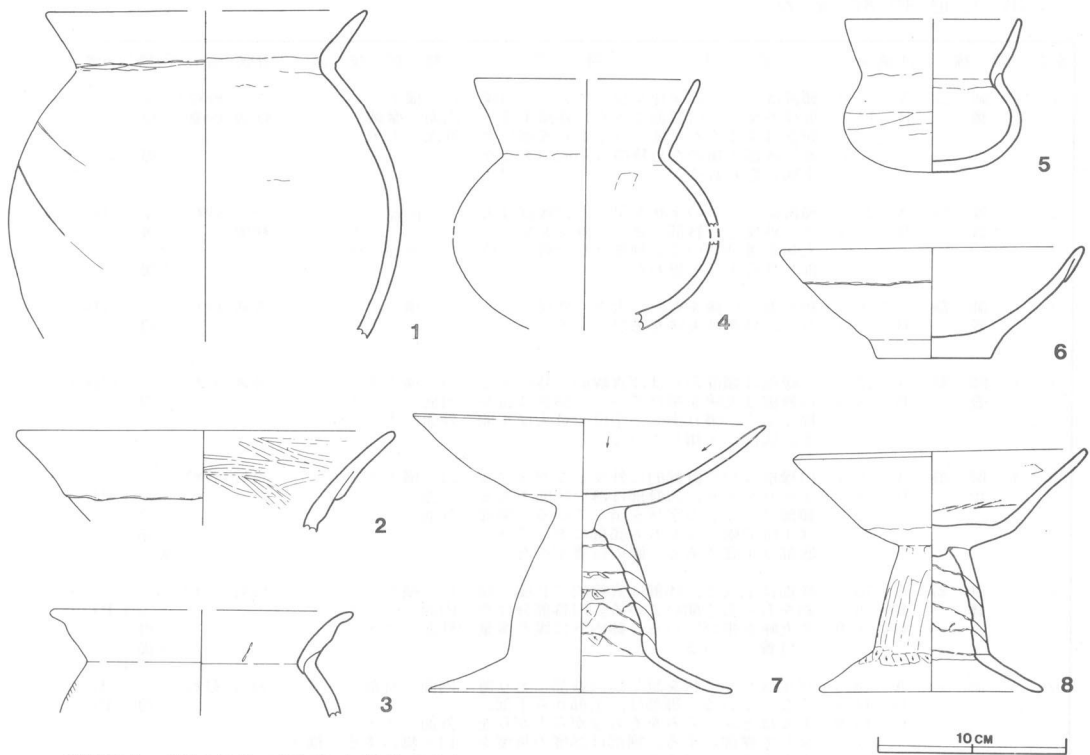
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 14.7 B 17.0 C 4.9	頸部から口縁部にかけて外反し、口唇部は丸味を帯びている。胴部は球形状を呈し、中位部で最大径を測りながら底部へ内彎しながら至る。底部は平坦である。	口一横ナデ 胴内面一摩滅 外面一ナデ	やや・砂粒・橙にぶい橙 軟弱	80% P L 37-2
2	土師器 壺	A 7.6 B 8.6	頸部はやや下が厚手で、口唇部にかけて外反して立ち上っている。胴部は大きく膨をもち、中位部で最大径を測っており、底部はやや丸味を帯びている。底部から口唇部にかけて一部媒が付着している。	内面一摩滅 外面<上ナデ 下ヘラのあと ナデ	良好・砂粒・明赤褐にぶい橙褐灰	100% P L 37-3
3	土師器 壺	A (8.6) B 6.4	口縁部はやや垂直な立ち上りを見、口唇部で外反している。頸部が厚手で内彎しながら底部へと至る。底部欠損である。	口一横ナデ 内面一摩滅 外面一ヘラナデのあと ヘラミガキ	軟弱・砂粒・にぶい赤褐 砂礫	40%
4	土師器 環	A 18.6 B 15.3 C 12.9	坏体部から口唇部にかけて直線的に開きを見せている。底部と体部の間に稜線をもっており、脚柱部はややふくらみをもって裾部に至る。裾部はなだらかに開いている。媒が全体に付着している。	坏<口一横ナデ その他一ナデ 坏部と脚部の接合点をヘラオサエ をヘラナデ 脚一横ナデ 外一ナデ	良好・砂粒・灰褐スゴリア(礫)にぶい橙	70% P L 37-4
5	土師器 環	A 20.2 B 5.4	脚部欠損。坏部はやや薄手で直線的に大きく開いている。底部内外に媒の付着が見受けられる。	内面一ヘラナデ 上ナデ 外面<下ヘラ押え	良好・砂粒・橙明赤褐スゴリア(少)にぶい黒	坏部 70% P L 37-5
6	土師器 環	A 17.2 B 5.3	全般的に薄手でやや直線的な開きを示している。	内面一ヘラナデ 摩滅きみ 外面一ハケ目調整のあとナデ	やや・砂粒・橙明赤褐 軟弱	坏部 85% P L 38-1
7	土師器 環	B 8.6 C 14.6	坏部は欠損。脚部は厚みをもち直線的に23度の開きを有しながら裾部に至る。裾部は傾斜を保ちながら開いている。	脚部すそ 外面>横ナデ 内面一ナデ 外面一ナデ 輪積痕	良好・砂粒・にぶい褐橙にぶい赤褐	脚部 90% P L 38-2



第27図 第13号住居跡実測図

第13号住居跡（第27図）

本住居跡はE3c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>調査区を中心に確認されたもので、第12号住居跡の北東側に位置しており、長軸方向はN-20°-Wを指す。規模は長軸4.77m・短軸4.66m・面積22.22m<sup>2</sup>を有し、平面形は方形を呈している。壁高は15~20cmを測るが、ゆるやかに外反して立ち上がる。西側は削平・



第28図 第13号住居跡出土遺物実測図

攪乱され低くなっている。西壁下及び南壁下に焼土・炭化物等が多量に検出され、いずれもやや硬いブロック状を呈している。床面はしまりのあるロームで、全体として平坦である。また、多量の焼土・炭化物が検出されたことから、本跡は焼失した家屋であると思われる。

本跡は貯蔵穴の検出がなかったが、東壁中央部に方形の踏み固められた黒色土が検出されている。柱穴は7か所検出されているが、支柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4か所である。その平面形は、径約18cmを測る円形で、深さ26～29cmを測り、円筒形に掘り込まれている。また、壁溝が住居跡を囲むように検出され、あわせて壁柱穴も確認されている。

炉跡は北側中央部に検出され、直径50cmあまり、深さ10cm程掘り窪められた地床炉で、炉床の北側に、さらに16cm程小さく皿状に掘られていた。炉内には、赤褐色・暗褐色の色調をもつ焼土・炭化粒子が多量に堆積していた。炉床は褐色の焼けたロームで、北側が深く窪み、南側がゆるやかな皿状に掘られている。本跡の出土遺物は、土師式土器及び土器片等が検出されている。

本跡の覆土は褐色土・黒褐色土・暗褐色土で、ローム粒子・ソフトロームブロック・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が混入し、しまりを帯びて自然堆積と思われる。



出土遺物解説表

SI-13

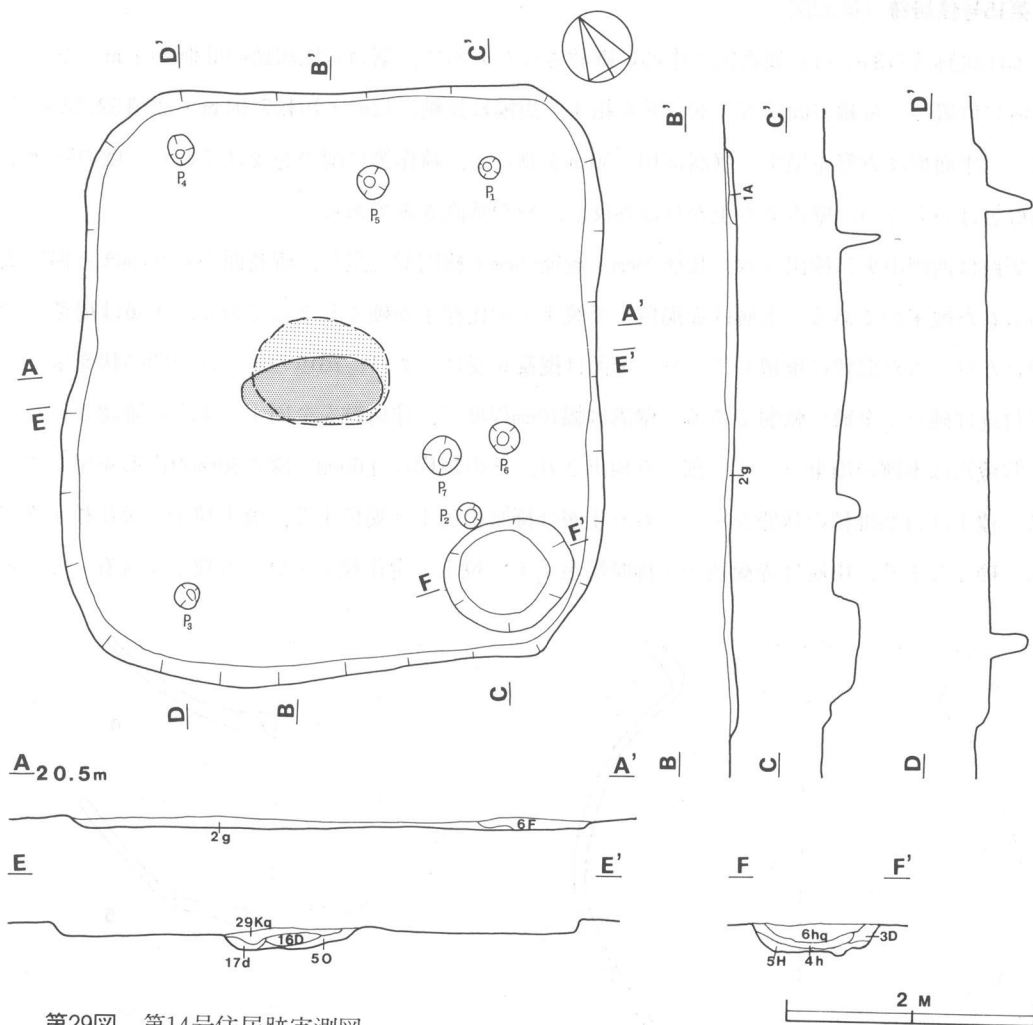
番号	器種	法量(cm)	器形の特徵	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (17.0) B 17.3	頸部は「く」の字状を呈しており、口縁部は外反し、口唇部でさらに外傾する。胴部はゆるやかに膨らみながら底部に至る。底部欠損のため特徴は不明であるが平底と思われる。	口一横ナデ 内面一摩滅 外面一ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 砂礫 (少) い い 橙 い 褐	50%
2	土師器 壺	A 20.0 B 5.4	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は大きく外反し口唇部でさらに外反を見せて丸味を帯びている。胴部はなで肩で中位部へ移行すると思われる。	内面一ヘラミガ キ 口< 外面一横ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 い 黄 橙 灰褐	口縁部70%
3	土師器 壺	A (16.0) B 5.4	折り返し口縁を有し、大きく外反しており、口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ	普通・砂粒・にぶ い 橙	口縁部40%
4	土師器 壺	A (12.0) B 13.3	口縁部は頸部からほぼ直線的に外反する。口唇部は丸味を帯びている。胴部は弧を描くように張り出し、中位で最大径を測る。底部は欠損している。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶ い 橙	口縁部40%
5	土師器 罎	A 9.4 B 8.2	口縁部はやや直線的に外反しながら立ち上がりをみせ、口唇部は薄い状態である。頸部は「く」の字状を呈している。胴部は下位で膨らみをもち底部に至っている。底部は平底である。煤の付着が目だつ。	口一横ナデ 内面>ナデ 外面	良好・砂粒・黒 にぶ い 橙 明 赤 褐	50% PL 38-3
6	土師器 鉢	A 16.1 B 6.0 C 6.0	底部は平底で、体部は直線的で45度の傾斜をもち広く開いている。口唇部分はやや丸味を帯びている。鉢内外に煤が多量に付着している。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	良好・砂粒・黒 にぶ い 橙 明 赤 褐	95% PL 38-4
7	土師器 高環	A 18.5 B 14.8 C 15.9	坏部はやや弧状を呈し、口唇部に至り薄くなっている。脚部は、上部から下部に至るほどふくらみもちながら広がりを呈して裾部に至る。裾部は25度の角度をもちなめらかである。	内面一坏部一ヘラナ デ 外面一ナデ 口と脚のすそ一横ナ デ	良好・砂粒・にぶ い 橙 橙	100% PL 38-5
8	土師器 高環	A 15.6 B 12.9 C 11.9	坏体部から口唇部にかけて直線的な開きをもっており、底部はややあげ底を示している。脚部はふくらみもちながら裾部へと至っている。裾部は底辺から35度の傾斜を測っている。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ ヘラナデ ヘラオサエ すそ部一横ナデ	良好・砂粒・黒 赤 褐 橙	90% PL 38-6

第14号住居跡 (第29図)

本住居跡はD3h2・i2調査区を中心に確認されたもので、第15号住居跡の南、第16号住居跡の北側にはさまれる状態で検出された。長軸方向はN-29°-Eを指している。規模は長軸4.65m・短軸4.14m・面積19.25㎡を有し、平面形は隅丸方形を呈す。壁高は5~10cmを測り、外反しながらなだらかに立ち上がっている。床面はソフトロームで凹凸し、耕作によって削平されて、全体的に軟弱であり、西側が一段と低くなっている。柱穴は7か所検出されているが、支柱穴はP1~P4の4か所である。径はほぼ20cmの円形を呈し、深さはまちまちで最深のものは40cmを測り、円筒形に掘り込まれている。

炉跡は本跡の中央に存在し、長径120cm・短径20cmを測る楕円形を呈し、確認面から約30cm掘り窪められた地床炉である。炉内には暗赤褐色土・褐色土が堆積し、炭化粒子・焼土粒子等が混入している。炉床は硬く、しまりを帯びている。

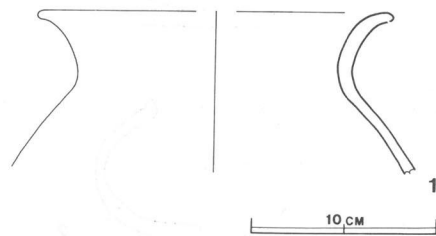
貯蔵穴は南コーナー部に確認され、径80cmの円形で深さ約30cmを測る。極暗褐色・褐色土がしまりを帯びて自然堆積し、底面はやや凹凸状である。壁の立ち上がりは垂直に近く、遺物の検出



第29図 第14号住居跡実測図

はなかった。

住居跡内の覆土は暗褐色土が大半をしめており、ソフトロームブロック・炭化粒子・焼土粒子が混入している。遺物は、本跡南東部の炉跡と貯蔵穴の間から土師式土器片が出土している。



第30図 第14号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表

SI-14

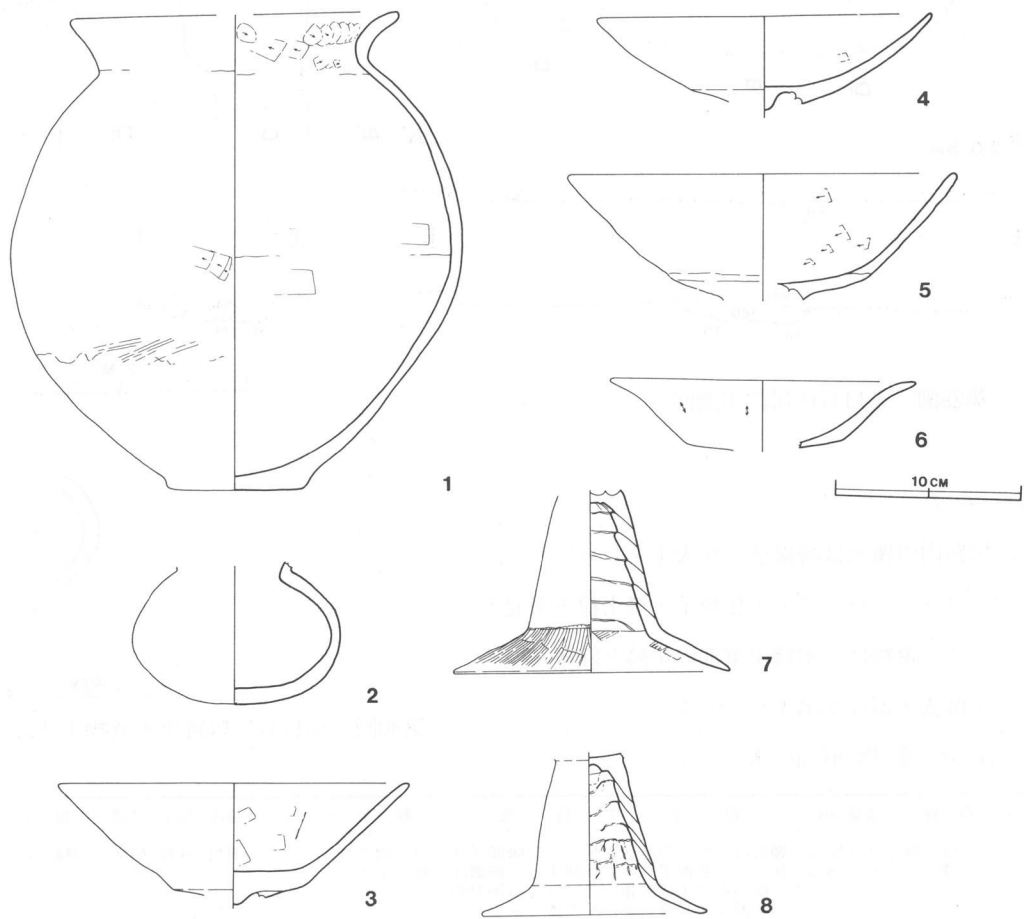
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (19.0) B 8.3	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反し、口唇部でさらに外傾する。胴部は上部のみで下は欠損しているため決定的な判断は出来ないが、やや膨らみをもっているものと思われる。	口一横ナデ 胴一ナデ	良好・砂粒・褐灰 スコ 橙 リア	口縁部45%

第15号住居跡 (第32図)

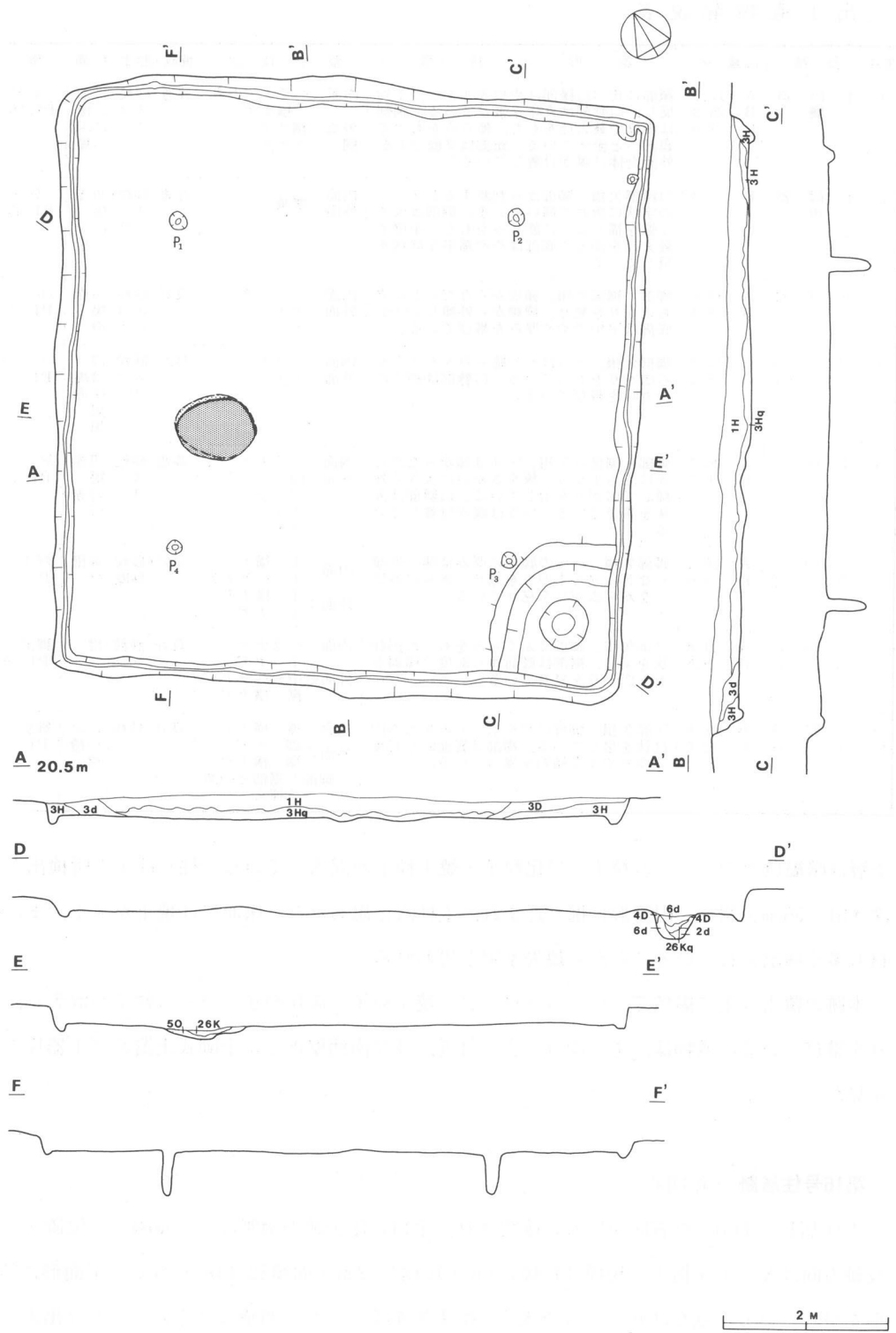
本住居跡はD3e<sub>2</sub>・f<sub>2</sub>調査区を中心に確認されたもので、第14号住居跡の北側約4mへだたった所に位置し、長軸方向はN-30°-Eを指す。規模は長軸7.42m・短軸7.04m・面積52.23㎡を有し、平面形は方形を呈す。壁高は10~30cmを測るが、耕作等に削平を受けており、壁の状態は良好とはいえない。壁の立ち上がりは外反し、やや垂直さみである。

炉跡は西側中央に検出され、長径70cm・短径55cmで楕円形を呈し、確認面から9cmほど掘り窪められた地床炉である。上層は赤褐色土で焼土・炭化粒子が硬くしまっており、下層は褐色土で焼けたロームが皿状に堆積している。床面は攪乱を受けており、褐色のロームで凹凸状を呈し、炉付近は硬いが全般に軟弱である。壁溝は幅10cm程度で、住居跡を全周するように確認された。

貯蔵穴は本跡の南東コーナー部より検出され、その規模は径60cm・深さ30cmの円形を呈している。覆土は自然堆積の状態を示しており上層は極暗褐色土と褐色土で、焼土粒子・炭化粒子が混入し硬くしまり、中層は赤褐色土・極暗褐色土で、焼土・炭化粒子・ローム粒子を含有している。



第31図 第15号住居跡出土遺物実測図



第32图 第15号住居跡実測図

出土遺物解説表

SI-15

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (17.5) B 25.3 C 7.0	頸部に比べ口縁部はやや太さを示して外反し、口唇部は丸味を帯びている。胴部は中位で最大径をもち、膨らみをもって底部へと至っている。底部は平底である。外面全体に煤が付着している。	内面－ヘラナデのあと横ナデ 外面－横ナデ 胴－ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい橙 スコ リア にぶい褐	45% PL 39-1
2	土師器 埴	B 7.3	口縁部欠損。頸部から判断すると「く」の字状に折れて開いている。胴部は大きく弧を描くように膨らみをもち、中位で最大径を測る。底部はやや扁平な球状を呈している。	内面 外面 > 摩滅	普通・砂粒・明赤 スコ リア にぶい橙	70% PL 39-2
3	土師器 高環	A 18.6 B 6.4	脚部・裾部欠損。頸部からなだらかに立ち上がりを見せ、稜線から外傾している。底部は平坦でやや厚みを帯びている。	内面－ヘラナデ 外面－ナデ	良好・砂粒・明赤 スコ リア 褐 橙	坏部 100% PL 39-4
4	土師器 高環	A 17.7 B 5.2	脚部欠損。坏部はやや膨らみをもちながら広がりをもっている。口唇部は細くやや丸味を帯びている。	内面－ヘラナデ 外面－ナデ	良好・砂粒・橙 スコ リア 暗褐 明赤 褐 黒	坏部 90% PL 39-5
5	土師器 高環	A 20.7 B 6.7	脚部・裾部は欠損。坏部は頸部からなだらかに立ち上がり、稜をさかんに大きく外傾して広がりを見せている。口唇部は丸味を帯びている。坏部は煤が付着している。	内面－ヘラナデ 外面－横ナデ ラフなヘラミ ガキ ナデ	普通・砂粒・明赤 スコ リア 暗赤 灰	坏部 80% PL 39-6
6	土師器 高環	A 16.2 B 3.6	脚部欠損。坏部の底部の厚みは薄く外傾しながら立ち上がりを見せ、さらに外反しながら広がりを見せている。	内面 < 上－横ナデ 下－ヘラナデ 外面 < 上－横ナデ 下－ナデ	良好・砂粒・黄橙 砂礫 橙	坏部 95% PL 39-7
7	土師器 高環	A 14.8 B 9.6	坏部欠損。脚部はふくらみをもった円柱状を呈し、裾部は底面から30度の傾斜をもち広がりを見せている。	内面－ヘラナデ 上－ナデ 外面 < 中－ヘラナデ 裾－横ナデ	良好・砂粒・橙	脚部 70% PL 39-3
8	土師器 高環	B 8.6 C 12.0	坏部欠損。脚部はややふくらみもち円柱状を呈している。裾部は底面から15度のゆるやかな傾斜を保っている。	内面－裾－横ナデ 脚－ナデ 外面 < 裾－横ナデ 脚部と裾部との間 ヘラ押え	良好・砂粒・にぶい橙 橙	脚部 100% PL 40-1

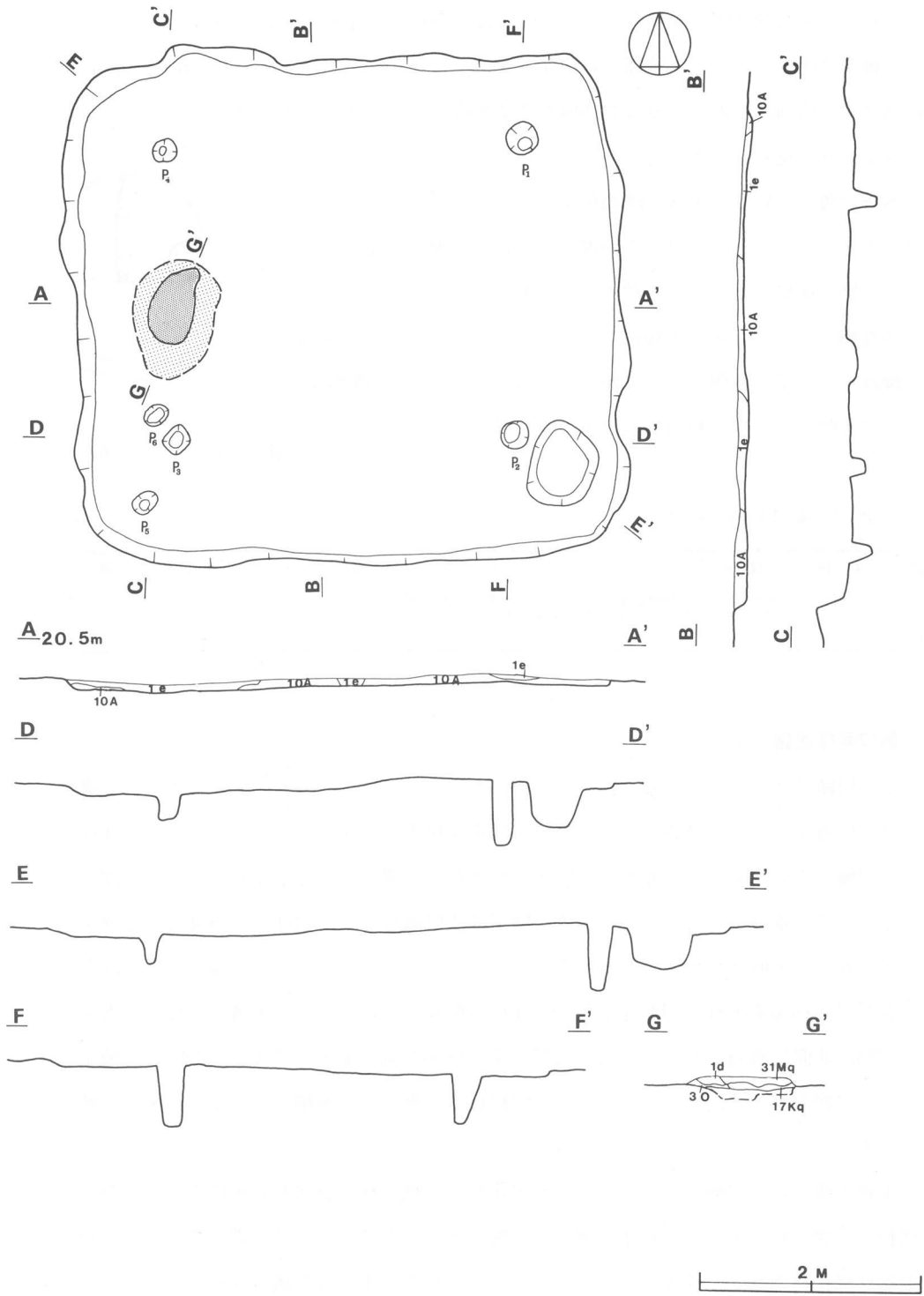
下層は暗褐色土で、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子が混入している。柱穴は4か所検出され、深さ51～56cmを測り、円筒形に掘り込まれ、主柱穴と思われる。床面には焼土が多く、また炭化材も多く検出されていることから焼失家屋と思われる。

本跡の覆土は主に褐色で、ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子が混入し、しまりを帯びている。遺物は、主に南コーナー付近、及び南西壁近くに土師式土器及び土器片の出土を見た。

第16号住居跡 (第33図)

本住居跡はD3j1調査区を中心に確認され、第14号住居跡の南側2～3m隔った位置にあり、長軸方向はN-0°を指す。規模は長軸4.9m・短軸4.52m・面積22.14㎡を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は6～7cmで浅く、削平等を受けており明確にとらえることは出来ない。

炉跡は西側中央に検出され、長径60cm・短径40cmで深さ12cmを測り、楕円形を呈している。それぞれ焼土ブロック・炭化粒子・焼土粒子が混入し、ややしまりがある。炉床は褐色で焼けたロ

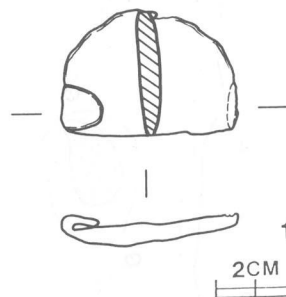


第33图 第16号住居跡実測図

ームである。柱穴は6か所検出されたが、主柱穴と思われるのはP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4か所である。径22cmあまりで、平面形は円形を呈しており、57cmほど円筒形に掘り込まれている。

貯蔵穴は南東コーナーに確認され、深さ36cm・長径80cm・短径50cmを有し楕円形を呈している。底面はやや凹凸状であり、壁は北西側がやや垂直に立ち上がり、南東側はやや外反する状態での立ち上がりを見せている。

本跡の覆土は総じて上層が暗褐色土で、ローム粒子・ロームブロック・ソフトロームブロックが混入しており、攪乱を受けている。下層は明褐色土でローム粒子を多く混入し、しまりをもって自然堆積している。床面も褐色ロームでやわらかく、特に中央部が攪乱を受けて、西側が低く東側がやや高くなっている。遺物は、西側に土師式土器片・鉄製品の出土がみられた。



第34図 SI-16出土遺物実測図

### 出土遺物解説表

SI-16

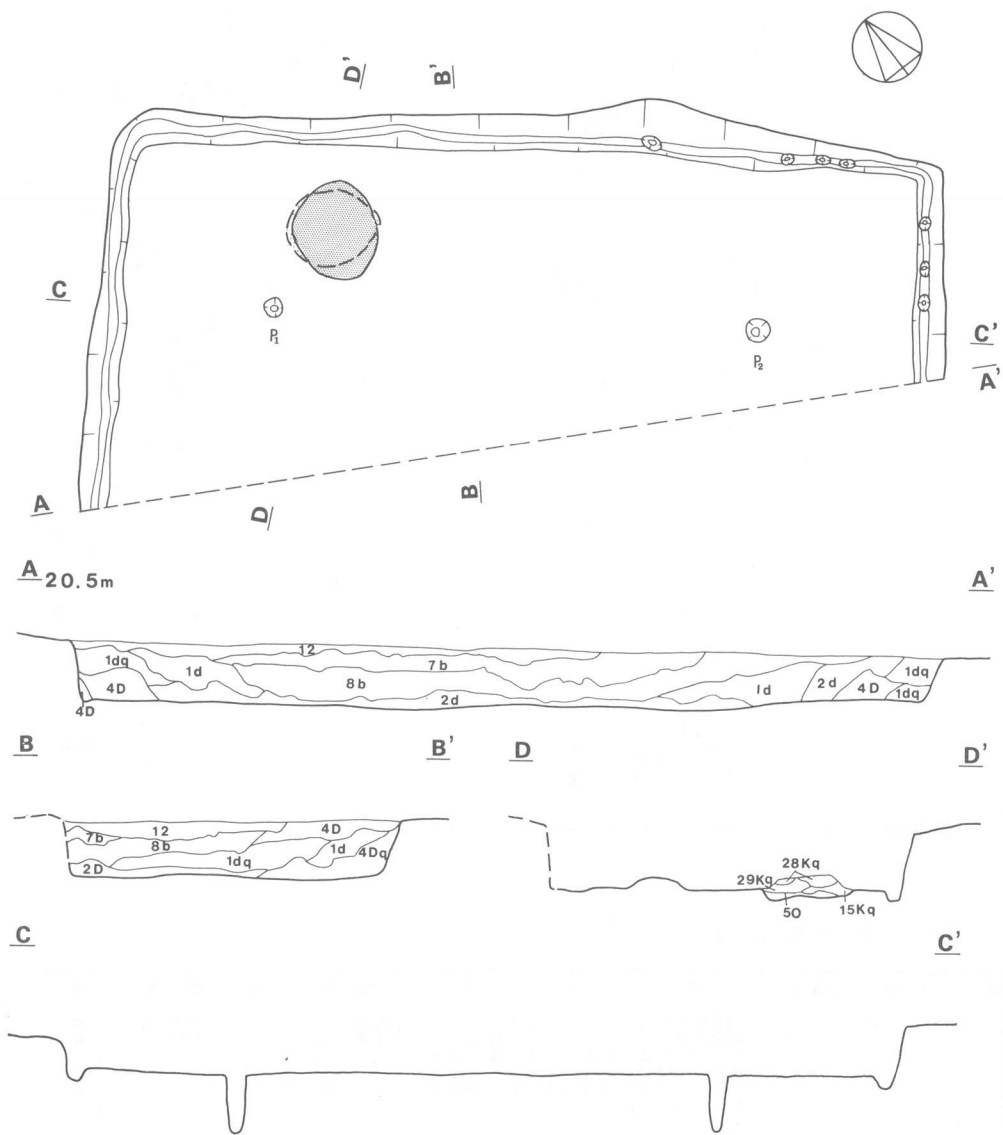
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	鉄製品	長さ 4.3 幅 4.7	半円形を呈し、一対の耳が有り、折り曲げているが、片方欠損している。			PL 75-16

### 第17号住居跡 (第35図)

本住居跡はF3f<sub>1</sub>・f<sub>2</sub>を中心に確認されたものであるが、約半分以上と考えられる遺構がエリア外に位置するため、調査が完全でない。推定長軸方向はN-50°Wを指し、規模は長軸6.82mで、短軸は不明である。平面形は方形と予想される。確認された壁高は22~40cmを測り、外反ししながらほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には壁溝を有し、壁柱穴も南東及び東壁下に7か所検出された。床面は平坦で、しまりを帯びている。なお、柱穴は2か所検出され、深さ45~52cmを有し、径18cmあまりで円形を呈し、円筒形に掘り込まれている。本跡の主柱穴と考えられる。

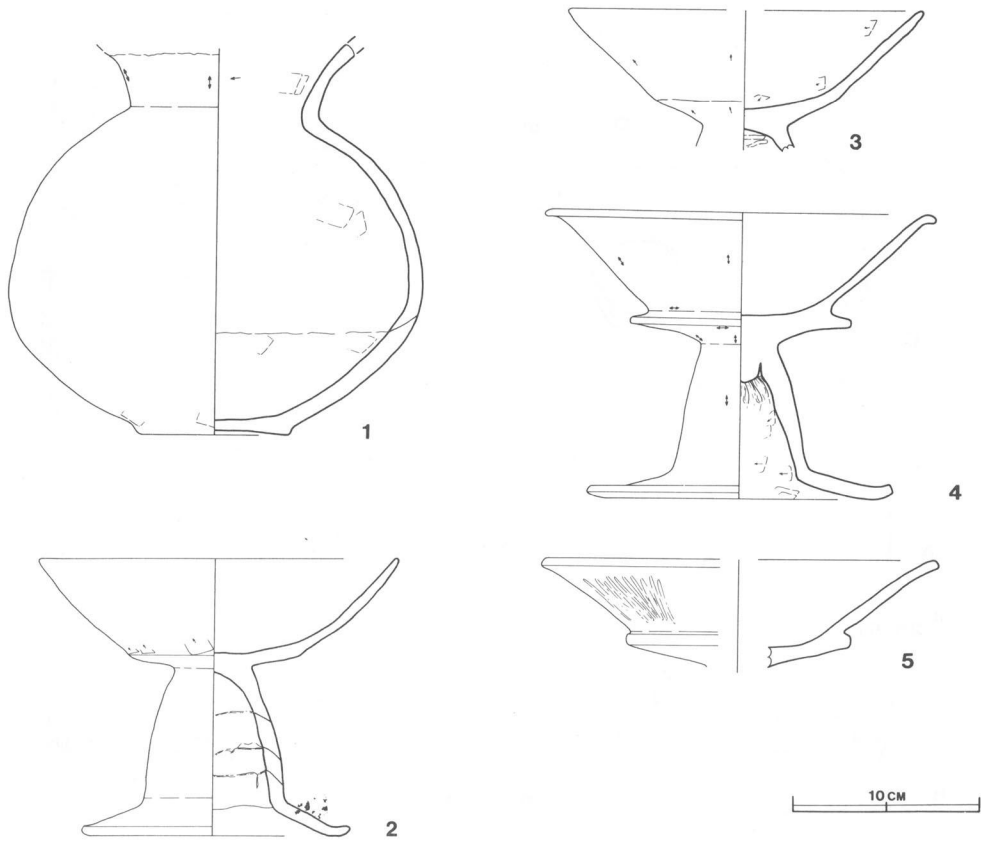
炉跡は北側に確認され、径55cmの円形で深さ18cmを測る地床炉である。炉内には焼土・炭化粒子・炭化物が混入し、サラサラしている暗褐色土と褐色土が堆積している。炉床は、焼けたロームである。

本跡の覆土は、黒褐色土と、それぞれ炭化粒子・焼土粒子を含む暗褐色土、およびそれぞれ炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子が混入した褐色土からなり、しまりを帯びているのが特長である。遺物は炭化材のほか、土師式土器の出土がみられた。本跡は貯蔵穴は有していない。なお、本跡は焼失家屋と思われる。



第35图 第17号住居跡実測図





第36図 第17号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表

SI-17

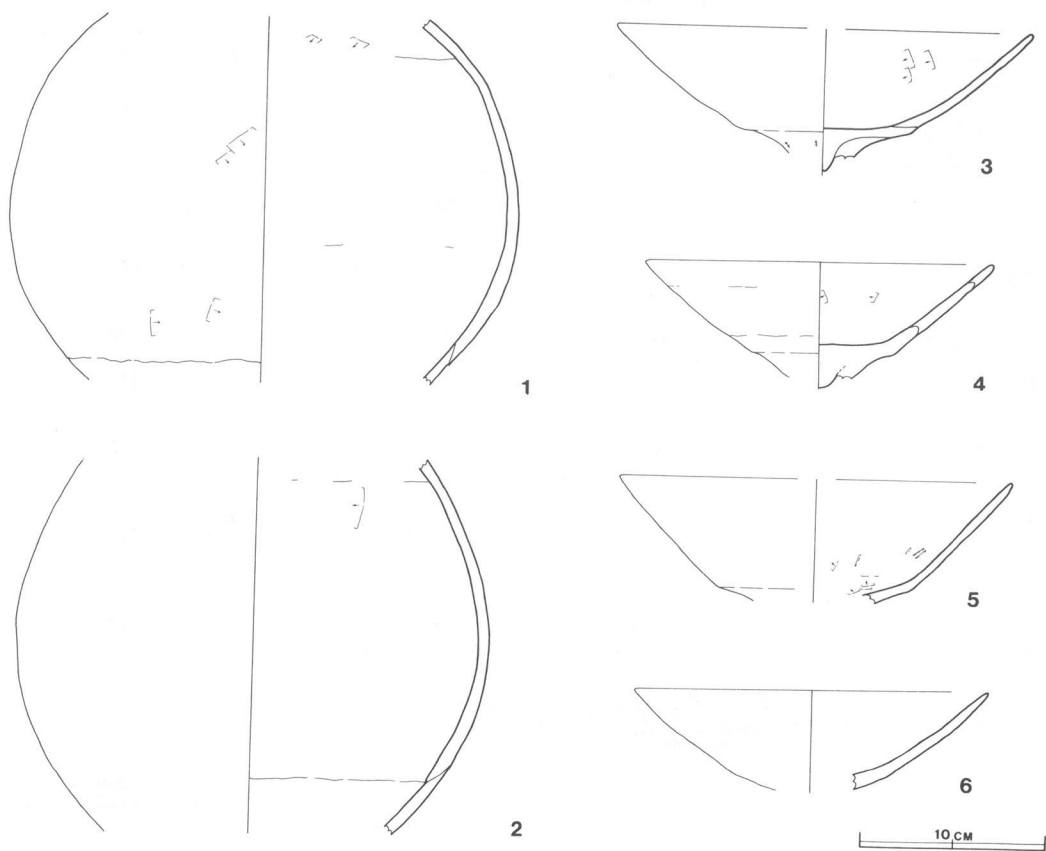
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 壺	B 20.8 C 8.0	口縁部は頸部で「く」の字状に外反し、頸部は厚みをもっている。口唇部近くでさらに広がる。胴部は大きく弧を描き、胴部の中位で最大径を測りながら底部へと至っている。底部は上げ底。器厚は一定している。	内面←ヘラナデ 外面←口←ヘラナデ 胴←ヘラミガキ 底←ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 スコ リア 砂礫 灰褐 黄褐	70% PL 40-2
2	土師器 高環	A 19.1 B 14.6	頸部で「く」の字状に外反し、環部はややなだらかに立ちあがりを見せている。底はやや上げ底である。脚部は太く厚みもち、円柱状で裾部に至り、裾部は大きく広がっている。	内面<口>横ナデ 外面 口←横ナデ 環←ヘラナデ 脚←ナデ 裾←横ナデ	やや・砂粒・橙 軟弱	80% PL 40-3
3	土師器 高環	A (19.0) B 7.3	脚部・裾部欠損。口縁部「く」の字状を呈し、体部との境に稜をもつ。環部は外反ししながら立ち上り、口唇部はやや丸味を帯びている。底部はやや平坦である。	口←横ナデ 環←ヘラナデ	普通・砂粒・明赤 スコ リア 灰褐	環部 20%
4	土師器 裝飾器台	A 20.9 B 15.3 C 16.4	脚部付近から裝飾器台が水平に突起している。環部はやや薄手で外反し、口唇部でさらに外反している。脚部はふくらみもち、円柱状で裾部に至っている。裾部はなだらかである。環部の底部は平坦である。	環<内面←ナデ 外面←ヘラミガキ 脚<内面←ヘラナデ 外面←ヘラミガキ	普通・砂粒・橙 にぶ 黒褐	80% PL 40-4
5	土師器 裝飾器台	A (19.4) B 5.7	脚部・裾部欠損。頸部付近で裝飾突起が見られ、環部は外反しながら大きく開き、口唇部でさらに外反している。底部は平坦である。	口←横ナデ 内面←ナデ ヘラミガキ 外面←横ナデ ヘラミガキ	良好・砂粒・にぶ スコ リア	環部 10%

第18号住居跡 (第38図)

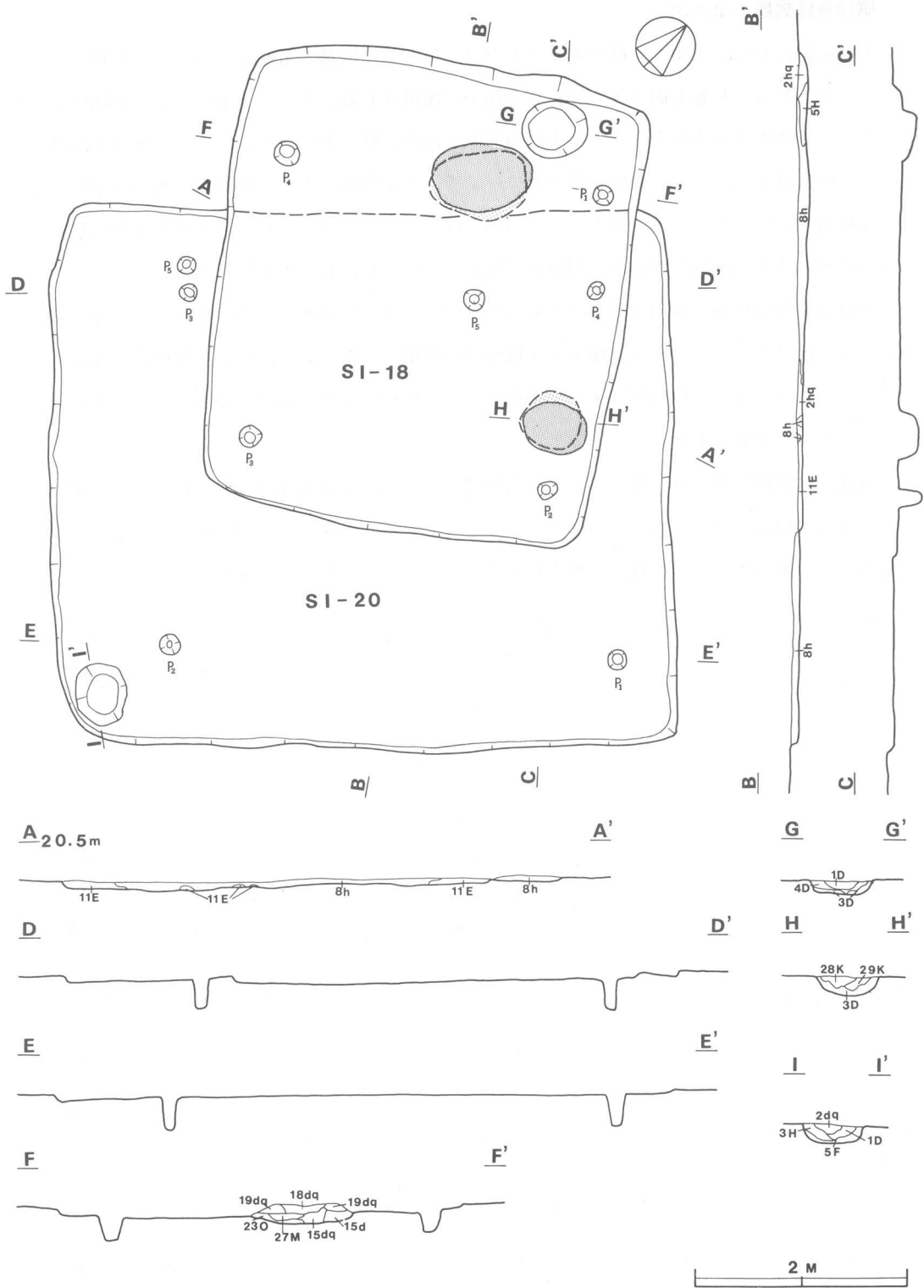
本住居跡はF3 a4 を中心に確認されたもので、第20号住居跡と重複しているが、本跡の方が新しいと思われる。長軸方向はN-40°Wを指す。規模は長軸5.47m・短軸3.85m・面積21.05㎡を有し、平面形は長方形を呈する。本跡の北側・西側の壁は削平され、プランの確認も困難であった。床面は平坦であり、褐色を帯びたロームで、やや軟弱である。北側及び西側にかけては一部暗褐色土のロームブロックが混入している。柱穴は5か所検出され、径20cm内外の円形を呈し、深さはそれぞれ24cm程を測るが、円筒形に掘られているP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴と思われる。

炉跡は北西壁付近に検出され、長径95cm・短径65cmを測る地床炉で楕円形を呈している。炉床は褐色土で焼けたロームであり、覆土の上層部は暗赤褐色土で、ローム粒子・炭化粒子等が混入し、あまりしまりが無い。中層部は主に赤褐色土で、炭化粒子・焼土粒子・焼土ブロック等が混入し、バサバサした状態である。

貯蔵穴は炉跡に近い壁に接するかたちで確認され、平面形は直径60cmの円形を呈し、深さは18cmを測る。壁は、やや垂直に近い形で立ち上がっている。底面は平坦で、覆土はしまりを帯び、暗褐色土・褐色土で、炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子等が混入して堆積している。



第37図 第18号住居跡出土遺物実測図



第38图 第18号·20号住居跡実測図

出土遺物解説表

SI-18

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器	B 19.5	口縁部・底部欠損。胴部の器厚は中位から下にかけてやや厚みをもち、底部近くでやや薄くなっている。胴部中位で最大径を計る。	内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・いぶ 砂礫 黒褐 灰褐	胴部 20%
2	土師器	B 20.0	口縁部・底部欠損。胴部の器厚は一定で、中位で最大径を測り、全体的にゆるやかな弧状を呈している。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラミガキ	やや・砂粒・いぶ 軟弱 スコ リア 赤 褐 灰褐 黒褐	胴部 20%
3	土師器 高 器 環	A 22.1 B 6.8	脚部・裾部欠損。坏部はゆるやかに外傾して大きく開き、器厚はやや薄く、口唇部はさらに細くなっている。体部と頸の間に稜をもっている。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ 口一横ナデ	やや・砂粒・いぶ 軟弱 砂礫 (少)	坏部 25%
4	土師器 高 器 環	A 18.7 B 6.2	脚部・裾部欠損。坏部は直線的に開き、口唇部はやや丸味を帯びている。底部はやや上げ底である。体部と頸の間に稜をもっている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ	やや・砂粒・いぶ 軟弱 砂礫 い橙	坏部 60% PL 40-5
5	土師器 高 器 環	A (21.0) B 6.6	脚部・裾部欠損。頸部と体部の間に稜をもち、坏部は大きく外傾しながら開いている。器厚は下位で薄く、上位でやや厚みを帯びている。口唇部はやや丸味をもっている。	口一横ナデ 坏一ヘラナデ	良好・砂粒・いぶ スコ リア 橙 褐灰	坏部 20%
6	土師器 高 器 環	A 19.9 B 5.3	脚部・裾部欠損。坏部はなだらかに外傾して立ち上がり、口唇部は細くなっている。	内面>ナデ 外面 口一横ナデ	軟弱・砂粒・いぶ 砂礫 い橙 (少)	坏部 60%

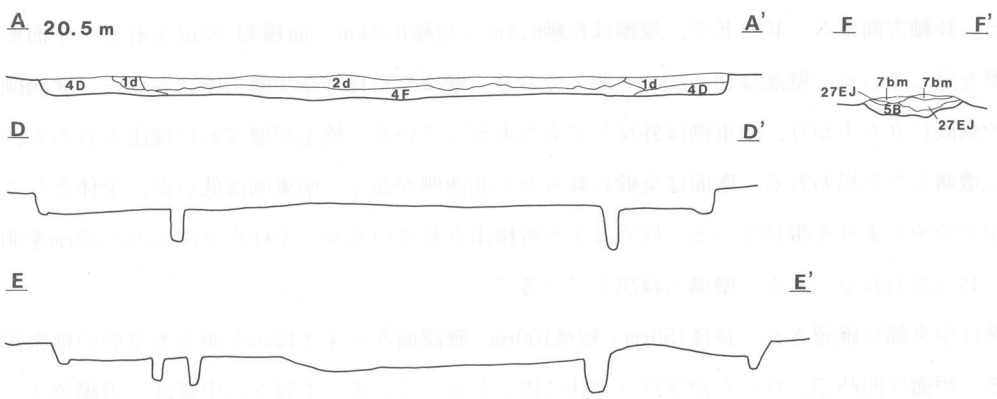
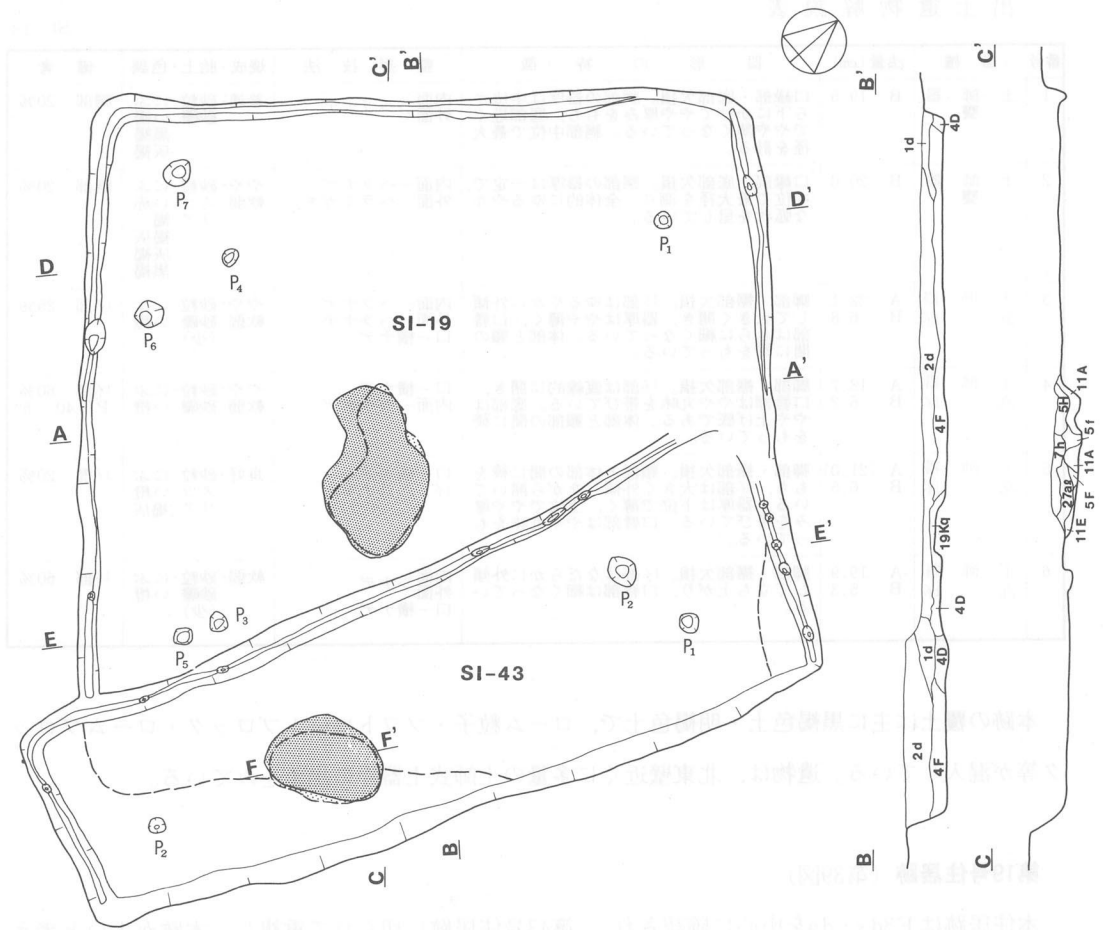
本跡の覆土は主に黒褐色土・明褐色土で、ローム粒子・ソフトロームブロック・ロームブロック等が混入している。遺物は、北東壁近くに多量の土師式土器片の出土をみている。

第19号住居跡 (第39図)

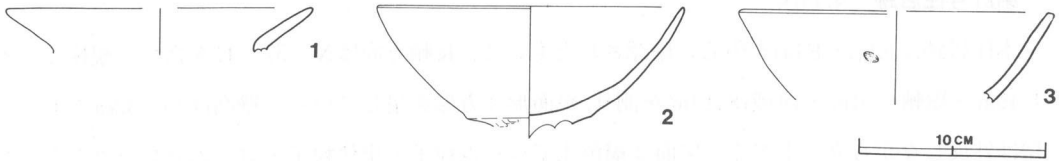
本住居跡はF3d8・d9を中心に確認され、第43号住居跡に切られて重複し、本跡が古いと考えられる。長軸方向はN-40°Eで、規模は長軸6.4m・短軸6.24m・面積39.93㎡を有し、平面形は方形を呈している。壁高は15~20cmを測っており、壁はやや良好な状態で確認された。北西側はやや垂直に立ち上がり、南東側は外反して立ちあがっている。焼土が壁ぎわに検出されたが、火災に遭遇したと思われる。床面は全般に軟らかく北西側が高く、南東側は低いが、全体としては平坦でややしまりを帯びている。柱穴は7か所検出されているが、主柱穴は深さ26~37cmを測るP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>と思われる。また、壁溝も検出している。

炉跡は中央部に確認され、長径150cm・短径100cm、確認面から深さ12cmを測る不定形の地床炉である。炉面は凹凸で、ロームがブロック状に固くしまっている。上層から中層は、黒褐色土・赤褐色土・褐色土でローム粒子・ハードロームブロック・焼土粒子・炭化粒子等が混入し、ややしまりをもっている。

住居内の覆土は、自然堆積の状態を示し、暗褐色土・褐色土が堆積している。また、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子等が混入し、総じてしまりを帯びている。遺物は、土師式土器片の出土が見られた。



第39图 第19号·43号住居跡実测图



第40図 第19号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表

SI-19

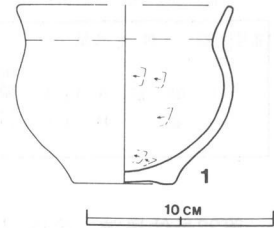
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (16.2) B 2.4	胴部・底部欠損。 口縁部は外反しながら開き、口唇部はやや丸味を帯びている。 頸部は「く」の字状と考えられる。	口ー横ナデ	普通・砂粒・にぶい赤褐 明示褐	口縁部10%
2	土師器 高坏	A 16.3 B 6.4	脚部・裾部欠損。 坏部は底部で器厚を増し、坏部は極端に薄手となる。口唇部にかけてやや外反し細くなる。体部と頸部の境に稜をもつ。	内面ーハラナデ 外面<ハラミガキ ハラオサエ	良好・砂粒・明赤 砂礫・褐 にぶい橙	坏部 70% P L 40-6
3	土師器 高坏	A (16.7) B 4.7	脚部・裾部欠損。 坏部はやや急勾配で立ち上がり、口唇部は丸味をもっている。	内面ーハラナデ 外面ーハラミガキ 口ー横ナデ	良好・砂粒・にぶい橙 スゴリア	坏部 50%

第20号住居跡 (第38図)

本住居跡はF3b4・b5を中心に確認され、長軸方向はN-43°-Eを指す。規模は長軸5.85m・短軸5.03m・面積29.42㎡を測り、平面形は長方形を呈している。壁高は5~7cmを測るのみで浅く、壁は外反している。柱穴は5か所検出され、いずれも深さ27~31cmを測る。これらは、主柱穴と思われ、平面が径18cm程の円形で、円筒形を呈して掘られている。

炉跡は北東コーナーに検出されたが、第18号住居跡によって一部削平されていた。長径60cm・短径50cmの楕円形を呈し、確認面から約16cm掘り窪められた地床炉で、その覆土の上層は暗赤褐色土、下層は褐色土となっている。燃焼部は焼土が多量に堆積していた。炉床は割合軟らかで、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が混入し、しまりを帯びている。

貯蔵穴は南コーナーに径58cmの円形を呈し、深さ34cmを測る。壁はやや垂直に立ち上がっている。その覆土は暗褐色土・褐色土が堆積し、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が混入し、ややしまりを帯びている。遺物は、少量の土師式土器が出土している。



第41図 SI-20出土遺物実測図

出土遺物解説表

SI-20

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 小型甕	A (11.6) B 9.5 C 5.6	底部は平坦で、胴部は緩やかに内彎して、中位で最大径をもち、口縁部は、頸部からやや垂直きみに外反しながら立ち上がる。 口唇部は丸味を帯びている。媒が付着している	口ー横ナデ 内面ーハラナデ 外面ーナデ	良好・砂粒・赤褐 黒褐 明示褐	40% P L 41-1

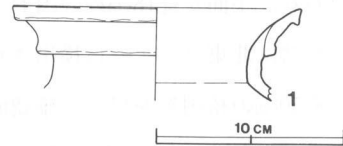
### 第21号住居跡（第43図）

本住居跡はE4j1・F4a1を中心に確認されたもので、長軸方向はN-57°-Eを指す。規模は長軸4.49m・短軸4.04m・面積18.13㎡を測り、平面形は方形を呈している。壁高は25～32cmを測り、壁は外反しながら立ち上がる。床面は褐色土でローム粒子・炭化粒子・ロームブロックが混入し平坦でややしまりを帯びている。本跡は耕作による攪乱を受けているが、床面までは及んでいない。

炉跡はほぼ中央に検出され、長径60cm・短径50cmの不定形を呈する。また、これは床面を7cm程掘り窪めた地床炉で、炉内には明褐色土・暗褐色土・褐色土がローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を混入させて堆積しており、しまりを帯びた状態である。柱穴は17か所検出され、住居跡内には7か所、深さは22～38cmほどである。住居跡内のP1～P3の平面は径18cmあまりの円形を呈し、円筒形に掘り込まれており、主柱穴と思われる。なお、棟持柱と推定される柱穴の検出を見ている。

貯蔵穴は西壁近くに確認され、長径80cm・短径52cmで、平面形は楕円形を呈しており、底面までの深さは46cmを測っている。底面はやや平坦で、壁はほぼ垂直に立ちあがり、その断面はU字形を呈している。

本跡の覆土は暗褐色土・褐色土で、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が混入し、自然堆積の様相を呈して、しまりを帯びている。遺物は少ないが、土師式土器片の出土を見ている。なお、本跡の床面、東壁コーナー・西壁コーナー・北壁コーナーに焼土が検出されており、焼失家屋と考えられる。



第42図 SI-21出土遺物実測図

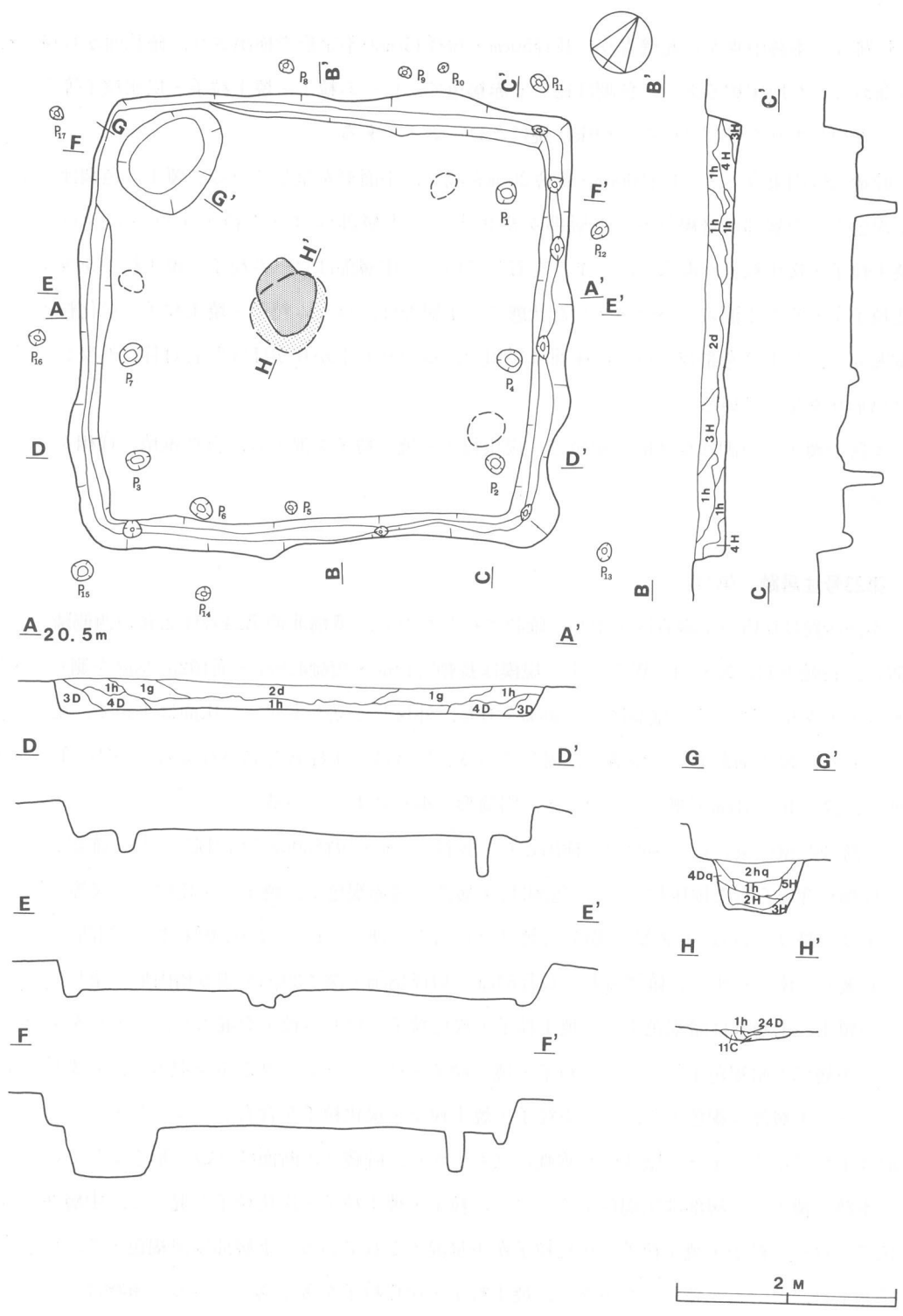
### 出土遺物解説表

SI-21

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 壺	A 15.3 B 4.4	胴部・底部は欠損。 頸部は「く」の字状で、口縁部は折り返し口縁で大きく外反している。 口唇部は尖がった状態である。	内面—ヘラナデ 外面<横ナデ ヘラナデ	やや・砂粒に 軟弱 砂礫 にぶ い赤 褐	口縁部100%

### 第22号住居跡（第18図）

本住居跡はE3g1を中心に確認されたもので、第7号住居跡を重複して存在している。長軸方向はN-0°を指す。規模は長軸5.06m・短軸4.93m・面積24.94㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は4～10cmを測り、壁の南側は垂直に立ち上がる。また、北側は段差をもって外反している。床面は平坦で固く、しまりを帯びている。柱穴は住居跡内に14か所確認され、深さは16～33cmとまちまちである。主柱穴は4カ所で、平面形はほぼ円形を呈して円筒形に掘り込まれ



第43图 第21号住居跡実测图



ている。

炉跡は、本跡中央から北壁寄りに長径50cm・短径45cmの不定形で検出され、確認面から14cm掘り窪められた地床炉である。色調は総じて赤褐色で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子等が混入し、ややしまりを帯びている。炉床は焼けたローム土である。

貯蔵穴は南東コーナーに径60cm・深さ20cmを測り、平面形を呈している。覆土の色調は上層部が褐色土、中層部が暗褐色土、下層部が褐色土で、上層部はローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が混入し、しまりを有している。中層部はローム粒子・焼土粒子を少々、炭化粒子をやや多く混入しパサパサした状態で、下層部は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が少量混入し、しまりを帯びている。床面は平坦で、壁の立ち上がりがほぼ左右対称に外反し、断面は△形状を呈している。

本跡の覆土の色調は全体的に褐色で、炭化粒子・焼土粒子を混入し、自然堆積の様相を示している。

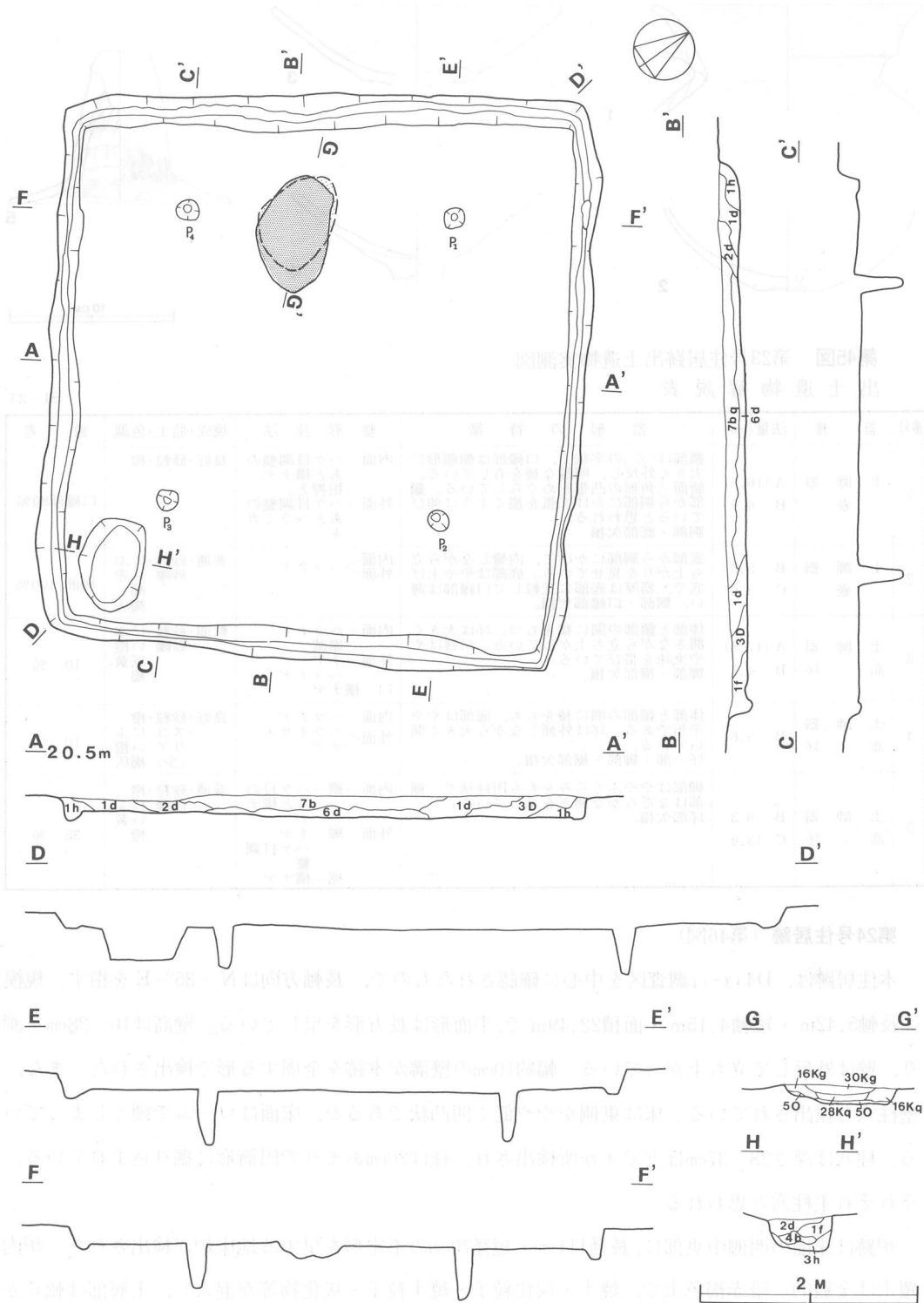
#### 第23号住居跡（第44図）

本住居跡はD4h1・ii調査区を中心に確認されたもので、遺構北側第24号住居跡の西側隣りに位置し、長軸方向はN-54°Wを指す。規模は長軸5.18m・短軸4.9m・面積25.38㎡を測り、平面形は方形を呈している。壁高は15～30cmを有し、外反して立ち上がる。床面は平坦で、締りを帯びており、幅12cmあまりの壁溝が全周している。柱穴は、主柱穴と思われるものがP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4か所で、深さ40～51cmを測ることができ、円筒形に掘り込まれている。

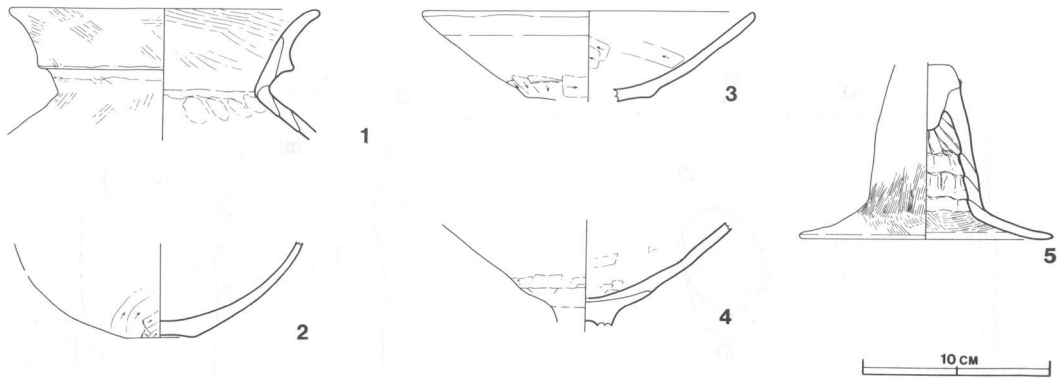
炉跡は北壁中央に近い場所から検出され、長径105cm・短径50cmで楕円形を呈し、確認面から18cm程掘り窪められた地床炉である。色調は、上層部が暗赤褐色で、焼土・炭化粒子・炭等が混じりしまりを帯びている。下層部は褐色で、焼けたロームで硬くしまっており、炉床はやや凹凸している。

貯蔵穴は南コーナーに確認され、長径84cm・短径48cm・深さ30cmを測る楕円形を呈している。その覆土の上層部は暗褐色土で、焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子が混入し、しまりを帯びている。中層部も暗褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・ロームブロックが少々混入し、しまりを帯びている。下層部は褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子を含有し、よくしまっている。床面は平坦でよくしまり、壁はやや垂直に立ち上がり、貯蔵穴の断面は「∨」形を呈している。

本跡の覆土の上層部は黒褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が混入し、中層部は暗褐色で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が少量混入されている。下層部は黒褐色土で、ローム粒子および、ロームブロックを少々と、焼土粒子・炭化粒子を多く含んでいる。遺物は、土師式土器片が西側に多く出土している。



第44图 第23号住居跡実測図



第45図 第23号住居跡出土遺物実測図  
出土遺物解説表

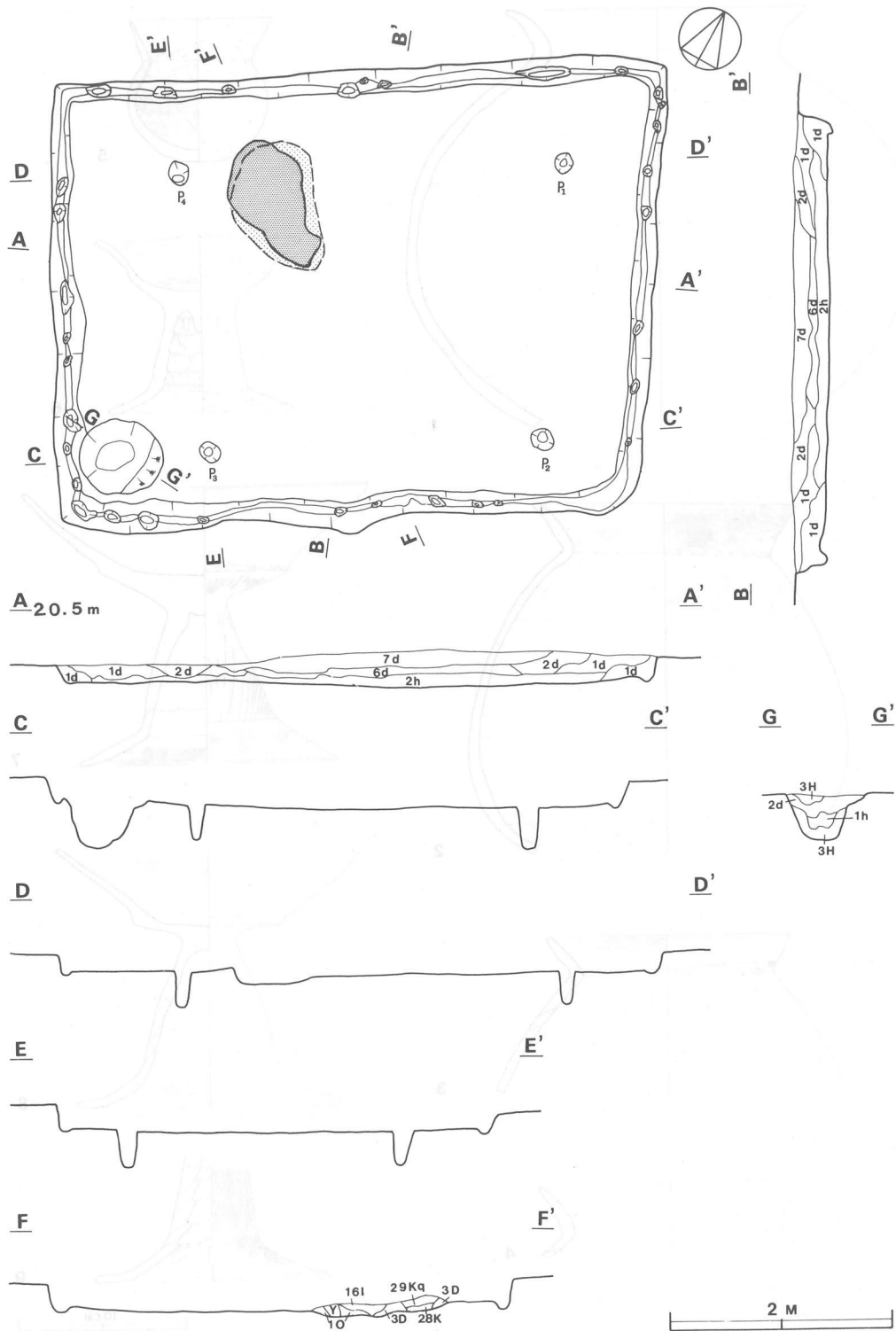
SI-23

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 壺	A (16.5) B 6.9	頸部は「く」の字状で、口縁部は朝顔形に大きく外反し、明瞭な稜を有している。断面三角形の凸帯をめぐらしている。頸部から胴部にかけて弧を描くように伸びていると思われる。胴部・底部欠損。	内面—ハケ目調整のあと横ナデ。 指押え。 外面—ハケ目調整のあとヘラミガキ	良好・砂粒・橙	口縁部80%
2	土師器 壺	B 5.0 C 3.5	底部から胴部にかけて、内彎しながら立ち上がりを見せている。底部はやや上げ底で、器厚は底部に比較して口縁部は薄い。胴部・口縁部欠損。	内面—ヘラナデ 外面—ヘラナデ	普通・砂礫・赤砂礫 にぶい赤褐灰	底部 100%
3	土師器 高環	A (17.8) B 4.7	体部と頸部の間に稜をもつ。環は大きく開きながら立ち上がっている。口唇はやや丸味を帯びている。脚部・裾部欠損。	内面—ヘラナデ 摩滅 外面—ナデ ヘラナデ 口—横ナデ	軟弱・砂粒・赤砂礫 にぶい橙黄褐	10 %
4	土師器 高環	B 5.6	体部と頸部の間に稜をもち、底部はやや平坦である。環は外傾しながら大きく開いている。環一部・脚部・裾部欠損。	内面—ヘラナデ 外面—ヘラオサエ ナデ	良好・砂粒・橙 スゴ リア (少) にぶい黄褐灰	10 %
5	土師器 高環	B 9.3 C 13.6	脚部はややふくらみをもち円柱状で、裾部はなだらかな開きを示している。環部欠損。	内面—裾—ハケ目のあと横ナデ 外面—脚—ナデ ハケ目調整 裾—横ナデ	普通・砂粒・赤砂礫 にぶい黄橙	35 %

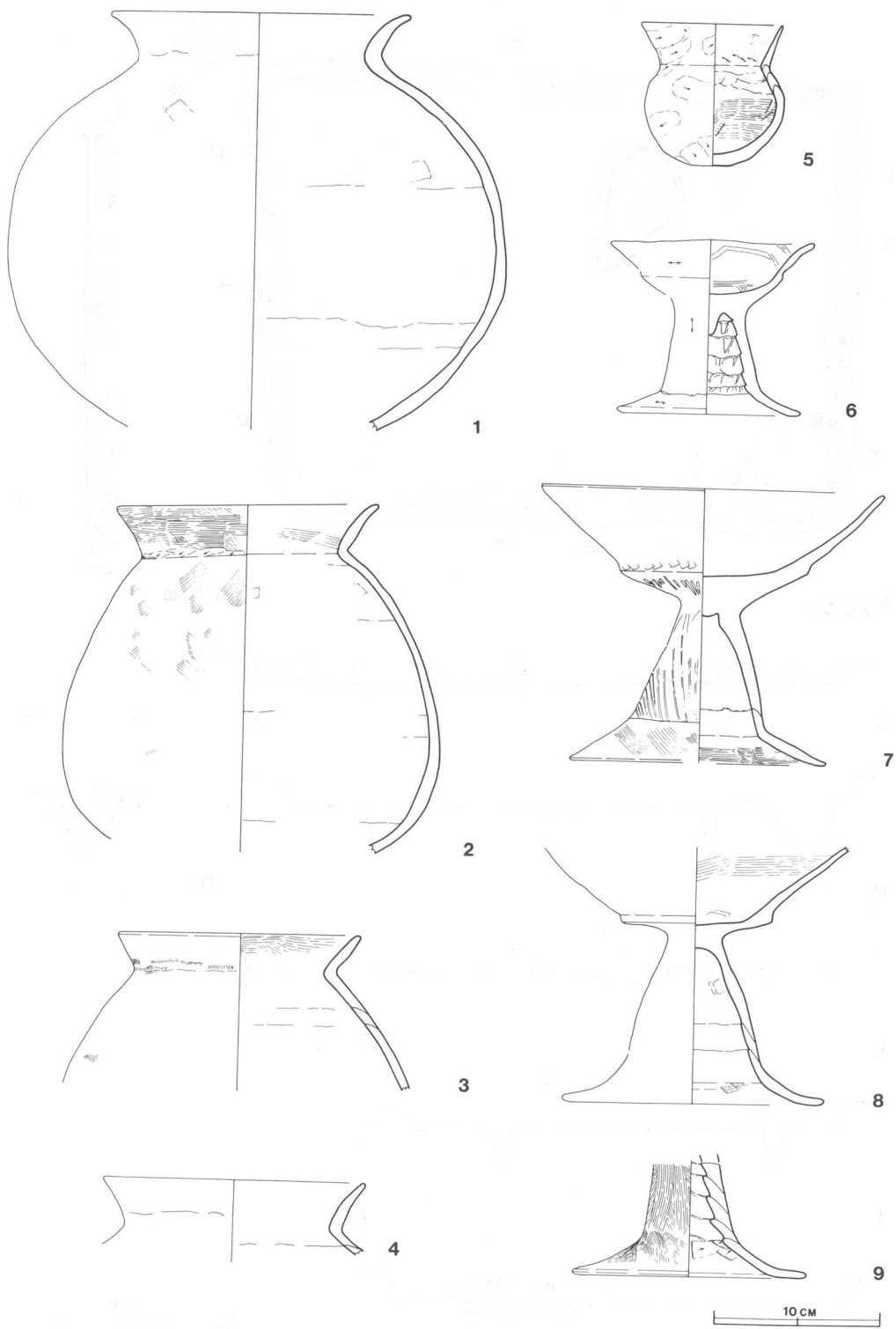
第24号住居跡 (第46図)

本住居跡は、D4i3・i4調査区を中心に確認されたもので、長軸方向はN-35°Eを指す。規模は長軸5.42m・短軸4.15m・面積22.49㎡で、平面形は長方形を呈している。壁高は10~28cmを測り、壁は外反して立ち上がっている。幅約10cmの壁溝が本跡を全周する形で検出された。また、壁柱穴も検出されている。床は東側がやや低く凹凸状であるが、床面はロームで硬くしまっている。柱穴は深さ28~37cmほどで4か所検出され、径は20cmあまりで円筒形に掘り込まれている。それぞれ支柱穴と思われる。

炉跡は床面の西側中央部に、長径111cm・短径70cmの不定形を呈する地床炉が検出された。炉内覆土は全般的に暗赤褐色土で、焼土・炭化粒子・焼土粒子・炭化物等が混入し、上層部は軟らかく、サラサラした状態である。また、一部攪乱されている。下層部は暗褐色で、硬く焼けた凹凸したロームである。



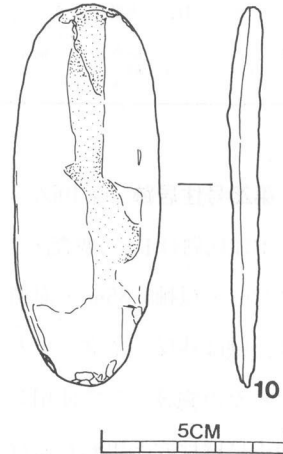
第46图 第24号住居跡実測図



第47图 第24号住居跡出土遺物実測図

貯蔵穴は南コーナー部に検出され、径70cm程の挿鉢状で、深さ44cmを測る。覆土は、上層部が褐色土・暗褐色土で、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を混入し、しまりを帯びている。中層部は褐色土で、ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が混入し、しまりを帯びている。

本跡の覆土は、上層部が黒褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子をそれぞれ少量混入していた。中層部は、おおむね極暗褐色で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が混入し、しまりを帯びている。下層部は暗褐色土で、やはりローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が多く混入し、硬くしまっている。遺物は、土師式土器片が西側に多く出土している。



第48図 SI-24出土遺物実測図

出土遺物解説表

SI-24

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 18.0 B 25.0	底部欠損。 胴部の中位で最大径を測り、半球状の弧を描いている。器厚は一定ではない。 口縁部は頸部から大きく外反し、口唇部でさらに外反する。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一あらいヘラミガキ	普通・砂粒・黒褐色 にぶい橙 に赤 褐色 褐灰	20 % P L 41-4
2	土師器 甕	A 15.8 B 21.0	底部欠損。 胴部は底部付近で内彎し最大径を測っている。頸部付近の傾きはやや急で、頸部は「く」の字状。口縁部は外反しながら立ち上がる。 口唇部はやや丸味を帯びている。	内面一ヘラナデ ハケ目調整 外面一ヘラオサエ ハケ目調整のあとヘラミガキ	良好・砂粒・橙 にぶい赤 褐色暗 赤灰	40 % (口縁部 90%) P L 41-2
3	土師器 甕	A 14.4 B 9.2	胴部は中位へ内彎しながら至っていると思われる。口縁部は「く」の字状を呈して外反している。 欠損部分が多い。	内面一ハケ目調整 ヘラナデ 外面一横ナデ ハケ目調整のあとヘラナデ	良好・砂粒・にぶい黄 橙 橙 褐灰	口縁部100%
4	土師器 甕	A (15.4) B 4.1	頸部は「く」の字状を呈し、肩部は下方に開く様相である。口縁部はやや外反し、器厚を減じながら口唇部へと至っている。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ 口一横ナデ	普通・砂粒・にぶい橙 スコ リア 暗赤 灰	口縁部10%
5	土師器 小型甕	A 8.5 B 8.0	底部は厚手で平底である。胴部は弧を描きながら口縁部に至る。 口縁部はやや垂直きみに外反し、口唇部に近づくにつれて薄手になっていく。	内面一ヘラナデ ハケ目調整 外面一ヘラナデ ヘラケズリ	普通・砂粒・赤褐 黒黒	70 % P L 41-5
6	土師器 高環	A 12.3 B 10.5 C 11.0	裾部から脚部にかけて約30度の傾斜で立ち上がり、脚部はやや太めを形成しながら環部に至っている。 頸部はゆるやかに外反し、環部に稜線をもち、さらに外反して立ち上がる。 口唇部はやや丸味を帯びている。	内面一ナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶい橙 スコ リア 浅黄 橙	80 % P L 41-3
7	土師器 高環	A 20.5 B 16.7 C (15.4)	裾部、脚部欠損。 裾部から脚部にかけて25度の傾斜を保ちながら立ち上がり、脚部は膨みをもち内彎している。 体部に鮮明な稜をもっている。底部はやや平坦である。 環は外傾しながら大きく立ち上がり、口唇部はやや丸味を帯びている。 環部欠損。	環部 口一横ナデ 内面一ヘラミガキ 外面一ヘラミガキ (摩滅気味) 脚部 内面一ナデハケ目 ( ) 外面一ハケ目 ( ) 裾一ハケ目 ( )	普通・砂粒・橙 にぶい橙 赤	70 % P L 41-6
8	土師器 高環	B 15.4 C 15.7	裾部が脚部にかけて急勾配で立ち上がり、脚部は太く膨みをもち、内彎しながら環部へと至っている。 頸部は「く」の字状で、体部との間に稜を鮮明にもつ。 環部は直線的に大きく外傾している。	内面一ハケ目調整 ヘラナデ 外面一ヘラナデ ナデ 裾一横ナデ	やや・砂粒・橙 軟弱 にぶい橙	60 % P L 42-1
9	土師器 高環	B 6.8 C 14.1	脚部内側は輪積痕を有している。外面は凹筒形状で、裾の広い裾部に移行している。裾部の器厚は一定であり、先端は丸味をもっている。	外面一ケズリのあと ハケ目調整 裾一横ナデ	普通・砂粒・にぶい橙 砂礫 明褐 灰	脚部 60% P L 42-2

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼土・胎土・色調	備考
10	石器	長さ10.1 幅 3.9 厚さ 0.8	扁平な楕円形を呈して表裏とも剥落している。	ミガキ		

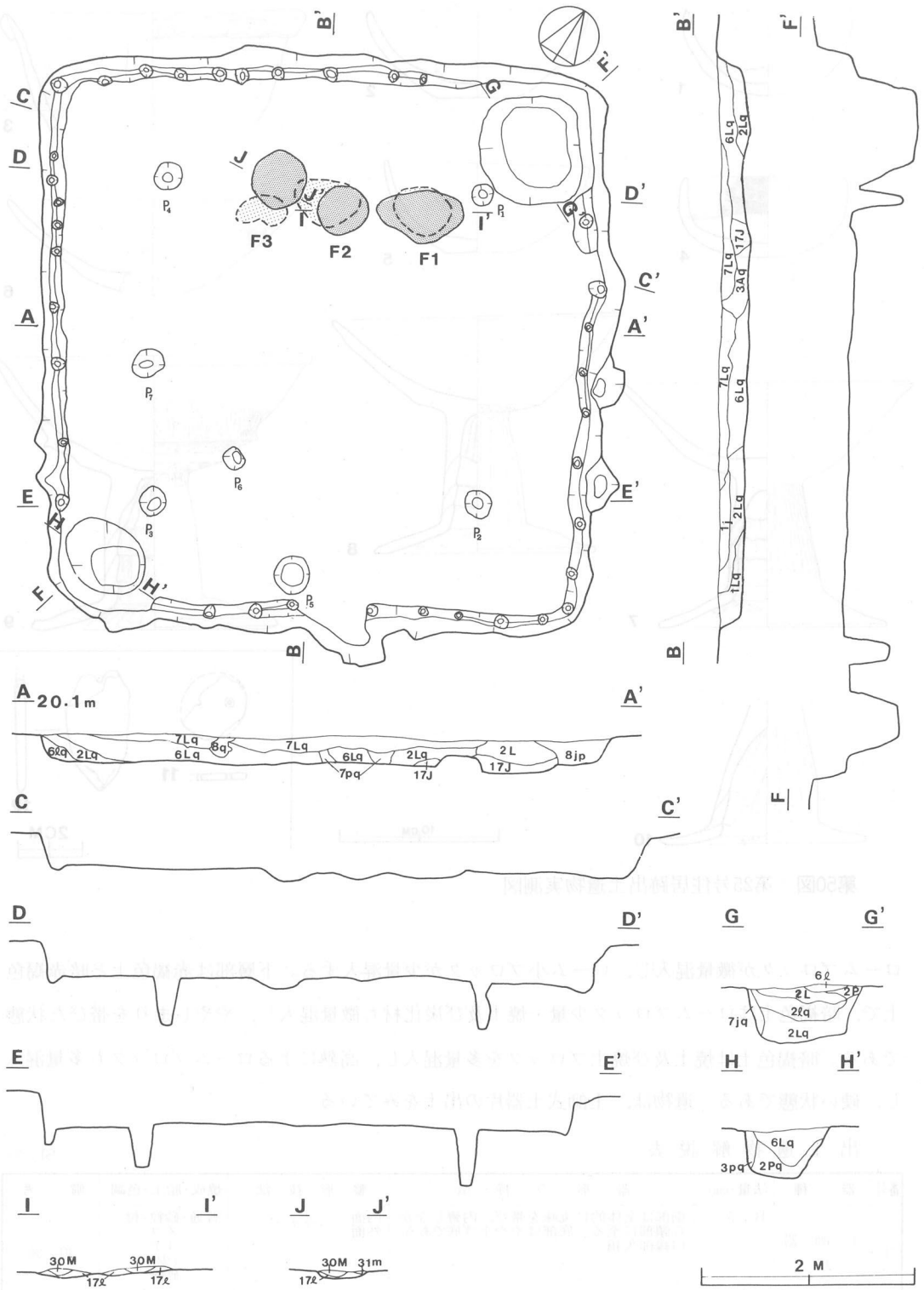
### 第25号住居跡（第49図）

本住居跡はF4c3調査区を中心に確認されたもので、長軸方向はN-30°Wを指す。規模は長軸5.37m・短軸5.35m・面積28.72㎡を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は20～37cmを測り、壁は外反して立ち上がっている。ただ、北側壁の中央部分だけがなだらかになっており、なんらかの施設として使用したと思われる。北側一部を除き、壁下には浅く壁溝が回っている。この中に壁柱穴と思われる柱穴が数多く検出されている。この壁柱穴は上面径約10～15cm・深さ15cm内外のものが多く、壁溝幅は15～20cmで、深さ10～20cm程度のものである。壁に接して多量の焼土及び炭化材が濃密に分布している。また、住居跡全面にわたって焼土・炭化物が検出され、各コーナーから中央部に向かって炭化した柱が倒れている。さらに、屋根を葺いたと考えられる茅の一部が炭化して遺存している。床面は全体的によくしまっており、全面に焼土・炭化材の混入が顕著である。柱穴は7か所検出されているが、主柱穴はP1～P4と思われる。平面の径は20cm内外で、深さはほぼ45cmのものである。

炉跡は、北西壁中央部付近に3基連なる形で検出された。3基ともに、床上に暗褐色土で固い焼土ブロックが盛りあがりを見せて広がっている。下層は焼土ブロック・ロームブロックが混入し、全体としてやや軟らかい状態である。P1に隣接した炉跡は、深さ8.5cm・長径80cm・短径50cmのやや楕円形を呈している。その西側の炉跡は、深さ11cm・径45cmの円形を呈し、さらに西側の炉跡は、深さ10cm・径50cmの円径を呈している。

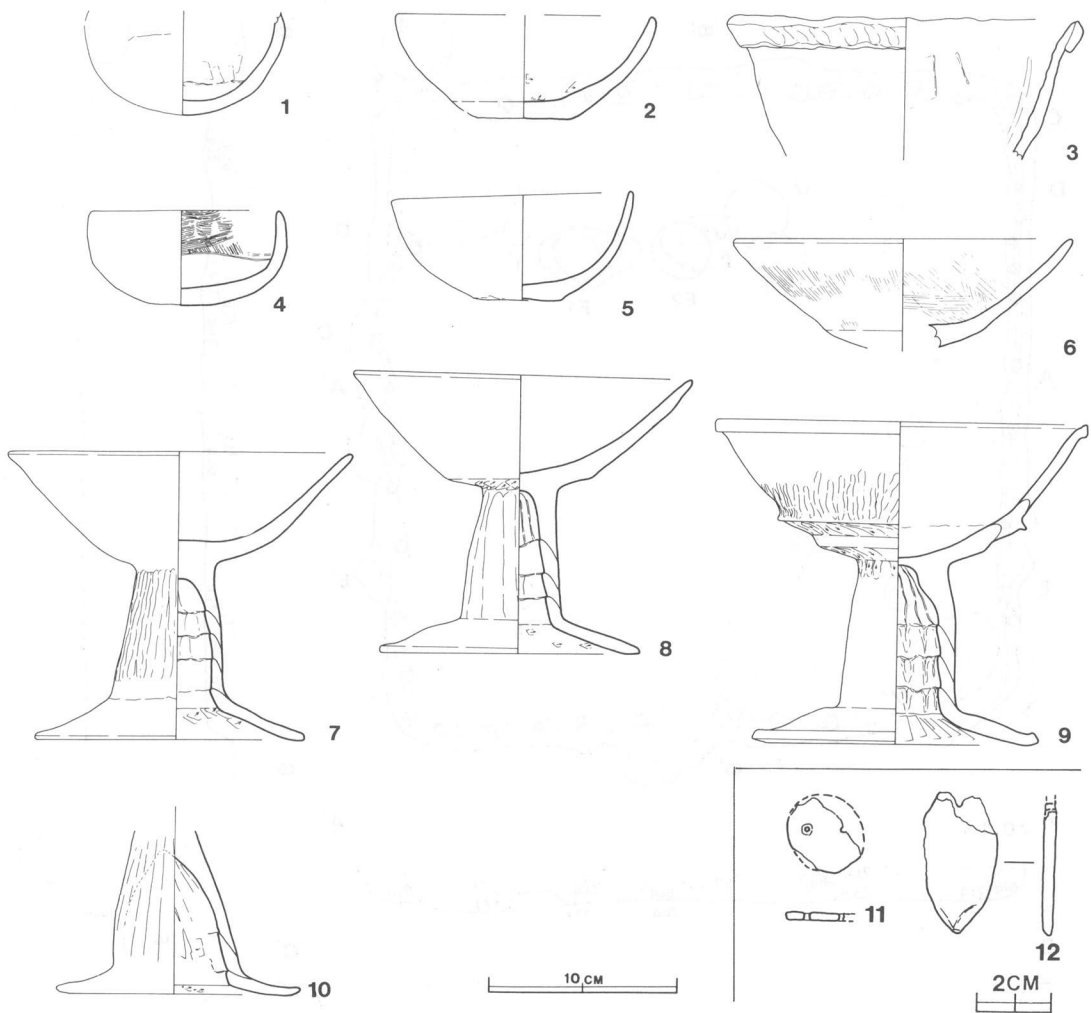
貯蔵穴は、北と南の各コーナーから2基確認された。北側の貯蔵穴は径100cm・深さ57cmで、平面形は隅丸方形である。覆土は三層に大別され、上層部は暗褐色土・極暗褐色土で、焼土及びロームブロックが混入されている。中層部も暗褐色土で焼土・炭化材が少量混入し、ローム小ブロックが少量混入されていた。下層部も暗褐色土で炭化材・焼土が少量混入し、ロームブロックが多量に混入されて軟らかい状態であった。底部はやや凹凸状で、壁は垂直に近い形で立ち上がる。南側コーナーの貯蔵穴は、径80cm・深さ55cmあり、平面形は円形を呈している。覆土はおおむね二層で、ロームブロックが多量・炭化材が少量混入し、やや軟らかい状態である。底部はやや凹凸状で、壁はほぼ垂直に近い形で立ち上がる。本跡は覆土の一部で耕作による攪乱を受けているが、割合明確なもので保存状態も良好である。なお、本跡は焼失家屋と思われる。

本跡の覆土は大別すると三層からなる自然堆積土である。上層部は黒褐色土で、焼土及びローム小ブロック・炭化材が微量混入しており、しまりはない。中層部は極暗褐色土で焼土・炭化材・



第49图 第25号住居跡実測图





第50図 第25号住居跡出土遺物実測図

ロームブロックが微量混入し，ローム小ブロックが少量混入する。下層部は赤褐色土と暗赤褐色土で，暗褐色土はロームブロック少量・焼土及び炭化材も微量混入し，ややしまりを帯びた状態である。暗褐色土は焼土及び焼土ブロックを多量混入し，高熱によるロームブロックも多量混入し，硬い状態である。遺物は，土師式土器片の出土をみている。

出土遺物解説表

SI-25

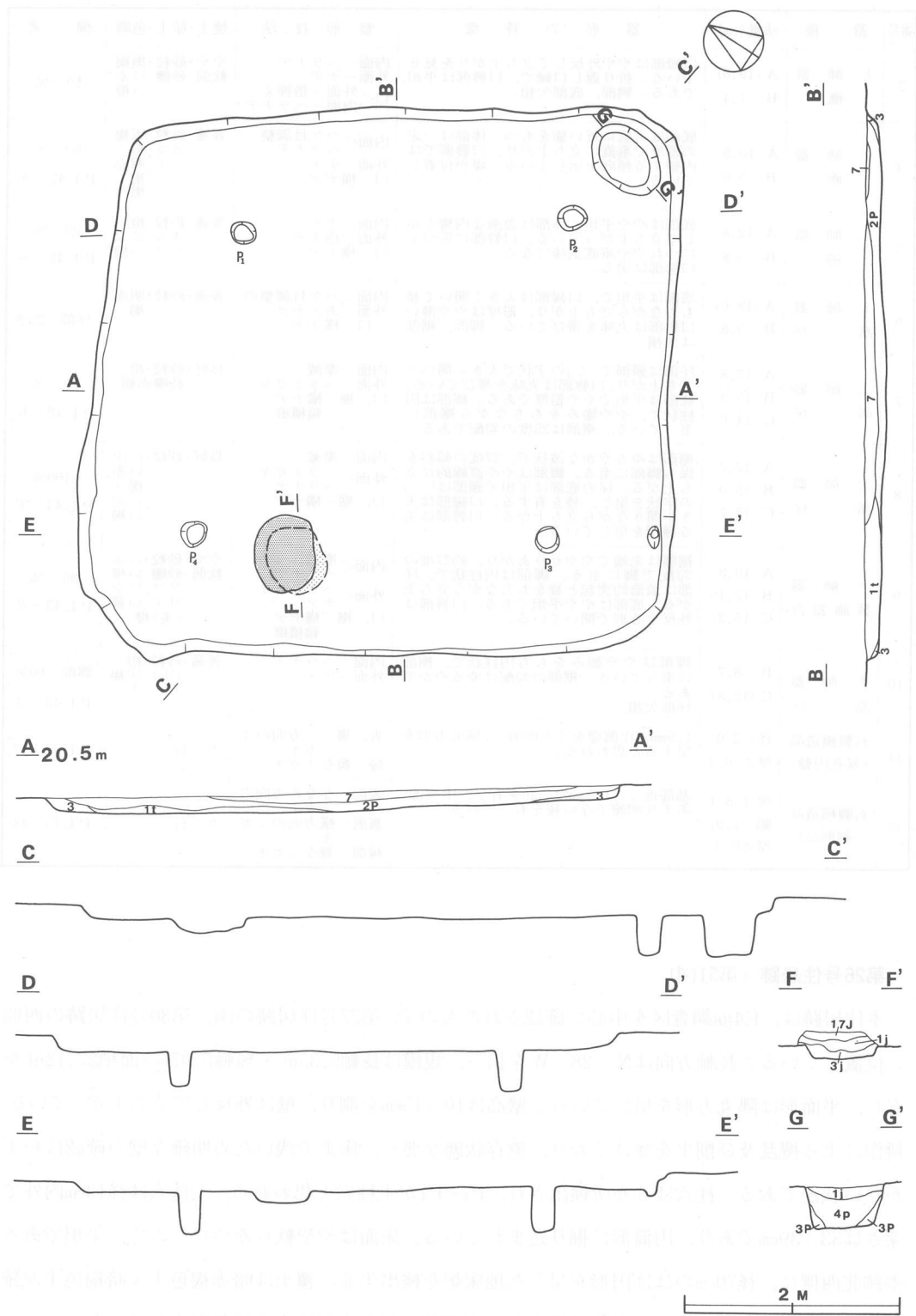
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 埴	B 5.5	胴部は全体的に丸味を帯び，内彎しながら頸部に至る。底部はやや上げ底である。口縁部欠損。	内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・橙 スコ リア (少) 砂礫	30 %
2	土師器 碗	A 13.8 B 5.5 C 5.0	底部は平底でやや器厚を増しておりゆるやかに内彎して立ち上がる。体部の器厚は一定でない。口唇部近くで垂直に近い立ち上がりで，丸味を帯びている。	内面>ヘラナデ 外面 口-横ナデ	普通・砂粒・明赤 スコ リア 橙 黒	60 % P L 42-3

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼土・胎土・色調	備考
3	土師器 甌	A (19.0) B 7.4	口縁部はやや外反して立ち上がりを見せている。折り返し口縁で、口唇部は平坦である。胴部、底部欠損。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ 口<外面一指押え 内面一ヘラナデ	やや・砂粒・黒褐にぶい 軟弱 砂礫 橙	10 %
4	土師器 碗	A 10.5 B 5.0	底部は丸底に近い膨をもつ。体部は一定の器厚で垂直に立ち上がり、口唇部では内彎する傾向を示している。媒が付着している。	内面<ハケ目調整 ヘラナデ 外面一ナデ 口一横ナデ	普通・砂粒・灰褐 スコリア 明赤褐黒	80 % P L 42-4
5	土師器 碗	A 12.8 B 5.8	底部はやや平坦。体部は急激な内彎を示して立ち上がっている。口唇部に近づくにつれやや垂直気味になる。口唇部は尖る。	内面一ナデ 外面一指ナデ 口一横ナデ	普通・砂粒・橙にぶい スコリア 橙	90 % P L 42-5
6	土師器 高環	A (18.0) B 5.8	底部は平坦で、口縁部は大きく開いて稜もちながら立ち上がり、器厚はやや薄い口唇部は丸味を帯びている。脚部、裾部は欠損	内面>ハケ目調整の 外面>あとナデ 口一横ナデ	普通・砂粒・明赤褐	坏部 25%
7	土師器 高環	A 17.8 B 15.3 C 14.0	坏部は頸部で「く」の字状で大きく開いて立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。底部は平坦でやや器厚である。脚部は円柱状で、やや膨みもちながら裾部に至っている。裾部は25度の勾配である。	内面一摩滅 外面一ヘラミガキ 口、裾一横ナデ 輪積痕	良好・砂粒・橙 砂礫赤褐	90 % P L 42-6
8	土師器 高環	A 17.7 B 15.0 C 13.7	裾部はゆるやかな波状で、27度の傾斜を保ち脚部に至る。脚部はやや直線的に立ち上がる。環の底部は平坦で頸部は「く」の字状を呈し、稜を有する。口縁部は大きく開きながら立ち上がる。口唇部は尖る様相を呈している。	内面一摩滅 外面<ヘラミガキ ヘラナデ 口、裾一横ナデ	良好・砂粒・にぶい赤褐 にぶい褐	100% P L 43-1
9	土師器 裝飾器台	A 19.8 B 17.15 C 15.2	裾部は先端でややせりあがり、約27度の勾配で脚に至る。脚部は円柱状で、坏部は装飾的突起と稜もちながら立ち上がる。底部はやや平坦である。口唇部は外反する形で開いている。	内面<摩滅(一部) ヘラナデ 外面<ヘラミガキ ナデ 口、裾一横ナデ 輪積痕	やや・砂粒・にぶい 軟弱 砂礫 橙 スコリア 黄(多) 橙	80 % P L 43-2
10	土師器 高環	B 8.7 C (12.8)	脚部はやや膨みもち円柱状で、裾部に至っている。裾部の勾配はゆるやかである。坏部欠損。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・橙 (少) 灰褐	脚部 60% P L 43-3
11	石製模造品 (双孔円盤)	径(2.0) 厚さ0.2	1.5mmの片側穿を2か所有し、隅丸方形を呈すると思われる。	表、裏一方向のミ ガキ 縁一雑なミガキ	カッ石	P L 75-12
12	石製模造品 (剣形品)	現寸(3.4) 幅(1.9) 厚さ0.3	基部近くに1.5mmの小孔を有し、中央部にあまり明瞭でない稜を有している。	表面一ななめ方向の ミガキ 裏面一横方向のミガ キ 縁部一雑なミガキ	カッ石	P L 75-14

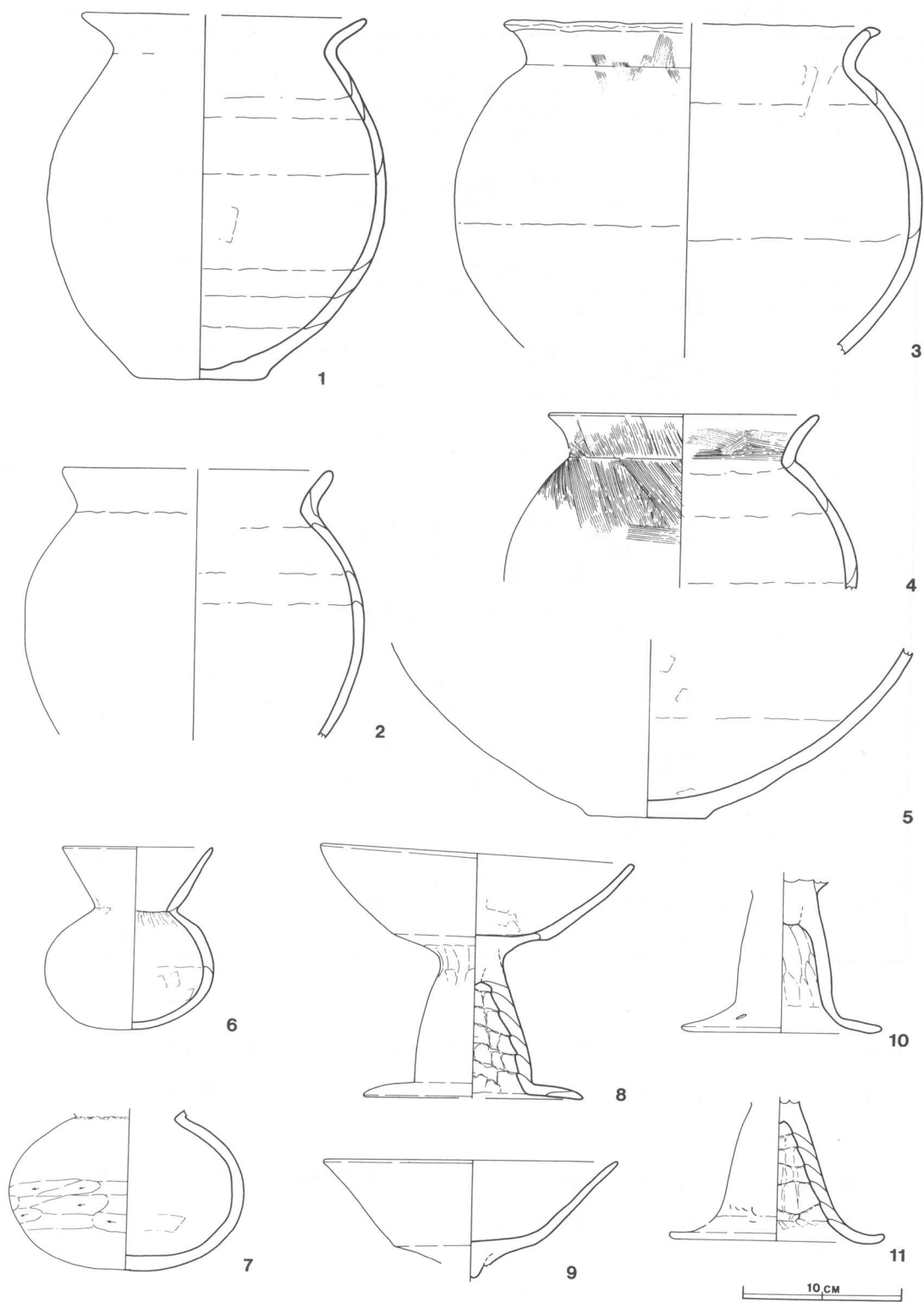
## 第26号住居跡 (第51図)

本住居跡は、E4g6調査区を中心に確認されたもので、第27号住居跡の南、第30号住居跡の西側に位置している。長軸方向はN-28°-Wを指し、規模は長軸5.35m・短軸5.07m・面積27.12㎡を有し、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は10~15cmを測り、壁は外反して立ち上がっている。耕作による攪乱及び削平を受けており、遺存状態が悪く、床まで浅いため明確な壁の確認はむずかしい状況である。柱穴は6か所検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が主柱穴と思われる。主柱穴は径13cm内外で、深さは33~39cmであり、円筒形に掘り込まれている。床面はやや軟らかいロームで、平坦である。本跡北西側に、径70cmのほぼ円形を呈した地床炉を検出する。覆土は暗赤褐色土・暗褐色土が確認され、焼土・焼土ブロックが少量混入し、下層部は褐色土で焼土を微量混入していた。

貯蔵穴は、南東コーナーに長径70cm・短径53cmを測る楕円形のものを検出し、深さ38cm程で、



第51图 第26号住居迹实测图



第52図 第26号住居跡出土遺物実測図

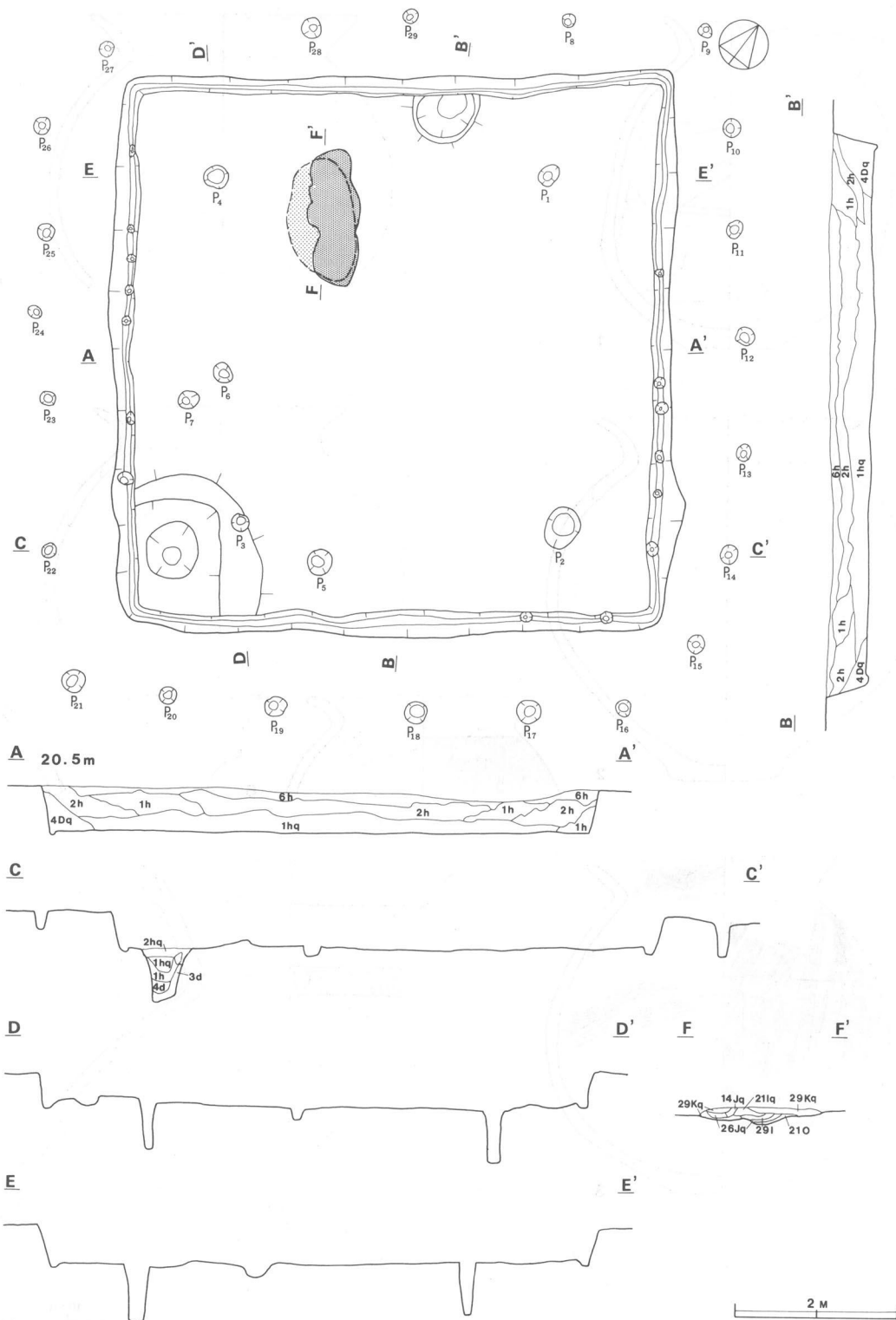
出土遺物解説表

SI-26

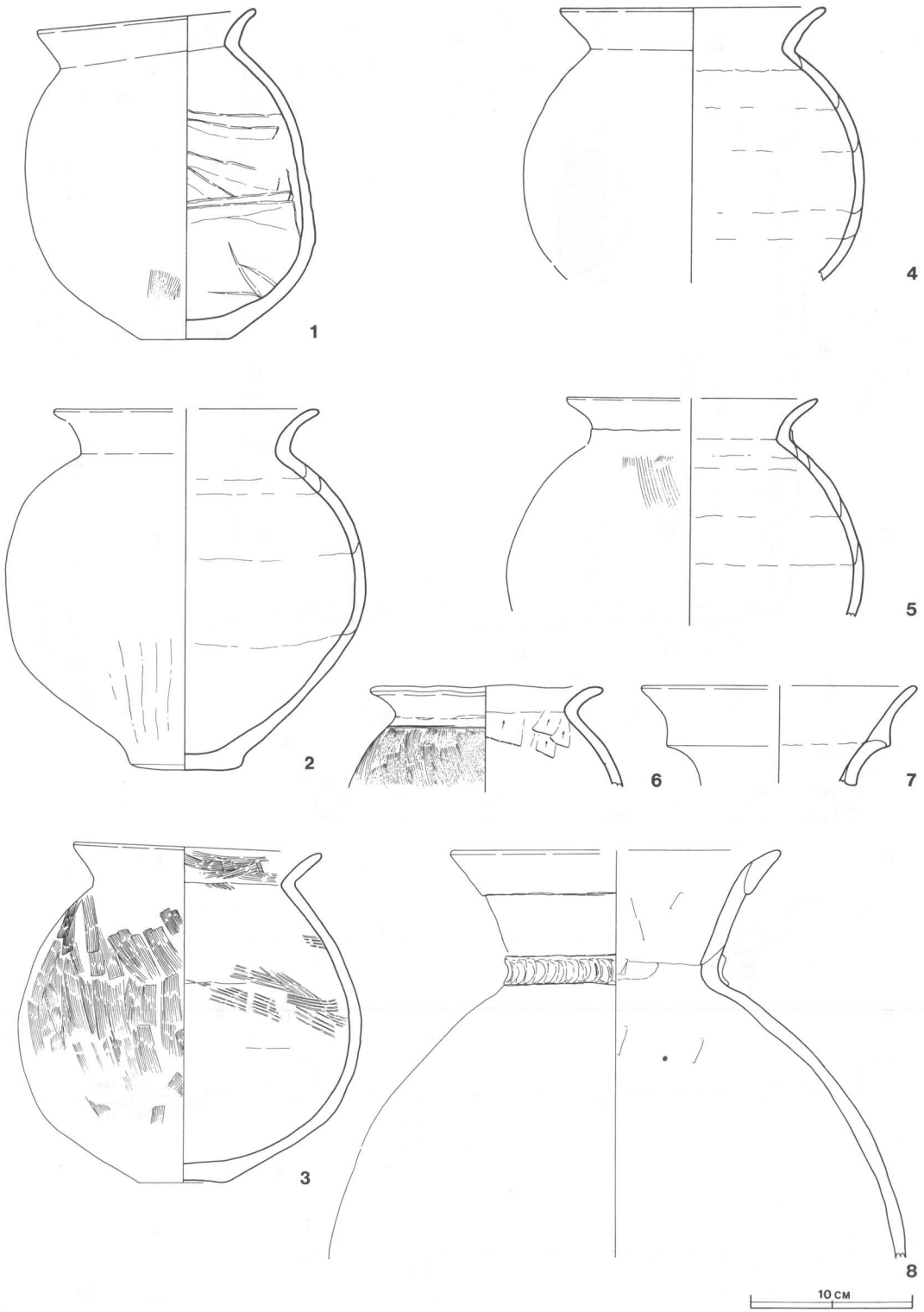
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (17.9) B 22.8 C 7.0	底部はやや平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、中位で最大径を測る。頸部は「く」の字状で、口縁は外反しており、口唇部はやや細くなる。媒の付着が見受けられる。	内面－ヘラナデ 外面－ナデ 口－横ナデ	普通・砂粒・にぶい赤褐黒褐	70 % P L 43-4
2	土師器 甕	A (16.4) B 17.8	器厚は一定で胴部は内彎し、頸部はやや「く」の字状を呈しており、口縁部は胴部より厚みを帯び立ち上がる。口唇部はやや丸みを帯びている。	内面－ヘラナデ 外面－ナデ 口－横ナデ	普通・砂粒・にぶい赤褐にぶい橙	40 % P L 44-1
3	土師器 甕	A (22.5) B 20.6	胴部は内彎し、器厚を一定に保ち膨みをもっている。中位で最大径を測る。頸部は「く」の字状を呈しており、口縁部は外反している。口唇部は尖る様相である。底部欠損。	内面－ヘラナデ 外面<ハケメ調整 口－ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい橙にぶい赤褐	30 %
4	土師器 甕	A 16.8 B 10.9	胴部は内彎しながら頸部に至っており、口縁部は外反して、口唇部でやや細くさらに外反している。底部欠損、胴部一部欠損。	内面－輪積のあとヘラナデ 外面－ハケ目調整 口－横ナデ	普通・砂粒・にぶい赤褐赤黒	口縁部70%
5	土師器 甕	B 10.5 C 7.3	底部は平底で、胴部は大きく広がりを見せ内彎して立ち上がる。器厚は一定である。他は欠損。	内面－ヘラナデ 外面－摩滅	やや・砂粒・にぶい橙にぶい灰褐(少)	底部 25%
6	土師器 罎	A 9.2 B 11.4	底部は丸みもち、胴部はやや強く張り出すように内彎している。中位で最大径を測り、器厚も中位から上が厚い。頸部はやや「く」の字状で、口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部へと至る。	内面－ヘラナデ 外面<ヘラミガキ ヘラオサエ ヘラナデ 口－横ナデ	普通・砂粒・明赤褐にぶい橙	70 % P L 44-4
7	土師器 罎	B 9.7	底部はやや平底で、胴部は強く張り出しほぼ中位で最大径をもつ。器厚は一定である。口縁部欠損。	内面>ヘラナデ 外面>ヘラナデ	良好・砂粒・橙	70 % P L 43-5
8	土師器 高環	A 19.4 B 15.9 C (13.6)	裾はやや平坦に立ち上がり、脚部は大きく膨みもち、頸部は「く」の字状で底部は平坦、稜をもち、環部は大きく開き、段々細身になりながら口唇部に至る。	内面－ヘラナデ 内面<ヘラナデ 口、裾－横ナデ	普通・砂粒・にぶい橙	60 % P L 44-2
9	土師器 高環	A 18.2 B 6.5	脚部・裾部欠損。底部は平底。環部に稜をもち、外反しながら立ち上がり、器厚はやや薄手である。口唇部でやや外反している。	内面－摩滅 外面－ヘラナデ 口－横ナデ	普通・砂粒・にぶい赤褐赤褐	環部 70%
10	土師器 高環	B 9.5 C 12.5	環部欠損。脚部は円柱状でやや膨みもち、裾部に至る。脚部と裾部の境の器厚はきわめて薄い。	内面－ヘラナデ 外面－ナデ 裾－横ナデ	普通・砂粒・明赤褐赤褐	環部 70% P L 44-5
11	土師器 高環	B 8.7 C (13.4)	環部欠損。脚部は逆三角形でやや膨みをもっている。裾部は短かく、先端はそり立っている。	外面－ナデ 裾－横ナデ	良好・砂粒・にぶい赤褐にぶい赤褐	脚部 70% P L 44-3

断面はU字形を呈している。その覆土は自然堆積で三層からなり、上層部は暗褐色土で焼土も微量混入している。下層部は褐色土で、ロームブロックを混入していた。底面は軟らかく平坦である。

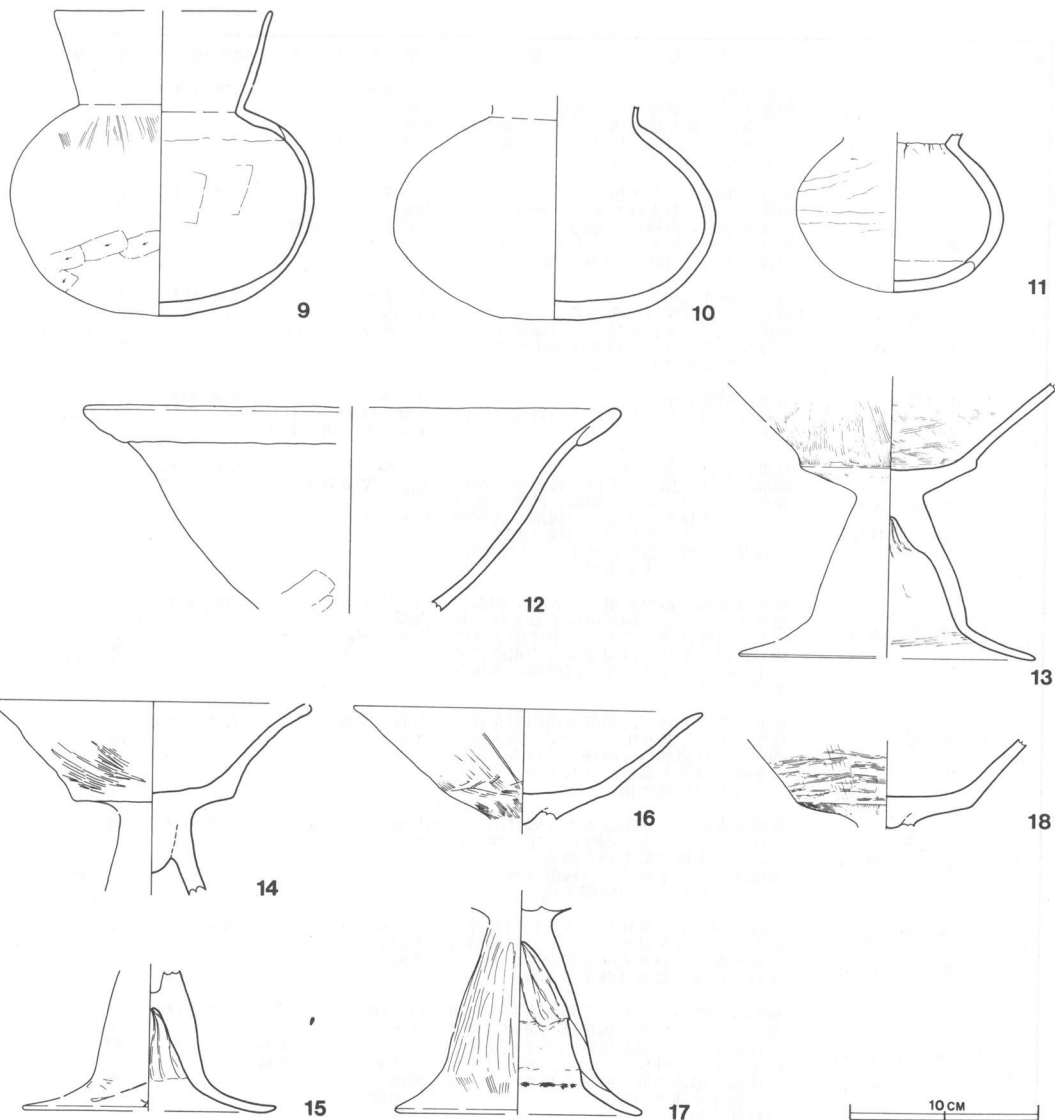
本跡の覆土は大半が黒褐色土・暗褐色土で、ロームが多量に混入し、焼土を微量に混入していた。遺物は、多数の土師式土器片を出土している。



第53图 第27号住居跡実測图



第54図 第27号住居跡出土遺物実測図(1)



第55図 第27号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表

SI-27

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 13.5 B 20.4 C 5.5	底部は平底。器厚は厚手で、体部はほぼ垂直で立ち上がっているが、中位で凹状である。上位で内彎し、頸部に至っている。口縁部は外反しており、口唇部で細身を帯び、さらに外反し丸味をもっている。	口<横ナデ 外面<ナデ (ハケ目調整あり)	やや・砂粒・明褐 軟弱 灰 褐灰	100% P L 45-1
2	土師器 甕	A (16.1) B 22.3 C 6.8	底部の器厚は厚手で平底。胴部は内彎しており、器厚は一定でない。中位で最大径を測る。頸部は「く」の字状で、口縁はさらに外反している。口唇部はややそりぎみである。	口<横ナデ 内面<ヘラナデ 外面<ナデ、ヘラミ ガキ	普通・砂粒・赤 灰褐	90% P L 45-2
3	土師器 甕	A 15.4 B 21.0 C 5.4	底部の器厚は厚手で、あげ底を呈し、胴部の器厚は一定で半円状を呈し、胴部中位で最大径を測っている。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は大きく外反を見せている。口唇部は丸味を帯びている。全面に媒が付着している。	口<横ナデ 内<ハケ目調整 内面<ヘラナデ ハケ目調整 外面<ハケ目調整	やや・砂粒・黒褐 軟弱 にぶ い橙	70% P L 45-4



番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
4	土師器 甕	A 16.2 B (16.8)	底部欠損。 胴部は一定の器厚を保ち弧状を呈しており、中位で最大径を測っている。頸部は「く」の字状で口縁は外反し、口唇部はやや尖がりを見せている。	口ー横ナデ 内面ーヘラナデ 外面ーヘラナデ (炭化物付着)	普通・砂粒・にぶ い橙 にぶ い褐	60 % P L 45-5
5	土師器 甕	A (15.2) B (13.2)	底部・胴部の一部欠損。 胴部の中位で最大径を測り、器厚を一定に保ちながら内彎し、頸部に至っている頸は「く」の字状を呈し、大きく外反した口縁である。口唇部は丸味を帯びている。	口ー横ナデ 内面ーヘラナデ 外面ーハケ目調整の あとナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	60 %
6	土師器 壺	A 14.1 B (6.2)	底部・胴部欠損。 器厚を一定に保った壺と考えられる。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は大きく外反しており、口唇部は丸味を帯び、さらに外反を見せている。	口ー横ナデ 内面ーヘラナデ 胴< 外面ーハケ目調	良好・砂粒・にぶ スコ リア い橙 にぶ い黄 橙	口縁部50%
7	土師器 壺	A (16.6) B (6.2)	底部、胴部欠損。 口縁部は折り返し口縁で、口唇部は平坦である。	口ー横ナデ 内面>横ナデのあと 外面>上に積みあげ	普通・砂粒・にぶ い橙	口縁部10%
8	土師器 壺	A (20.0) B (25.0)	底部、胴部一部欠損。 胴部は弧状を描き、中位で最大径を測る頸部は「く」の字状で、頸部に降帯を貼付しキサミ文様をつける。口縁部は直線的に立ち上がる。折り返し口縁である。口縁及び口唇の器厚は厚手で、口唇部は大きく外反し丸味を帯びている。	口ー横ナデ 内面<摩滅気味 ヘラナデ 外面ーナデ、ヘラナ デ	良好・砂粒・にぶ スコ リア い橙 赤灰	70 %
9	土師器 埴	A (10.5) B 16.3	底部は丸底で器厚を増し、大きく胴部へ張り出している。胴部中位で最大径を測るが、器厚は薄手である。中位より内彎し頸部に至り、口縁部はらや垂直に立ち上がりを見せている。口唇部は丸味を帯びている。	口ー横ナデ 内面ーヘラナデ 外面ー胴 ハケ目、 ナデ ヘラケズ リ	良好・砂粒・明赤 褐 にぶ い橙	30 % P L 46-1
10	土師器 埴	B (11.4)	底部はやや丸底で、胴部は楕円形を描く様相で大きく張り出し、中位で最大径を測りながら頸部へと内彎している。頸部で垂直に厚みを減じ、立ち上がりを見せている。口縁部欠損。	内面ー摩滅 外面ーナデ	普通・砂粒・橙 スコ リア 灰褐	80 % P L 45-6
11	土師器 埴	B (8.5)	底部は丸底で、胴部は大きく張り出した弧状を呈している。器厚は一定に保たれており、中位で最大径を測る。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反していると思われる。口縁部欠損。	内面ーヘラナデ 外面ーナデ	普通・砂粒・赤褐	70 % P L 45-2
12	土師器 甌	A (27.8) B (10.8)	口縁部中位まで外傾し、さらに口唇部に向かって外反を見せている。口唇部付近で折り返しを見せ丸味を帯びている。全体的に口縁の器厚は薄手である。	口ー横ナデ 内面ーヘラナデ 外面ーナデ	普通・砂粒・明赤 褐 橙	口縁部50%
13	土師器 高 坏	B (14.5) C 15.6	裾部は20度のゆるやかな勾配をもち、脚部へと至っている。脚部は二等辺三角形の柱状を呈し、頸部は「く」の字状を示し坏部は大きく外反している。底部は平坦で体部と頸部の間に鮮明な稜をもち、坏部の器厚は薄手である。坏口唇部欠損。	口ー横ナデ 坏部 内側ーハケメ調整 外側ーハケメ調整 脚部 内側>ナデ 外側 裾ー横ナデ、ハケ目	普通・砂粒・赤 にぶ い橙 にぶ い褐	60 %
14	土師器 高 坏	A 16.7 B 10.2	坏部の底部は平坦で、頸部は「く」の字状を呈している。体部の間に稜をもち、口縁部は外反して立ち上がり、口唇部でさらに外反し丸味を帯びた状態である。	坏部ー横ナデ	普通・砂粒・橙	坏部 50% P L 46-3
15	土師器 高 坏	B (7.4) C (13.3)	裾部は20度の傾斜でそり上がる様相を呈し、脚部へと至っている。脚部はやや器厚が厚手で、円柱状である。	内面ーナデしぼり痕 外面ーナデ 裾ー横ナデ	普通・砂粒・にぶ い赤 褐 にぶ い褐	20 %
16	土師器 高 坏	B (6.1)	底部は平坦で体部との間に稜をもち、体部で大きく外反して立ち上がり、口唇部でさらに外反し尖がりを見せている。	口ー横ナデ 内面ー摩滅気味 外面ーハケ目調整	良好・砂粒・暗赤 スコ リア 橙	坏部 80% P L 45-3
17	土師器 高 坏	B (11.0) C (12.7)	坏部欠損。 裾部は45度勾配で、脚部にせり上がり、脚部は円柱状で頸部に至っている。頸部「く」の字状を呈している。	内面ー布目こん 外面ーヘラナデ 裾ー横ナデ	良好・砂粒・にぶ い黄 橙	50 %
18	高 坏	B (4.9)	脚部、裾部欠損。 坏部の底部は平坦で割合鮮明に稜をもちやや直線的に外反して立ち上がりを見せている。	内面ーヘラナデ 外面ーハケメ調整の あとヘラナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リア 明赤 褐	20 %

### 第27号住居跡（第53図）

本住居跡は、E4d<sub>4</sub>・d<sub>5</sub>調査区を中心に確認されたもので、第26号住居跡の北側に位置している。長軸方向はN-50°-Eを指し、規模は長軸6.84m・短軸6.80m・面積46.51㎡を測り、平面形は方形を呈している。本跡の遺存状態は良好で、壁などの破損は見あたらない。壁高は30～45cmを測り、壁はやや垂直に立ち上がっている。壁下には、約15cmの幅をもつ壁溝がめぐっている。北壁下を除く壁溝中に壁柱穴が多数検出されている。柱穴は住居跡外に22か所、本跡内に8か所検出され、主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>の4か所である。主柱穴は深さがほぼ60cmで、円筒形に掘り込まれている。住居跡内外の柱穴は、総じて住居跡をとり囲むようにしてほぼ等間隔で検出され、深さも35cm内外である。床面はしまりを帯び、硬く踏み固められた状態を示している。

炉跡は、床面の北西側から検出され、長径150cm・短径120cmの地床炉である。炉内覆土は暗赤褐色系統で、焼土・炭化粒子が混入し、炉床は焼けたロームでしまりを帯びている。

貯蔵穴は本跡南コーナー部から検出され、径65cm・深さ76cmを測る円筒形に掘られたものである。その覆土の色調は暗褐色土・褐色土で、それぞれローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が混入ししまりを帯びて自然堆積の様相を呈している。底面は硬く、床まわりに幅約25cmを測る壁溝が回っている。

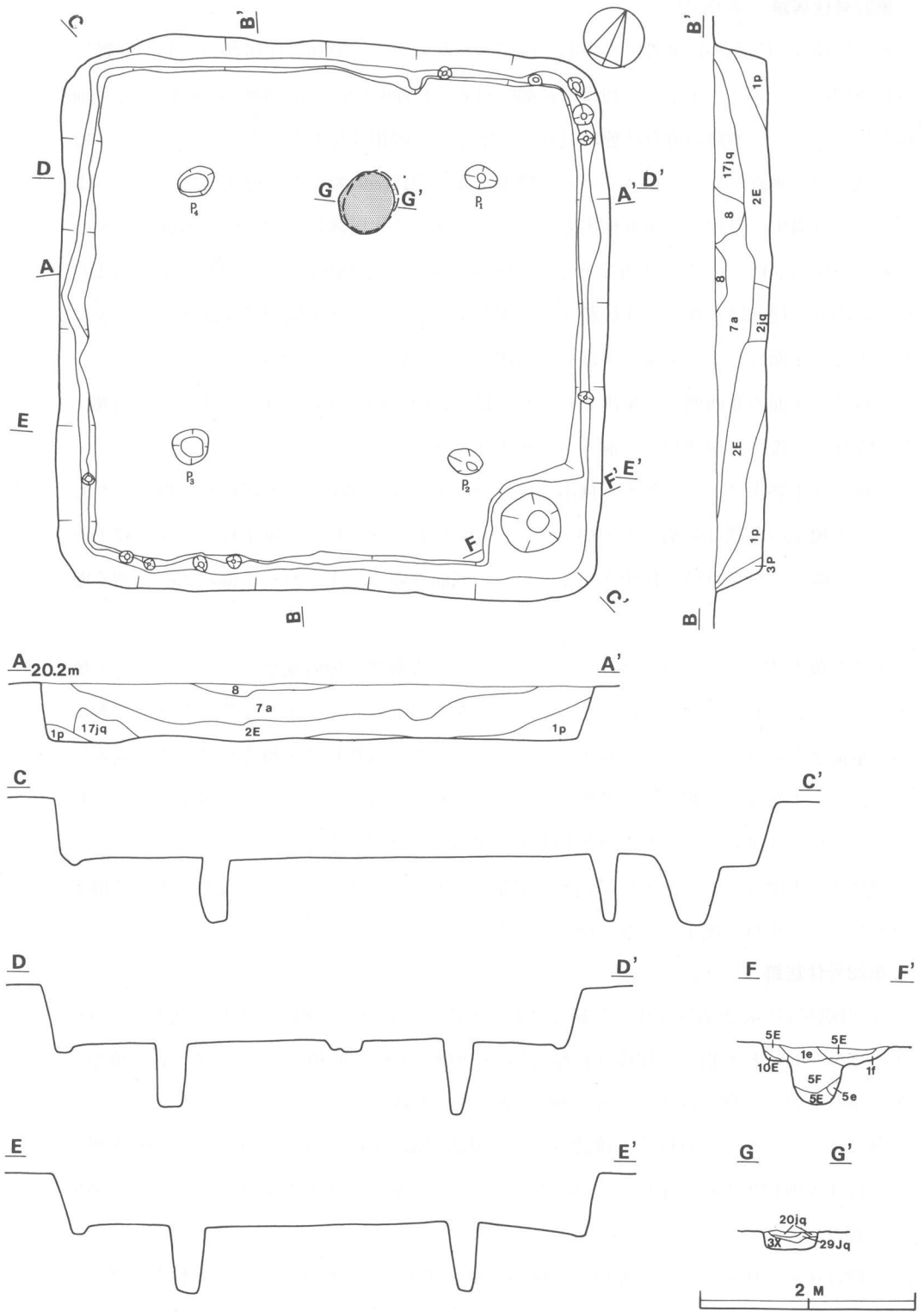
本跡の覆土は大きく三層に分けることができる。上層部は極暗褐色土でローム粒子・焼土粒子・炭化粒子をそれぞれ少量と、ロームブロックを少量混入し、しまりを帯びた状態である。中層部は暗褐色土の色調で、ローム粒子・ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子が少量混入し、しまりがある。下層部も暗褐色・一部褐色土でローム粒子・ロームブロック・焼土粒子をそれぞれ少量と炭化粒子は多量に、また、炭化物も少量混入した状況である。

遺物は、土師式土器で、完形品のほか多量の土器片が出土している。なお、本跡は焼失家屋と思われる。炭化材・焼土が多量に検出された。

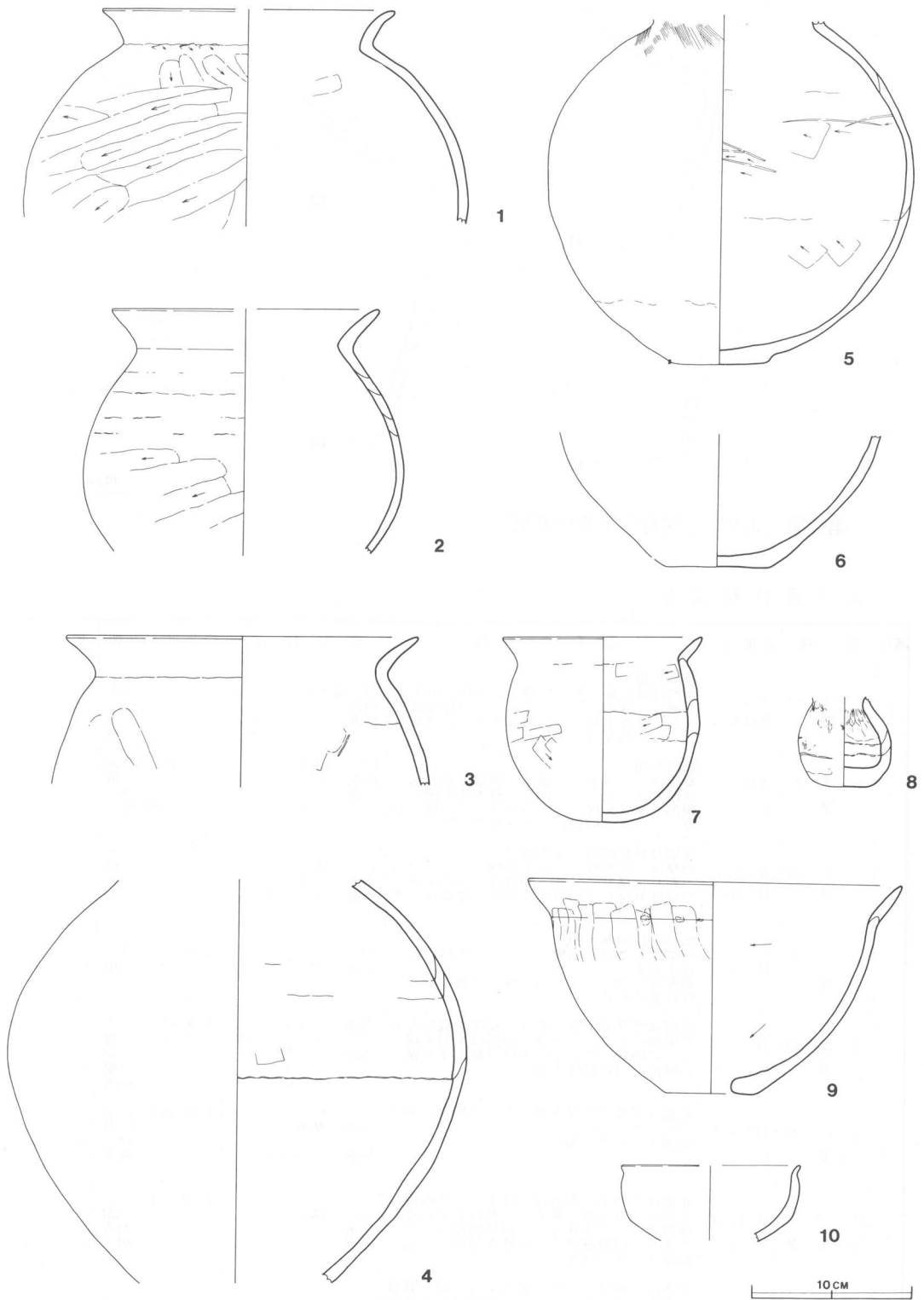
### 第28号住居跡（第56図）

本住居跡はE5e<sub>2</sub>調査区を中心に確認されたもので、第29号住居跡の西側に位置している。長軸方向はN-69°-Eを指し、規模は長軸5.1m・短軸5.05m・面積25.75㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は50～55cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がり、固くしまっている。壁下には溝がめぐっており、壁柱穴も確認された。壁溝の幅は15～20cmで、深さ10～20cmを測っている。柱穴は4か所検出され、主柱穴と思われる。柱穴の上面はおおむね30cmで、深さ59～66cmを円筒形に掘り込んでいる。

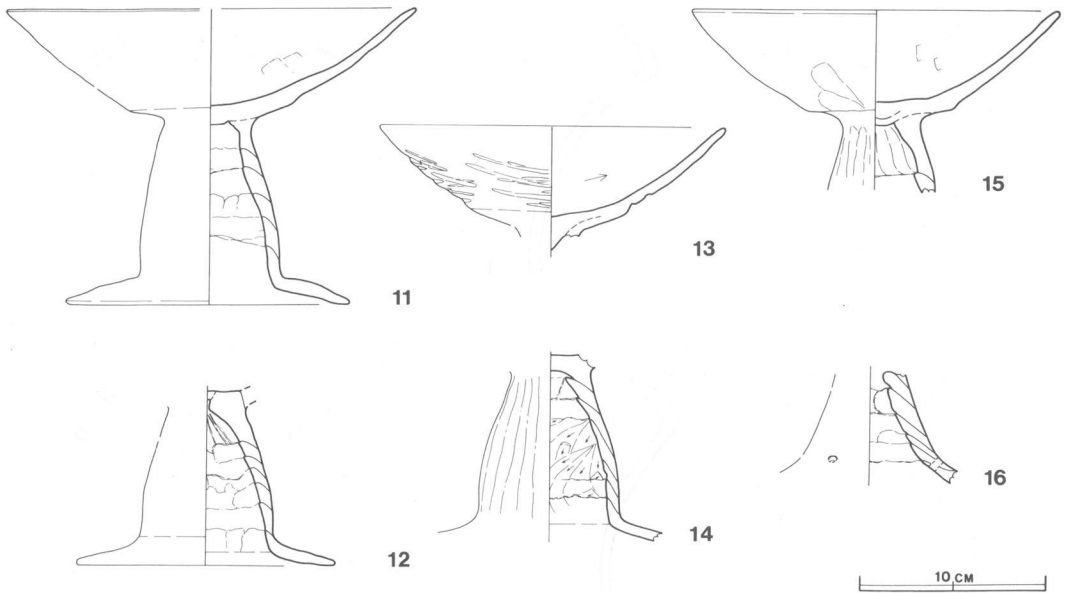
炉跡は床面の中央よりやや北側から検出され、径50cmの円形を呈し、15cm程掘り窪められた地床炉である。炉内覆土の上層部は極暗赤褐色で、炭化物・焼土・焼土ブロックが多量に混入し、中層部は暗褐色土で、焼土・焼土ブロックを多量、炭化物が少量混入している。



第56图 第28号住居跡実測図



第57図 第28号住居跡出土遺物実測図(1)



第58図 第28号住居跡出土遺物実測図(2)

出土遺物解説表

SI-28

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (17.8) B (13.2)	底部欠損。 胴部は弧を描く形で内彎し、中位で最大径を測る。頸部は「く」の字状で、口縁部は外反して立ち上がる。口唇部でさらに外反している。器厚は一定である。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶい赤スコーリア にぶい橙	15%
2	土師器 甕	A (16.5) B (15.2)	底部欠損。 器厚はやや薄手で一定し、胴部は弧を描く状態で立ち上がり、中位で最大径を測る。頸部で厚さを保ち「く」の字状で、口縁は外反している。口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ナデ ヘラナデ	良好・砂粒・にぶい黄スコーリア 砂礫 橙	30%
3	土師器 甕	A (21.6) B (9.3)	底部及び胴部の一部欠損。 器厚は一定を保ち、やや内彎しながら立ち上がりを見せている。頸部は「く」の字状で口縁は外反して口唇部に至り、先端はやや丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶい赤スコーリア	20%
4	土師器 壺	B (25.0)	底部・口縁部欠損。 胴部は弧を描き内彎しており、中位で最大径を測る。器厚はやや一定である。媒の付着が胴部下位に見られる。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ	普通・砂粒・橙(少) 灰褐	胴部 25%
5	土師器 壺	B (21.5) C 5.9	底部は肉厚で平底であり、器厚を減じながら胴部へと至っている。胴部は半円を描くように内彎しており、中位で最大径を測る。口縁部・口唇部は欠損。	内面一ヘラナデ 上ハケ目調 外面一整合 下ナデ	普通・砂粒・にぶい赤スコーリア にぶい褐(少) 褐灰	60% P L 46-4
6	土師器 壺	B (8.3) C 6.2	底部は平底で器厚を減じながら胴部へ向かっている。 底部のほかは欠損。	内面一摩滅 外面一ヘラナデ	良好・砂粒・にぶい黄スコーリア 橙 黄灰	底部 100%
7	土師器 小型甕	A 12.4 B 11.6	底部は平坦で、胴部は中位までやや内彎しながら立ち上り、垂直へと移行している。頸部は「く」の字状で、口縁は外反して立ち上り、口唇部はやや丸味を帯びている。器厚は一定ではない。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ	良好・砂粒・にぶい明赤褐	100% P L 46-5
8	土師器 小型壺	B (5.6) C 2.4	全体的に器厚で、特に底部では一段と顕著であり平底となっている。胴部はやや垂直に立ち上がり、中位から内彎する口縁部は欠損する。	内面一ナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・明赤褐	95% P L 46-6

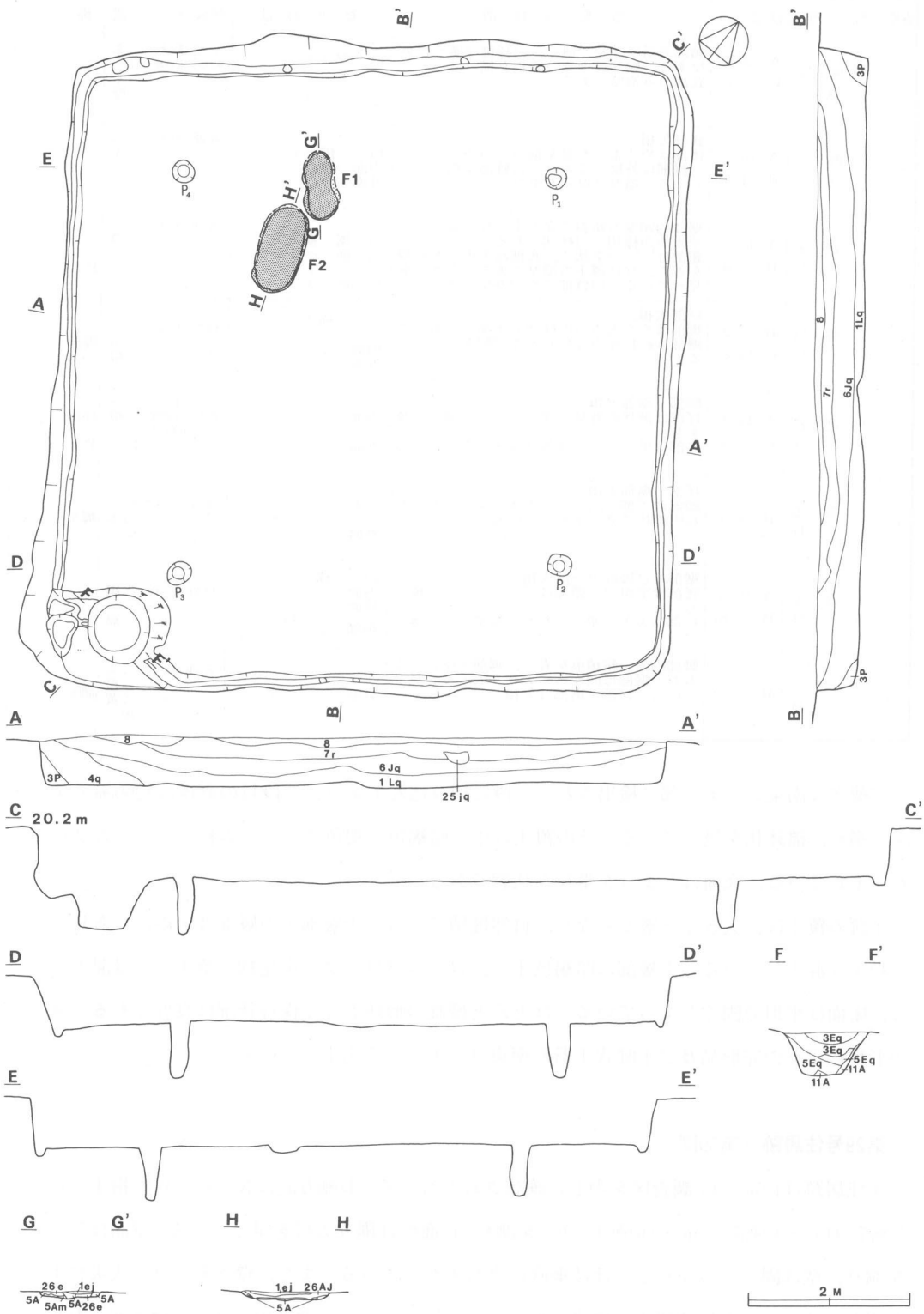
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
9	土師器 甕	A (23.3) B 13.1 C 5.7	頸部で器厚がやや薄く、口縁部は僅かに外反する。胴部はゆるい曲線を描いている。底部のみ器厚である。	口一横ナデ 胴一ヘラナデ	やや・砂粒・明赤 軟弱 砂礫 濁 にぶ い橙	20%
10	土師器 埴	A (10.9) B (4.8)	底部欠損。体部はやや歪んだ弧を描いている。口縁部は外反しており、口唇部が細くなっている。器厚は厚みを帯びている。	口一横ナデ 内面一摩滅 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶ スコリア 赤 濁 赤	15%
11	土師器 高環	A 19.3 B (9.8)	裾は約20度の傾斜で立ち上がり、脚部はやや太めの様相で円柱状である。頸部は「く」の字状で、底部は平坦であり稜をもち、環は薄手の器厚で大きく広がりを見せている。口唇部でやや外反している。	口・裾一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶ スコリア 橙 濁	70% P L 47-1
12	土師器 高環	B (9.2) C 13.6	環部欠損。脚部はやや太めの円柱状で下開きである。裾部は約15度のなめらかな勾配をもっている。	口一横ナデ 内面>ナデ 外面	良好・砂粒・橙 にぶ い橙	脚部 70%
13	土師器 高環	A 18.4 B (5.9)	脚部・裾部欠損。環部は波状の外見を保ち、大きく開いて稜をもつ。底部は平坦で、口唇部は丸味を帯びている。	内面 外面}ヘラナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 砂礫 橙 (石英) 橙 スコリア	環部 90% P L 46-7
14	土師器 高環	B (8.6)	環部・裾部欠損。脚部は下部に向かって大きくなり、おおむね円錐状で立ち上がっている。	内面 外面}ヘラナデ	普通・砂粒・橙 明赤 濁	脚部 60%
15	土師器 高環	A 19.3 B (9.8)	裾部及び脚部の一部欠損。底部は平坦で、頸部は「く」の字状で稜をもつ。環部は大きく開きをもち、器厚はやや薄い。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面<内一指ナデ 脚部<外一ヘラナデ	良好・砂粒・赤濁 灰濁	60%
16	土師器 高環	B (5.3)	脚部内面に輪積痕を有し、脚部下位に孔をもち、裾部に向かって大きく広がりを見せている。環部・裾部は欠損。	外面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ スコリア 橙 濁 灰黄 濁	脚部 50%

貯蔵穴は南東コーナー部に検出され、二段に掘り込んであり、2段目の直径は約60cm・深さ70cmを測り、挿鉢状を呈している。その覆土は主に暗褐色と褐色で、ローム粒子・ロームブロックが含まれている、底面はしまりを帯びた状態である。

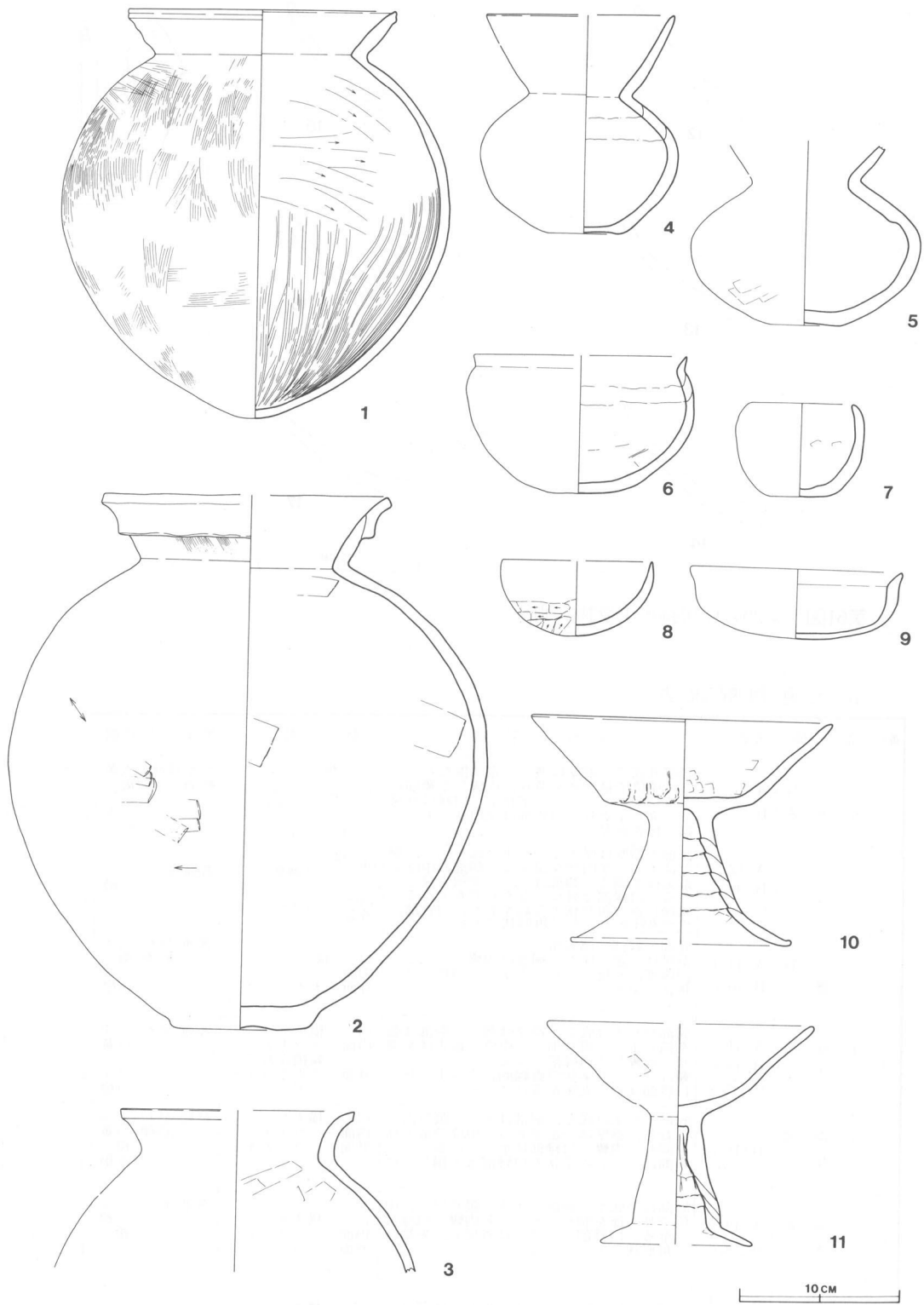
本跡の覆土は、大きく三層からなり、自然堆積である。上層部・中層部は黒褐色であり、ローム粒子が混入している。下層部は暗褐色土で、ロームブロック・炭化物・焼土が少量混入している、床面は平坦で固くしまっている。ほとんど攪乱の形跡もなく保存状況は良好である。遺物は、小形甕形土器の完形品及び土師式土器が南東コーナーから出土している。

### 第29号住居跡（第59図）

本住居跡はE5e4・f4調査区を中心に確認されたもので、長軸方向はN-32°Wを指す。規模は長軸7.94m・短軸7.72m・面積61.29㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は55～85cmを測り、壁は固くしっかりし、ほぼ垂直に立ち上がっている。また、壁ぎわには、火災にあったと思われる炭化した柱や焼土が検出されている。幅15～26cm・深さ12cmほどの壁溝がきわめて明確に検出され、また、壁柱穴も確認された。柱穴は4か所で支柱穴と考えられ、いずれも内側に

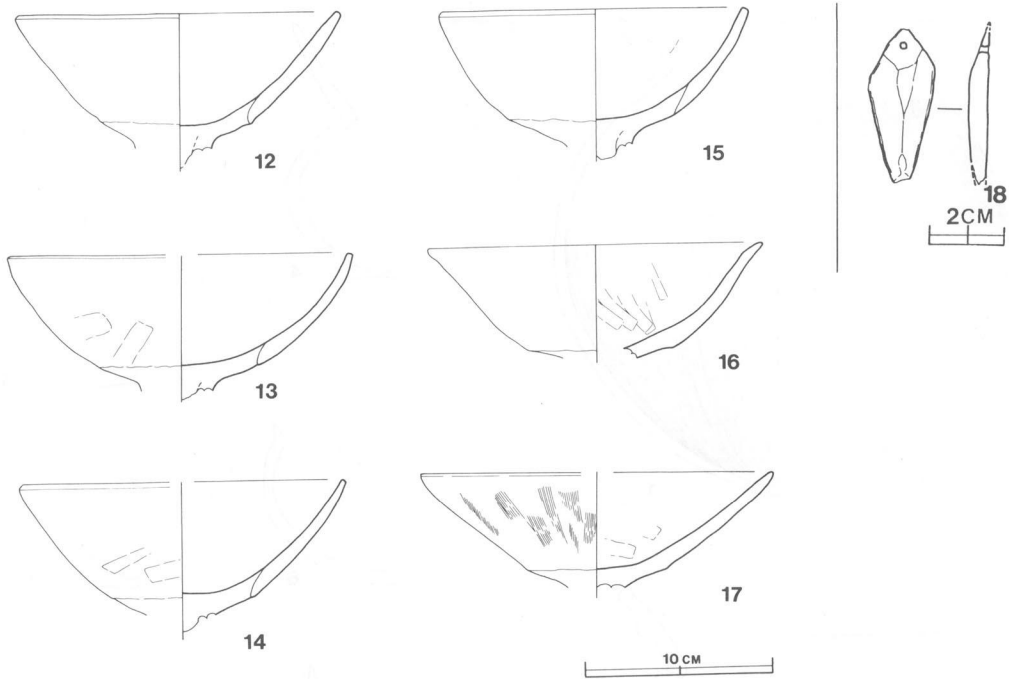


第59图 第29号住居跡実測図



第60図 第29号住居跡出土遺物実測図(1)





第61図 第29号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表

SI-29

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 丸底壺	A 16.7 B 25.4	底部丸底で、器厚は薄く一定に保たれている。中位で最大径を測り、内彎して頸部に至る。頸部は「く」の字状で、口縁は外反して立ち上がり、口唇部は受口状である。媒の付着を見る。	口一横ナデ 胴内上ヘラナデ 下ハケ状工具によるナデ 外ハケ目	やや・砂粒・灰黄 軟弱・砂礫にぶ スコリア赤 褐	80% P L 47-4
2	土師器 壺	A (17.5) B 33.2 C 8.6	底部の器厚は厚手でやや上げ底を呈し、胴部は大きく半円状を呈する。胴部の中位で最大径を測る。頸部は「く」の字状を呈している。口縁部は外反しながら立ち上がる。口縁に逆三角形の突起をもち、口唇部はやや丸味をもった三角形状である。	口一横ナデ ハケメ調整 内面ヘラナデ 外面	普通・砂粒にぶ い橙	60% P L 47-3
3	土師器 甕	A (14.4) B (10.0)	底部・胴部一部欠損。器厚は一定に保ち、胴部は内彎している。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部は三角状に尖がる。	口一横ナデ 内面ヘラナデ 外面ナデ	普通・砂粒・暗灰 砂礫・褐にぶ い橙	口縁部50%
4	土師器 埴	A 11.6 B 13.6 C 4.5	底部やや上げ底で、器厚は薄い。胴部は弧を描くように張り出し、中位で最大径を測り、内彎して口縁部に至る。頸部は「く」の字状で直線的に立ち上がり、口唇部はやや丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面ヘラナデ 輪積みあり 外面ミガキツボイ ナデ	普通・砂粒にぶ い黄 橙にぶ い橙	70% P L 47-6
5	土師器 埴	B (11.2)	底部やや上げ底で、胴部は大きく張り出してあり、器厚は一定である。中位で最大径を測り、内彎し口縁部に至っている。頸部は「く」の字状で口唇部は欠損している。	口一横ナデ 内面ヘラナデ 外面ヘラミガキ ヘラナデ	良好・砂粒にぶ い黄 砂礫・橙 赤褐	80% P L 48-1
6	土師器 碗	A 13.2 B 8.6	底部は平底で、胴部は大きく張り出し、中位で最大径を測り、そこから内彎し口縁部に至る。口唇部にかけては外反し、先端は三角形状に尖っている。	口一横ナデ 内面ヘラナデ 外面ヘラミガキ	普通・砂粒にぶ い橙 橙	98% P L 48-2
7	土師器 鉢	A 6.4 B 5.8 C 3.4	底部は平底で器厚は一定に保ち、体部はやや垂直に立ち上がり、口唇部で内彎してやや丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面ヘラナデ 外面ナデ	良好・砂粒にぶ い黄 砂礫・橙	100%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	土師器 小型瓿	A 9.3 B 4.8	底部やや丸底を見る。体部は弓なりにそり上がり、口唇部は尖っている。器厚は一定に保っている。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶ い橙	95% P L47-2
9	土師器	A 13.3 B 4.4	底部は平坦で、器厚は薄く、口縁部は厚味を帯びやや垂直に立ち上がり、口唇部で外反している。	内面>摩擦 外面	軟弱・砂粒・橙	50% P L47-5
10	土師器 環	A 18.5 B 14.2 C 13.4	裾部は約30度の勾配で脚部に至っている。脚部は太く下に広い状態でしっかりしている。環部の底部は平坦。頸部は「く」の字状で鮮明な稜をもち、立ち上がりは直線的である。器厚もやや一定で口唇部は丸味を帯びている。	口・裾一横ナデ 外面一ナデ 内面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	70% P L48-3
11	土師器 環	A (16.6) B 13.8 C 9.4	裾部は約27度の傾斜で、脚部は比較的細身で円柱状を呈している。環部は大きく外反しながら広がっている。口唇部は丸味を帯びている。	環部一ナデ 脚部一内(裾) ヘラナデ 外一ナデ	普通・砂粒・にぶ い赤 褐 灰 に い 黄 褐	40%
12	土師器 環	A 17.9 B (7.2)	体部は内彎して立ち上がり、器厚はやや一定を保っている。体部と頸部で稜をもち、底部は平坦を呈している。口唇部は平坦である。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	良好・砂粒・にぶ い橙 明赤 褐	部 98% P L48-4
13	土師器 環	A (17.9) B (7.8)	底部は平坦でやや厚みをもち、環部薄手である。なめらかな放物線を描いて立ち上がる。口唇部はやや平坦である。脚部、裾部欠損。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ヘラナデ	良好・砂粒・浅黄 色 に い 橙	環部 60%
14	土師器 環	A (17.0) B (7.1)	脚部・裾部欠損。器厚は底部が厚く体部はやや薄い。口唇部ではさらにそれが顕著にあらわれている。総じて立ち上がりは内彎している。	口・裾一横ナデ 外 面一ナデ 環 内一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	70% P L48-5
15	土師器 環	A 16.5 B (7.3)	底部は平坦で、環体部は弧状を呈して立ち上がり、口唇部は平坦である。器厚はやや厚みを帯びている。脚部・裾部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・橙 スコ リア (大粒小)	環部 97% P L48-6
16	土師器 環	A 17.9	環体部は総じて外反して立ち上がり稜をもち、器厚はやや厚い。口唇部付近では尖がりを見せ、さらに外反している。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・橙 スコ リア (少) 大粒	環部 85% P L48-7
17	土師器 環	A 18.6 B (5.2)	脚部・裾部欠損。環部の器厚は一定で、底部は平坦。稜を鮮明にもち大きく外反して立ち上がる。口唇部でやや内彎する様相を呈している。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ (摩擦気味) 外面一ハケ目調整 あとナデ	普通・砂粒・浅黄 橙 に い 黄 橙	環部 40%
18	石製模造品 剣形品	現長 4.1 幅 (1.7) 厚さ 0.5 孔径 0.15	基部近くに小孔を有し、逆Y字形に明瞭な稜を有し、断面三角形を呈している。一方向からの穿孔である。		滑石	

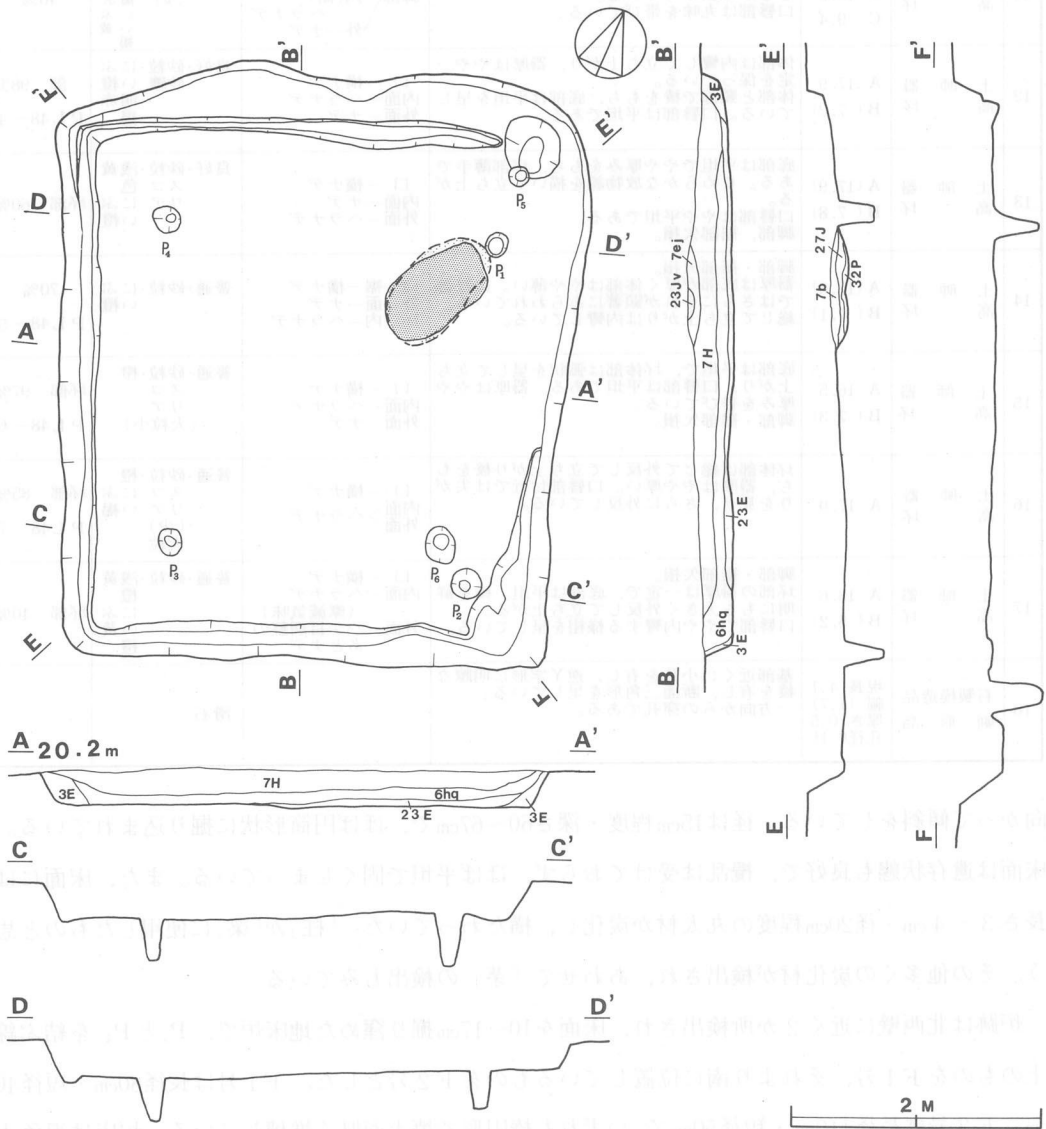
向かって傾斜をしている。径は15cm程度・深さ60~67cmで、ほぼ円筒形状に掘り込まれている。床面は遺存状態も良好で、攪乱は受けておらず、ほぼ平坦で固くしまっている。また、床面には、長さ3~4cm・径20cm程度の丸太材が炭化し、横たわっていた。「柱」か「梁」に使用したものと思う。その他多くの炭化材が検出され、あわせて「茅」の検出もみている。

炉跡は北西壁に近く2か所検出され、床面を10~17cm掘り窪めた地床炉で、P<sub>1</sub>とP<sub>4</sub>を結ぶ線上のものをF1号、それより南に位置しているものをF2号とした。F1号は長径80cm・短径40cm、F2号は長径110cm・短径50cmで、いずれも楕円形で焼土が厚く堆積している。炉床は褐色土で硬く締まっており、長期間使用されたと思われる。

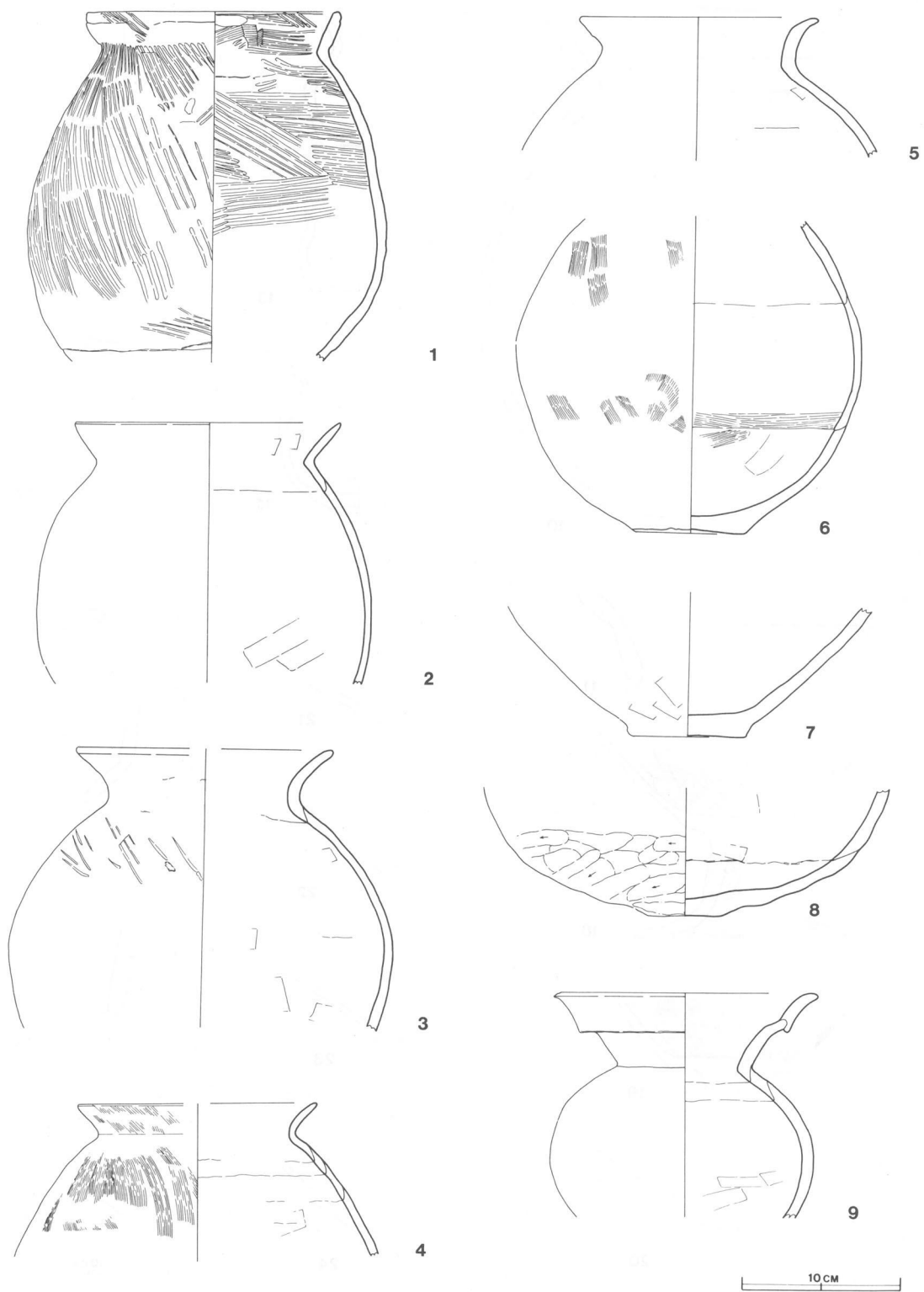
貯蔵穴は本跡南コーナー部に確認され、長径110cm・短径85cm・深さ53cmを測り、その覆土は五層からなる自然堆積土で、ローム粒子・炭化物・焼土ブロックが混入している。底面はロームできわめて硬くしまりがあり、深鍋状に掘り込まれている。

本跡の覆土の上層部は、黒褐色土でやや軟弱であるが、中層部から下層部にかけて暗褐色土・褐色土と変化している。炭化物・焼土が少量混入している。堆積の状況は、自然堆積の様相を呈している。遺物は、土師式土器片が多量に出土している。

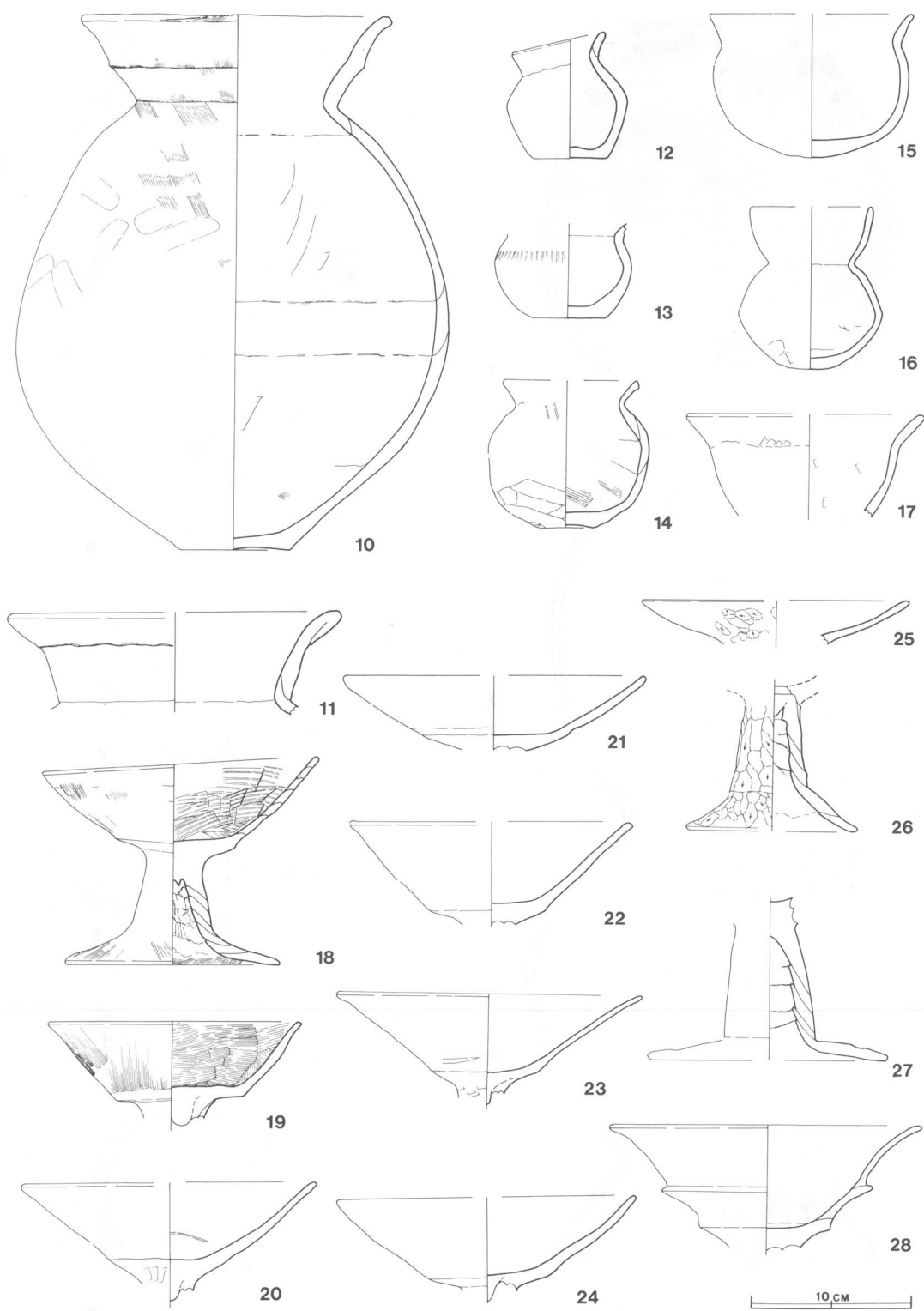
第30号住居跡（第62図）



第62図 第30号住居跡実測図



第63図 第30号住居跡出土遺物実測図(1)



第64图 第30号住居跡出土遺物実測図(2)

本住居跡はE4g<sub>0</sub>調査区を中心に確認されたもので、長軸方向はN-19°-Wを指す。規模は長軸4.62m・短軸4.05m・面積18.71㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は12~25cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁面は硬くしっかりしているが、北西部の一部が削平され不明瞭である。壁溝は東側一部をのぞき、壁下に幅10~16cm・深さ17cm程で全周している。柱穴は6か所検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は主柱穴と考えられ、深さ30.5~40.0cmを測り、垂直に掘り込んでいる。底面はほぼ平坦で硬く、よく締まっている。特に中央部及び南東隅が顕著である。

炉跡は北東壁付近に検出され、長径94cm・短径52cmの楕円形で、床面を15cmほど皿状に掘り窪めた地床炉となっている。また、焼土粒子・ローム粒子が混入しており、炉床は凹凸でブロック状に固くなっている。

貯蔵穴と思われるものが南東コーナー部の壁下に検出され、深さ15cmあまりを掘り込んでいる。その覆土は暗褐色土と褐色土が堆積しており、それぞれローム粒子・ロームブロックを少量混入してややしまりを帯びている。しかし、貯蔵穴と断定するには疑問が残る。

本跡の覆土は三層に分かれ、上層部が黒褐色で、焼土粒子・炭化粒子・ソフトローム小ブロック・ローム小ブロックが少量混入している。中層部は上層部より多くのローム粒子が混入し、しまりを帯びている。下層部は褐色土で、黒色土が散在する。焼土粒子・炭化粒子が少量混入し、自然堆積している。遺物は、土師式土器片がほぼ全面にわたって検出されている。

#### 出土遺物解説表

SI-30

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 15.8 B (22.0)	頸部はほぼ直立し、口縁部は直線的に外反して立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。肩部はなで肩で、胴部は下位で最大径を測り、緩やかに底部に移行している。器厚は一定ではない。底部欠損。	ハケ目調整	やや・砂粒・灰褐色 軟弱 にぶい赤褐色	60% P L 49-1
2	土師器 甕	A 16.5 B (16.5)	器厚は薄手で一定であり、頸部は「く」の字状で、口縁部はやや外反している。口唇部は丸味を帯びている。胴部中位で最大径を測る。底部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	やや・砂粒・にぶい 軟弱 橙褐色	50% P L 49-2
3	土師器 甕	A 16.2 B (17.7)	頸部は「く」の字状を呈している。口縁部は丸味を帯びている。胴部の器厚は薄手で中位で最大径を測り、底部へと移行している。底部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	良好・砂粒・赤黒明赤 褐色	口縁部50% P L 49-3
4	土師器 甕	A (15.0) B ( 9.7)	胴部・底部欠損。器厚は薄手で一定。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 外面一ハケ目調整	良好・砂粒・灰褐色	口縁部30%
5	土師器 甕	A (15.0)	頸部は直線的に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。口唇部はやや鋭くなる。胴部・底部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶい 橙褐色 橙	口縁部90%
6	土師器 甕	B (20.7) C 6.8	底部上げ底でやや器厚は厚めである。大きく弧を描きながら内彎している。胴部中位に最大径を測る。胴部の器厚は薄手である。口縁部欠損。	内面一ヘラナデ 一部ハケ目調整 外面一ハケ目調整のあとナデ	普通・砂粒・灰褐色	50% P L 49-4
7	土師器 甕	B ( 8.1) C 6.2	底部の器厚はやや厚手を有し、上げ底で胴部中位へと移行している。胴部は器厚を一定に保っていると思われる。	内面一摩減 外面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい 橙	底部 100%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	土師器 甕	B(8.1) C 4.7	底部付近は器厚を増しているが、胴部下位の器厚は一定でなく、つくりも粗野である。	口一ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラケズリ	良好・砂粒・赤褐 にぶい橙	底部 100%
9	土師器 壺	A 15.6 B(14.2)	底部欠損。胴部はやや横に張り、最大径は中位にあって球形を呈し、口縁は、朝顔形に大きく開いた複合口縁をもち、口唇部でさらに外反している。器厚は厚手で一定している。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・にぶい黄 橙 明褐 灰	60% P L 50-1
10	土師器 壺	A 18.5 B 33.2 C 7.0	頸部から口縁中位にかけてやや外反し、それからさらに強く外反する。口唇部は丸味を帯びている。肩部はなで肩で、胴部中位で最大径を測りながら底部へと移行している。底部は上げ底である。	内面一ヘラナデ 外面一ハケ目調整の あとヘラナデ (ヘラミガキ)	普通・砂粒・明赤 スコ リア 橙	80% P L 49-5
11	土師器 壺	A(19.8) B(5.9)	口縁部は頸部から直線的に器厚を立ち上がり、折り返し口縁で、口唇部は丸味をもち大きく外反を見せている。胴部・底部欠損。	口一横ナデ 外面一摩滅気味	良好・砂粒・明赤 スコ リア にぶい褐	口縁部20%
12	土師器 小型壺	A 5.8 B 7.9 C 4.5	底部は凸凹状で、体部はやや垂直に立ち上がり、中位で最大径を測り内彎し、直立ぎみの頸部に至る。口縁部はほぼ直線的であるが、口唇部でやや外反している。型は不定形である。	口一横ナデ 内面>ナデ 外面	普通・砂粒・にぶい 橙 にぶい黄 橙	100% P L 50-2
13	土師器 小型壺	B(5.9) C 4.9	底部は平坦で器厚を有し、体部は中位まで内彎する形で立ち上がり、口縁部にかけてさらに内彎する。口縁部欠損。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一摩滅気味 ハケ目調整 ナデ	良好・砂粒・にぶい スコ リア 明赤 褐 (小)	70% P L 50-3
14	土師器 小型壺	A 8.4 B 9.2 C 3.6	底部上げ底。体部は浅い弧状を呈する。頸部は器厚を減じ「く」の字状を呈し、口縁部は器厚を増し、口唇部で最も厚手となる。	口一横ナデ 内面一ナデ	やや・砂粒・にぶい 軟弱 スコ リア 橙 褐 灰	60% P L 50-4
15	土師器 壺	A(12.2) B 8.9	底部の内面は平坦であるが、外面は彎曲して器厚は厚手である。胴部下位は薄手で、やや横に張り出してから垂直に立ち上がる。頸部から口縁部の器厚は一定で、口縁は外反して、口唇部でさらに外反して丸味を帯びる。	口一横ナデ 内面一摩滅気味 外面一ナデ 摩滅気味	やや・砂粒・灰黄 軟弱 砂礫 (少) 褐 にぶい橙	60% P L 50-5
16	土師器 罎	A(7.7) B 10.1	口縁部はやや内彎する形で立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。体部は最大径を中位にもち、球形状を呈している。底部は平坦で、やや器厚を有している。	内面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい 赤 褐 褐 灰	40%
17	土師器 鉢	A(14.8)	口縁部下位で外反し、中位で垂直をみせ、上位から口唇部にかけてさらに外反を見せて、器厚を増している。口縁部以外は欠損。	口一横ナデ (ヘラオサエ) 内面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい 赤 褐 褐 灰	口縁部45%
18	土師器 環	A 17.1 B(12.9) C 13.2	裾部約30度の傾斜をもちながら脚部へと移行し、脚部はやや器厚を有し、円柱状を呈している。頸部は「く」の字状で体部との間に鮮明な稜をもち、底部は平坦で、環部は薄手の器厚で広く立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。	口一ハケ状工具による ナデ 内面一ハケ目調整 外面一ナデ ハケ状工具による ナデ	良好・砂粒・橙 褐 灰	80% P L 50-6
19	土師器 環	A 15.3 B(6.0)	環底部は平坦で器厚は厚手で、環部はやや直線的な開きをもっている。口唇部で少々外反を見せている。脚部・裾部は欠損。	内面一摩滅気味 外面一ヘラケズリ	やや・砂粒・明赤 軟弱 にぶい黄 橙	環部 60%
20	土師器 環	A 18.2	底部は平坦で厚手の器厚を有している。環部は大きくせり上がりを見せているが、薄手の器厚であり、先端近くで顕著である。口唇部はやや丸味を帯びている。脚部・裾部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ ヘラケズリ	やや・砂粒・橙 軟弱 褐 灰	環部 50%
21	土師器 環	A 18.8 B(4.6)	底部は平底で、ゆるやかに内彎しながら環部が立ち上がっている。器厚は厚手で体部・頸部の間に稜をもつ。口唇部は丸味を帯びている。脚部・裾部欠損。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ	良好・砂粒・にぶい 赤 褐	口縁部70% P L 51-1
22	土師器 環	A(17.4)	裾部・脚部欠損。底部は平坦でやや器厚を有し、朝顔状に大きく開く環部をもち、器厚は薄手である。口唇部は丸味を帯びやや外反している。	摩滅気味	軟弱・砂粒・にぶい 橙 灰 褐	環部 60%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
23	土師器 土高器 環	A (18.9)	底部はやや平坦で、坏部の器厚は総じて薄く、外反する形で大きく広がりを見せて立ち上がり、口唇部でさらに外反する。脚部・裾部欠損。	口一横ナデ	普通・砂粒・橙にぶい褐灰褐	坏部 50% P L 51-2
24	土師器 土高器 環	A 18.5 B (6.4)	底部はやや平坦で、坏部は内彎して立ち上がりを見せて、口唇部は丸味を帯びている。総じて坏部の器厚は薄手である。脚部・裾部欠損。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面>ナデ	良好・砂粒・明赤褐	口縁部80% P L 51-3
25	土師器 土高器 環	A (16.6)	坏部の器厚は薄く大きく開いている。口唇部でやや丸味をもち器厚を増している。他は欠損。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶい橙	坏部 15%
26	土師器 土高器 環	C (10.6)	裾部は勾配37度を保ち、肉厚の感じを持ち脚部に移行している。脚部はやや垂直で円柱状で立ち上がっている。坏部欠損。25と同一個体か。	外面一ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶい褐	脚部 65%
27	土師器 土高器 環	C (14.9)	裾部は広く、15度の傾斜で脚部に移行し、脚部は円柱状である。坏部欠損。	外面一ヘラナデ 横ナデ	やや・砂粒・橙軟弱(少) 小礫(少)	脚部 60%
28	土師器 土高器 裝飾器台	A 19.3	底部は平坦で稜を鮮明にもち、複合口縁で器厚は総じて薄手である。口縁の立ち上がりは大きく外反し、口唇部でさらに外反する形を示している。脚部・裾部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一横ナデ	普通・砂粒・明赤(少)褐黒褐	受部 80% P L 51-4

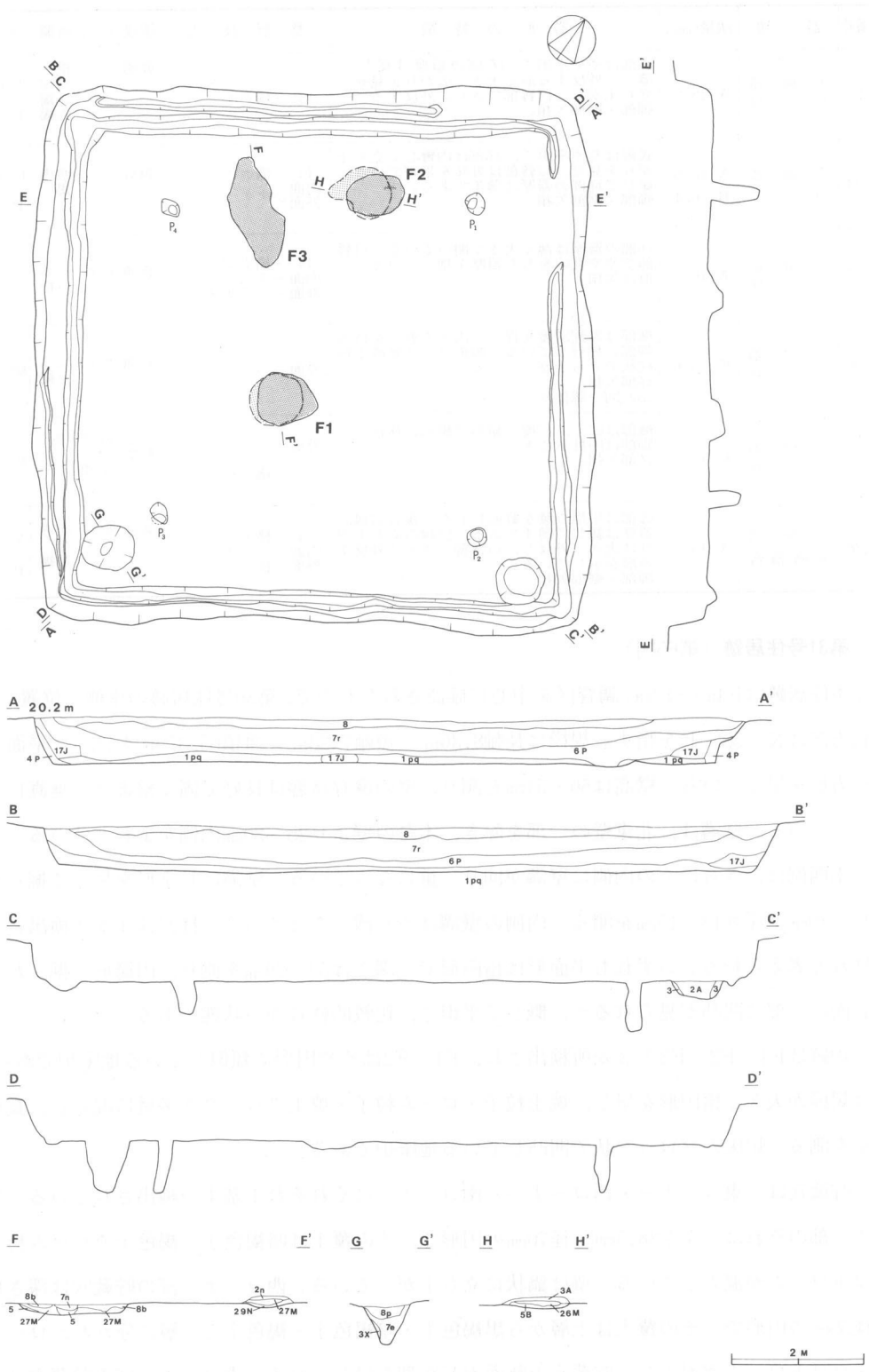
### 第31号住居跡（第65図）

本住居跡はF4a0・F5a1調査区を中心に確認されたもので、第30号住居跡の南側に位置し、長軸方向はN-55°-Eを指す。規模は長軸8.36m・短軸7.28m・面積65.37㎡を測り、平面形はやや方形を呈している。壁高は50~54cmを測り、壁の遺存状態は良好で固く締まり、垂直に立ち上がっている。壁溝は、北東壁の一部を除き、本跡の壁より25~30cm内側をまわっている。北西及び南西側は、さらにその内側に壁溝が回り二重になっている。壁溝はU字形を呈して掘られ、幅15~20cm・深さ13~15cmを測る。内側の壁溝はやや浅くなっている。柱穴は4か所検出され、主柱穴と考えられる。いずれも平面形は楕円形で、深さは53~79cmを測り、円筒形に掘られている。底面の一部に凹凸が見られるが、概して平坦で、比較的軟らかい状態である。

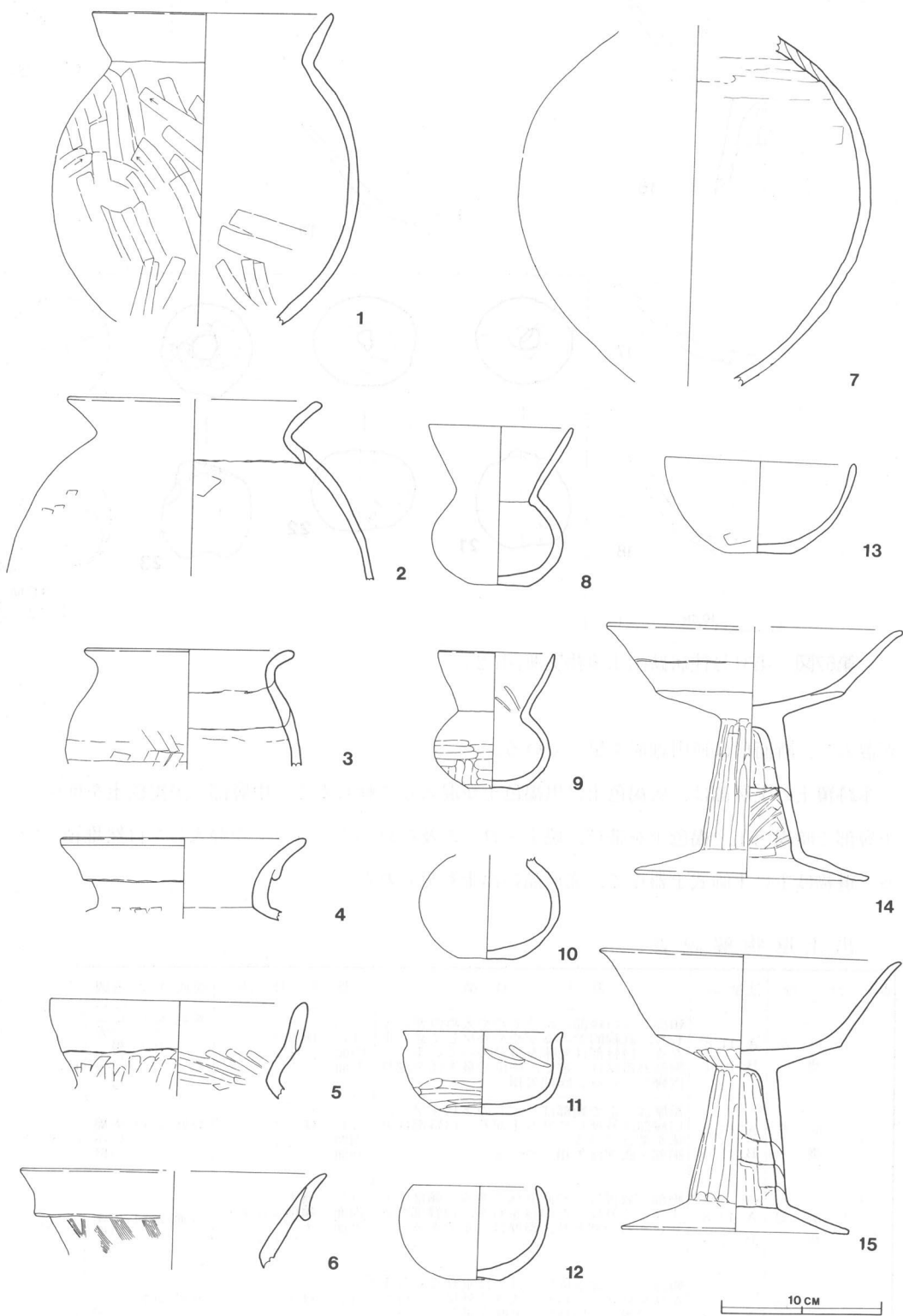
炉跡はF1・F2・F3と3か所検出され、F1とF2はやや円形で類似している地床炉である。F3は規模が大きく楕円形を呈し、焼土粒子・ローム粒子・焼土ブロックが多量に混入し、長径160cmを測る。炉床がブロック状で凹凸している地床炉である。

貯蔵穴は、東コーナー・西コーナー・南コーナーにそれぞれ1基ずつ検出されている。東コーナー部のそれは、深さ28.5cm・径70cmの円形で、その覆土は暗褐色土・褐色土でローム粒子・ソフトロームが混入している。壁は鍋状に立ち上がっている。西コーナー部の貯蔵穴は深さ12cm・径55cmの円形で、その覆土は上層から黒褐色土・暗褐色土・褐色土と三層に分かれ、ローム粒子・ソフトロームが混入し、貯蔵穴の断面がV字型を呈している。南コーナー部の貯蔵穴は、深さ55cm・径65cmで細長い楕円形を呈し、その覆土は主に黒褐色土で、ロームブロック・ローム粒子

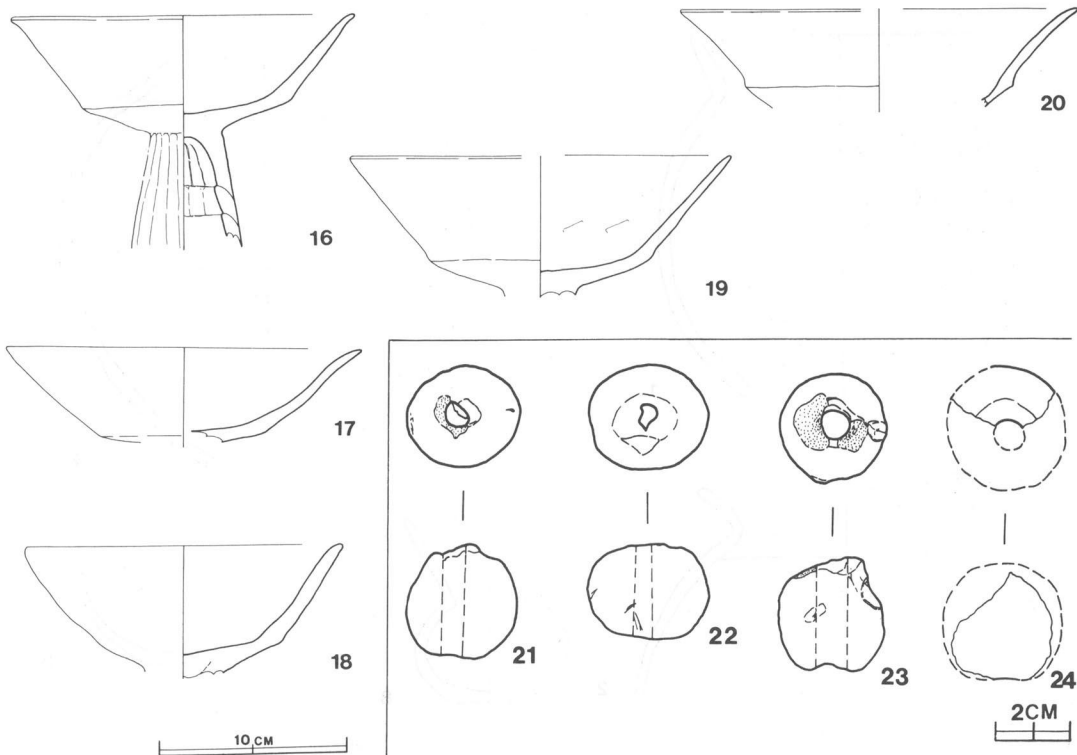




第65图 第31号住居跡実测图



第66図 第31号住居跡出土遺物実測図(1)



第67図 第31号住居跡出土遺物実測図(2)

が混入し、断面形は逆円錐形を呈している。

本跡覆土の上層部は、灰褐色土に黒褐色土が混入して軟らかく、中層部に黒褐色土を堆積し、下層部で暗褐色土・褐色土を帯び、焼土・ローム及びロームブロックが混入した自然堆積土である。遺物は主に土師式土器片で、完形品の出土も見られた。

出土遺物解説表

SI-31

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 14.8 B (19.4)	頸部から口縁部にかけてやや太めの感じをもち、直線的であるがやや外反して立ち上がる。口唇部は丸味を帯び尖っている。胴部の器厚は一定で、中位で最大径を測り内彎している。底部欠損。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・にぶい赤褐にぶい黄橙	60% P L 51-5
2	土師器 甕	A 15.8 B (11.0)	器厚は一定で頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。胴部・底部は欠損している。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	良好・砂粒・灰褐にぶい橙	口縁部30%
3	土師器 甕	A 12.8 B (7.8)	胴部の肩部はやや直立状である。頸部からすどく外反した口縁をもち、口唇部ですらにそれが加わり、器厚は一定である。	口一横ナデ 内面一輪積こんあり 外面一ナデ ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい橙	50%
4	土師器 壺	A 15.3	頸部から口縁下位にかけては垂直な立ち上がりを見せ、それから大きく外反し、折り返し口縁で、口唇部で丸味を帯びている。	口一横ナデ 外面一ヘラオサエ	軟弱・砂粒・にぶい橙	口縁部90%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	土師器 壺	A 16.0 B ( 6.0)	頸部から直線的に外反し、口唇部で折り返し口縁となる。 口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ	良好・砂粒・明赤 褐 赤黒	口縁部100 %
6	土師器 壺	A 18.7 B 5.4	口縁部は折り返し口縁で、器厚は一定で直線的である。 口唇部はやや丸味をもって尖る。 脚部・底部欠損。	口一横ナデ 内面一横ナデ 外面一横ナデ ハケ目	良好・砂粒・にぶ スコ リア	口縁部40%
7	土師器 壺	B 21.6	胴部のみで半円形状を描き、全体的に器厚が薄く、中位部で最大径を測る。上位部内面に輪積痕を有している。	内面一ヘラナデ ヘラケズリ 外面一ヘラナデ	普通・砂粒・明褐 黒褐 にぶ い黄 褐	30%
8	土師器 埴	A 9.0 B ( 9.9)	口縁部は直線的で器厚を一定に保ち、大きく外反して立ち上がり、口唇部でやや内彎している。 頸部は「く」の字状で、胴部はやや厚めの器厚で弧を描く状態で張り出し、平底に至る。	口一ヘラナデ 内面一ナデ 外面一摩滅	良好・砂粒・橙 スコ リア	60 % P L 52- 1
9	土師器 埴	A 7.1 B 8.5 C 3.0	口縁部は直線的に広がり、口唇部でやや内彎し丸味を帯び、頸部は「く」の字状にくびれ、胴部は強く張り出し弧を描き、底部に至る。 底部は平底である。	口一横ナデ 外面一ヘラミガキ ナデ	良好・砂粒・にぶ い黄 い橙 砂礫	100 % P L 52- 2
10	土師器 埴	B ( 6.4) C 3.6	底部・胴部のみで、底部は平坦で、器厚は厚手で胴部へ移行。胴部下位はやや薄手で中位で最大径を測り、頸部へと内彎する。 口縁部欠損。	内面一摩滅気味 外面一ヘラミガキ (摩滅気味)	良好・砂粒・赤褐 スコ リア	70 % P L 51- 6
11	土師器 埴	A 10.0 B ( 5.2)	底部は平坦。体部は深みをもち弧状を呈し、口縁部で直立する。 口唇部でやや外反し、丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ケズリのあと ヘラミガキ	良好・砂粒・明赤 スコ リア	100 % P L 53- 1
12	土師器 埴	A 7.7 B 5.9 C 2.8	底部は上げ底で、体部中位から垂直に立ち上がる。 口唇部で内彎し丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ヘラナデ	普通・砂粒・橙 スコ リア	98 % P L 53- 2
13	土師器 埴	A 12.0 B ( 5.8)	底部は平坦で、体部はなめらかに内彎して立ち上がり、器厚は薄手である。 口唇部は直立する様相で、端は丸味を帯びている。	口一横ナデ 外面一ヘラケズリの あと ヘラミガキ	良好・砂粒・黄橙 スコ リア	100 % P L 52- 3
14	土師器 埴	A (18.4) B 15.6 C 14.2	裾部は21度の勾配で脚部に至り、脚部は円柱状を呈している。 底部は平坦であるがやや傾斜をもっている。 割合鮮明な稜をもち、坏部は外反して立ち上がり、口唇部でさらに外反している。	口一横ナデ 内面一摩滅気味 外面一摩滅気味 (ナデ) ミガキ ヘラケズリ ナデ、横ナデ	普通・砂粒・にぶ い赤 褐 淡橙 スコ リア	60 % P L 52- 3
15	土師器 埴	A 18.4 B (17.1) C 14.0	裾部から脚部までは26度の勾配で、器厚を一定に保ちながら立ち上がり、脚部は円柱状で頸部に至っている。頸部は「く」の字状を呈し、鮮明な稜をもっている。底部は平坦であり坏部は直線的に大きく開き、口唇部付近で外反する。先端は尖がりを見せている。	口一横ナデ 内面一ミガキが摩滅 外面一ナデ、ヘラケズリ 脚部一ナデ 裾一横ナデ	普通・砂粒・明赤 砂礫 にぶ い褐	85 % P L 53- 4
16	土師器 埴	A 18.1 B (12.4)	脚部一部・裾部欠損。 脚部は円柱状で、底部は平坦で頸部は「く」の字状である。坏部は稜をもち外反しながら立ち上がりを見せ口唇部近くで器厚を減じてさらに外反して丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一横ナデ ミガキ ヘラケズリ 脚部外側一ヘラミガキ	良好・砂粒・明赤 砂礫 褐 灰褐	60 % P L 53- 5
17	土師器 埴	A 19.0 B ( 5.2)	胴部・裾部欠損。 底部は平坦であるが、やや傾斜を持っている。器厚は一定で、外反して立ち上がり、口唇部でさらに外反を見る。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ヘラナデ	良好・砂粒・橙	坏部 80 % P L 52- 4
18	土師器 埴	A 16.7 B ( 7.0)	器厚は厚く保ち、底部は平坦で、坏部は直線的な立ち上がりを見せている。口唇付近で外反し丸味を帯びている。 脚部・裾部欠損。	内面一ヘラナデ 外面一 部下半 ヘラ押え	良好・砂粒・橙 スコ 明赤 褐	坏部 90 % P L 53- 6
19	土師器 埴	A (20.2) B ( 7.5)	器厚は薄く、底部は平坦で、体部に稜をもち、やや直線的に広く立ち上がりを見せている。 口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一摩滅	普通・砂粒・にぶ スコ い赤 褐	坏部 50 %

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
20	土師器 高器環	A(20.8) B(5.3)	脚部・裾部欠損。 器厚一定で体部に鮮明な稜をもち、外反して立ち上がり、口唇部でさらに外反し、丸味を帯びている。	口一横ナデ 外面一摩滅	良好・砂粒・にぶい黄橙明赤褐	口縁部20%
21	土師器 土器玉	3.1×3.0 孔径0.7 21.5g	不整球形で、孔が中心線よりずれている。	ナデ	普通・砂粒・にぶ(少)い橙	100% P L 75-7
22	土師器 大土器玉	2.6×3.3 孔径0.4 22g	扁平な球形を呈している。	ナデ	普通・砂粒・褐灰スコーリア	100% P L 75-8
23	土師器 土器玉	3.1×2.8 孔径0.7 20g	不整球形を呈している。 造りが雑である。	ナデ	普通・砂粒・黒褐(少)	95% P L 75-6
24	土師器 土器玉	(3.3×3.2) 孔径(0.8) 8g	表面は滑らかであるが、不整球形を呈している。	ナデ	普通・砂粒・にぶ(少)い橙	25%

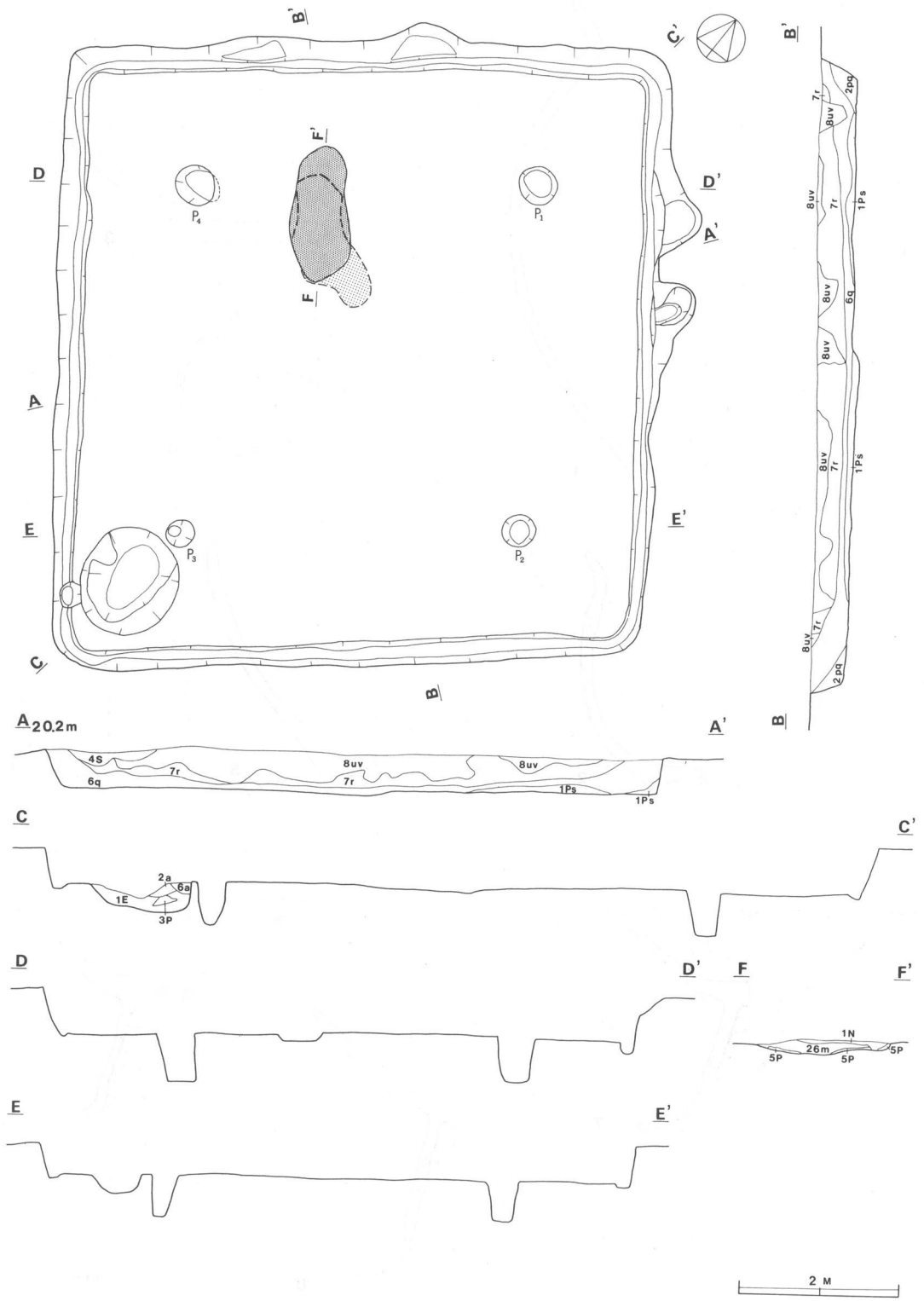
### 第32号住居跡（第68図）

本住居跡はF5f<sub>2</sub>・g<sub>2</sub>調査区を中心に確認されたもので、本遺跡南東部に位置し、長軸方向はN-39°-Wを指す。規模は長軸7.78m・短軸7.46m・面積58.03㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は40～58cmで、垂直に立ち上がり、固く締まりを帯びている。壁下に、壁溝が幅15cm・深さ10cmのU字型を保ちながら本跡をめぐる。床面はほぼ平坦で、固くしまっている。柱穴は4か所検出され、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は深さ51.5～68cm・径17～25cmを測る。それぞれ円筒形に掘り込まれており、主柱穴と考えられる。

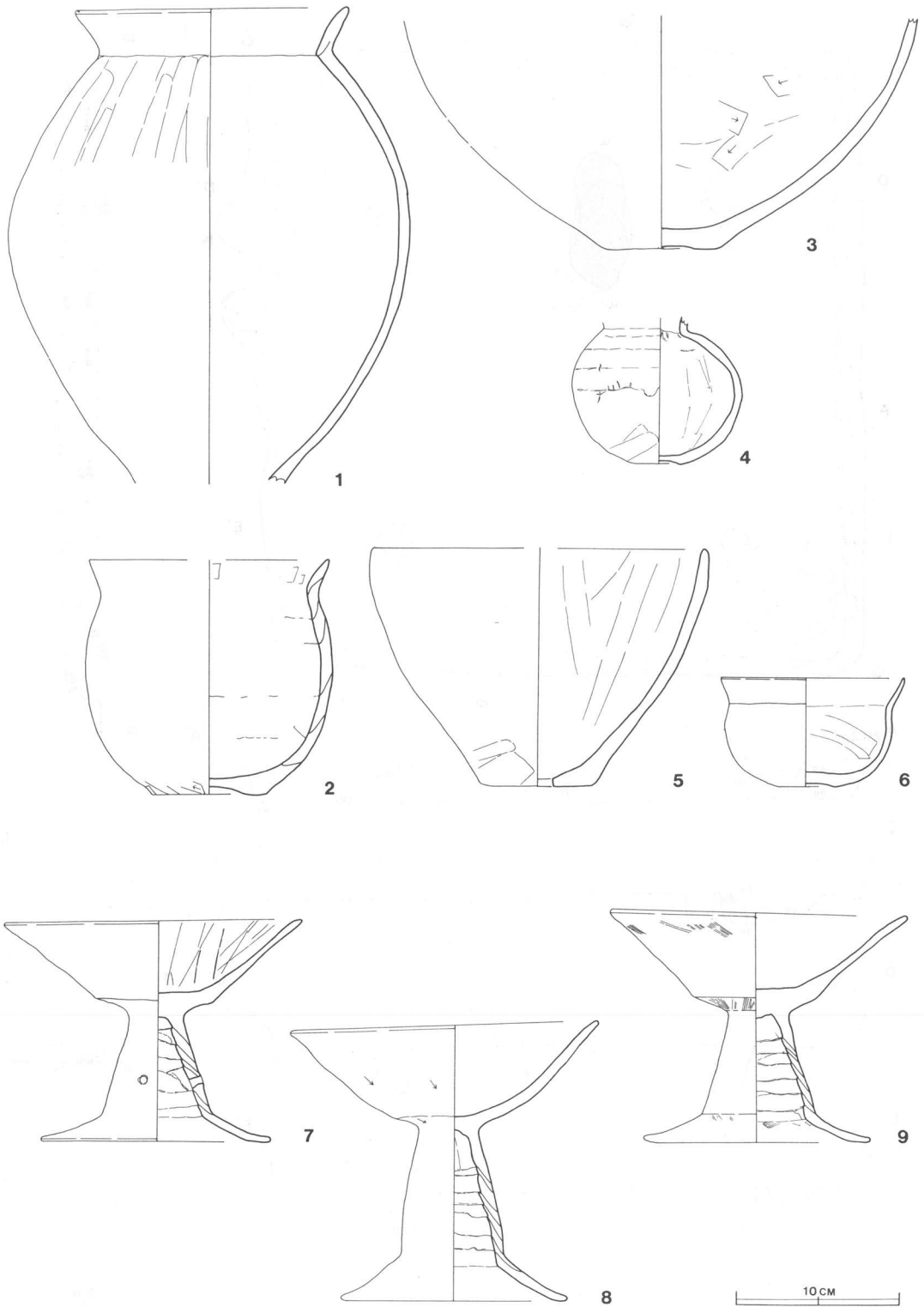
炉跡は本跡北西部に検出され、長径170cm・短径68cmの楕円形を呈し、床面を15cm程掘り窪めた地床炉で、焼土粒子・焼土ブロックを混入している。炉床は硬いブロック状である。

貯蔵穴は、南コーナー部に円形を呈し径120cm・深さは37cmを測っている。その覆土は自然堆積で、上層部は暗褐色土・極暗褐色土でローム粒子を少量混入し、中層部は褐色土でロームブロックを混入している。また床面は暗褐色土で、ロームブロック・ローム粒子が多量に混入している。北壁はほぼ垂直な立ち上がりを見せているが、南側の壁は大きく外に傾斜をもちながら立ち上りを示している。

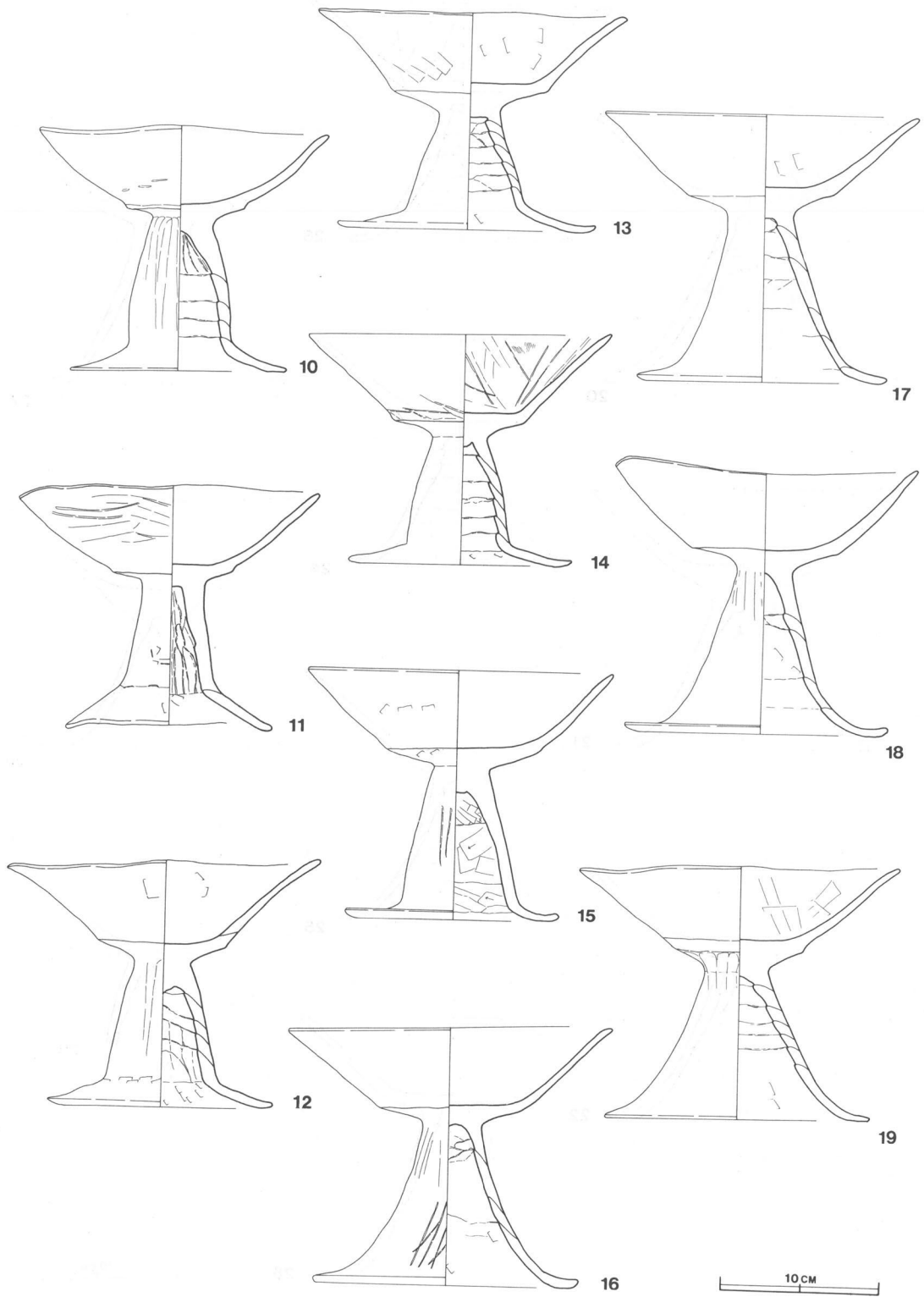
本跡覆土は、三層からなる自然堆積土である。上層部は黒褐色土で、耕作により攪乱されている。中層部も黒褐色土であるが、軟らかいロームを混入している。下層部は極暗褐色土でローム・炭化物が少量混入している。遺物は土師式土器片及び完形品の出土を見た。



第68图 第32号住居跡実測图

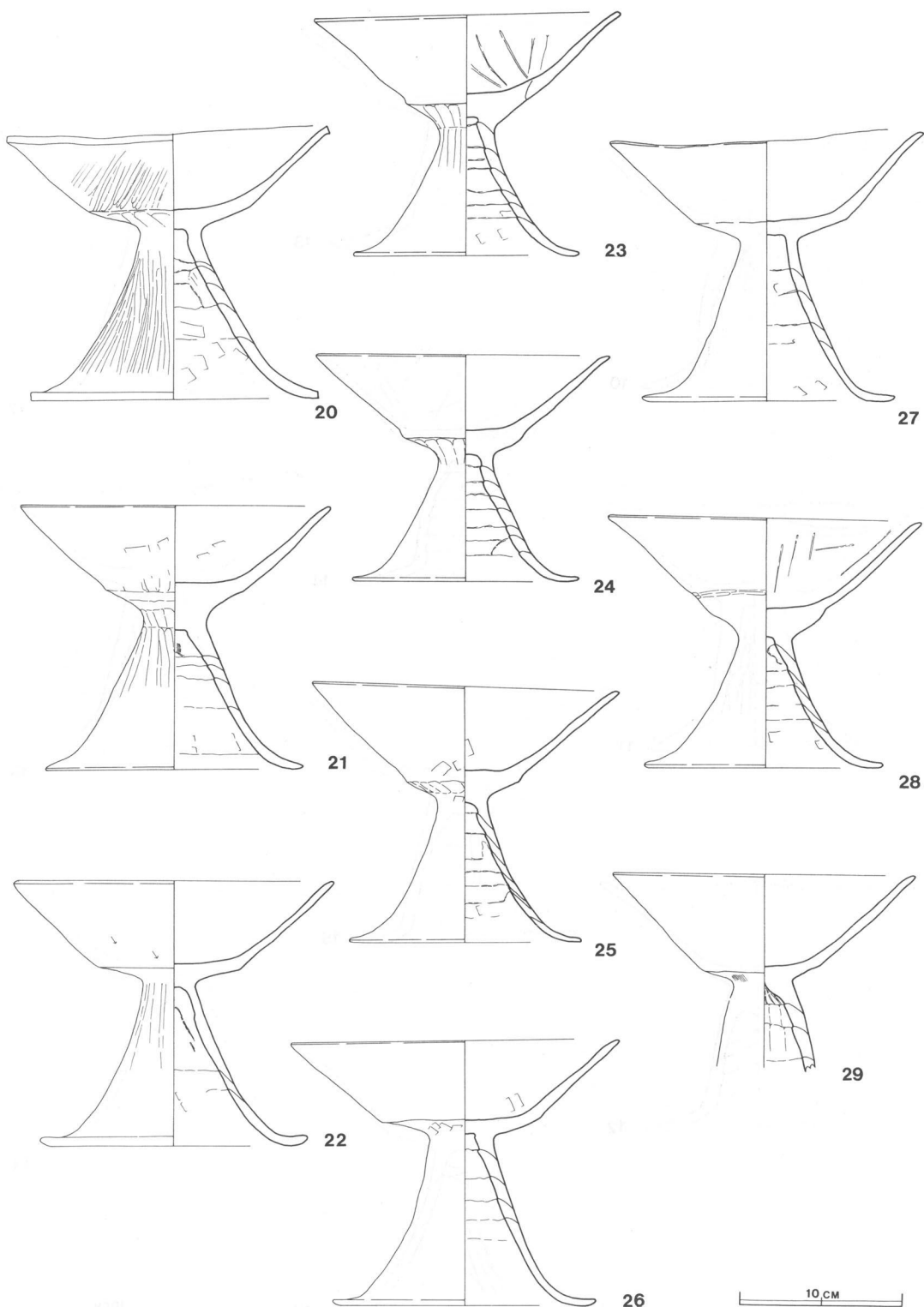


第69図 第32号住居跡出土遺物実測図(1)



第70图 第32号住居跡出土遺物実測図(2)





第71图 第32号住居跡出土遺物実測図(3)

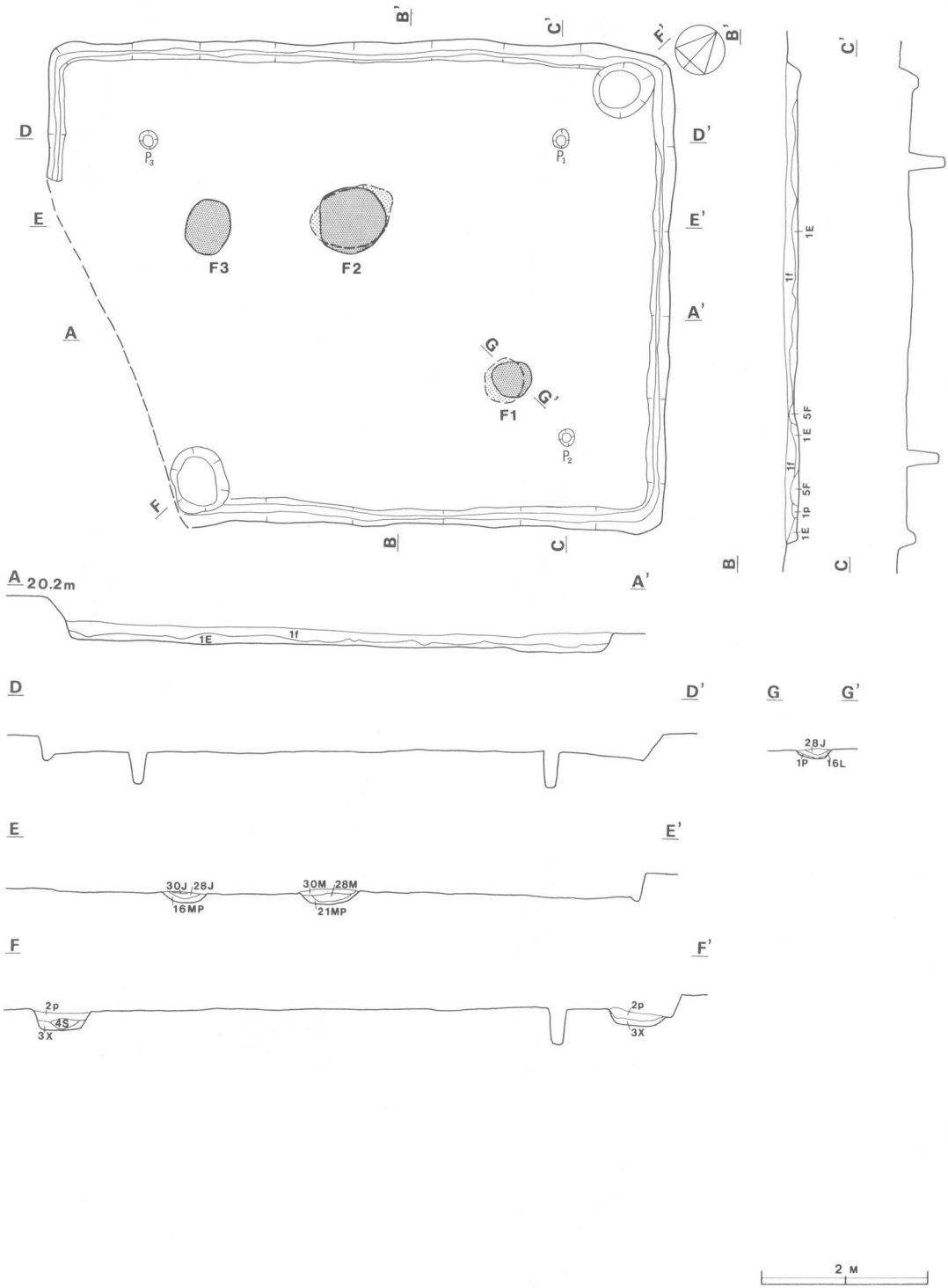
出土遺物解説表

SI-32

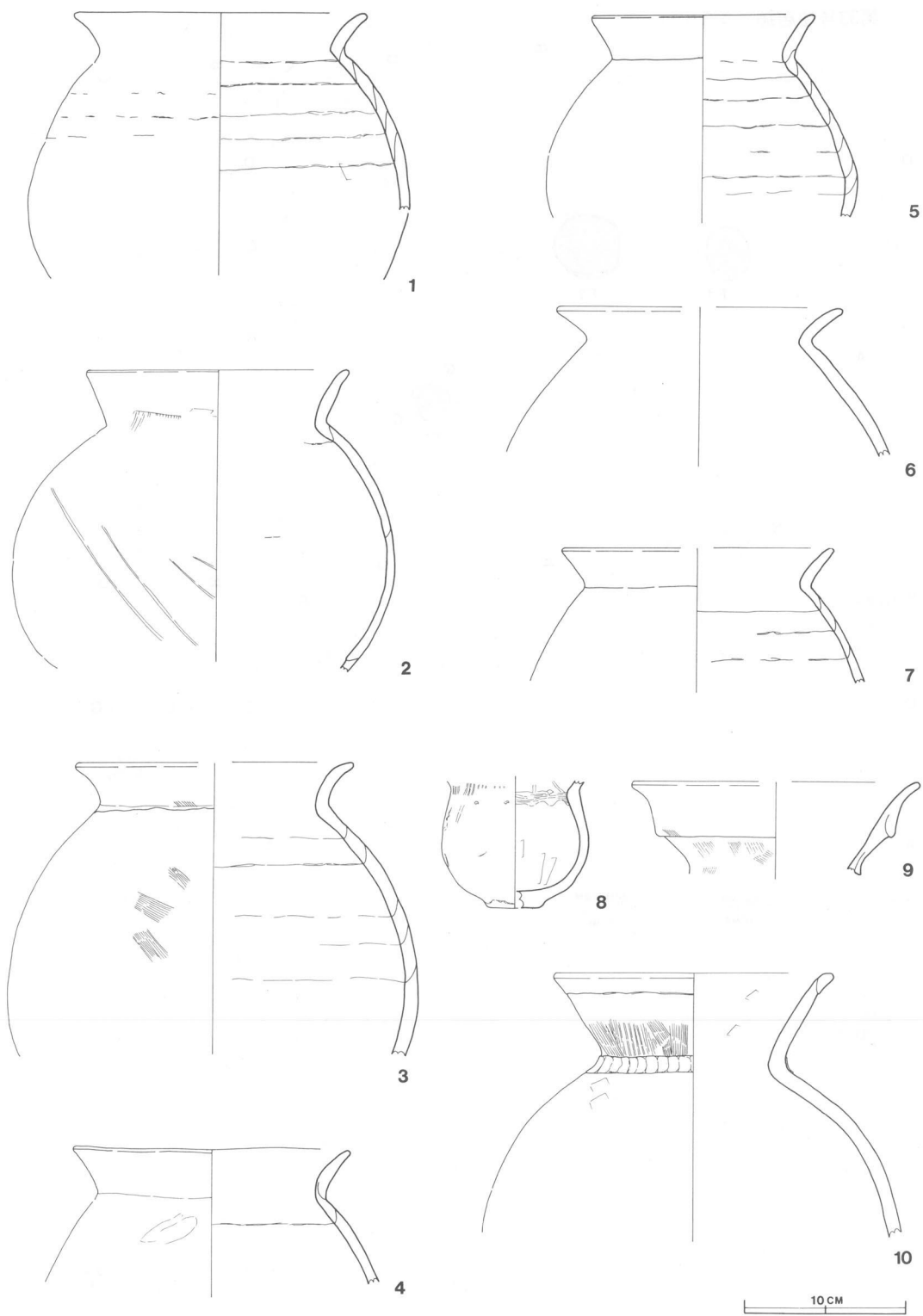
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 16.8 B (29.5)	底部欠損。胴部は器厚を一定にし、やや直線的な膨みで立ち上がり、中位で最大径を測り、内彎しながら頸部に至っている。頸部は「く」の字状で、口縁部は器厚を厚く外反して立ち上がる。口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・灰赤 褐灰	60% P L 52-5
2	土師器 甕	A 14.9 B (14.6)	底部は上げ底で、胴部はやや直立に立ち上がり、器厚は一定である。中位から内彎し口縁部に移行している。口縁は直線的に外反して立ち上がり、口唇部はやや尖がりを帯びている。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ ヘラケズリ	良好・砂粒・にぶ い赤 褐橙	60% P L 54-1
3	土師器 甕 or 壺	B (14.1) C 7.0	底部器厚を有し若干上げ底で、胴部は大きく内彎しながら膨らみをもつ。中位部に移行するにしたがって器厚を減じている。	内面一ヘラナデ 摩滅気味 外面一ミガキが摩滅	普通・砂粒・にぶ い橙 スコ リア	20%
4	土師器 小型 壺	B 8.7 C (3.5)	底部の器厚は薄手で上げ底を呈し、胴部は大きく張り出し、弧を描いて口縁部へと移行する。中位で最大径を測る。器厚は一定でない。口縁部欠損。	内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・灰褐 (少) にぶ い赤 褐	40% P L 54-2
5	土師器 甕	A (20.3) B 14.8 C (7.1)	底部中央に孔を有し、器厚はやや厚手で、やや直線的に立ち上がりを見せ、口唇部に近くなるにつれ、垂直を帯びている。口唇部はやや内彎をする形をもち、丸味をもっている。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ ヘラナデ	普通・砂粒・黒褐 灰褐	30% P L 54-3
6	土師器 壺	A 11.3 B 6.8 C 3.3	底部上げ底で、体部は器厚を薄く垂直に立ち上がる。頸部で外反した口縁へと移行し、口唇部でやや内彎する形をとる。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ ナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶ い黄 橙	90% P L 54-4
7	土師器 器環	A 18.5 B (13.8) C (14.2)	裾部の器厚は薄手で約23度の傾斜を保ち、貫通孔を有し脚部に至り、器厚をやや増しながら頸部に移行している。頸部は「く」の字状を呈している。底部扁平で体部の間に稜をもち、環部は朝顔状である。口唇部は直線的で丸味を帯びている。	環部内面一摩滅気 味 ヘラナ デ	良好・砂粒・橙	80% P L 54-5
8	土師器 器環	A 19.0 B 17.4 C 14.0	環部内彎しながら立ち上がりを見せ、口唇部付近でやや外反し、丸味を帯びている。底部は平坦で、頸部は「く」の字状である。脚部は円柱状で垂直きみである。裾部は大きく広がりをもっている。裾部・脚部の器厚は一定である。	口・裾一横ナデ 環部外面一ヘラナデ 脚部外面一ヘラナデ (ミガキつ ばい)	良好・砂粒・橙 (少) スコ リア (大粒)	55% P L 54-6
9	土師器 器環	A 18.5 B (14.5) C 14.0	裾部の先端をせり上げ、25度の傾斜で脚部に至る。脚部は器厚をやや薄く円柱状を呈している。環の底部は器厚は厚く平坦で鮮明な稜をもち、朝顔状に開く。口縁中位は薄手であり、口唇部付近で外反して丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一摩滅気味 外面一ハケ目、ナデ、 横ナデ	良好・砂粒・浅黄 橙	95% P L 55-1
10	土師器 器環	A 18.0 B 15.5 C 13.9	環体部は弧状を呈し、口唇部付近でやや外反し丸味を帯びている。脚柱部は垂みのある円柱状で、裾部は緩やかに開いている。底部は扁平で厚い器厚を有し、頸部は「く」の字状を呈している。体部との間に鮮明な稜をもつ。	口一横ナデ 一ミガキ 外面一全体的に摩滅、 ミガキ、ヘラナデ 裾一ハケナデ	良好・砂粒・淡黄 にぶ い橙	90% P L 55-2
11	土師器 器環	A 18.5 B 15.4 C 13.8	環体部は内彎し、口唇部でやや直線的となり、端は丸味を帯びている。底部は扁平を呈し、頸部は「く」の字状で体部との間に稜をもつ。脚柱部は円柱状で器厚を有している。裾部は器厚を減じながら広がりを見せている。全般に粗悪である。	口・裾一横ナデ 環部内面一摩滅気味 外面一ミガキが摩滅 ヘラオサエ	普通・砂粒・赤 スコ リア	10% P L 55-3
12	土師器 器環	A 19.5 B 15.6 C 14.0	裾部は約25度の勾配で脚部に至り、脚部は器厚を一定に保ち、頸部に移行している。環体部はほぼ扁平で体部との間に稜をもつ。環口縁部は大きく外反しながら立ち上がり、口唇部でさらに外反している。	口・裾一横ナデ 外面一ナデ、ヘラオサ エ ヘラナデ	良好・砂粒・明赤 褐 にぶ い赤 褐 黒褐	100% P L 55-4
13	土師器 器環	A 18.9 B 13.7 C 15.9	裾部を広くもち、器厚は薄く、脚部壁も薄い。環底部の器厚は厚く扁平である。頸部は「く」の字状で体部との間に鮮明な稜をもつ。口縁部は外反して立ち上がり、口唇部はさらに外反を見せている。	口・裾一横ナデ 環部内面>ヘラナデ 外面 脚部一ナデ	普通・砂粒・にぶ い褐 にぶ い橙	95% P L 55-5
14	土師器 器環	A 19.1 B (14.7) C 14.0	裾部は20度の角度をもちながらせり上がる様相を呈し、脚部に至る。脚部はやや膨らみをもち円柱状である。底部平坦で頸部は「く」の字状を呈し、環は器厚が薄く一定して外反している。口縁部も直線的で丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ ナデ 横ナデ	良好・砂粒・橙 スコ リア	95% P L 55-6
15	土師器 器環	A 18.9 B 15.8 C 13.4	裾部はやや平坦で、器厚は厚手で脚部へと移行し脚部は曲線を描いて立ち上がり、器厚を有した底部へと至っている。底部は平坦で、頸部は「く」の字状を呈している。環部は器厚を減じながら大きく開き、口唇部付近でやや外反を見る。	環一ナデ 口一ヘラナデ 環部内面一ナデ 環部外面一ヘラナデ 脚部内面一ヘラケズリ 脚部外面一ミガキが摩滅 裾一横ナデ	良好・砂粒・明赤 褐 スコ リア にぶ い褐	87% P L 56-1

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
16	土師器 器環	A 20.4 B (16.5)	裾部から脚部にかけてせり上がりを見せ、器厚を一定にして頸部へと移行し、頸部は「く」の字状を呈し、坏部は扁平で器厚薄く、口縁、口唇部と外反して立ち上がり、丸味を帯びている。	口・裾一横ナデ 外 面一ナデ 坏 内 面一ナデ 脚 部 内 面一ヘラナデ	良好・砂粒・にぶい橙 スコリア 明赤 褐	ほぼ完形品 P L 56-2
17	土師器 器環	A 19.6 B 16.9 C 15.7	裾部・脚部の器厚は薄手で、脚部はスマートに立ち上がり頸部に至っている。坏底部は平坦でやや厚手の器厚で稜をもち、口縁部は朝顔状に開いている。口唇部でやや外反して丸味を帯びている。	口・裾一横ナデ 外 面一ナデ 坏 内 面一ヘラナデ あとナデ	良好・砂粒・にぶい橙	100% P L 56-3
18	土師器 器環	A 19.0 B 17.3 C 17.0	坏体部はやや内彎しながら立ち上がり、口唇部で外反し丸味を帯びている。底部は平坦で、頸部は「く」の字状を呈している。脚柱部は円柱状で、裾部は大きく開いている。	裾一横ナデ 坏 内 面一摩滅気味の 脚 部 内 面一輪積のあと とヘラナ デ 外 面一ミガキ	良好・砂粒・にぶい橙 スコリア 灰白	98% P L 56-4
19	土師器 器環	A 20.1 B 16.0 C 16.4	裾部の器厚は薄く、急勾配で、脚柱部はややゆるやかに器厚をもちながら頸部へと至る。頸部は「く」の字状を呈し、底部は平坦で、体部との間に鮮明な稜をもつ。坏部はやや外反して立ち上がり、口唇部でさらに外反している。	口・裾一横ナデ 内 面一ヘラナデ 坏 部 内 面一ヘラミガ キ 脚 部 外 面一ナデ	良好・砂粒・橙にぶい橙	90% P L 56-5
20	土師器 器環	A 19.8 B 17.0 C 17.8	裾部の先端は角状で急斜面を呈し、脚部から頸部へ器厚を一定に保ち、せり上がりを見せ、頸部は「く」の字状を呈し、坏底部はやや張りをもちながら立ち上がり、口唇付近で外反している。	口・裾一横ナデのあ 外 面一ミガキ 内 面一摩滅のあ とヘラナ デ 脚 部 内 面一輪積のあと とヘラナ デ	良好・砂粒・浅黄橙 灰白	100% P L 56-6
21	土師器 器環	A 19.0 B 16.5 C 15.8	裾部は反り返る様相を呈して脚部に至り、器厚をやや一定に保つ。脚部形は二等辺三角形で頸部へ移行している。頸部は「く」の字状で、底部は扁平を呈し、体部との間に稜をもち、坏部は朝顔状に開き、口唇部は丸味を帯びている。	口・裾一横ナデ 部内面一ヘラナデ 部外面一ヘラナデ 脚 部 外 面一ヘラミガ キ	良好・砂粒・にぶい橙	70% P L 57-1
22	土師器 器環	A 19.8 B (16.5) C 16.5	裾部はそり返る様相で器厚が薄く、脚部へ至る。脚柱部内側は歪みもち、頸部は「く」の字状を呈し、体部との間に稜をもつ。底部は扁平を呈し、坏体部は薄手で大きな開きをもち立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 坏 部 内 面一ナデ 坏 部 外 面一ヘラナデ 脚 部 内 面一ヘラナデ 脚 部 外 面一ヘラナデ (ヘラミガキ)	良好・砂粒・にぶい褐	ほぼ完形品 P L 57-2
23	土師器 器環	A 18.8 B 15.1 C 13.7	裾部から25度の勾配で器厚を増しながら脚柱部に至り、ややなだらかな円柱状を呈する。底部は器厚が厚く平坦で、坏体部はやや外反して立ち上がりを見せ、口唇部でさらに外反している。	口・裾一横ナデ 内 面一ヘラナデ 外 面一ナデ	良好・砂粒・橙にぶい橙	90% P L 57-3
24	土師器 器環	A 17.8 B 14.1 C 13.7	裾部先端は細く、脚部の器厚は下から頸部にかけて徐々に厚みをもつて行く。頸部は「く」の字状で坏体部の間に稜をもつ。坏底部は平坦で、坏の開きは朝顔状である。口唇部でやや外反している。	口一横ナデ 坏 部 内 面一摩滅気味の 坏 部 外 面一ナデ、ヘラ ナデ 脚 部 内 面一輪積の あと 脚 部 内 面一ナデ 脚 部 外 面一横ナ デ	普通・砂粒・橙にぶい橙	90% P L 57-4
25	土師器 器環	A 16.3 B 19.0 C 14.3	坏体部は直線的な開きを有し、口唇部でやや外反している。脚柱部は器厚を薄く流れるように裾部に至っている。底部は平坦で、頸部は「く」の字状を呈し、体部との間に稜をもつ。	口一横ナデ 坏 部 内 面一ヘラナデ 坏 部 外 面一ヘラナデ (ヘラケズリ) 脚 部 内 面一ナデ 脚 部 外 面一ヘラナ デ	良好・砂粒・明赤 褐	80% P L 57-5
26	土師器 器環	A 20.2 B 16.5 C 16.2	裾部は器厚を薄く脚柱部に移し、脚柱部は直線的である。頸部は「く」の字状を呈し、坏体部との間に稜をもち、底部は平坦である。坏部はやや直線的な朝顔状に開き、口唇部は丸味を帯びている。	口・裾一横ナデ 坏 部 内 面一ナデ 坏 部 外 面一ヘラナ デ 坏 部 外 面一ナデ ヘラナ 脚 部 外 面一ナ デ	良好・砂粒・にぶい橙	97% P L 57-6
27	土師器 器環	A 19.4 B 16.9 C 15.7	裾部はそり返る様相を呈して脚部に至り、器厚は薄く頸部に移行している。頸部は「く」の字状で体部との間に稜をもち、坏底部はやや平坦である。口縁部はやや外反して開き、口唇部でさらに外反を見ている。	一横ナデ 坏 部 内 面一ナデ 脚 部 内 面一ヘラナ デ 脚 部 外 面一ナ デ ヘラナ デ	良好・砂粒・にぶい橙 砂礫	100% P L 58-2
28	土師器 器環	A 19.4 B (15.7) C (14.8)	坏体部は直線的な開きをもち、口唇部で外反し、やや丸味を帯びている。器厚は薄く、底部は平坦で頸部は「く」の字状を呈している。脚柱部は円柱状で器厚の薄い裾部へと至っている。	口・裾一横ナデ 坏 部 内 面一ヘラナ デ 脚 部 外 面一ナ デ	良好・砂粒・橙	70% P L 58-1
29	土師器 器環	A 18.8 B (12.0)	裾部・脚部一部欠損。坏体部は大きく朝顔状に開き、口唇部で外反を見る。底部はやや平坦で頸部は「く」の字状を呈している。体部との間に稜を有している。脚部は器厚を有している。	口一横ナデ 内 面 > ミガキが摩滅 外 側	良好・砂粒・橙にぶい橙 スコリア	40% P L 58-3

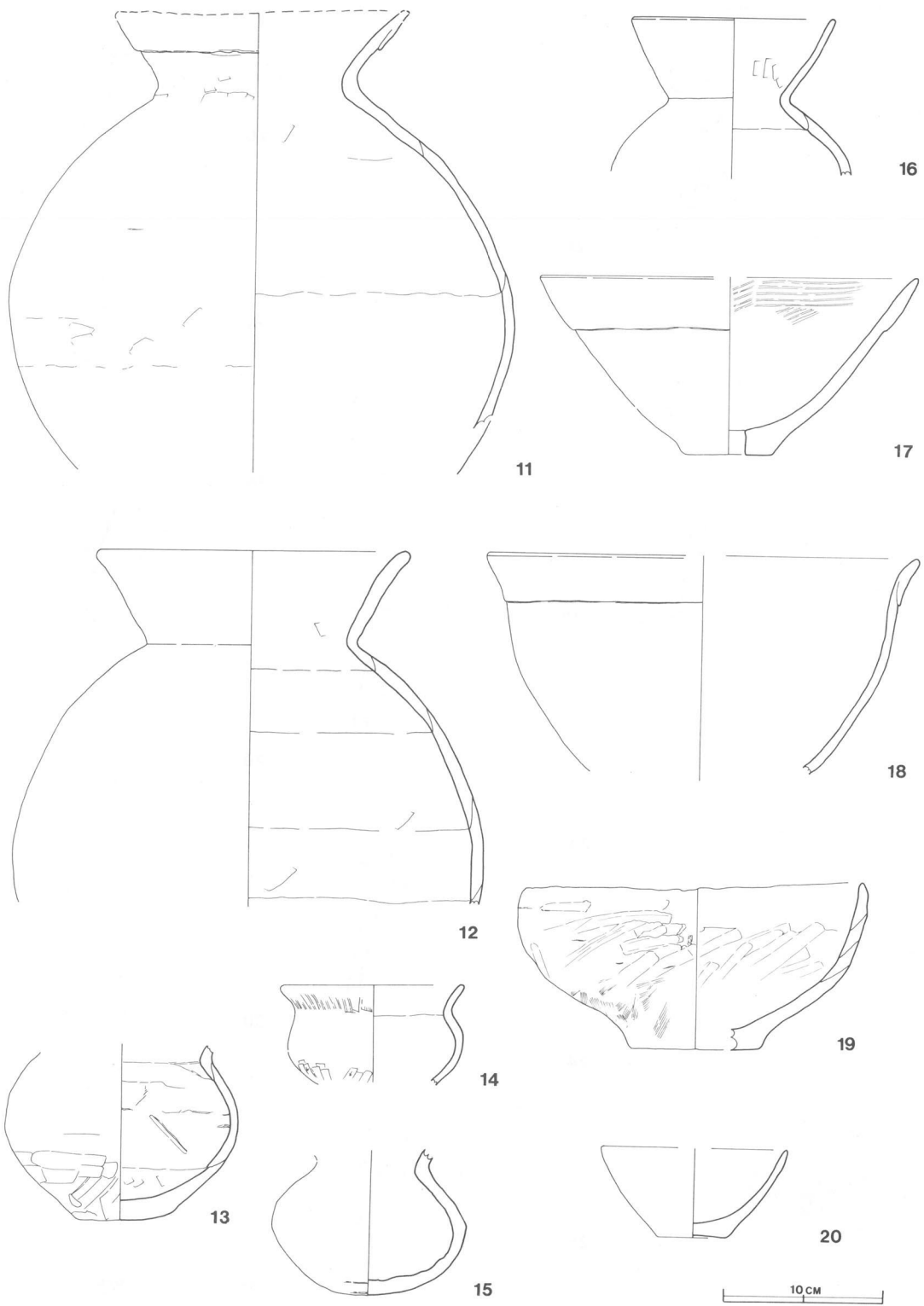
第33号住居跡 (第72図)



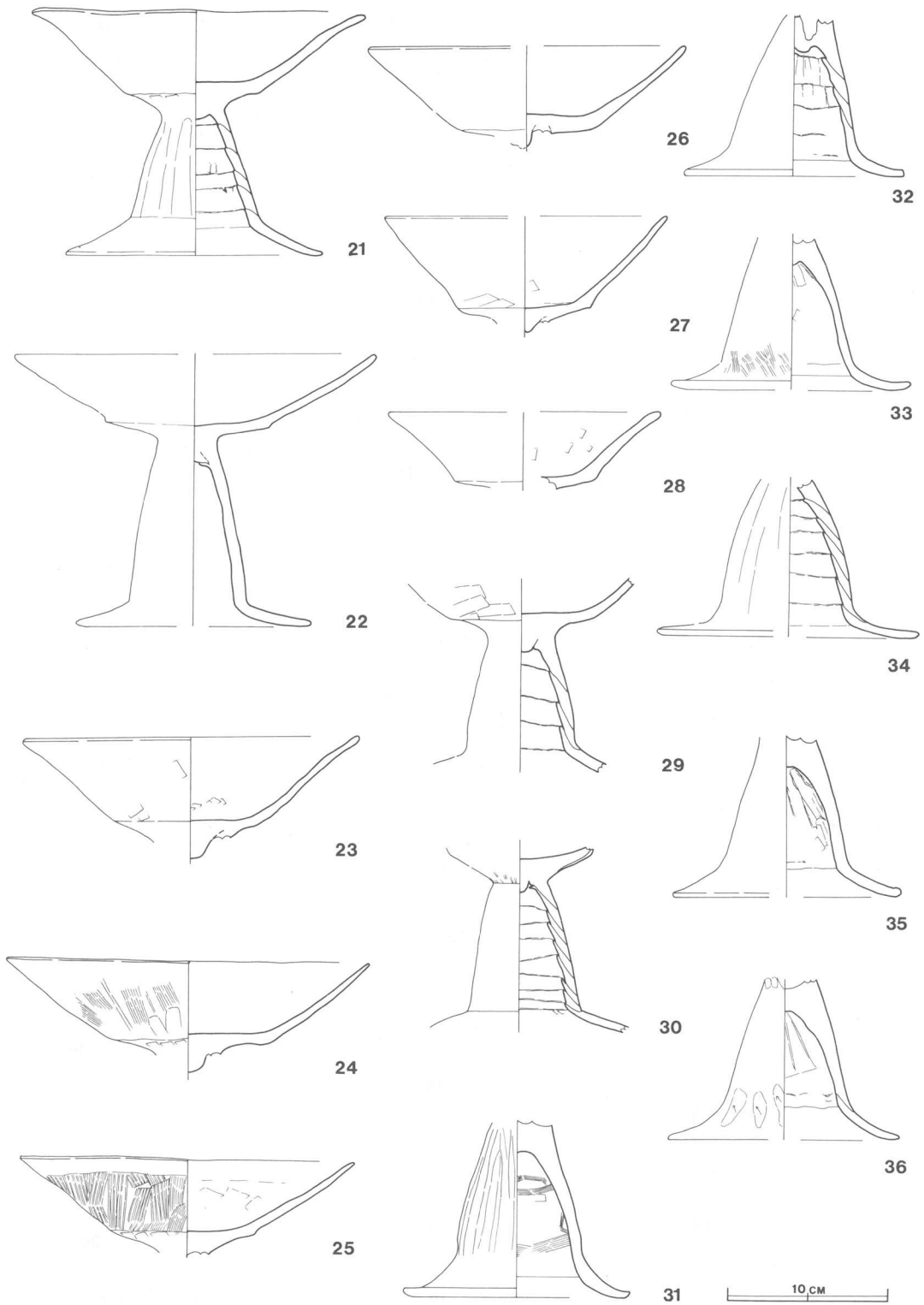
第72図 第33号住居跡実測図



第73图 第33号住居跡出土遺物実測図(1)



第74図 第33号住居跡出土遺物実測図(2)



第75図 第33号住居跡出土遺物実測図(3)

本住居跡はF4i5 調査区を中心に確認されたもので、本遺跡南部で第45号住居跡の南側に位置し、長軸方向はN-47°-Eを指す。規模は長軸7.52m・短軸5.8mで、隅丸方形を呈してはいるが、南西部は壁をはじめ住居跡の一部がエリア外となるため未調査である。壁高は15~35cmで、北東壁がやや高く、垂直に立ち上がってはいるが、保存状態は良好とはいえない。壁下にはU字形の壁溝がみられ、エリア外を除いて巡っている。床面は平坦で硬く踏み固められており、住居跡中央は特に硬さを増している。柱穴は3か所検出され、主柱穴と考えられる。径10cm内外で深さ38~43cmを測り、円筒形に掘り込まれている。なお、1か所の柱穴はエリア外に存在するものと思われる。

炉跡は3基確認され、F1はP<sub>2</sub>の西60cmの所に検出された。径42cmで、床面を12.5cmほど掘り窪めた地床炉で円形を呈す。炉床は暗褐色土で、ローム及びロームブロックが混入している。F2は規模が大きく、径80cmの円形で、床面を13.5cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床は暗褐色土で、焼土ブロック・ロームブロックが混入し、固くしまりを帯びている。F3はP<sub>3</sub>に近く、径52cmの円形で、床面を12cmほど掘り窪めた地床炉である。炉床はF2と同様暗赤褐色土で、焼土ブロック・ロームブロックが混入し、固くしまりを帯びている。

貯蔵穴は、本跡北コーナー・南コーナーに2基確認された。北コーナーの貯蔵穴は、径65cm・深さ17cmを測る円形を呈している。底面は平坦で、南壁はやや急傾斜をもち、北壁はなめらかに立ち上がっている。その覆土は暗褐色土・褐色土で、ロームブロック・ソフトロームが混入し、ややしまりを帯び、自然堆積している。南コーナーの貯蔵穴は、径85cm・最深部23cmを測り円形を呈し、底面は凹凸である。南壁は二段に立ち上がり、北壁はやや垂直に掘られている。覆土は暗褐色土・褐色土で、ロームブロック・ソフトロームブロックが少量混入し、ややしまりを帯びて自然堆積している。

本跡の覆土は、攪乱を受けているが大きく二層に分けられ、上層部が暗褐色土で、ローム粒子・ソフトローム・ロームブロックが少量と焼土粒子を少量混入している。下層部では同色調でローム粒子が多く、またソフトロームブロック・ロームブロックが極少量混入し、しまりを帯びている。遺物は、土師式土器片が多量に出土している。

出土遺物解説表

SI-33

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (18.0)	口縁部は器厚を一定にし外反しながら立ち上がり、口唇部では丸味をもちさらに外反を見る。胴部は弧を描くように中位へと移行しており、中位で最大径を測る。底部欠損。	口一横ナデ 内面>ナデ 外面	普通・砂粒にぶい橙にぶい黄橙	口縁部90%
2	土師器 壺	A 16.1 B (18.8)	口縁部は器厚を厚く保ち、頸部から外反をみせ、口唇部でさらに外反し丸味を有している。胴部は薄手の器厚でゆるやかな弧を描いている。中位で最大径を測る。底部欠損。	口一横ナデ ハケ目調整 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	軟弱・砂粒にぶい砂礫にぶい黄橙	40% P.L.58-4



番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	土師器	A(16.8) B(18.2)	頸部はやや直立をみて口縁部は大きく外反し、口唇部は丸味を帯びている。胴部は器厚を一定に保ち、胴部の肩から弧を描くよう最大径を測る中位へと移行している。底部・胴部下位欠損。	口—横ナデ 内面—輪積のあとへ 外面—ハケ目 ナデ (摩滅気味)	普通・砂粒・にぶ スコ リア い橙	40%
4	土師器	A 16.8	頸部はくびれ、口縁部は器厚を厚くし、外反して口唇部に至っている。口唇部端はやや丸味を帯びている。胴部の肩はなで肩で中位へと移行している器厚は一定。	口—横ナデ 内面>へラナデ 外面—へラナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リア い橙 灰褐	口縁部 100%
5	土師器	A 13.4	口縁部は頸部から外反しながら立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。胴部はなで肩で最大径をもつ中位に向っており、器厚は一定に保っている。底部欠損。	口—横ナデ 内面—輪積痕 外面—ナデ (摩滅気味)	普通・砂粒・にぶ い橙 にぶ い橙 い黄 橙	口縁部 100% 全 体40%
6	土師器	A(17.5) B(9.0)	口縁部は直線的に外反し、口唇部はさらに外反し丸味を帯びている。頸部は「く」の字状を呈しており、胴部は器厚を一定に保ち、中位へ移行している。胴部中位から底部にかけて欠損。	口—横ナデ 内面>へラナデ 外面—へラナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リア い赤 褐 灰褐	口縁部18%
7	土師器	A(16.4) B(8.2)	口縁部は胴部より器厚を有し外反し、口唇部は丸味を帯びている。頸部は「く」の字状を呈し、胴部の器厚は薄くなで肩である。胴部中位から底部は欠損。	口—横ナデ 内面—輪積痕の あと ナデ 外面—ナデ	普通・砂粒・にぶ い赤 褐 にぶ い橙	30%
8	土師器 小型壺	B 7.8 C(3.4)	底部は平底で厚手の器厚をもち、体部は薄手で半円形状を呈し、中位からはやや垂直きみに器厚を有する頸部に至っている。口縁部、欠損。	内面—へラナデ 外面—ナデ 頸部—ハケ目	良好・砂粒・橙 (少) スコ リア (少)	40%
9	土師器 壺	A(17.4) B(5.7)	口縁部は下位で稜をもち、中位から大きく外反し、口唇部でさらに外反し丸味を帯びている。折り返し口縁をもつ。	口—横ナデ 内面>横ナデ 外面—ハケ目調整	良好・砂粒・にぶ い橙	口縁部10%
10	土師器 壺	A 17.0 B 16.0	頸部に凸部を有し「く」の字状を呈する。口縁部は直線的に外反している。口唇部はさらに外反し丸味を帯びている。胴部は器厚を一定にし、なだらかに中位へと移行している。	口—横ナデ 内面—へラナデ 外面—ハケ目 へラナデ	良好・砂粒・赤 スコ リア 明赤 褐	50% (口縁部98%) P L 58—5
11	土師器 壺	A(18.3) B(28.5)	器厚を厚手にもち「く」の字状の頸部から直線的に外反し、口唇部で器厚を減じた折返し口縁を形づくっている。胴部の器厚は薄手で一定し、大きく弧を描いている。中位で最大径を測る。底部欠損。	口—横ナデ 内面—へラナデ 外面—へラナデ へラミガキ	普通・砂粒・橙 灰褐 黒褐	口縁部 90%(30%) P L 58—6
12	土師器 壺	A 19.5 B 21.8	頸部は器厚を減じ「く」の字状で、口縁部は口唇部に移行するにしたがって器厚を増して外反を見る。胴部は弧を描く様相で最大径をもつ中位に向かう。底部欠損。	口—横ナデ 内面—へラナデ 外面—へラミガキ	普通・砂粒・灰 にぶ い赤 褐 明赤 褐 黒褐	30% (口縁部80%)
13	土師器 壺	B(10.9) C 5.8	底部平坦で器厚は厚手であり、胴部はほぼ球形状で、器厚はやや薄手である。口縁部は欠損。	口—横ナデ 内面—へラナデ 外面—へラケズリ	良好・砂粒・赤 にぶ い褐	口縁部欠損 P L 59—1
14	土師器 埴	A 11.5 B(5.3)	底部欠損。胴部は器厚を一定に保ち、ゆるやかな曲線をもち、頸部に移行し口縁部にかけて外反を見せている。口唇部は丸味をもちさらに外反をしている。	口—ハケ目あと横 ナデ 内面—摩滅気味 外面—ナデ へラナデ	良好・砂粒・にぶ い褐	口縁部50%
15	土師器 罎	B(8.6)	底部丸味を帯びて内側は凸凹状である。胴部は大きく張り出し、中位で頸部にかけて内彎している。口縁部欠損。	内面—へラナデ 外面—へラミガキ	良好・砂粒・明 (少) 橙 褐 灰	80% (口縁部欠損) P L 59—2
16	土師器 罎	A 12.3	口縁部はやや直線的に開きをみせ、口唇部は丸味を有している。頸部は「く」の字状を呈しており、体部は中位に向かつて張り出している。	口—横ナデ 内面—へラナデ 外面—ナデ (摩滅気味)	普通・砂粒・橙 スコ リア にぶ い橙	口縁部 100%
17	土師器 甌	A(23.3) B(11.1) C(5.4)	底部に孔を有し厚手の器厚を有して、体部は直線的な広がりを見せて立ち上る。口縁は折り返しで、口唇部はやや尖がりを有している。	口—横ナデ ハケ目あり 内面—へラナデ 外面—摩滅気味	良好・砂粒・にぶ スコ リア い橙	40%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
18	土師器 甌	A (26.7) B (13.5)	体部はゆるやかに内彎し、口縁部は緩やかに外反して折り返し口縁をもつ。 器厚は一定である。 底部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	良好・砂粒・にぶ い橙 にぶ い褐	20%
19	土師器 鉢	A 21.0 B 10.5	底部から体部にかけて大きく張り出し、中位からやや垂直に立ち上がる。 口唇部は尖がりを見せて内彎している。	内面一指ナデ 外面一ヘラナデ ハケ目	普通・砂粒・にぶ (少)い橙 スコリア 褐灰 (大粒少)	40% P L 59- 3
20	土師器 小型 壺	B 5.6 C 4.3	底部あげ底でやや厚手の器厚を有している。 体部は器厚を減しながら、ゆるやかな弧を描いている。 口唇部で内彎し丸味を帯びている。	内面 外面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	20%
21	土師器 高 環	A 20.7 B 15.3 C 15.8	裾部は27度の勾配を有して脚部に移行している。 脚部は直線的で円すい形を呈し、内側は輪積痕を有している。頸部は「く」の字状を呈し体部との間に稜をもつ。環底部は平坦で、口縁は大きく広がり、口唇部付近で外反を見せ、丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ナデ 環部外面一ヘラナデ 脚部外面一ミガキが 摩滅	良好・砂粒・赤褐 にぶ い橙	80% P L 59- 4
22	土師器 高 環	A (22.5) B 16.9 C 14.6	全体的に器厚は薄手で直線的に大きく開き、口唇部でやや内彎を見る。環体部は平坦で、頸は「く」の字状を呈し、体部との間に稜をもつ。脚部は円柱状で裾部に移行し大きなひろがりを見せ先端部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ナデ 環部外面一ヘラナデ 脚部外面一ヘラミガキ 摩滅気味	軟弱・砂粒・浅黄 スコ リヤ (少)	30% P L 59- 5
23	土師器 高 環	A 20.9 B 7.6	環底部は平坦で器厚を減じ朝顔状に開いており、口唇部でやや外反を見せている。 底部は扁平である。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一横ナデ	良好・砂粒・橙	環部60% P L 59- 6
24	土師器 高 環	A 22.4 B ( 6.3)	環底部は平坦で、器厚を減しながらやや内彎する形で口縁、口唇部へと移行する。 口唇部は尖がりを見せている。体部と頸部の間に稜をもつ。 脚部・裾部欠損。	口一横ナデ 内面一ナデのあと摩 滅 外面一ハケ目調整の あとヘラナデ	良好・砂粒・明赤 褐 橙	環部97% P L 60- 1
25	土師器 高 環	A 20.7 B ( 6.0)	環体部は朝顔状でやや内彎する形で広がり、口唇部は尖がりを見せ、器厚を減じている。 底部は平坦で、体部と頸部の間に稜をもつ。 脚部・裾部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ハケ目調整 ヘラナデ	良好・砂粒・にぶ い橙 褐灰	環部90% P L 60- 2
26	土師器 高 環	A 19.8 B ( 6.4)	環部は大きく朝顔状に広がり、口縁部で器厚を減じ、口唇部では丸味を帯びやや内彎を見せている。 底部は平坦で器厚を有している。	口一横ナデ 内面一摩滅	良好・砂粒・橙 スコ リヤ	環部50% P L 60- 3
27	土師器 高 環	A (17.6) B ( 6.7)	環体部の器厚は薄手で、直線的に大きな広がりを見せている。口唇部は丸味を帯びている。底部は扁平で、頸部と体部の間に稜を有している。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い橙	環部20%
28	土師器 高 環	A 16.9 B ( 4.8)	脚部・裾部欠損。 環体部は大きく外反しながら広がりを見せ、口唇部は丸味を帯び、さらに外反を見せている。 器厚は一定を保っている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ ナデ	良好・砂粒・橙 一部 黒色	環部80% P L 60- 4
29	土師器 高 環	B (12.0)	裾部・環部一部欠損。 脚部はやや曲線を持ち、円柱状を呈している。 内側はやや凸凹状である。「く」の字状である。 環底部は平坦で、頸部は「く」の字状である。	環部外面一ヘラナデ 脚部外面一ヘラミガ キ (摩滅気味)	良好・砂粒・橙 明赤 褐	40%
30	土師器 高 環	B (11.1)	脚部は円柱状で直線的で裾部へと移行している。 裾部は器厚を減じ、外下方へ広がりを見せている。	脚部外面一ナデ 裾一横ナデ	やや・砂粒・褐灰 軟弱 スコ リヤ にぶ い赤 褐	脚部60%
31	土師器 高 環	B (10.9) C 14.0	環部欠損。 脚部は大きく広がり、円すい状を呈し、しっかりとしている。 裾部は器厚を厚くもちゆるやかに外下方へ伸び、先端は丸味を帯びそり返っている。	内面一ハケナデのあ とヘラナデ 外面一ヘラミガキ 裾一横ナデ	良好・砂粒・にぶ い橙 橙	脚部50%
32	土師器 高 環	B (10.0) C 13.5	脚部はやや垂直直みで、内側の整形は凸凹であり、裾部は割合い広く開き、先端部は丸味を見せている。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ (摩滅している) 裾一横ナデ	良好・砂粒・明黄 スコ リヤ	脚部70%

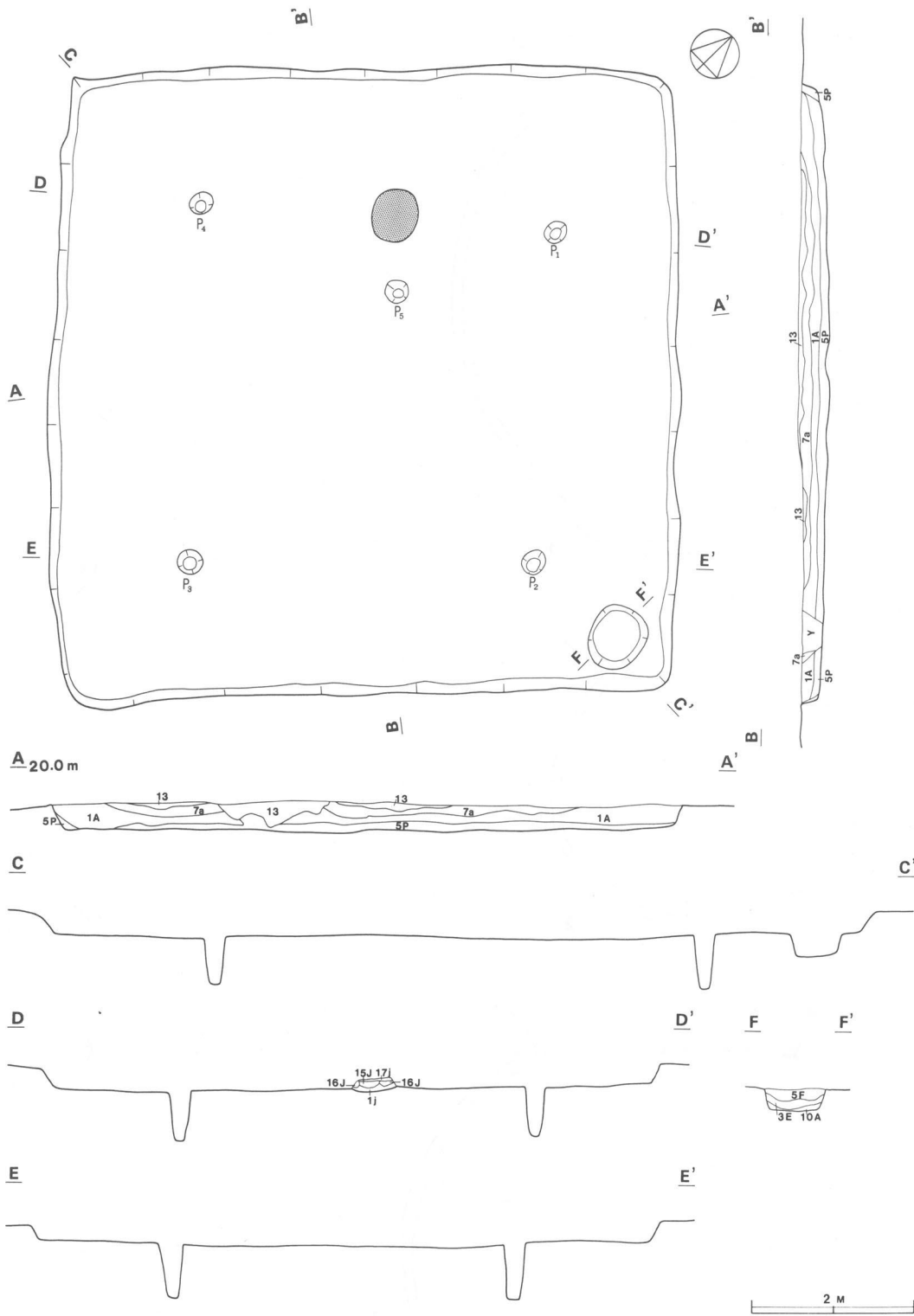
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
33	土師器環	C (14.8)	脚部は器厚を薄く保ち、ほぼ直線的で円錐形を呈している。裾部はそり返る様相で、先端は丸味を帯びている。	内面—ヘラナデ 外面—ナデ ハケ目調整 裾—横ナデ	普通・砂粒・橙 灰褐色	脚部50%
34	土師器環	B (9.8) C (16.2)	脚部はゆるやかに弧を描く様で厚手の器厚を有し、やや円錐形と見られる。内面は輪痕を有している。裾部は器厚を減じ大きな広がりを見せ、先端部は丸味を帯びている。	内面—ヘラナデ 外面—ナデ 裾—横ナデ	やや・砂粒・いぶ 軟弱 スコ リア (少) いぶ 黄 橙	脚部60%
35	土師器環	A (9.9) B (14.1)	脚部は器厚を一定にし、やや膨らみもち裾部に至っている。裾部はやや器厚を減じ先端はそり返って丸味を帯びている。	内面—ヘラナデ 裾—横ナデ	良好・砂粒・明赤 褐色 橙	脚部70%
36	土師器環	A 14.4 B (10.0)	脚部は円錐状で、器厚を一定に保ち裾部へと移行し、裾部で器厚をやや減じて広がりを見せている。先端は丸味を帯びている。環部の底部は器厚を増していると思われる。	外面—ヘラオサエ ナデ ヘラケズリ 裾—横ナデ	良好・砂粒・橙	脚部70%

### 第34号住居跡（第76図）

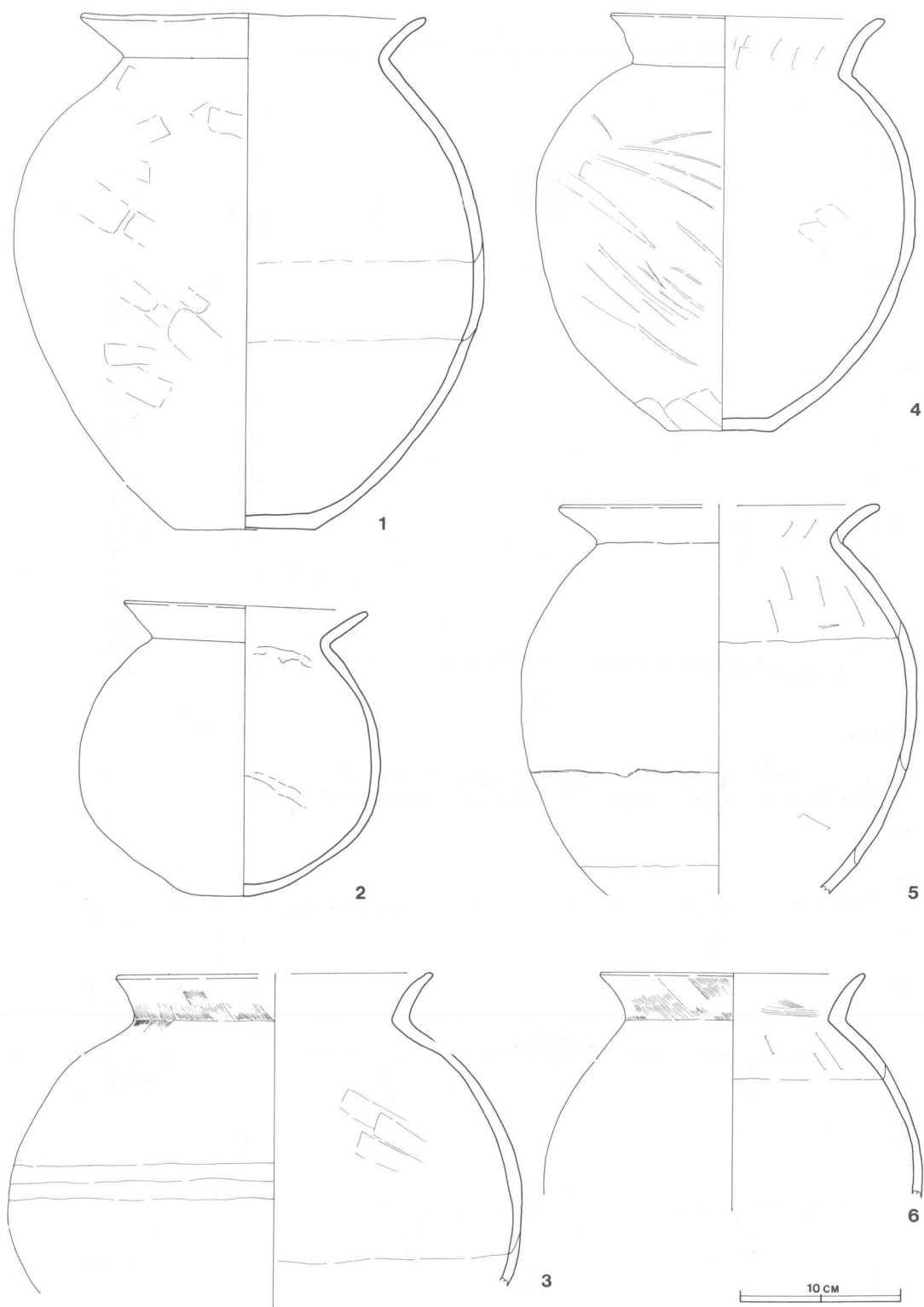
本住居跡はF4j<sub>8</sub>・j<sub>9</sub>・G4a<sub>8</sub>・a<sub>9</sub> 調査区を中心に確認されたもので、第33号住居跡の東側に位置している。長軸方向はN-46°Wを指し、規模は長軸7.70m・短軸7.64m・面積58.82㎡を測る。平面形は隅丸方形を呈している。壁高は20～25cmで、壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、遺存状態は良好とはいえない。本跡の覆土は上層部が灰褐色を呈した黒褐色土、中層部は黒褐色土、下層部は暗褐色土である。床面は平坦で、やや軟らかなロームである。柱穴は5か所検出され、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は支柱穴と思われる。それぞれの径はおよそ30cm内外で、深さは60～69cmを測り、ほぼ円筒形に掘られている。

炉跡は、北西壁に近い個所に検出され、径60cm・深さ35cmの円形を呈している。多量の焼土を含む暗赤褐色土・暗褐色土である。炉床は固く焼けている。

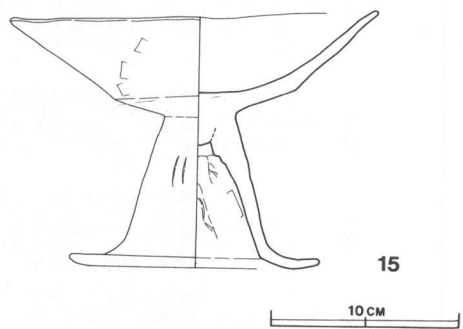
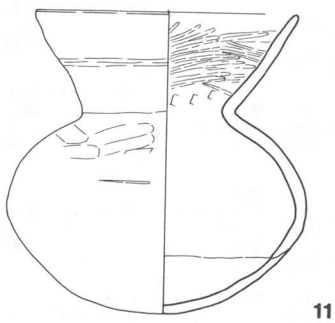
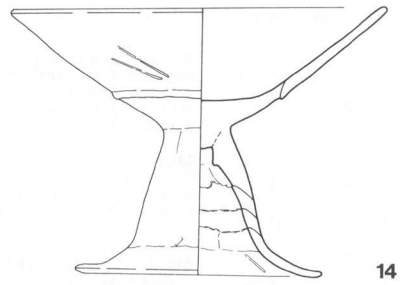
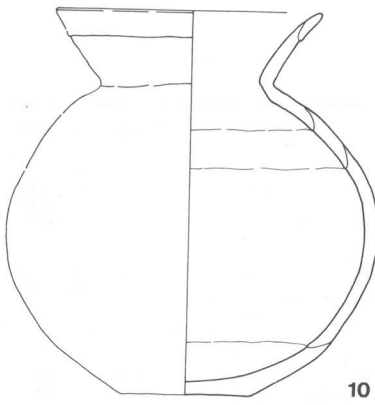
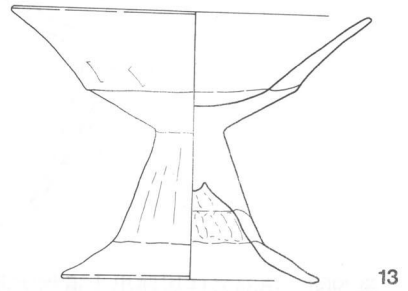
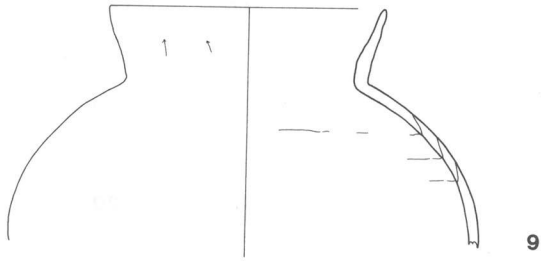
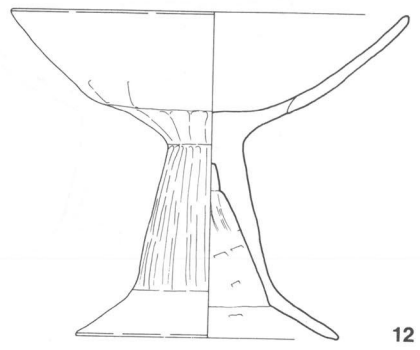
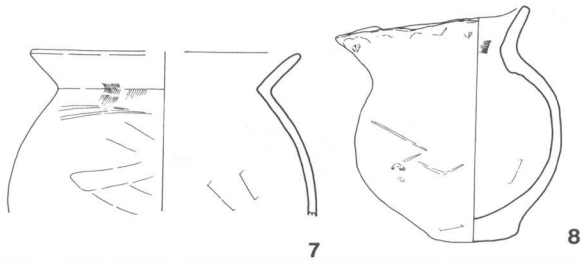
貯蔵穴は東壁コーナー部に検出され、長径80cm・短径75cmでほぼ円形を呈し、深さは28cmを測り、底面はしまりを帯びている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、貯蔵穴の断面はU字形を呈している。その覆土は褐色土・明褐色土が自然堆積し、焼土粒子・ソフトロームブロック・ロームブロック・ローム粒子等が混入し、しまりを帯びている。遺物は、土師式土器片及び完形品の出土を見た。



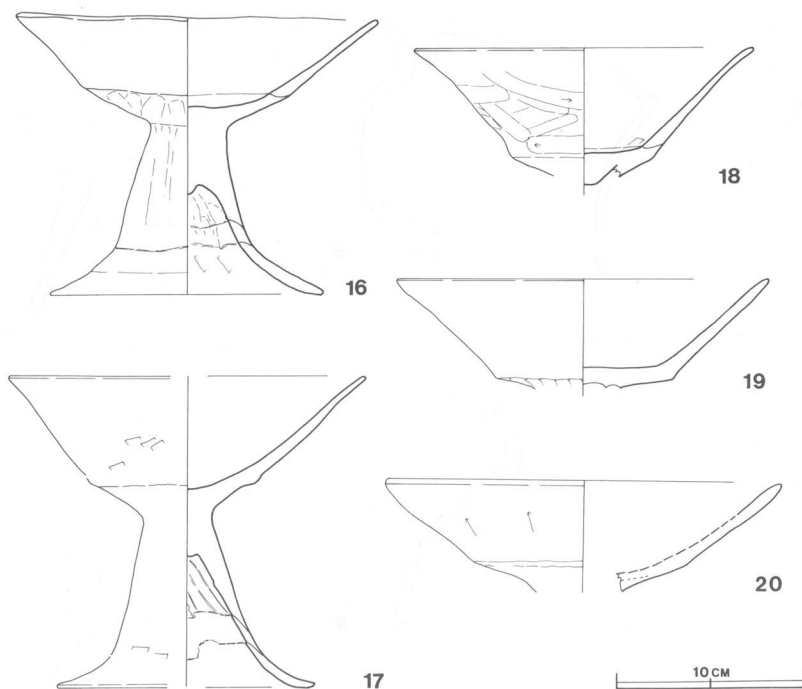
第76図 第34号住居跡実測図



第77図 第34号住居跡出土遺物実測図(1)



第78図 第34号住居跡出土遺物実測図(2)



第79図 第34号住居跡出土遺物実測図(3)

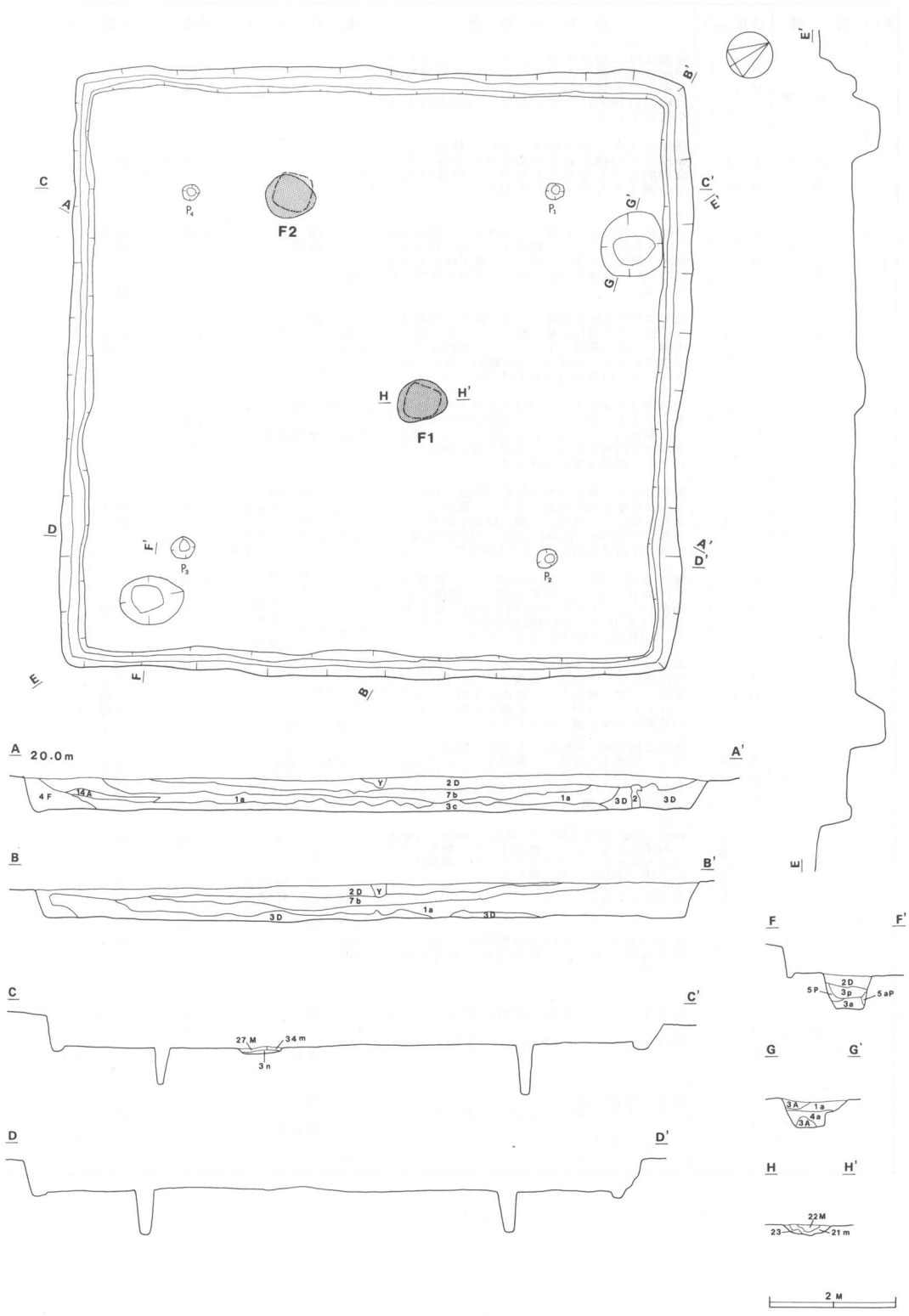
出土遺物解説表

SI-34

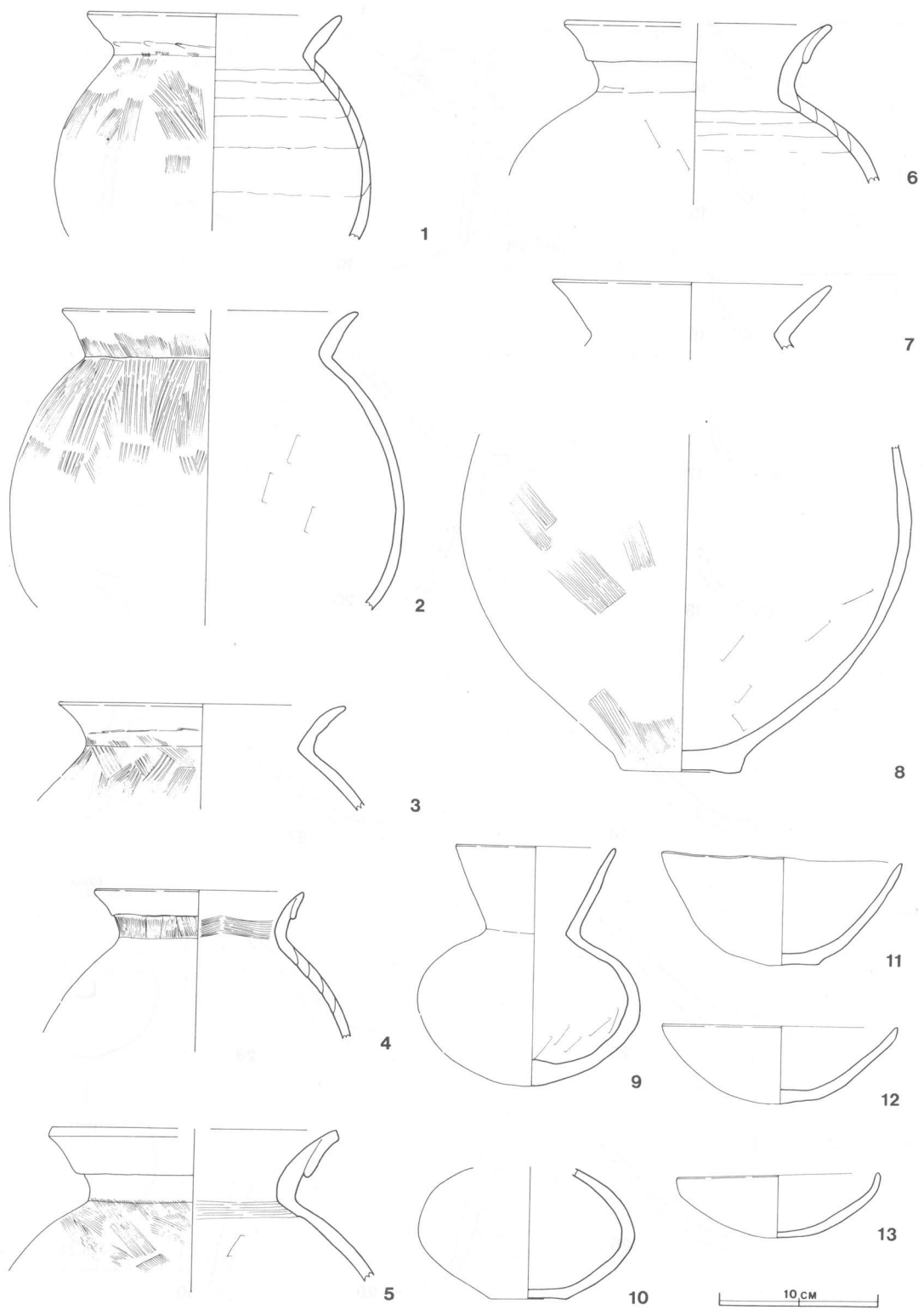
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器	A 21.3 B 32.0 C ( 8.6)	全体的に器厚は薄手で、底部は扁平である。胴部は弧を描く様相で中位で最大径を測っている。頸部は「く」の字状を呈し大きく外反しており、さらに口唇部で外反を見せ丸味を帯びている。	口一横ナデ 外面一ヘラケズリ	良好・砂粒・にぶ スコ リア 赤灰 褐灰	80% P L 60-5
2	土師器	A (15.0) B (17.9)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は直線的で大きく外反している。胴部はやや器厚を減じながら、半円状で最大径を測る中位へ向い、さらに平坦な底部へと移行する。	口一横ナデ 体内内一ヘラナデ 外一横ナデ ヘラミガキ 下位一ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶ 砂礫 スコ リア 雲母	80% P L 61-1
3	土師器	A 19.7 B (19.6)	頸部から口縁部は直線的に外反し、口唇部で器厚を減じながらさらに外反を見せている。胴部は内彎しながら最大径を測る中位へと移行する。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ (輪積あり)	普通・砂粒・明赤 スコ リア にぶ 褐	50% P L 61-2
4	土師器	A 17.0 B 25.8 C 6.6	口縁部はやや直線的に外反し、口唇部付近でさらに外反を見ている。胴部は緩やかに張り、中位で最大径を測り、底部へ移行している。底部は平坦で、器厚は一定に保たれている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ 黄 橙 灰褐	90% P L 60-6
5	土師器	A (19.9) B (24.1)	底部欠損。胴部は器厚を一定に保ち弧を描く状況を呈し、中位で最大径を測る。頸部は「く」の字状を呈し、口縁は大きく外反し、口唇部でさらに外反をみ、丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	良好・砂粒・明赤 褐 にぶ い橙	40% P L 61-3
6	土師器	A 16.5 B 16.9	頸部から口縁にかけて器厚を減じながら口唇部に至り、やや尖がりを見せている。胴部上位はやや器厚を有し、中位に下るほど減じている。中位で最大径を測る。底部・胴部一部欠損。	口一横ナデ (ハケ目あり) 内面一ヘラナデ 摩滅 外面一ナデ	普通・砂粒・褐灰 にぶ い橙	口縁部 100% 全体 30%
7	土師器	A (14.0) B ( 8.7)	器厚は薄手で、頸部は「く」の字状を呈し口縁部は直線的に外反し、口唇部は丸味を帯びている。胴部の肩はなで肩になっている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ (摩滅気味) 外面一ヘラケズリ	良好・砂粒・にぶ スコ リア い橙	30%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	土師器 小型甕	A 10.4 B (12.6) C 4.4	底部は厚い器厚を有し、ややせり上がりで胴部は割合張りの少ない弧を描き器厚を増し頸部へと移行している。口縁は直線的に外反を見せ、口唇部は丸味を帯びている。	内面—ヘラナデ	普通・砂粒・橙	100% P L 61— 4
9	土師器 壺	A 14.7 B 12.7	胴部は大きく弧を描き、中位へ移行する。頸部から口縁にわたり器厚をやや厚くもち、直線的な立ち上がりを見せ、口唇部付近はやや薄手となり尖がりを見せている。	外面—ヘラナデ	普通・砂粒・橙 砂礫 (少)	口縁部60%
10	土師器 壺	A (14.0) B 20.4 C 7.0	口縁部は折り返し口縁で、口唇はやや器厚を減じ丸味を帯びている。頸部は「く」の字状を呈し胴部は頸部から大きく張り出し最大径をもつ中位に至り、器厚を一定に保ち、平坦な底部に移行する。	口—横ナデ 内面—輪積のあと ナデ 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・明赤 スコ リア にぶ い 赤 褐	70% P L 62— 1
11	土師器 罌	A 13.8 B 16.0	底部はやや丸底で器厚を一定に保ち、胴部は大きく張り出す様相で最大径をもつ中位へ向かい内彎しながら頸部に至っている。頸部は「く」の字状を呈し、口縁はやや直線的な広がりを見せている。口唇部は丸味を帯びている。	口—横ナデ 内面—ミガキ 外面—ヘラナデ ヘラケズリの あとナデ	良好・砂粒・にぶ い 橙	95% P L 62— 2
12	土師器 器環	A 20.8 B 17.3 C 13.8	口唇部は丸味をもち、坯体部はゆるやかな弧をもって大きく開いている。底部はやや平坦である。頸部は「く」の字状を呈している。脚部は直線的で円錐形を呈し、器厚を減じ裾部へと移行する。裾部先端も丸味を帯びている。	口・裾—横ナデ 内面—摩滅剝落 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・ スコ リア	90% P L 62— 4
13	土師器 器環	A 19.2 B 14.2 C 13.6	裾部は大きく開き32度の勾配で脚部に移行し、脚部は器厚を増し円錐状である。頸部は「く」の字状を呈し、坯体部との間に鮮明な稜をもつ。底部はやや平坦、環口縁は外反して広がりを見せ、口唇部は器厚を減じて丸味を帯びている。	口・裾—横ナデ 坯体内側—摩滅気味 外側—ヘラナデ 脚部外側—ミガキ のあと摩滅	良好・砂粒・明赤 スコ リア	98% P L 62— 5
14	土師器 器環	A 19.8 B 14.4 C 13.0	裾部は広く開き、器厚は薄手で、脚部はやや円錐状を呈し、器厚を増して頸部に至る。頸部は「く」の字状で坯体部の間に稜を有し、底部は平坦で、環口縁は朝顔状に立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。	口・裾—横ナデ 坯体内側—ミガキが 摩滅 脚部外側—ミガキが 摩滅	良好・砂粒・赤 スコ にぶ い 橙	97% P L 62— 6
15	土師器 器環	A 19.5 B 13.8 C 13.2	裾部はせりかえる様相で、脚部はやや直線的で円錐状を呈している。頸部は「く」の字状で、坯体部との間に稜をもち、底部は平坦であるが凹凸状をもつ。坯部はやや直線的で開きをもち、口唇部は器厚を減じ外反を見る。	口—横ナデ 坯体内側—摩滅している 外側—ヘラナデ 脚部内側—ミガキが 外側—ナデ 裾—横ナデ	普通・砂粒・橙 スコ にぶ い 橙 黒褐	90% P L 63— 1
16	土師器 器環	A 19.1 B 15.0 C 14.3	裾部は約30度の勾配をもち型良く脚部にせり上がる。脚部は円柱状で、頸部は「く」の字状を呈する。底部はやや平坦を見せている。坯体部と頸部との間に稜をもち、環口縁は薄手の器厚で直線的に大きく開いている。口唇部は丸味を帯びている。	口—横ナデ ツキ部内側—摩滅 外側—摩滅気味 ヘラケズリ 脚部内側—ヘラナデ 外側—ミガキが摩滅	良好・砂粒・明赤 褐 赤	90% P L 63— 2
17	土師器 器環	A 18.7 (推) B 16.4 C 13.5 (推)	脚部・裾部の器厚は薄手で、脚部は円錐状で内側面に輪積痕が見られる。裾部は大きく開き、先端部は丸味をもち、ややせり上がる。頸部は「く」の字状で体部との間に稜をもつ。底部はやや平坦で、坯体部は大きく開き、口唇部で外反を見せている。	口—横ナデ 外側—ヘラナデ ナデ 外側—摩滅気味 脚部内側—輪積あり	普通・砂粒・橙 にぶ い 赤 褐	80% P L 61— 6
18	土師器 器環	A 17.8 B ( 6.8)	底部は扁平で、坯体部は朝顔状に開き、器厚を極端に減じ、口唇部付近で外反を見せている。	口—横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—ヘラミガキ ヘラナデ	良好・砂粒・赤 スコ リア	坯部90% P L 61— 6
19	土師器 器環	A 19.8 B ( 6.0)	底部平坦で、坯体部は直線的な広がりを見せている。器厚は一定で、口唇部はやや先細である。	口—横ナデ 内面—摩滅 外面	やや・砂粒・にぶ 軟弱 スコ い 橙 リア	坯部90% P L 61— 5
20	土師器 器環	A 21.1	脚部・裾部欠損。坯部は大きく開き、器厚は一定である。口唇部は丸味をもっている。	口—横ナデ 内面—摩滅剝落 外面—ヘラナデ	やや・砂粒・橙 軟弱	坯部80% P L 623

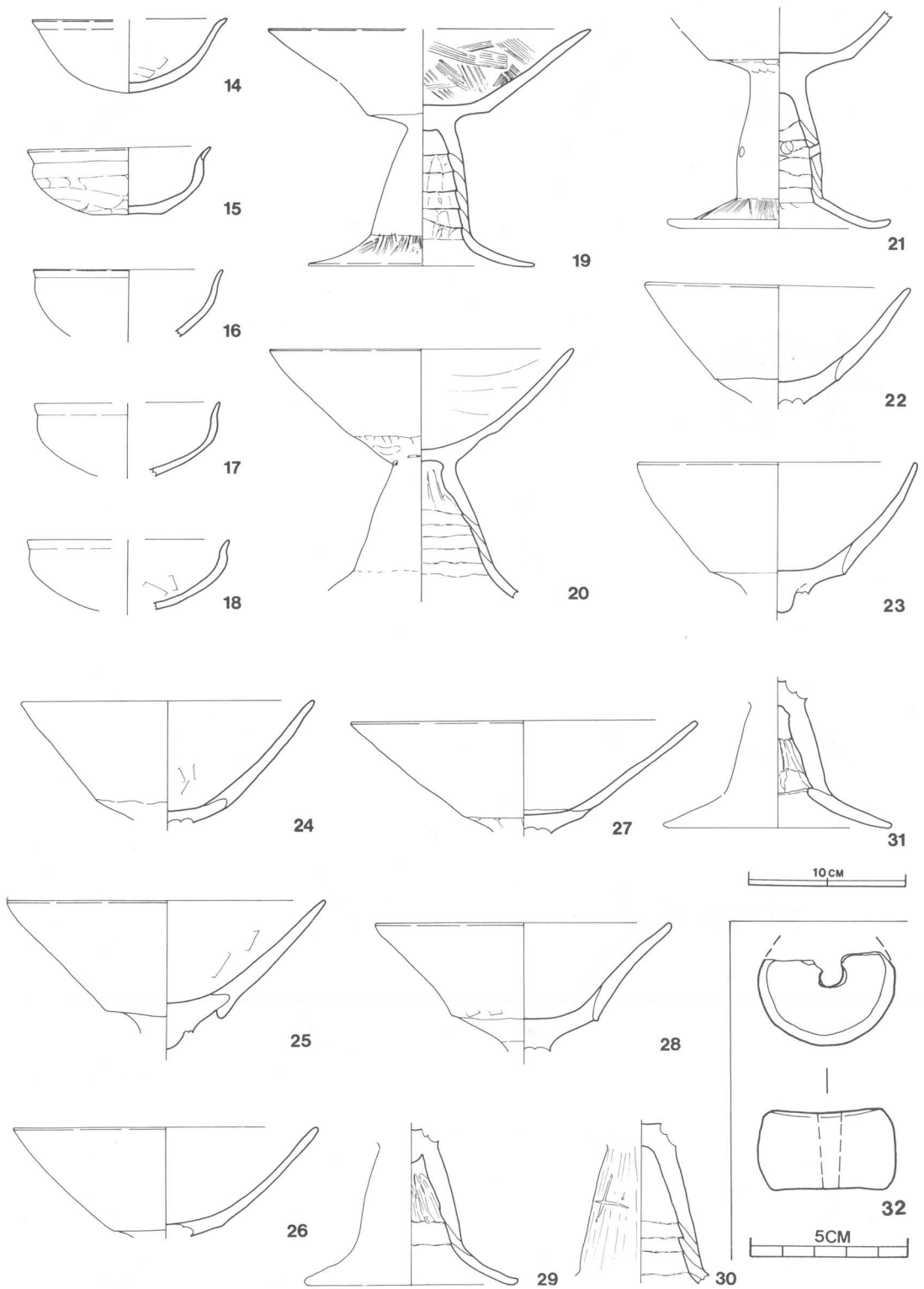




第80图 第35号住居跡実測図



第81图 第35号住居跡出土遺物実測図(1)



第82图 第35号住居跡出土遺物実測図(2)

本住居跡はF5<sub>eg</sub>・f<sub>g</sub>調査区を中心に確認されたもので、第40号住居跡の東側隣に位置し、長軸方向はN-31°-Eを指す。規模は長軸9.6m・短軸9.42m・面積90.43㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は40~45cmで、垂直に立ち上がっている。床面はやや軟弱である。柱穴は4か所検出され、支柱穴と思われる。それぞれ平面形は円形で、径30cm内外を有する。深さは58~80cmを測り、円筒形に掘り込まれている。

本跡の炉跡は2か所検出され、それらをF1号・F2号とした。本跡中心からやや東側にF1号が、北西壁付近にF2号が検出されている。F1号は74cm程の径をもち、床面を16cm程掘り窪めた地床炉で、平面形は円形を呈している。炉内の覆土は焼土ブロック・焼土粒子を混入している。炉床は硬く凹凸状である。F2号は68cm程の径をもち、床面を10cmあまり掘り窪めた地床炉で、F1号同様平面形は円形を呈している。色調は赤褐色土系で、焼土粒子・焼土ブロックが混入している。炉床は焼けたロームである。

貯蔵穴は、北壁近くと南壁コーナーに検出された。北壁に近い貯蔵穴は径100cm・深さ42cmを測る円形を呈し、覆土は褐色土・暗褐色土で、ローム粒子等が混入している。南東壁面は外反して立ち上がり、北西は二段に立ち上がっている。床面は平坦で、ややしまりを帯びている。南壁コーナーの貯蔵穴は径78cm・深さ55cmを測り、やや円形を呈している。その覆土は褐色土・暗褐色土の色調をもち、ローム粒子・炭化粒子が混入している。壁面はやや垂直に立ち上がり、貯蔵穴の断面はU字形を呈している。床面は平坦でややしまりを帯びている。

本跡の覆土は、上層部で暗褐色土、中層部には黒褐色土・暗褐色土、下層部には褐色土が自然堆積しており、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・ロームブロックが少量混入している。遺物は、土師土器片が出土している。

出土遺物解説表

SI-35

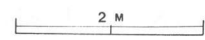
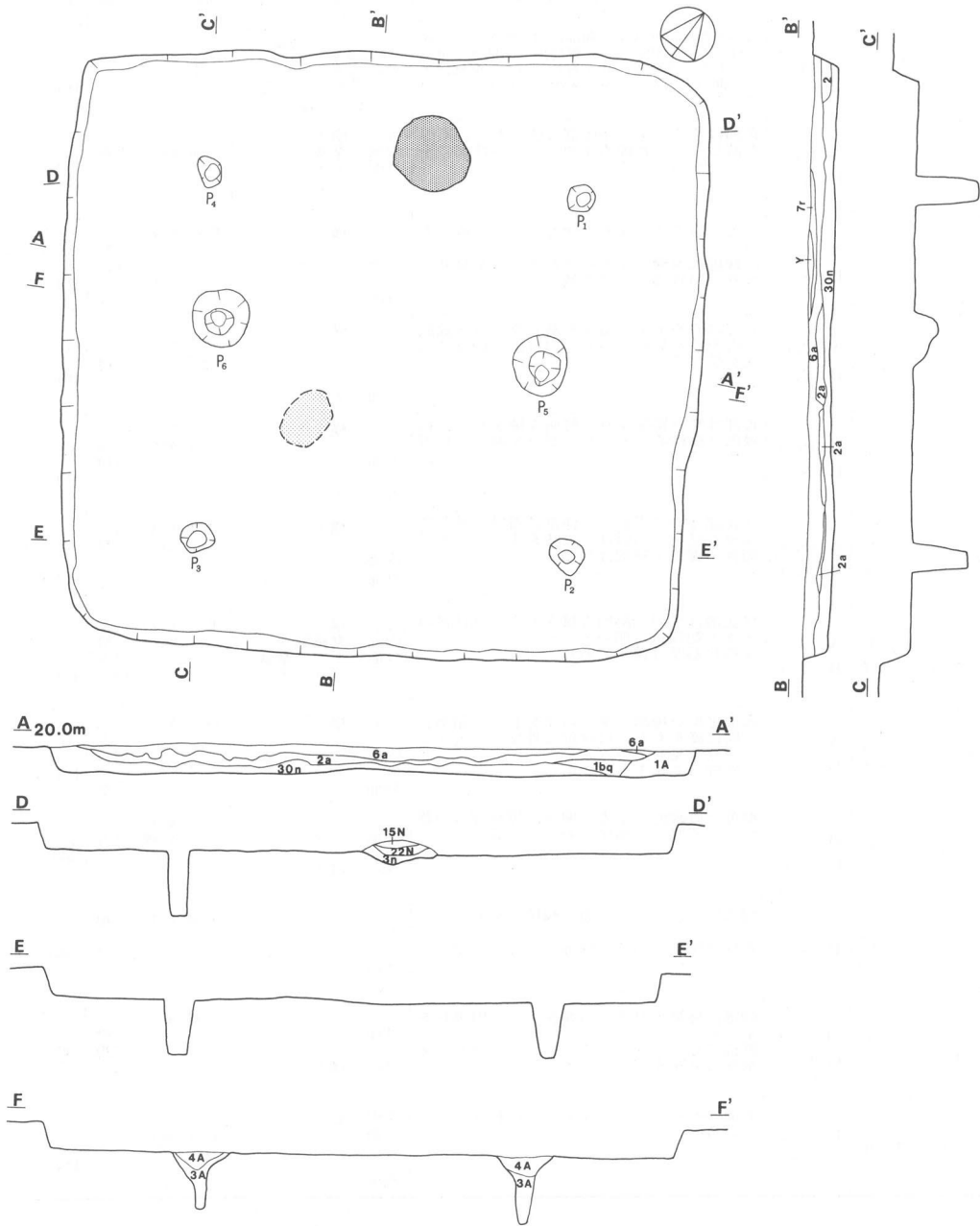
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 15.6 B (14.0)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部はやや厚手の器厚を有しており、口唇部は楕円状でやや丸味を帯びている。胴部肩はなで肩で、最大径を測る中位に移行して下位へと内彎している。底部欠損。	口-横ナデ 内面-ヘラナデ 外面-ハケ目調整	普通・砂粒・いぶスコ 赤褐 赤褐	50% PL63-4
2	土師器 甕	A (18.4) B (18.6)	頸部から口縁部にかけてはやや直線的に広がりを見せ、口唇部で器厚を減じながら外反し、やや尖がりを見せている。胴部は半円状で器厚は一定である。底部欠損。	口-横ナデのあと ハケ目調整 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・明赤 スコ 灰黄 褐	50% PL63-5
3	土師器 甕	A 17.7 B (16.3)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反し、口唇部でさらに外反を見せ、やや尖がりを見せている。胴部肩はなで肩を示している。	口-横ナデ 内面-ヘラナデ 外面-ハケ目	普通・砂粒・明赤 スコ 赤褐 灰	口縁部90%
4	土師器 壺	A 13.0	頸部から口縁部はやや直線的に立ち上がる複合口縁で口唇部で外反を見せている。肩部はなで肩で器厚を一定にし、中位へと移行する。	口-横ナデ 内面-輪積のあと ヘラナデ 外面-ハケ目 ヘラナデ	やや・砂粒・明赤 軟弱 スコ 赤褐 いぶ 橙	20%
5	土師器 壺	A 17.6 B (9.0)	頸部はややくぼみ、口縁は器厚を増し、大きく外反している。複合口縁で口唇部は平坦に近い。胴部肩はやや張り出している。	口-横ナデ 内面-ヘラナデ 外面-ハケ目	良好・砂粒・いぶ スコ 赤褐 灰	20%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
6	土師器 壺	A (16.6) B (9.7)	頸部から口縁部にかけては緩かに外反し、複合口縁で口唇部はさらに外反し、丸味をもっている。肩部は器厚を一定に保ち、やや強く張り出している。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	良好・砂粒・橙 スコリア い褐	10%
7	土師器 甕	A 17.5 B (4.2)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は直線的に大きく開き、口唇部付近で器厚を減じている。	口一横ナデ	良好・砂粒・明赤 スコリア 黒褐	口縁80%
8	土師器 甕	B (20.8) C 7.5	底部は厚手の器厚を有し、上げ底で、胴部は極端に器厚を減じ弧を描く様相である。中位で最大径を測ると思われる。胴部上位、口縁部欠損。	内面—ヘラナデ (摩滅気味) 外面—ハケ目調整の あと摩滅	良好・砂粒・橙 スコリア い橙	底部100%
9	土師器 罎	A 9.9 B 15.0	底部は極端に厚味のある器厚を有し丸味を帯び内側はやや凸凹状で、体部に向い大きく張り出している。中位で最大径を測り、頸部に内彎する。頸部から口縁にかけては、直線的な立ち上がりを見せ、口唇部で器厚を減じている。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・にぶ スコリア い橙	60% P L 64— 1
10	土師器 罎	B (8.1) C 4.8	底部やや上げ底で器厚を一定にし、大きく張り出すような弧を描いている。頸部、口縁部は欠損。	内面—ヘラナデ 外面—ミガキ (ヘラミガキ)	良好・砂粒・橙 スコリア 赤灰	80% P L 63— 6
11	土師器 埴	A 15.0 B 6.9	底部は平坦で、体部は器厚を一定に保ち内彎する。口唇部は器厚を減じ丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・にぶ スコリア 灰褐	80% P L 64— 2
12	土師器 埴	A 14.7 B 4.9	底部は丸味を帯び器厚で、体部は内彎する。器厚を減じながら、口唇部でさらに内彎している。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	良好・砂粒・にぶ スコリア い橙	60% P L 64— 4
13	土師器 環	A 12.6 B 4.2 C 2.8	口縁部は直線的に内傾し、体部はやや扁平な弧状を呈する。底部は器厚を減じている。	口一横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—ヘラナデ ヘラケズリ	良好・砂粒・明赤 砂礫 褐 赤褐	100% P L 64— 3
14	土師器 環	A (12.4) B (4.6)	底部から体部、口縁はゆるやかな弧を描き、口唇部で尖がり、外反を見せている。	口一横ナデ 内面—ヘラナデ (摩滅気味) 外面—ナデ	良好・砂粒・にぶ スコリア い橙	50% P L 64— 5
15	土師器 環	A (12.4) B (4.6)	底部は平坦で体部に向かって弧状を呈し、口縁部で直線的に立ち上がり、複合口縁をもち、口唇部でやや尖がり外反する。	口一横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—ヘラケズリ	良好・砂粒・明赤 にぶ い黄 橙	97% P L 64— 6
16	土師器 環	A 12.0 B (4.3)	口縁部はやや直線的な開きをみせ、口唇部で外反し丸味を布いている。体部の器厚は一定で扁平な弧状を呈している。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	良好・砂粒・にぶ スコリア い橙 橙	40%
17	土師器 環	A (11.6) B (4.6)	口縁部はやや垂直きみに立ち上がり、口唇部で器厚を減じて外反する。体部は扁平な弧状。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	良好・砂粒・にぶ スコリア 灰黄 褐	20%
18	土師器 環	A (12.6) B (4.4)	口縁部は直線的に開き、口唇部で外反する。体部との境に稜をもち、体部はやや扁平な弧状を呈する。	口一横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—摩滅気味	良好・砂粒・にぶ スコリア い黄 い褐	40%
19	土師器 高環	A (20.4) B (15.0) C 14.3	底部は扁平で、坏体部は直線的に開き、口唇部で器厚を減じ外反を見る。坏体部はやや垂直きみで、円柱状で裾部に至る。	口一横ナデ 坏部内面—ハケメ ハケメ 外面—ナデ 脚部外側—ミガキが 摩滅、ハケ ケメ	普通・砂粒・赤褐 スコリア い橙	70% P L 65— 1
20	土師器 高環	A 19.2 B (15.3)	脚部の器厚は薄手で円錐状を呈し、底部は平坦で体部との間に稜をもつ。坏体部は大きくゆるやかに弧を描く立ち上がりを見せ口唇部は丸味をもっている。	口一横ナデ 坏部内面—ヘラナデ 外面—ナデ	良好・砂粒・明褐 灰褐	80% P L 66— 1

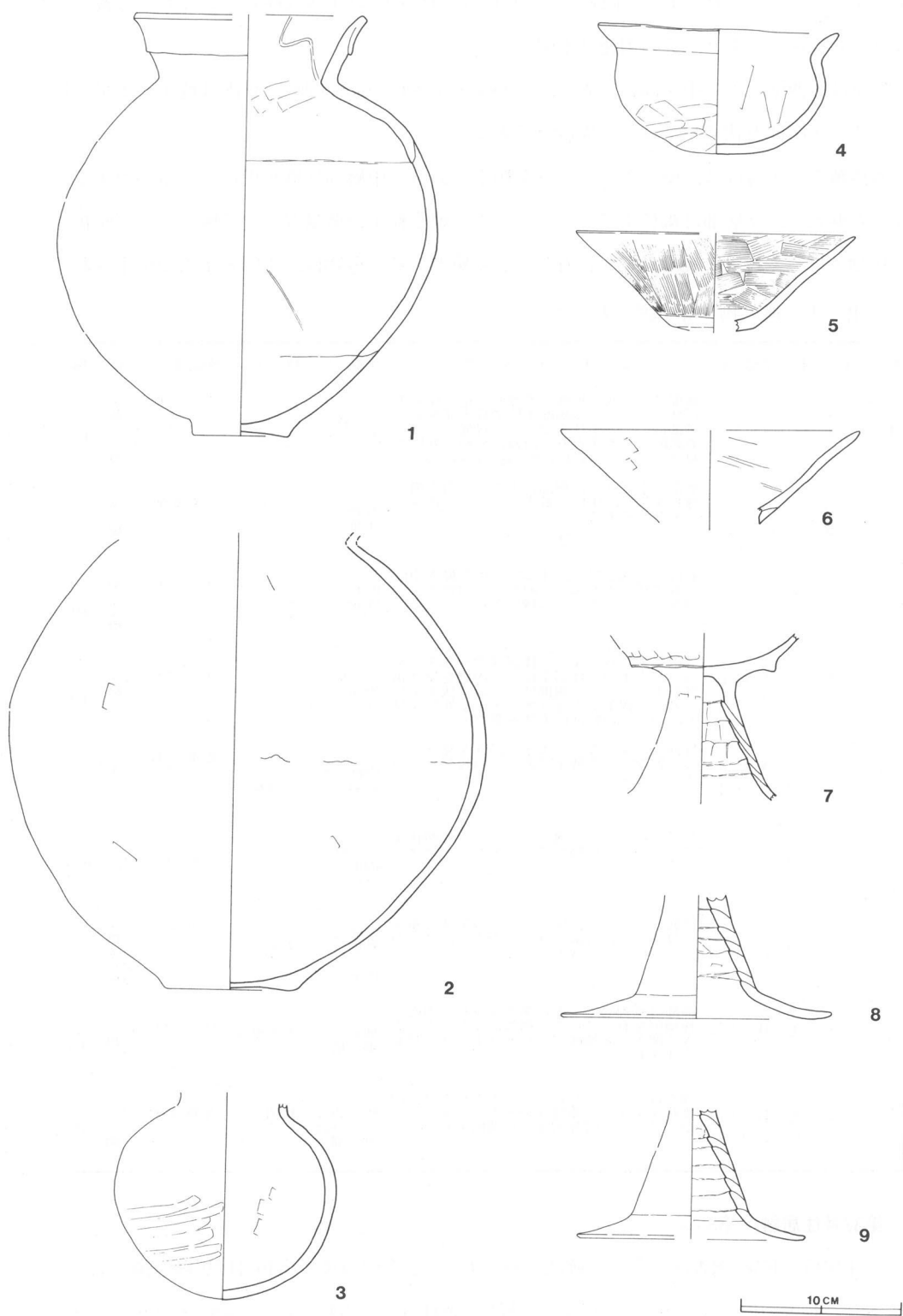
番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	整 形 技 法	焼成・胎土・色調	備 考
21	土 師 器 環 高	C 14.2	底部平坦で、坏体部と頸部の間に稜をもつ。頸部は「く」の字状を呈し、脚柱部は円柱状を呈しており、中位部に孔を有している。裾部は大きく開いて広がりを見せ先端でせり上がっている。	坏部 内面—ヘラミガキ (摩滅) 外面—ヘラナデ 脚部 内面—ヘラナデ 外面—ヘラミガキ 裾 —横ナデ	やや・砂粒・橙 軟弱	50% P L 65— 2
22	土 師 器 環 高	A 16.8 B ( 7.5)	底部はやや平坦。坏体部に稜をもち、器厚を減じながら直線的な開きで、口唇部に至り、やや外反する。	口 —横ナデ 内面—摩滅 外面—ナデ ヘラナデ	普通・砂粒・浅黄 スコ リア	坏部 100% P L 64— 7
23	土 師 器 環 高	A 17.6 B ( 8.2)	底部は扁平で、頸部と体部との間に稜をもつ。口縁部は内彎しながら立ち上がりを見せており、口唇部で器厚を減じている。	口 —横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—ナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リア 褐灰 砂礫	坏部95% P L 64— 8
24	土 師 器 環 高	A 18.6 B ( 7.7)	底部はやや平坦で器厚を減じながら直線的な広がりを見せている。口唇部は細身で丸味を帯びている。	口 —横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—ナデ	やや・砂粒・にぶ 軟弱 スコ リア	坏部60% P L 65— 3
25	土 師 器 環 高	A 19.9 B 8.5	底部は厚い器厚を有し鮮明な稜をもち、口縁部は直線的に広がり、器厚を減じ口唇部に至っている。	口 —横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—ナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リア	坏部90% P L 65— 4
26	土 師 器 環 高	A 19.3 B 6.9	坏底部はやや平坦で、体部は器厚を減じて塊状を呈し、口唇部で丸味を帯びている。頸部・脚部・裾部は欠損。	口 —横ナデ 内面>ナデ 外面>ナデ	普通・砂粒・にぶ スコ リア 雲母	坏部70% P L 65— 5
27	土 師 器 環 高	A 21.7 B ( 7.0)	坏底部は平坦で鮮明な稜をもち、坏体部は大きく朝顔状に開いている。全般に器厚は薄手である。	口 —横ナデ 内面—摩滅 外面—ナデ (摩滅) ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶ スコ リア 明赤 褐	80% P L 65— 6
28	土 師 器 環 高	A 18.5 B ( 8.1)	底部平坦で極端に厚い器厚を有し、頸部との間に稜をもち、口唇部は外反して大きく広がりを見せている。口唇部は丸味をもっている。	口 —横ナデ 内面 } 外面 }ヘラナデ	良好・砂粒・にぶ 赤 褐 にぶ い橙	坏部100% P L 65— 7
29	土 師 器 環 高	B ( 9.1) C 13.6	裾部は直線的に下方へ開き、脚柱部は円錐状でやや厚手の器厚を有している。	外面—ナデ 裾 —横ナデ	良好・砂粒・橙 砂礫 褐灰 (少)	脚部95%
30	土 師 器 環 高	B ( 8.3)	脚部は円錐状で、内面に輪積痕を有している。器厚は厚手である。裾部・坏部は欠損。	内面—ナデ 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・灰褐 にぶ い橙	脚部50%
31	土 師 器 環 高	B ( 8.2) C 14.4	脚部は極端に厚手の器厚を有し、円錐状を呈している。裾部はなだらかに下方へ広がりを見せ、先端部は丸味を帯びている。	外面—ナデ 裾 —横ナデ	普通・砂粒・にぶ スコ リア 明褐 灰	脚部50%
32	紡 錘 車	4.4×2.5 0.8	側面がややふくらみをもち、円板状を呈している。	上面>多方向ナデ 下面—ナデ 側面—ナデ	良好・砂粒 (少)	50% P L 75— 3

### 第36号住居跡 (第83図)

本住居跡はF5h<sub>5</sub>・h<sub>6</sub>調査区を中心に確認されたもので、第35号住居跡の南東に位置し、長軸方向はN-53°Eを指す。規模は長軸7.06m・短軸6.60m・面積46.59㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈する。壁高は30~33cmで、やや垂直に立ち上がっている。床面は平坦で、やや硬さを帯びている。柱穴は6か所検出され、平面が径40cm内外の円形を呈し、深さ61.5~72cmで、断面形はU



第83图 第36号住居跡実測図



第84图 第36号住居跡出土遺物実測図



字状を呈している。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>が支柱穴と思われる。P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>は大きな柱穴であるが、貯蔵穴としては位置的に疑問があり、その用途は不明である。

炉跡は北西壁近くの中央部に位置し、径90cm・深き15.50cmを測る。炉内は焼土を多量に堆積している。炉床は皿状でやや硬く、褐色土である。

本跡覆土の上層部は、攪乱されており腐植土である。中層部は極暗褐色土・暗褐色土でローム粒子が混入し、下層部は褐色土でソフトローム・焼土粒子が微量混入する層と、一部暗褐色土で炭化物・ローム粒子・焼土粒子を含有している層がある。遺物は、土師式土器が検出されている。

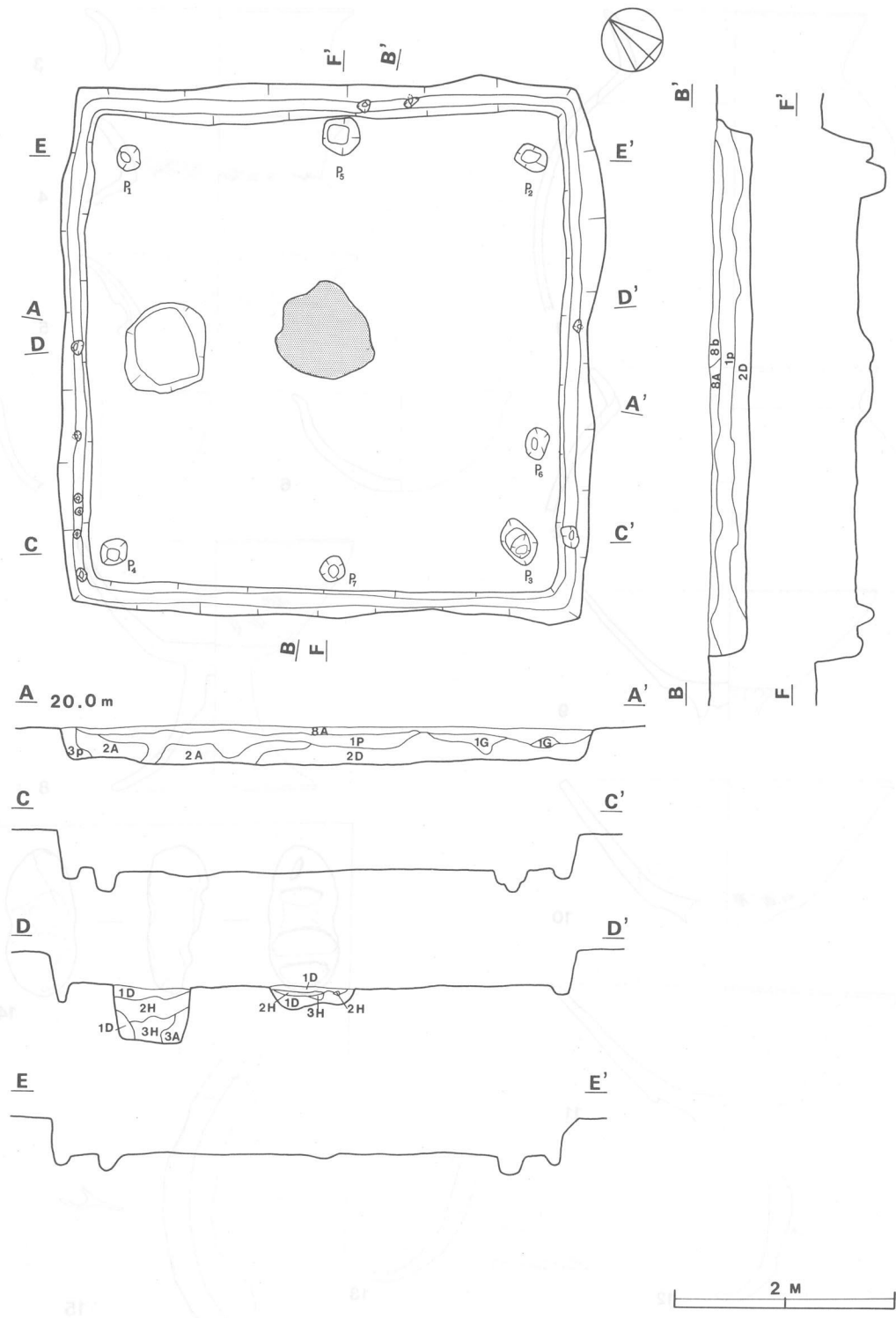
出土遺物解説表

SI-36

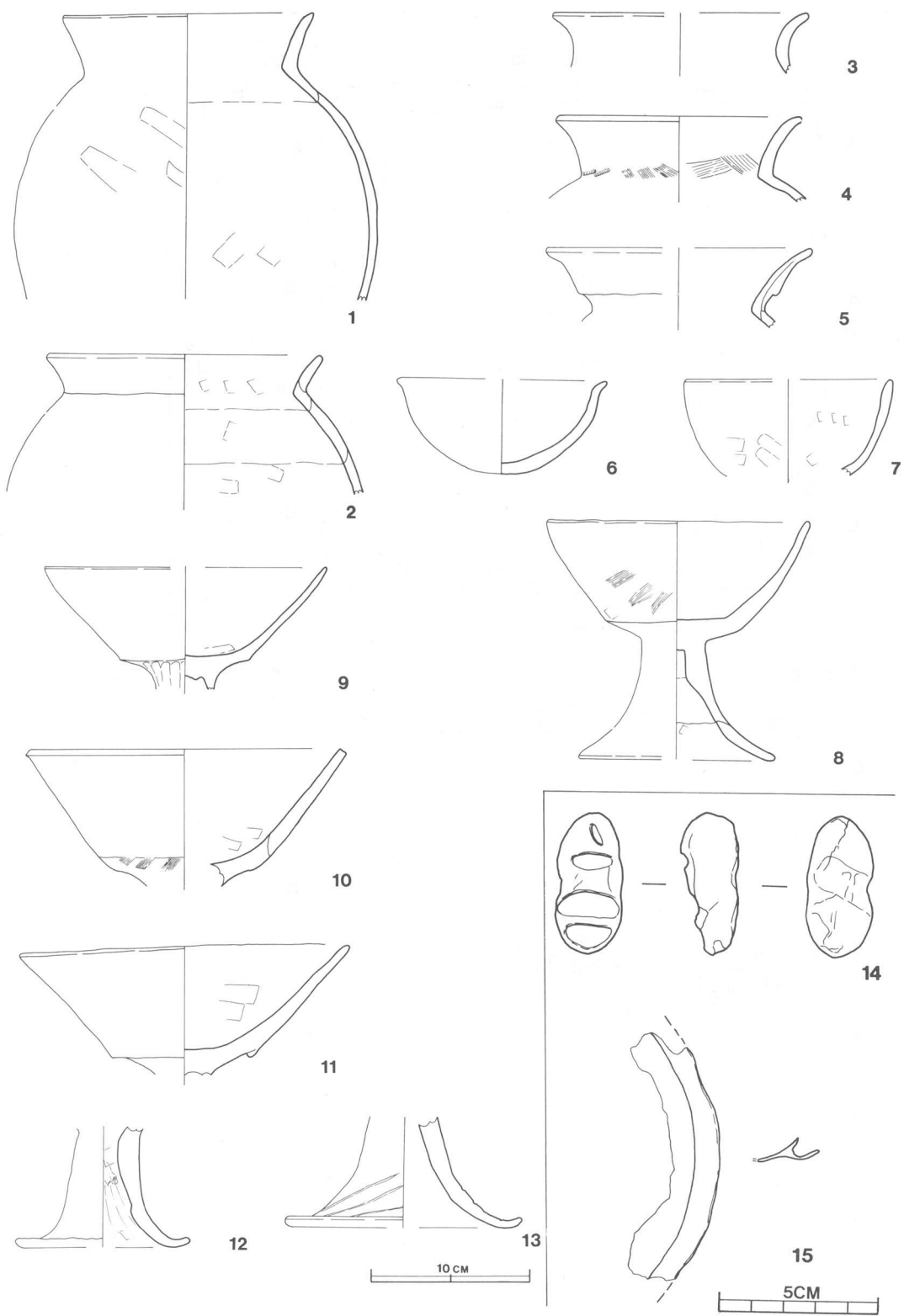
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師壺	A (14.0)	底部は上げ底で胴部は器厚を一定に保ち半円状を呈している。胴部中位で最大径を測る。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口唇部でやや外反を見せている。口縁部は折り返し口縁である。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ	良好・砂粒・にぶい スコリア 橙 い 橙	60% PL 66-2
2	土師甕	B (27.6) C 8.4	底部は上げ底で、胴部は大きく半円を描く様相を呈し、中位で最大径を測る。器厚はやや薄手である。	内面>ヘラナデ 外面>ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい 灰 褐	35% (底部100%)
3	土師埴	B (12.2)	底部は丸底を呈し、体部は半円を描き中位で最大径をもち頸部に向かって内彎する。器厚は一定である。口縁部欠損。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ ヘラケズリ	良好・砂粒・明褐 スコリア にぶい 橙	70% PL 66-4
4	土師壺	A 15.0 B 8.1	底部は丸底状を呈し、体部はやや丸味をもって立ち上がり体部上位から内彎を見せ頸部に至っている。頸部は「く」の字状を呈しており口縁部は器厚を増し大きく外反を見せている。口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラケズリ	良好・砂粒・にぶい 橙 褐 灰	50% PL 66-3
5	土師器環	A 17.4 B 6.1	坏部は外反しながら大きく開きを見せている。器厚はやや薄手である。口唇部はやや尖がりを見せている。	内面一ハケメ 外面一ハケメ調整	普通・砂粒・にぶい スコリア 赤 褐	坏部20%
6	土師器環	A 18.6	坏部の器厚はやや薄手で、大きく朝顔状を呈している。口唇部はやや尖がりを見せている。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面>ヘラナデ	普通・砂粒・橙 褐 灰	口縁部30%
7	土師器環	B 9.8	坏底部は平坦で、体部と「く」の字状の頸部に稜をもち、脚部は外反し下方へのびている。器厚はやや薄手である。	ツキ部 外面一ヘラナデ ヘラオサエ 内面一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい スコリア 明赤 褐 灰	25%
8	土師器環	B ( 7.7) C (16.8)	脚部は直線的で下方に開きを見せ、内面に輪積痕を有している。裾部はなだらかに大きく開き、先端部でややせり上がりを見せ丸味を有している。	外面一ミガキが摩滅 裾一横ナデ	良好・砂粒・にぶい 橙	脚部80% PL 66-5
9	土師器環	B ( 8.0) C (13.6)	脚部はゆるやかに外反して下方へのび、円錐状を呈する。裾部はやや平坦で大きく広がっている。脚部内部に輪積痕あり。	脚部内面一輪積痕 外面一ナデ 裾一横ナデ	普通・砂粒・橙 スコリア にぶい 橙	脚部20%

### 第37号住居跡 (第85図)

本住居跡はF6e<sub>5</sub>調査区を中心に確認されたもので、遺跡の東に第46号住居跡と隣り合った位置にあり、長軸方向はN-49°-Eを指す。規模は長軸4.8m・短軸4.7m・面積22.56m<sup>2</sup>で、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は27~40cmを測り、外反して立ち上がっている。壁下に壁溝が幅10



第85图 第37号住居跡実测图



第86图 第37号住居跡出土遺物実測図

cm内外で本跡を全周する形で確認され、また深さ4～12cmの壁柱穴が9か所検出された。底面は凹凸ではあるが、やや固くしまりを帯びている。柱穴は7か所検出され、主柱穴はP<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>と思われる。規模は径30cm内外で、平面形をほぼ円形とし、深さは13～21cmを測り、V字状に掘り込まれている。なお、棟持柱と推定される柱穴の検出を見ている。

炉跡は床の中央に検出され、径80cm程の円形を呈し、床面から19cm掘り窪めた地床炉で、炉内覆土は焼土粒子・炭化粒子が混入していた。炉床はロームブロックが熱を受けている。

貯蔵穴は北西壁近くに確認されており、径90cmを測り、床面から57cm程掘り込んでおり平面形はほぼ円形を呈している。その覆土は三層に大別され、上層部はローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が混入する暗褐色土である。中層部は上層部と同様であるが、ローム粒子を多量に含有している。下層部は褐色土で、微量であるが焼土粒子・炭化粒子が混入している。底面はややしまりを帯びており、壁はほぼ垂直に立ち上がり、貯蔵穴の断面はU字形を呈している。

本跡の覆土は、攪乱を受けているが三層に大別され、上層部は黒褐色土でローム粒子・焼土粒子が微量混入している。中層部は暗褐色土でロームブロックが混入し、下層部は暗褐色土で粒子・焼土粒子（少量）・炭化粒子（少量）が混入している。遺物は、炉跡の西側とP<sub>3</sub>の北西側等に土師式土器片の検出を見ている。

出土遺物解説表

SI-37

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 15.6 B (19.2)	頸部から口縁にかけて直線的に立ち上がり器厚を減じつつ口唇部に移行し、口唇部付近で外反し、やや尖がりを見せている。胴部の肩はなでがたで最大径を測る中位へと移行し内彎しながら底部へと向かう。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・にぶい スコリア い 橙	30%
2	土師器 甕	A 17.2 B ( 8.7)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁は「八」の字状の開きを見せ、口唇部はやや外反し丸味を帯び、胴部からなだらかに中位へ移行すると思われる。器厚は一定である。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	良好・砂粒・橙 スコリア い 褐	口縁部55%
3	土師器 甕	A (15.8)	口縁部は大きく外反し、口唇部でさらに外反を見せ丸味をもっている。	口一横ナデ	良好・砂粒・橙 スコリア 褐灰	口縁部10%
4	土師器 甕	A (15.2)	頸部から口縁にかけてやや厚手の器厚を有し、口縁はやや直線的な広がりを持ち口唇部で大きく外反を見せてさらに開き丸味を帯びている。胴部は器厚を減じている。底部、胴部大半欠損。	口一横ナデ 内面>ハケメ調整の 外面>あとナデ	普通・砂粒・にぶ い 橙	口縁部80%
5	土師器 壺	A (17.5) B ( 4.6)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は複合口縁で大きく外反している。口唇部でさらに外反を見せ丸味を帯びている。胴部、底部欠損。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一横ナデ	普通・砂粒・橙	口縁部20%
6	土師器 碗	A (13.2) B ( 6.0)	底部は丸底で、胴部はゆるやかに立ち上がり口縁部付近で垂直になり、さらに外反し口唇部でさらに外反を見せている。器厚は一定である。	口一横ナデ 内面>ナデ 外面	良好・砂粒・橙 砂礫 (少)	20%
7	土師器 碗	A (12.8) B ( 6.2)	口唇部は丸味を帯びる。器厚は一定に保ち体部はゆるやかな弧をもって立ち上がりをかせている。底部は欠損。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・橙 にぶ い 橙	30%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	土師器 高環	A 16.5 B 15.2 C (12.2)	環底部は扁平で、体部と「く」の字状の頸部との間に稜をもち、環部は深みをもちやや内彎する。口唇部で垂直な立ち上がりを見せ丸味を帯びている。脚柱部は円錐状で外反し裾部へ移行している。	口・裾一横ナデ 内面一ナデ 外面一ナデ (部分的にヘラナデ)	普通・砂粒・にぶ スコ リア い い 赤 い 赤 褐	80% PL 66-6
9	土師器 高環	A (17.6) B (7.7)	底部は平坦で、頸部は「く」の字状を呈し、体部との間に稜をもつ。環体部はやや内彎して立ち上がり、器厚を減じながら口唇部に至る。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ ヘラミガキ	良好・砂粒・にぶ スコ い い 橙 リア	環部30%
10	土師器 高環	A 19.7 B (8.7)	口縁部はやや太めで、直線的な開きを呈している。環底部は平坦と思われ、体部との間に稜をもつ。脚柱部、裾部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラナデ ハケメ調整	良好・砂粒・にぶ スコ い い 橙 リア	環部90%
11	土師器 高環	A 20.6 B (8.2)	環底部は平坦で、体部と頸部に稜をもち突起を有している。器厚を減じながらやや直線的に大きく開きを見せている。口唇部はやや丸味をもっている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	良好・砂粒・橙 スコ にぶ い い 橙 リア	環部97% PL 67-1
12	土師器 高環	C (11.0)	脚部は直線的で円筒状を呈し、裾部との境からなだらかに下方へ伸び、裾部先端は丸味を有しせり上がりを見せている。全体的に器厚を有している。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・スコ・橙 リア (大粒)	脚部50%
13	土師器 高環	C (15.0)	脚部はなだらかに下方へと開き、裾部先端で丸味を有しせり上がりを見せている。脚部は割合しっかりしている。	内面一ナデ 外面一ヘラナデ 裾一横ナデ	普通・砂粒・にぶ スコ い い 橙 灰 褐	脚部20%
14	土製品	4.45×2.1	そら豆状を呈し、両側面がわずかにくびれる。一方の面に、浅い「U」字状のくぼみを3ヶ所有する。	ナデ		100%
15	銅製品		皿状をなし、受部を有する。			受部に スス付着 10% PL 75-19

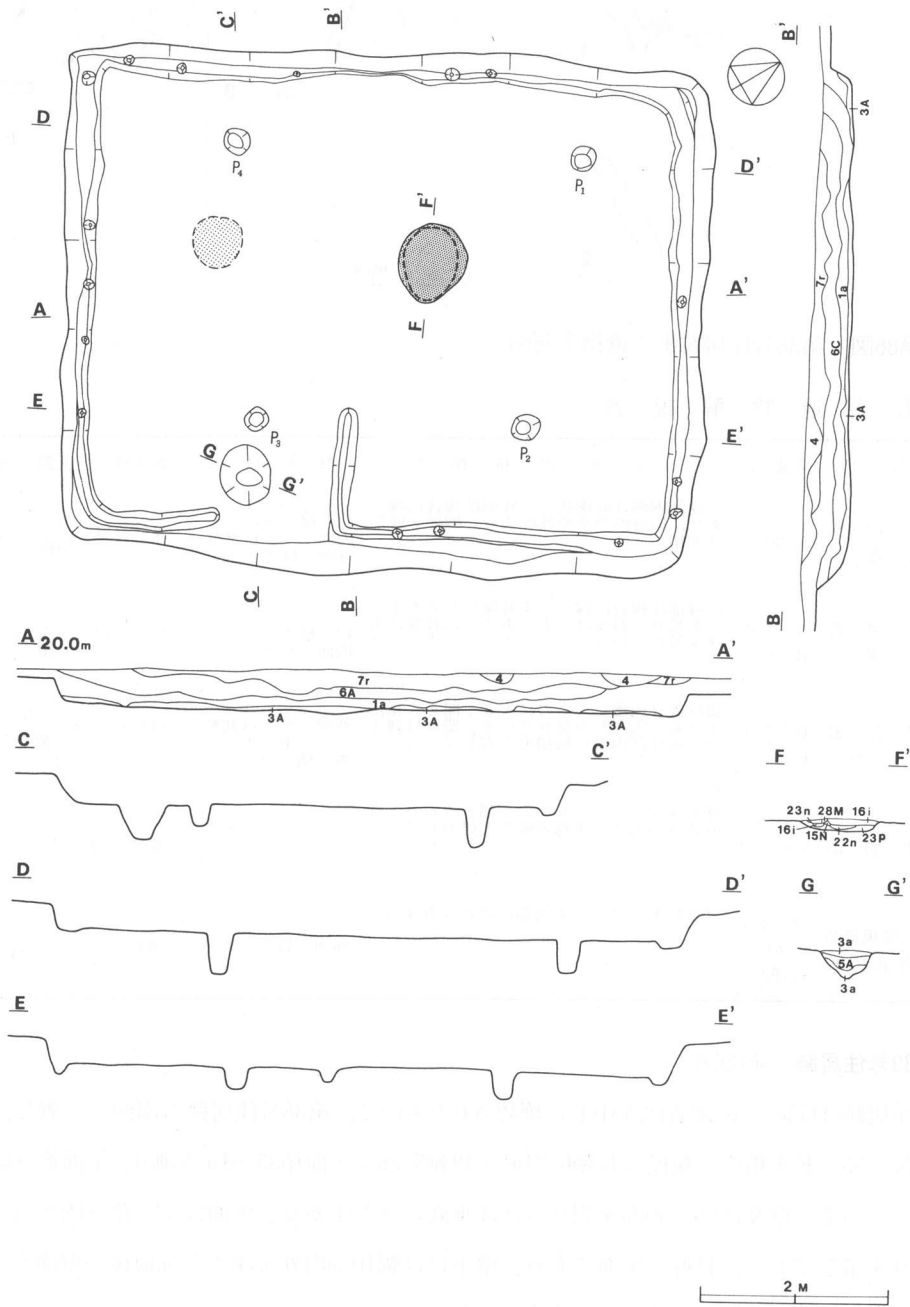
### 第38号住居跡 (第87図)

本住居跡はF5j<sub>0</sub>・G5a<sub>0</sub>調査区を中心に確認されたもので、第39号住居跡の北側に位置し、長軸方向はN-30°Eを指す。規模は長軸5.46m・短軸3.42m・面積18.67m<sup>2</sup>を測る隅丸方形を呈している。壁高は25~35cmを有し、外反しながら立ち上がる。床面は平坦でやや固い。壁下には壁溝が15~20cmの幅で南東の一部をのぞいて回っており、東壁のやや中央から本跡中央部にかけて間仕切りがある。また、壁溝中に深さ7cm程の壁柱穴が検出されている。

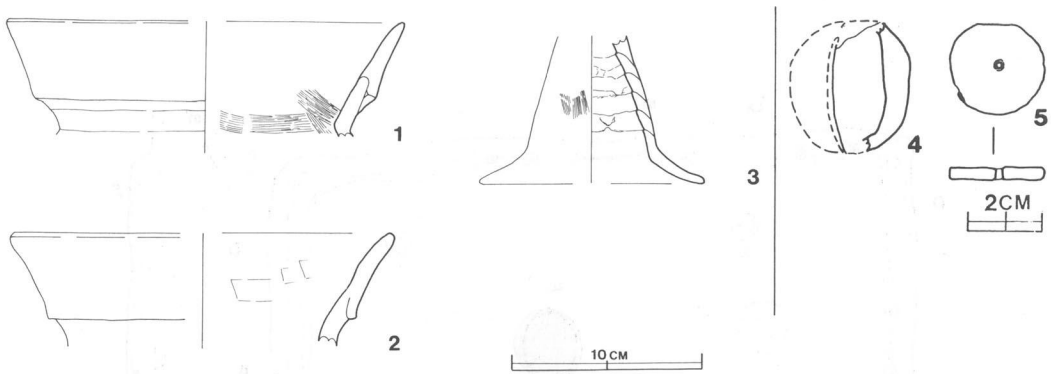
炉跡は床の中央部に径約73cmの円形を呈し、床面から14cm程掘り窪めた地床炉である。炉内覆土には焼土粒子・炭化粒子を含有し、炉床はロームで固くなっている。柱穴は4か所検出され主柱穴と思われる。ほぼ平面は円形で、深さ28~40.5cmを測り、断面は円筒形を呈している。

貯蔵穴は、南東コーナー部近くに径56cmの円形を呈し、深さ37cmを測る。その覆土の色調は褐色土でローム粒子を含有し、自然堆積を呈している。底面は軟弱で、壁はV字状に立ち上がっている。

本跡覆土は三層に大別され自然堆積しているが、一部耕作により攪乱を受けている。上層部は黒褐色土で腐植土、中層部は極暗褐色土・暗褐色土でローム粒子・焼土粒子が混入し、下層部は褐色土でローム粒子が多量に混入している。遺物は、土師式土器が出土しているが完形品の出土は見ない。



第87图 第38号住居跡実測図



第88図 第38号住居跡出土遺物実測図

出土遺物解説表

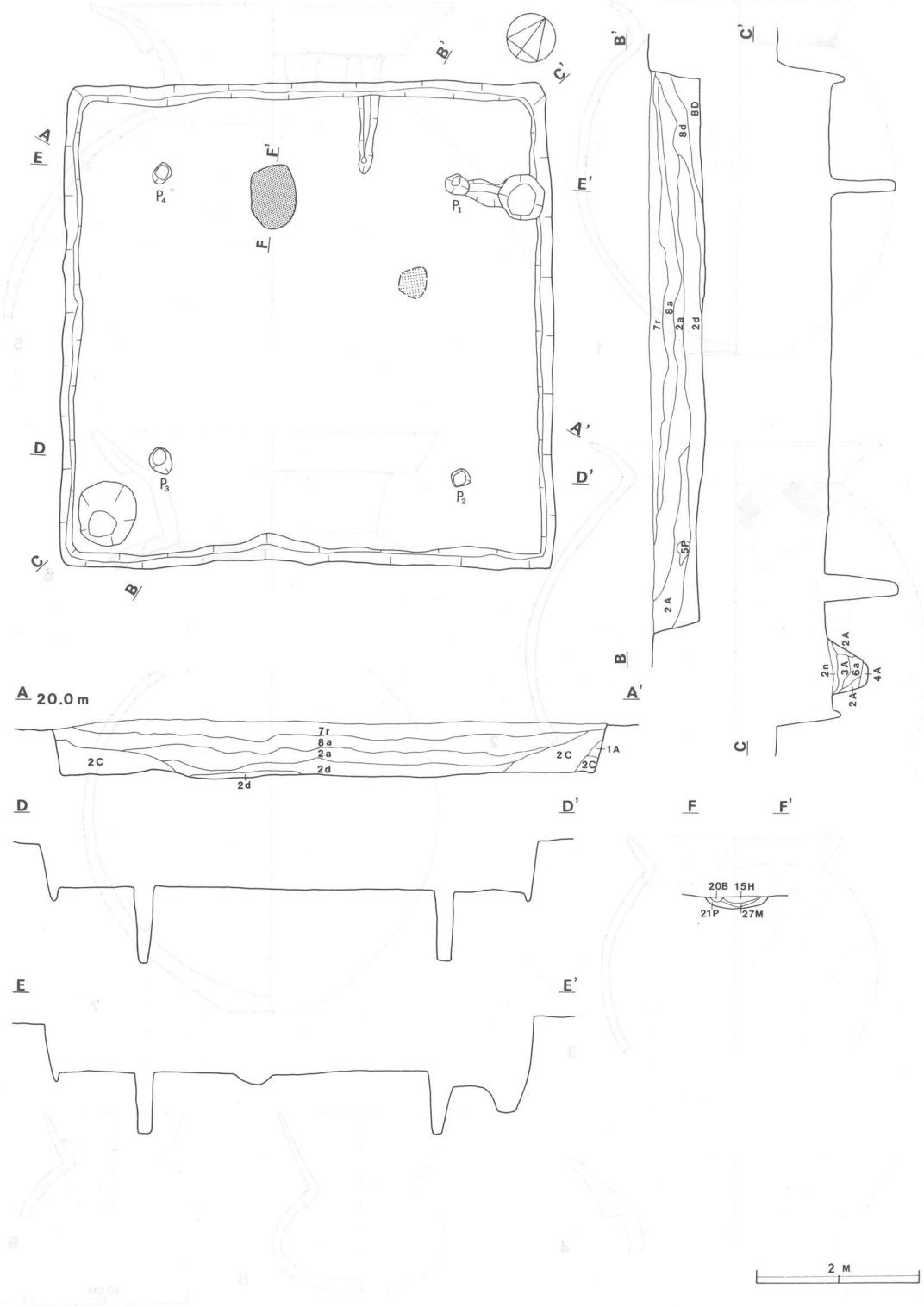
SI-38

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器壺	A (20.8)	口縁部内側は直線状で、外側は複合口縁であり、口唇部でやや外反する。脚部・底部は欠損。	口一横ナデ 内面一ハケ目調整 外面一横ナデ	良好・砂粒・にぶい橙	口縁部10%
2	土師器壺	A (20.0) B (6.1)	口縁部は複合口縁でやや外反した立ち上がりを見せ、器厚は一定である。口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ	良好・砂粒・にぶい橙	口縁部10%
3	土師器高環	B (7.9) C (11.7)	脚柱部は円錐状で下方に大きく開き、裾部でさらに広がりを見せている。器厚は薄手で、脚柱部内側に輪積痕を有している。	外面一ハケ目調整のあとナデ 裾一横ナデ	良好・砂粒・にぶい黄橙	脚部30%
4	土製品	3.6×3.2	球形を呈していたものの一部とみられ、切り込みがある。土鈴の破片と思われる。		普通・砂粒・橙	25%
5	石製模造品有孔円板	径 2.5 厚さ0.3 孔径0.15	ほぼ円形を呈し、中央部に穿孔を有する。	外周一雑なミガキ	滑石	95% PL 75-12

第39号住居跡 (第89図)

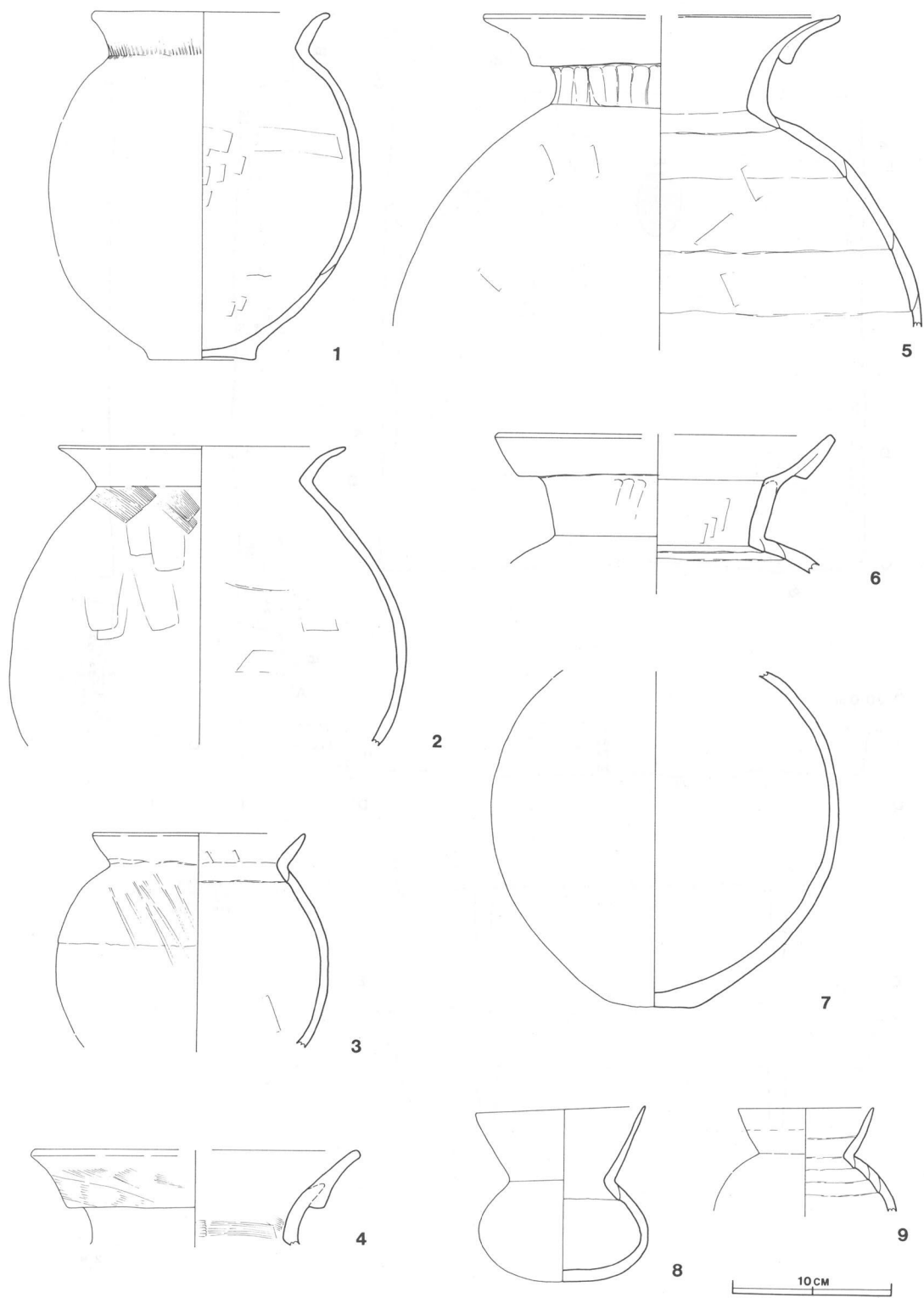
本住居跡はG5e<sub>8</sub>・e<sub>9</sub>調査区を中心に確認されたもので、第38号住居跡の南側に位置し、長軸方向はN-55°-Eを指す。規模は長軸6.04m・短軸5.88m・面積35.51m<sup>2</sup>を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は65~90cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面はよく踏み固められて硬く、しまりを帯びており、良好な床面である。壁下には幅10cm内外・深さ7cm前後の壁溝がめぐっている。北東・北西壁から間仕切りが検出された。

炉跡は、北西壁側やや中央に検出され、長径80cm・短径56cmの楕円形をし、床面から約8cm掘り窪められている地床炉である。炉内覆土は暗赤褐色土・赤褐色土が主で焼土粒子・焼土ブロックを含有している。柱穴は5か所検出された。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は深さ75~93cmで、断面を円筒形に掘り込んでいる。また平面は径20~30cmを測る円形を呈し、主柱穴と思われる。

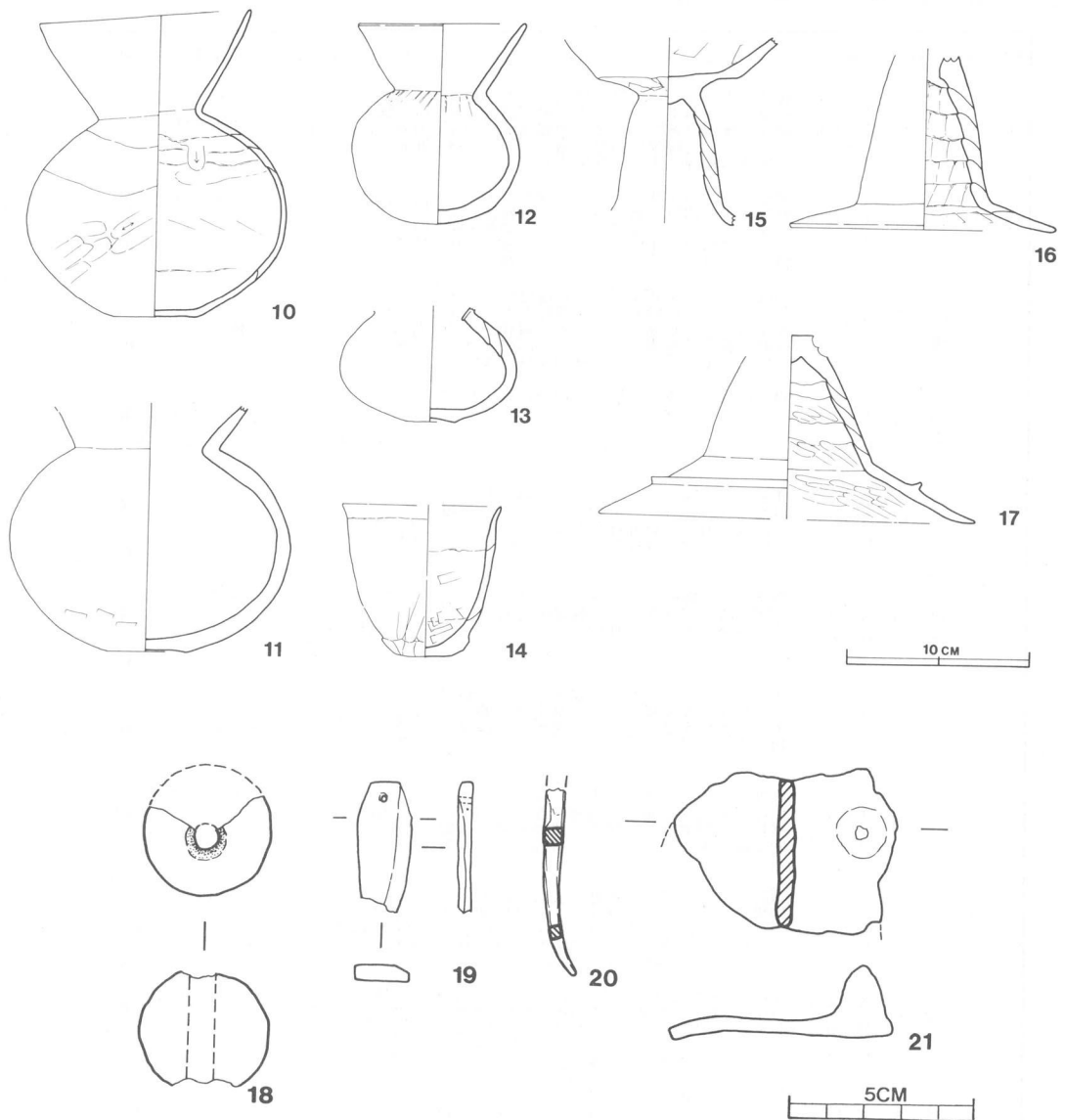


第89图 第39号住居跡実测图





第90図 第39号住居跡出土遺物実測図(1)



第91図 第39号住居跡出土遺物実測図(2)

貯蔵穴は、南コーナー部近くに径80cmの円形を呈し、深さ52cmを測る。その覆土の色調は暗褐色土・褐色土が主で焼土粒子少量・ローム粒子を含有し、自然堆積でややしまりを帯びている。またV字状に掘られ、南側はやや垂直に立ち上がっている。

本跡の覆土は、四層に大別され、第1層・第2層は黒褐色土で、黒色腐植土・ローム粒子が混入している。第3層はローム粒子が微量混入し、第4層はローム粒子を少量、焼土粒子を微量、炭化粒子を含有し、自然堆積している。遺物は土師式土器片が出土している。また、焼土・炭化物が多く検出されていることから焼失家屋と思われる。

出土遺物解説表

SI-39

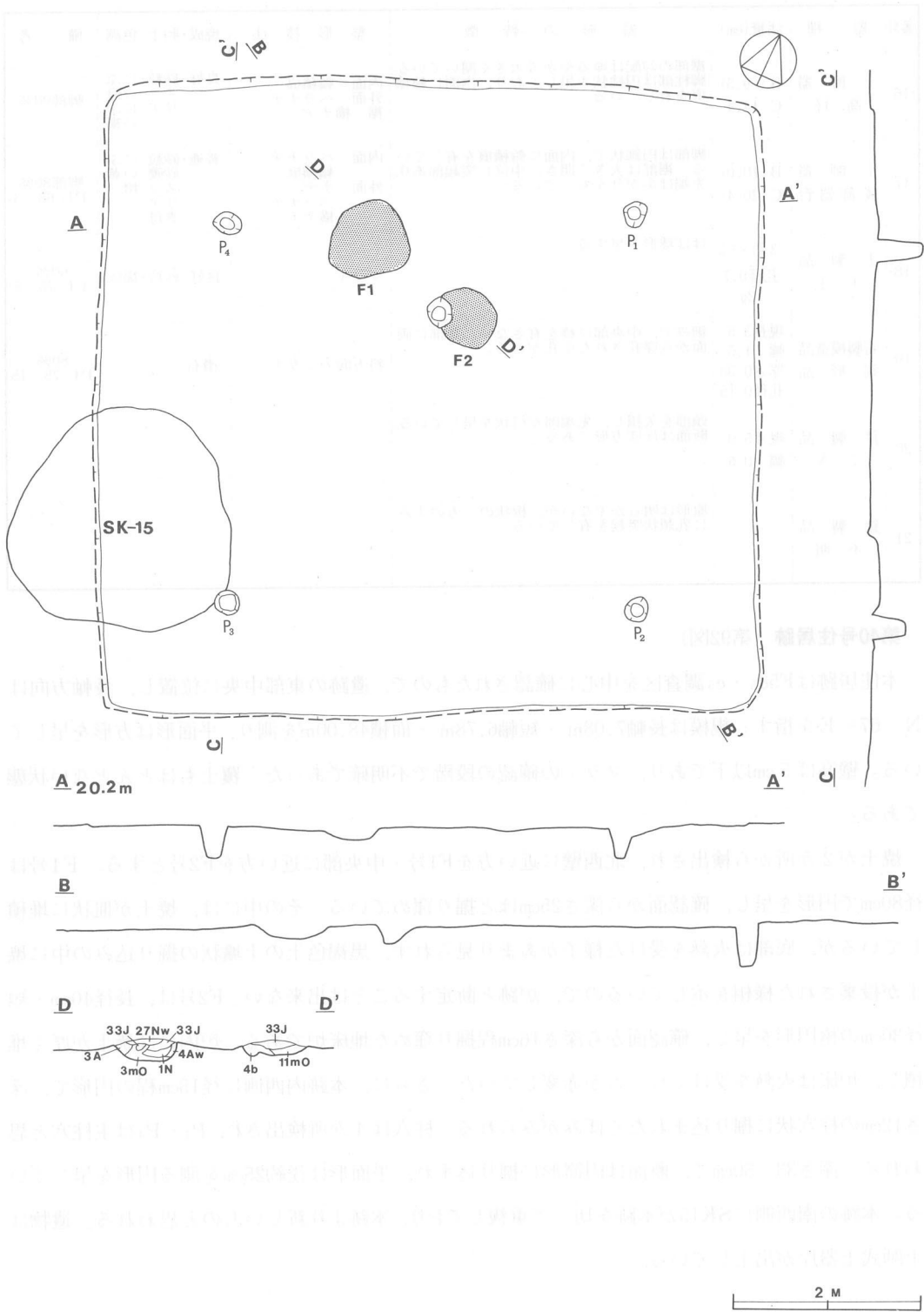
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器	A 14.8 B 21.9 C 6.8	底部は上げ底で、胴部は楕円状の弧を描き器厚はやや薄手である。中位部で最大径を測り、縁が付着している。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は器厚を増し「八」の字状に開き口唇部で大きく外反する。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ヘラミガキ	普通・砂粒・灰赤 橙	97% PL 67-2
2	土師器	A 17.8 B (18.6)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は大きく外反する。器厚を減じながら、口唇部で丸味をもち、さらに外反している。胴部の肩はなで肩で、中位部で最大径を測り、内彎し、底部へと移行している。底部欠損。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ハケメ ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ スコイ黄 リア橙 雲母明 ヘラナデ赤	50% PL 67-3
3	土師器	A 13.2 B (13.3)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁は「八」の字状に広がる。口唇部でやや器厚を減じて丸味をおびる。胴部肩からはなで肩状で、中位部で最大径を測る。それより内彎しながら底部に至っている。胴部器厚は一定。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面>	やや・砂粒・橙 軟弱 スコ リア い 橙	70% PL 67-4
4	土師器	A (20.0) B ( 5.9)	複合口縁で大きく外反し、口唇部は丸味をおび、さらに外反する。	口一横ナデのあと ハケ目	良好・砂粒・浅黄 スコ リア 橙	口縁部30%
5	土師器	A 22.3 B (19.6)	頸部から口縁にかけては大きく外反し、口唇部でさらに外反し丸味をおびている。複合口縁を有し、肩部は器厚を一定にし、なで肩で中位部へ移行している。	口一横ナデ 外面一ヘラケズリ	普通・砂粒・浅黄 スコ リア 橙 にぶ い	50% PL 67-5
6	土師器	A (20.7) B ( 8.2)	頸部から直線的に立ち上がり、さらに大きく開き複合口縁をもつ。輪積痕を有し、胴部の肩は大きく開く様相をみせている。	口一横ナデのあとミガキ 内面一ヘラナデ 輪積のあとナデ 外面一ヘラオサエ ミガキが摩滅	良好・砂粒・にぶ い赤 褐 にぶ い	口縁部30%
7	土師器	B (21.0) C ( 6.0)	底部は平坦でやや厚手の器厚を有し、胴部は半円状に弧を描き中位で最大径を測る。上位で器厚を減じている。頸部・口縁部欠損。胴部に縁が付着している。	内面一ヘラナデ 外面一ヘラミガキ	良好・砂粒・黒褐	75% PL 68-1
8	土師器	A 10.6 B (11.0)	底部は平坦で、体部が大きく張り出し、中位部で最大径を測る。内彎しながら頸部へ移行し、頸部から口縁部は器厚を減じ直線的な開きを見せている。口唇部は丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面>	良好・砂粒・にぶ スコ リア い 黄 橙	80% PL 69-1
9	土師器	A 8.4 B ( 6.5)	頸部から口縁にかけて直線的で、口縁中位から内彎して立ち上がりを見せている。口唇部はやや尖がりを見せ、器厚を減じている。頸部は「く」の字状を呈し、胴部肩はなで肩で中位部へ移行している。内側輪積痕を有している。	口一横ナデ 内面一輪積み 外面一ナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リア 赤 褐 にぶ い	50%
10	土師器	A 11.4 B 16.3 C 4.6	全体的に器厚は薄手である。底部は平坦で胴部は中位で最大径を測り、半円状の弧を描き頸部に至る。頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は大きく「八」の字状を呈している。口唇部は丸味を帯びている。胴部内面に輪積痕を有している。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 輪積痕あり 外面一ヘラミガキ 底部下部一ヘラケズリ 内面一ヘラナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リア 赤 褐 にぶ い 雲母	90% PL 68-5
11	土師器	B (13.2) C 4.2	底部は上げ底を呈し、体部は大きく弧を描き、器厚をやや一定に保ち「く」の字状の頸部に至り、口縁部は「八」状を呈している。	内面>ヘラナデ 外面>	良好・砂粒・明赤 褐 褐灰	90% PL 68-2
12	土師器	A 9.0 B 11.0	底部は丸底を呈し、体部は器厚を一定に保ち半円状の弧を描き頸部に至る。口縁部は「八」の字状を呈し口唇部で器厚を減じ丸味を見せている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ナデ	普通・砂粒・にぶ い	70% PL 68-4
13	土師器	B ( 6.1) C 2.6	底部は上げ底で、器厚を一定に保つ。体部は大きく張り出し、最大径を測る中位部より内彎し、頸部に至っている。体部上位の内側は輪積痕あり。頸部・口縁部欠損。	外面一ミガキ	良好・砂粒・にぶ い	80% PL 67-6
14	土師器	A 8.5 B 8.2 C 3.3	底部平坦。体部の器厚は薄手で直線的に立ち上がり、口縁部でやや外反し、口唇部でさらに外反を見せ、丸味を帯びている。	内面>ヘラナデ 外面>	良好・砂粒・にぶ い	30%
15	土師器	B (10.2)	坯底部は平坦で、頸部は「く」の字状を呈し体部との間に稜をもつ。口縁は大きく開いている。脚部は円柱状で裾部に移行している。輪積痕を有している。	内面>ヘラナデ 外面一輪積痕 脚部内面一輪積痕	普通・砂粒・にぶ スコ リア 雲母	50%

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
16	土師器 高環	B(9.5) C 14.4	裾部の勾配はゆるやかで大きく開いている。脚柱部は円柱状を呈しており、内面に輪積痕を有している。	内面—輪積痕 外面—ヘラナデ 裾—横ナデ	良好・砂粒・にぶ スコ リアにぶ い褐色	脚部90%
17	土師器 裝飾器台	B(10.0) C(20.4)	脚部は円錐状で、内面に輪積痕を有している。裾部は大きく開き、中に突起部あり。先端は尖がりをもっている。	内面—ヘラナデ 輪積痕 外面—ナデ ヘラナデ 横ナデ	普通・砂粒・にぶ 砂礫 スコ リア 雲母	脚部80% PL 68-3
18	土製品 土玉	(3.4)×3.5 孔径0.7 22g	ほぼ球形を呈する。	ミガキ	良好・砂粒・褐色	60% PL 75-5
19	石製模造品 剣形品	現長3.5 幅 1.5 厚さ0.35 孔径0.15	細みで、中央部に稜を有さない。基部に両面から穿孔された小孔がある。	斜方向のミガキ	滑石	80% PL 75-15
20	鉄製品 くぎ	現寸5.0 幅 0.6	頭部を欠損し、先端部が弓状を呈している。断面はほぼ方形である。			
21	鉄製品 不明		原形は明らかでないが、板状の一方のすみに乳頭状突起を有している。			

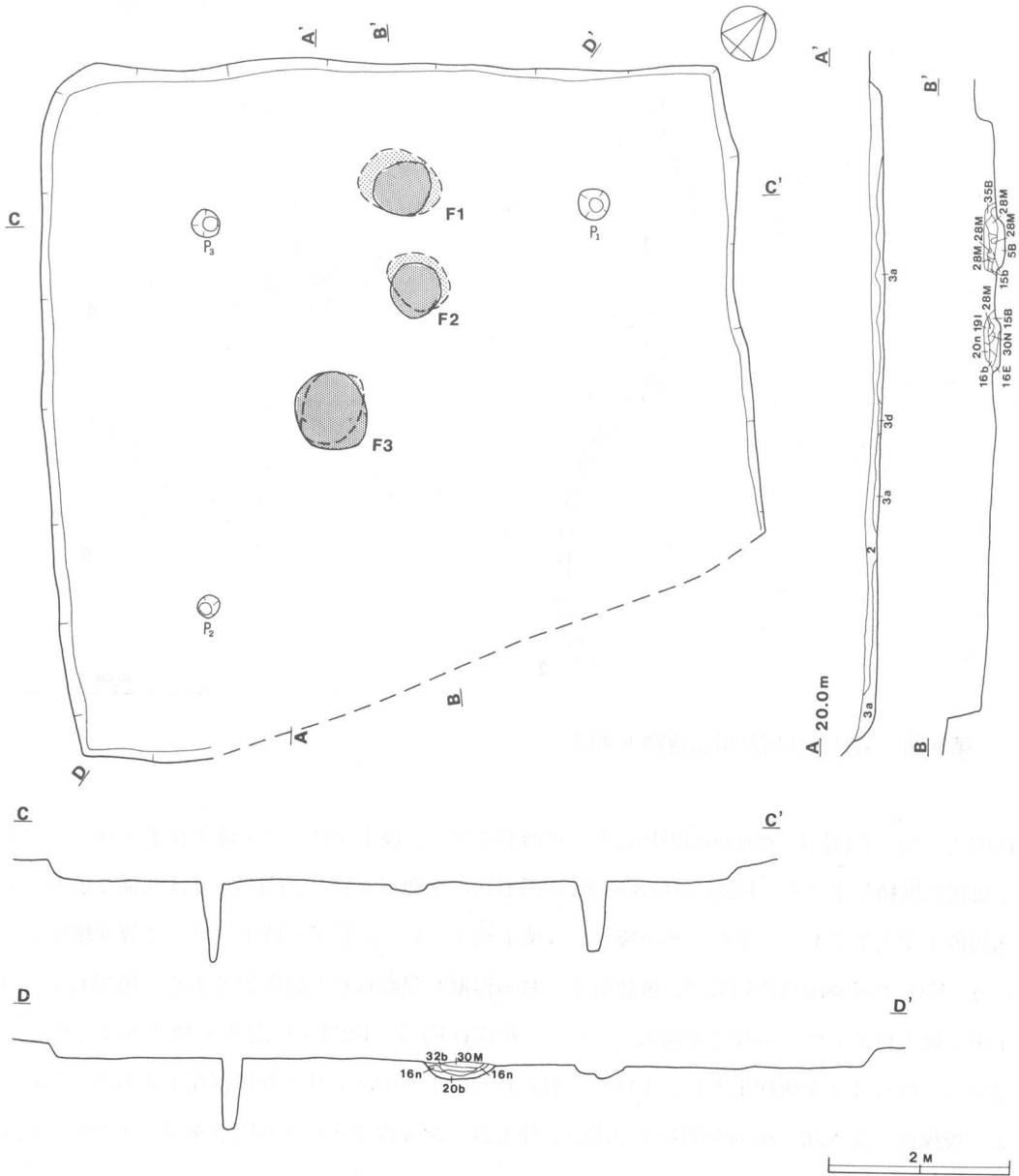
#### 第40号住居跡（第92図）

本住居跡はF5d<sub>5</sub>・e<sub>5</sub>調査区を中心に確認されたもので、遺跡の東部中央に位置し、長軸方向はN-67°Eを指す。規模は長軸7.08m・短軸6.78m・面積48.00㎡を測り、平面形は方形を呈している。壁高は5cm以下であり、プランの確認の段階で不明確であった。覆土もほとんどない状態である。

焼土が2か所から検出され、北西壁に近い方をF1号・中央部に近い方をF2号とする。F1号は径80cmで円形を呈し、確認面から深さ25cmほど掘り窪めている。その中には、焼土が皿状に堆積しているが、底部は火熱を受けた様子があまり見られず、黒褐色土の土壌状の掘り込みの中に焼土が投棄された様相を示しているため、炉跡と断定することは出来ない。F2号は、長径40cm・短径30cmの楕円形を呈し、確認面から深さ16cm程掘り窪めた地床炉である。炉内には焼土が厚く堆積し、炉床は火熱を受けてロームが赤変していた。さらに、本跡内西側に径15cm程の円形で、深さ12cmの柱穴状に掘り込まれたくぼみがみられる。柱穴は4か所検出され、P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>は支柱穴と思われる。深さ33～50cmで、断面は円筒形に掘り込まれ、平面形は径約25cmを測る円形を呈している。本跡の南西側にSK15が本跡を切って重複しており、本跡より新しいものと思われる。遺物は土師式土器片が出土している。



第92図 第40号住告跡実測図

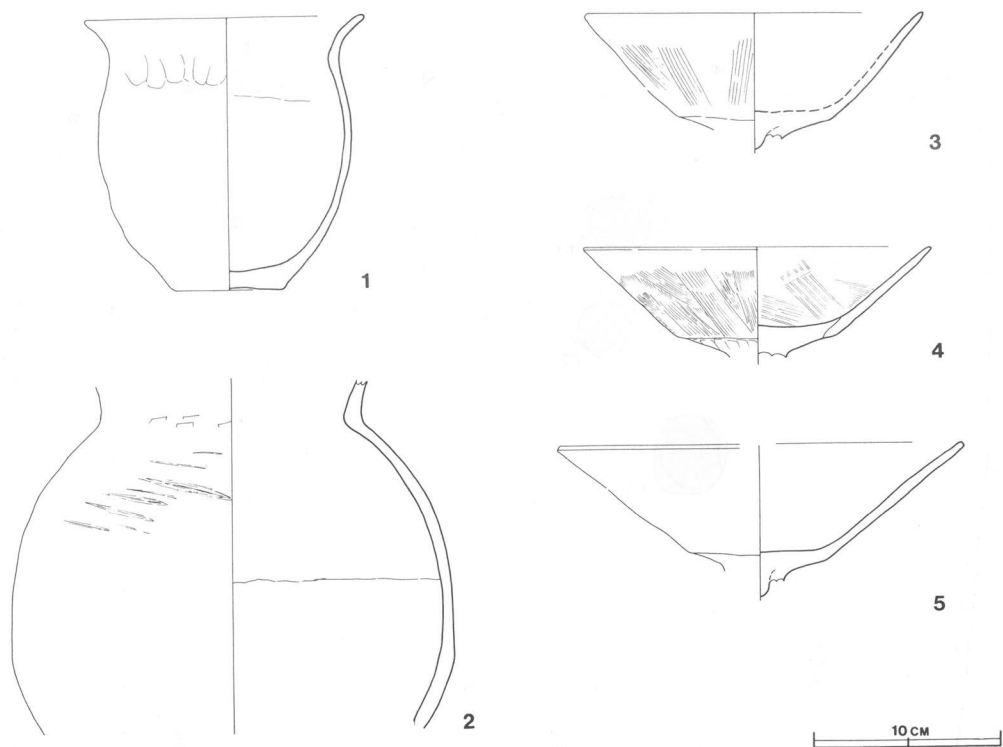


第93図 第41号住居跡実測図

第41号住居跡 (第93図)

本住居跡はG6a<sub>4</sub>・a<sub>5</sub>調査区を中心に確認されたもので、遺跡東部端に位置し、遺構の一部はエリア外に存在する。長軸方向はN-47°Eを指し、規模は長軸7.68m・短軸7.58m・面積58.21㎡を測り、平面形は方形と考えられる。壁高は13~20cmを測り、やや外反しながら立ち上がる。南東壁は道路で切られており確認できない。床面はやや平坦で軟らかいが、一部攪乱を受けている。

炉跡は3か所検出され、北西壁に近い方をF1号、その南東側をF2号、本跡のやや中央のものを



第94図 第41号住居跡出土遺物実測図

F3号とした。F1号は、径80cmの円形に近い平面形を呈し、焼土ブロック・焼土粒子・ローム粒子が皿状に堆積していた。F2号は径68cmのほぼ円形状の平面形を呈し、F1号とはほぼ同様な色調で暗赤褐色土が大半である。また、その覆土には焼土粒子・ローム粒子・焼土ブロック等が堆積している。F3号も径88cm程の円形で、確認面から34cm程掘り窪められた地床炉である。色調も暗褐色土系で焼土粒子・ローム粒子が混入している。炉床はF1号・F2号・F3号とも焼土がよく堆積している。柱穴は3か所検出され、主柱穴と思われる。1か所はエリア外に存在するものと思われる。規模は、深さ76~86cmを測りやや深い。径も24~38cm程でそれぞれ円形を呈しており、断面は円筒形でやや垂直に掘り込まれている。

本跡の覆土は暗褐色土・褐色土で、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子が混入し、自然堆積している。遺物は土師式土器が出土している。

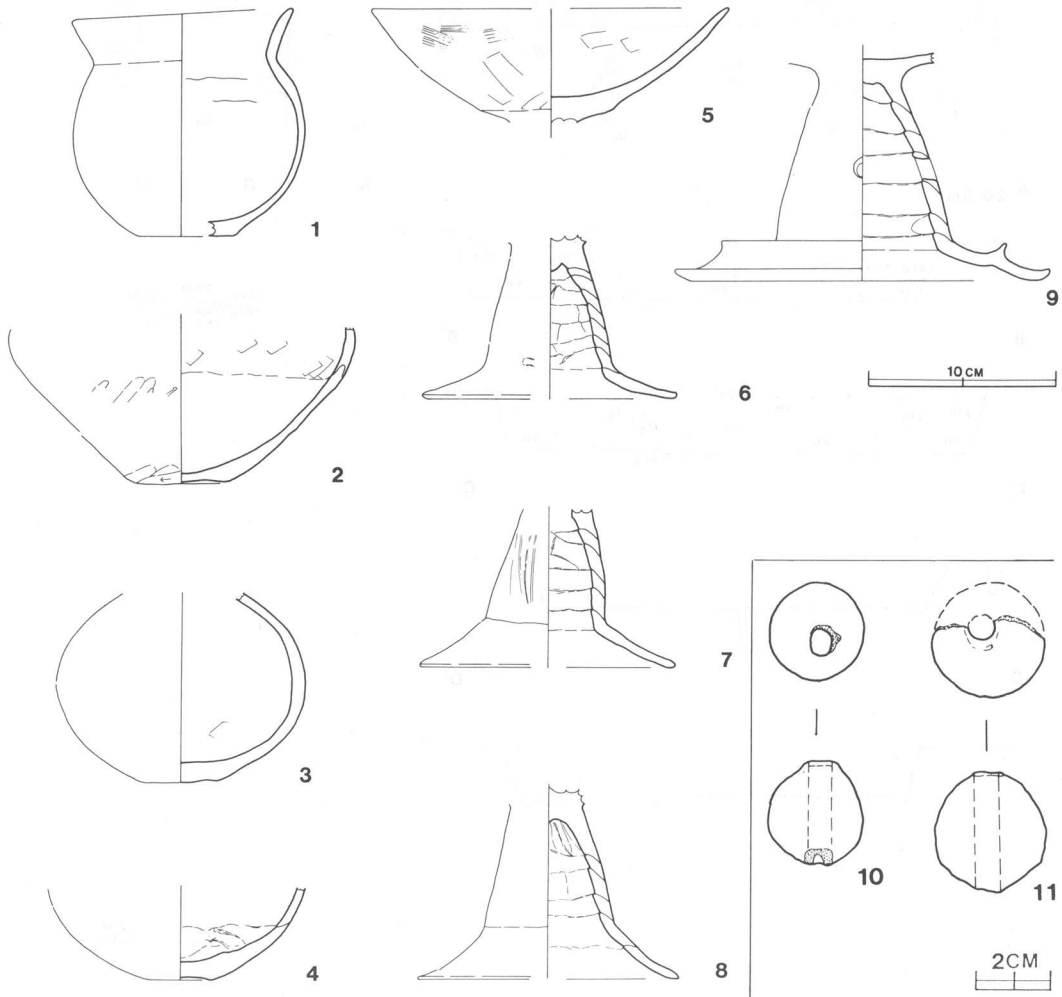
出土遺物解説表

SI-41

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (14.8) B (14.4) C 6.0	底部はやや厚手の器厚を有し若干上げ底となる。胴部は器厚を減じ、ゆるやかに内彎して膨らみ、頸部から口縁部にかけて外反して、口唇部でさらに外反をみせ丸味を帯びている。	口内面—ヘラナデ 外面—横ナデ 指圧痕 体部内外面—ナデ 底部内外面—ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ 砂礫 スコ リア 雲母	40% PL 69-2

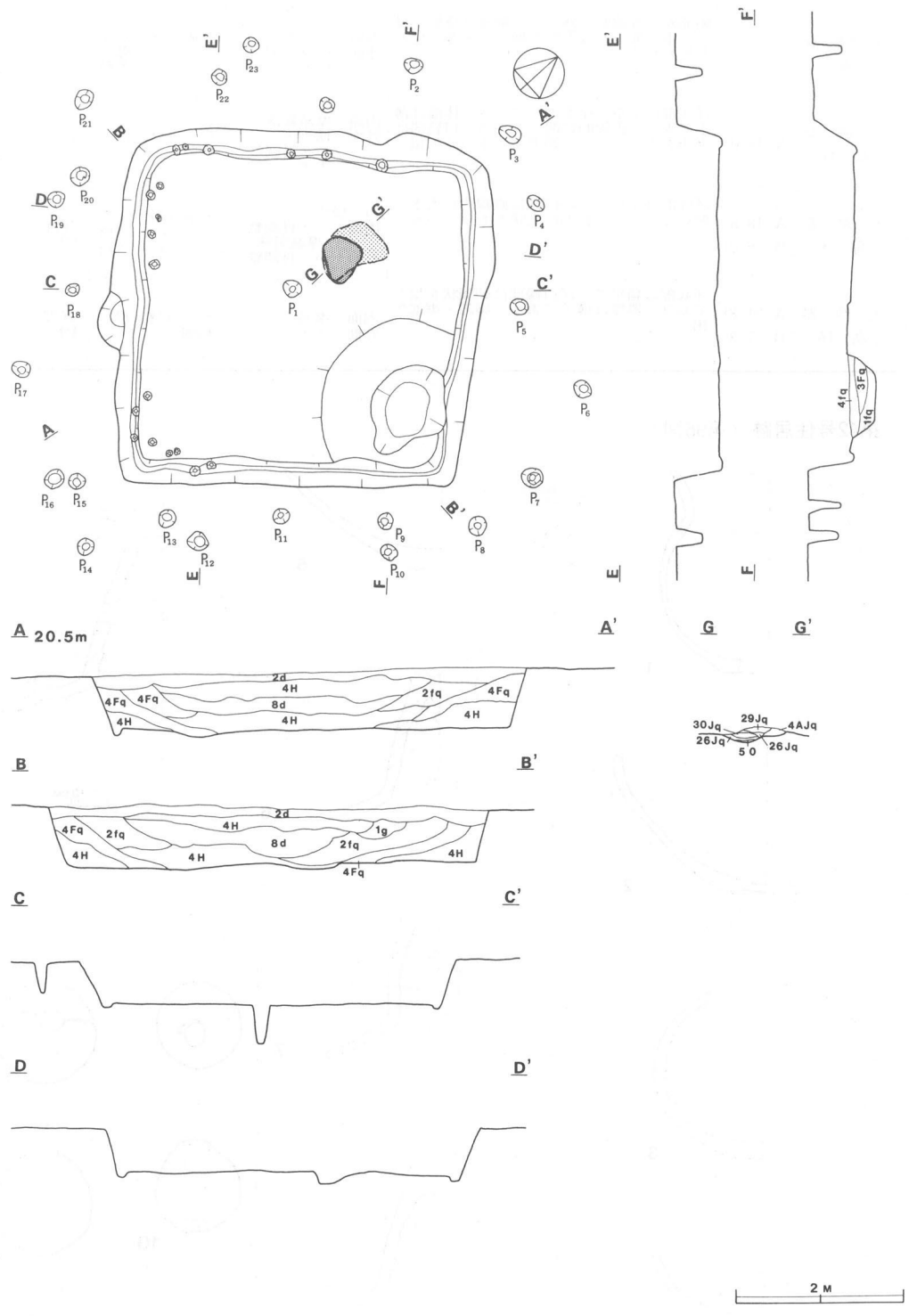
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
2	土師器 壺	B (18.5)	頸部から直線的に外反し、胴部は球形を呈し、中位部下から器厚を増し、底部に至ると思われる。	内面—ヘラナデ 外面—ヘラナデ ナデ	普通・砂粒・明赤 褐 黒褐	20%
3	土師器 高杯	A (18.0)	坏底部はやや器厚を増しており、体部は薄手で大きく直線的に開いている。口唇部は丸味をもっている。頸部から下方は欠損。	内面—摩滅剥落 外面—横ナデ ハケ目調整 ナデ	やや・砂粒・橙 軟弱	坏部40%
4	土師器 高杯	A 18.5 B (6.0)	坏底部は平坦で、坏口縁は直線的に大きく開いている。口唇部は丸味をおびている。	口—横ナデ 内面—ハケ目調整 (摩滅気味) 外面—ハケ目調整	普通・砂粒・にぶ スコい橙 リア 灰白	坏部90% PL 69—3
5	土師器 高杯	A (21.8) B (7.3)	坏底部は扁平で、坏口縁部は朝顔状を呈しており、器厚は薄手である。脚部・裾部欠損。	内面—摩滅 外面—ナデ	やや・砂粒・橙 軟弱	坏部50% PL 69—4

第42号住居跡 (第96図)



第95図 第42号住居跡出土遺物実測図





第96图 第42号住居跡実測図

本住居跡はF5a5・a6調査区を中心に確認されたもので、遺跡の東部中央第40号住居跡の北側に位置し、長軸方向はN-46°Eを指す。規模は長軸4.44m・短軸4.23m・面積18.78㎡を測り、隅丸方形を呈している。壁高は40~50cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には壁溝がめぐり、また、壁溝には壁柱穴が検出されている。

炉跡は床面の中央からやや北に検出され、径80cmほどの不定形を呈し、確認面から18cmほど掘り窪められた地床炉となっている。炉内には焼土・炭化粒子・ローム粒子等が堆積し、炉床は焼けたローム土で固い。

貯蔵穴は東壁コーナー部から検出され、径84cmほどの不定形を呈し、播鉢状に深さ28cmほど掘られている。床面は平坦で、壁は外反気味である。その覆土の色調は褐色土が大半で、ローム粒子・焼土粒子・炭化物・ロームブロック等が混入している。また自然堆積土で、全体にしまりを帯びている。柱穴は24か所検出されているが、本跡内に1か所、他は本跡をとりまくように外側に検出されている。平面形はほぼ円形を呈しており、径20cm内外、深さ25~48cmで、やや円筒形に掘り込まれている。

本跡の覆土は、上層に暗褐色土、次いで褐色土が大半でローム粒子・炭化粒子・焼土粒子・ロームブロックが混入し、床面は凹凸を呈しややしまりを帯びている。遺物は、壺・高坏・埴等の土師式土器片と土錘が検出された。

出土遺物解説表

SI-42

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 小型甕	A 11.6 B 11.8 C 5.0	底部は平坦で厚手であり、体部は薄手で半球状を呈する。口縁部は外反し、口唇部でさらに外反して丸味を帯びている。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面 底部内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・にぶ 砂礫 い橙 スコ リア 雲母	90% PL 69-5
2	土師器 壺	B 8.3 C 5.0	底部上げ底で、胴部は器厚を減じてゆるやかに内彎して膨らむ。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶ スコ リア い黄 橙 黒褐	底部100%
3	土師器 埴	B 10.2 C 4.0	底部は平坦でやや厚手の器厚を有している。体部は器厚を減じ大きく弧を描き頸部へ至っている。体部中で最大径を測っている。口縁部欠損。	内面一ヘラナデ (底の部分は摩滅) 外面一ヘラナデ	良好・砂粒・明赤 スコ リア い黄 い橙	30% (底部100%)
4	土師器 埴	B 4.9 C 3.3	やや厚手の器厚を有した底部はやや上げ底を呈し、体部の器厚は薄手で弧を描いている。	内面一指ナデ 外面一ヘラナデ	普通・砂粒・明赤 い黄 褐 橙	内面にわら 痕有り 20% (底部100%)
5	土師器 高坏	A (19.0) B (6.0)	坏底部平坦、口縁はゆるやかに内彎を呈するような開きを見せている。口唇部でやや外反している。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	良好・砂粒・橙 にぶ い赤 褐	坏部60% PL 69-6
6	土師器 高坏	B (8.3) C (13.5)	脚部はやや内彎ぎみに開き、裾部はなだらかに下方へ開き、先端は丸味をもっている。脚部内面に輪積痕あり。	内面一輪積みのあと ナデ 外面一ミガキが摩滅 裾一横ナデ	良好・砂粒・橙 明赤 褐	脚部70% PL 70-1
7	土師器 高坏	B (8.4) C (13.5)	脚部は中央で膨らみをもち、裾部に移行し裾部で大きく下方へ開いている。	内面一輪積みのあと ナデ 外面一ヘラナデ 裾一横ナデ	普通・砂粒・にぶ スコ リア い黄 橙 橙	脚部60% PL 70-2

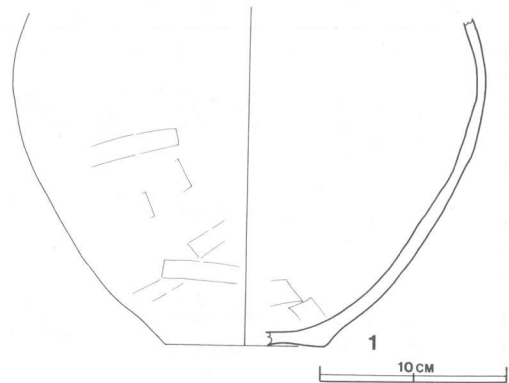
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
8	土師器 高環	B(9.2) C(13.8)	脚部は直線的に開き、内面に輪積痕を有している。裾部は下方に大きく開いている。	内面—輪積痕 紋り痕 外面—ナデ 裾—横ナデ	普通・砂粒・灰褐色	脚部60%
9	土師器 装飾器台	B(11.6) C 19.9	受底部は平坦で、頸部は「く」の字状を呈している。脚部は内彎しながら開き、脚柱裾部で大きく屈折させ、一段の稜を有し、改めて外反をみせている。内面に輪積痕を有している。全体的に器厚は一定で頑丈な感じをもつ。	内面—輪積あり ナデ 外面—ナデ 裾—横ナデ	良好・砂粒・にぶい橙	脚部90% PL 70-3
10	土製品 土玉	2.8×2.55 孔径0.7 16g	ほぼ球形を呈している。	ナデ		
11	土製品 土玉	3.2×3.0 孔径0.7 16.5g	ほぼ球形を呈している。	ナデ		

### 第43号住居跡（第39図）

本住居跡はF3d<sub>9</sub>・e<sub>9</sub>調査区を中心に確認されたもので、第19号住居跡と重複し大半がエリア外に位置する。長軸方向はN-19°Eを指し、規模は長軸7.34m・短軸2.24m・面積16.44㎡を測り、平面形は長方形を呈している。壁高は40～55cmを測り、やや垂直に立ち上がっている。壁下には壁溝が検出され壁柱穴も11か所確認された。床面は凹凸状でしまりを帯びている。

炉跡は中央からやや南に検出され、長径100cm・短径83cmを測り、楕円形に近い平面形を呈している。覆土にはローム粒子・焼土粒子・焼土ブロック・ロームブロックが混入し、固く堆積している。炉床は、ロームが熱を受けて固い。柱穴は3か所検出されているが、P<sub>2</sub>は第19号住居跡の支柱穴で、本跡のはP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>と思われる。平面形は円形で、深さ約30cmを測り、円筒形に掘り込んでいる。

本跡の覆土の色調は暗褐色・褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子が混入し、ややしまりを帯びている。本跡は第19号住居跡の床面を約15cmほど掘り下げて構築しているため、本跡の方が新しい遺構と思われる。道路下にかかる遺構の状況は良好であったが、他は攪乱等を受けている。また、多量の焼土が検出されているため焼失家屋と考えられる。遺物は土師式土器片が検出されている。



第97図 第43号住居跡出土遺物

出土遺物解説表

SI-43

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	B (17.4) C ( 8.4)	底部は平坦でやや器厚を増しており、胴部は器厚を減じ胴部中位で最大径を測り内彎して頸部に至ると思われる。底部の一部・頸部・口縁部欠損。	内面—ヘラナデ (所々摩滅) 外面—ヘラナデ (摩滅気味) 底—摩滅	普通・砂粒・明赤褐 にぶい褐	底部50% (全体30%) PL 70-4

第44号住居跡 (第98図)

本住居跡はF6b<sub>6</sub>・c<sub>6</sub>調査区を中心に確認されたもので、遺跡東部地区内最北に、第37号住居跡と第46号住居跡を南に見る位置に存在し、長軸方向はN-42°Wを指す。規模は長軸5.63m・短軸5.54m・面積31.30㎡を測り、平面形は方形を呈している。壁高は13~25cmで、やや垂直に立ち上がっている。床面は凹凸ではあるが、よく踏み固められている。柱穴は3か所検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>は主柱穴と考えられる。これらは85cm前後の深さを持ち、平面形は25cm前後の径をもった円形を呈し、円筒形に掘り込んでいる。P<sub>4</sub>と思われる主柱穴は攪乱を受け消滅している。

炉跡は、本跡中央から北西壁側に検出され、長径94cm・短径48cmの楕円形で、確認面から17cmほど掘り窪められた地床炉である。炉内覆土は主に暗褐色土で、焼土ブロック・炭化粒子・ローム粒子が皿状に堆積している。炉床はやや固い。

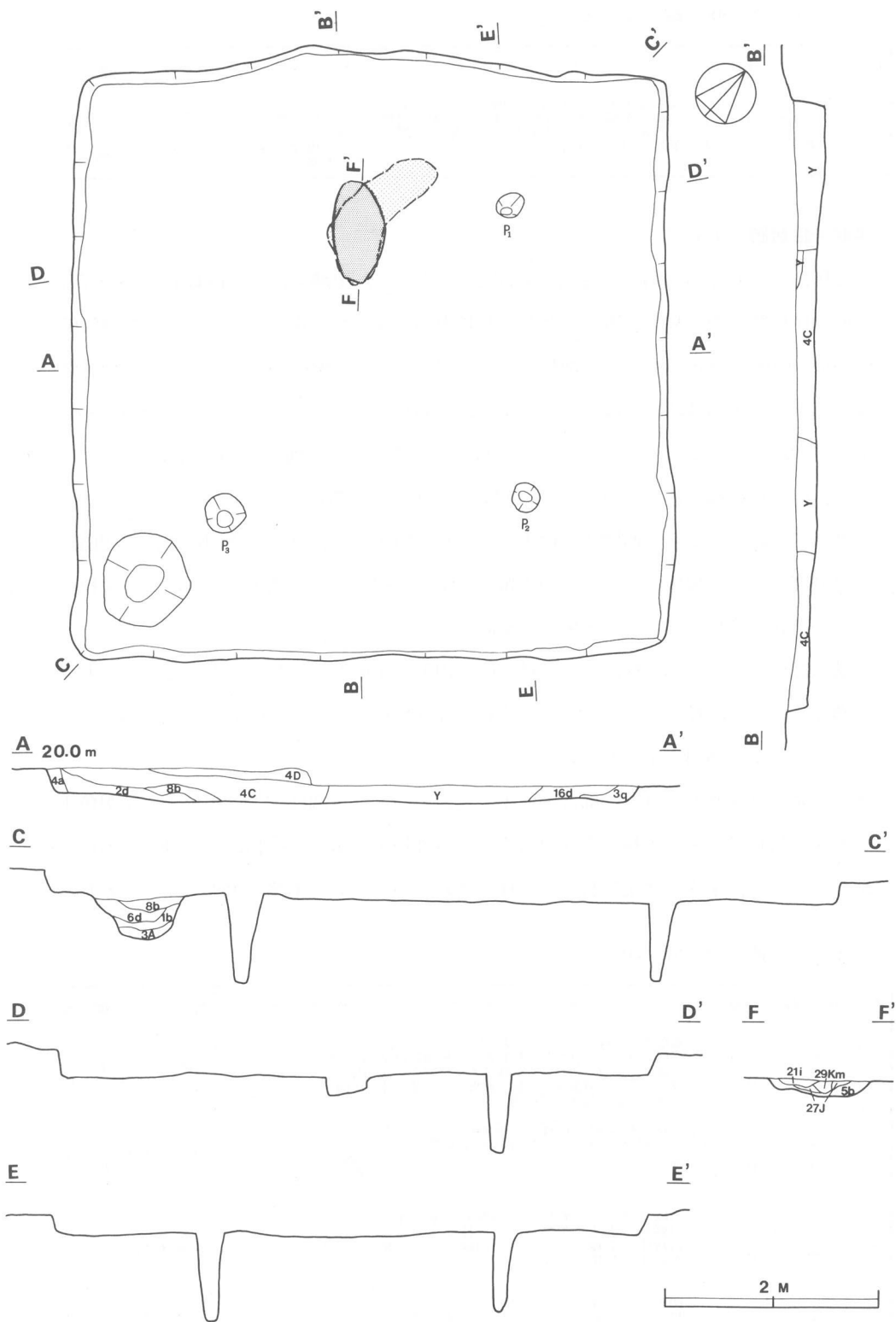
貯蔵穴は南コーナー部に検出され、径90cmの円形の平面形を呈し、深さ38cmほどのものである。その覆土は、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子等が堆積している。底面はやや凹凸で、しまりを帯びている。壁は傾斜を示しながら立ち上がる。

本跡の覆土は攪乱を受け、一部は床面まで及んでいる。色調は、主に褐色土・暗褐色土で、ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子等が混入する自然堆積土である。遺物は、土師式土器片が検出されている。また、床面には炭化材が多く検出されているため、本跡は焼失家屋と思われる。

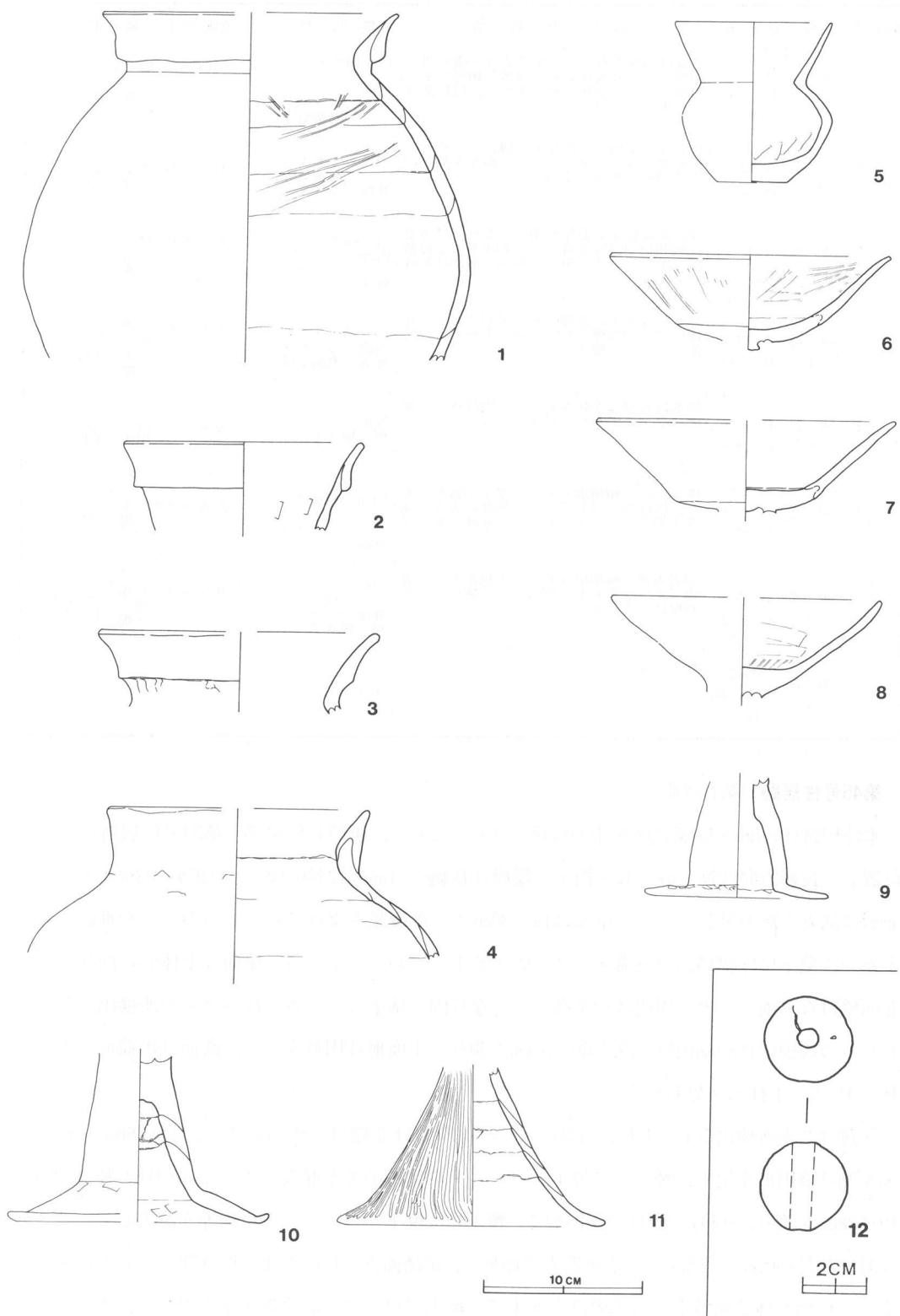
出土遺物解説表

SI-44

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 壺	A (18.6) B (21.7)	頸部から口縁にかけては直線的に立ち上がり、口縁部は大きく外反し、口唇部では極端に器厚を減じている。折り返し口縁である。胴部の器厚は一定で、肩部はなで肩。胴部中位に最大径を測り、弧を描き底部へ至る。	口—横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—	普通・砂粒・明赤褐	40% PL 71-1
2	土師器 壺	A 15.2 B ( 5.5)	口縁は折り返し口縁で、直線的な立ち上がりを見せている。口唇部は丸味を帯びている。	口—横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—ナデ	良好・砂粒・にぶい橙	口縁部95%
3	土師器 甕	A (17.4) B ( 4.8)	口縁部は大きく外反し、器厚を一定に保ち、口唇部で丸味を帯び、さらに外反している。口縁中位で稜をもつ、複合口縁である。頸部以下は欠損。	口—横ナデ	普通・砂粒・橙	口縁部40%
4	土師器 壺	A (16.5) B ( 9.2)	頸部から口縁にかけては器厚を増し外反を見せ、口唇部でさらに外反し丸味を帯びている。胴部の肩から中位にかけて大きく開く様相を呈している。		普通・砂粒・にぶい橙 スコリア 灰褐 (少)	口縁部30%



第98图 第44号住居跡実測図



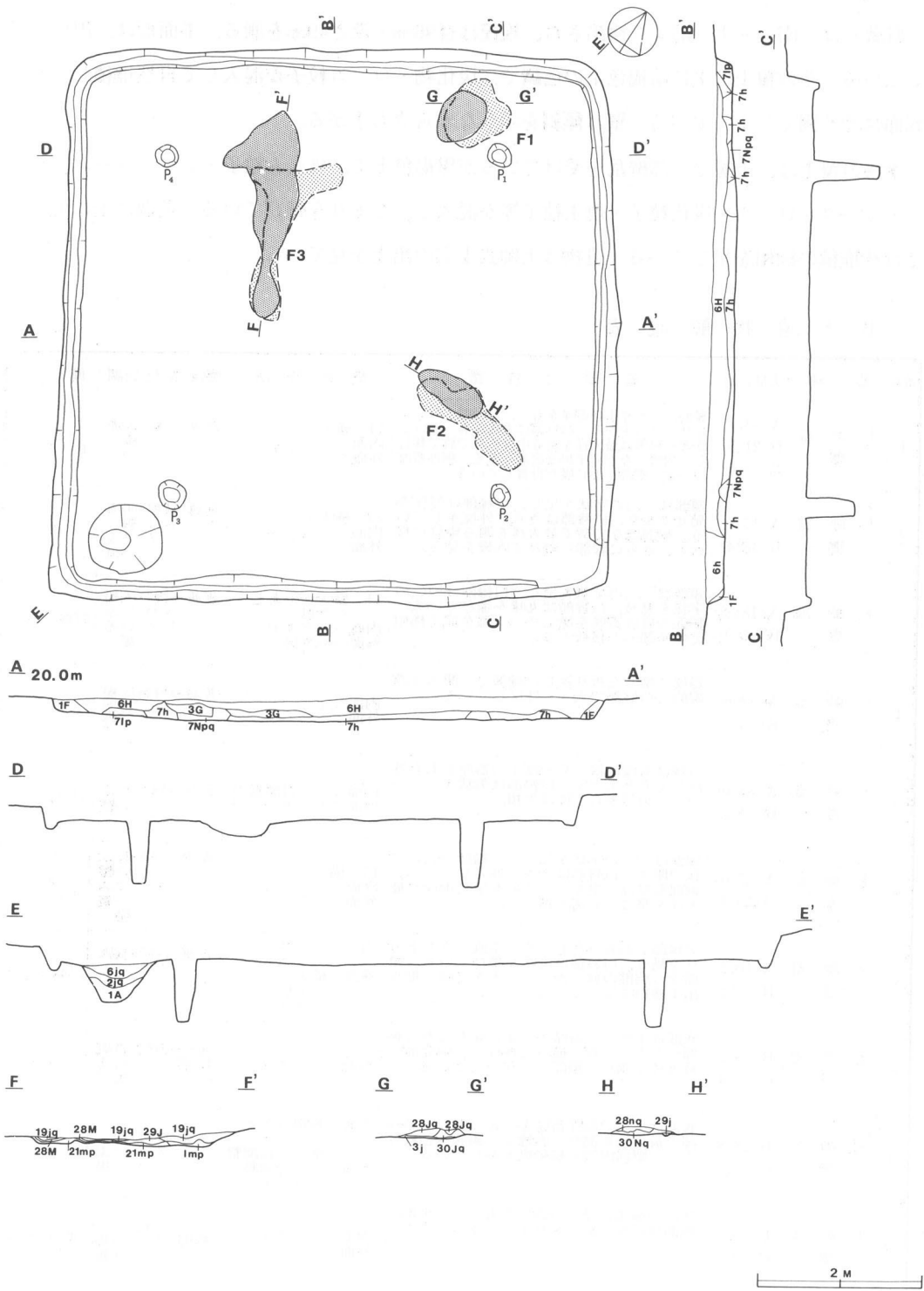
第99図 第44号住居跡出土遺物実測図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
5	土師器 卍	A 10.0 B 4.5 C 10.0	底部は器厚を有し、平坦で大きく張り出し、胴部中位で最大径をもち内彎し頸部に至る。口縁は「八」の字状に立ち上がる。口唇部はやや尖がりを見せている。	口—横ナデ ヘラナデ 内面—ヘラナデ 外面—ヘラナデ (摩滅気味)	普通・砂粒・褐色に赤褐色	70% PL 70-5
6	土師器 高環	A 17.8 B 5.5	環底部は平坦で、環部・口縁はゆるやかに弧を描きながら立ち上がり、器厚を減じ口唇部付近で外反している。	内面—ミガキ (摩滅気味) 外面—ミガキ	良好・砂粒・濃い橙	環部95% PL 70-6
7	土師器 高環	A (19.0) B (5.8)	環底部は扁平で器厚を増しており、環体部は朝顔状で器厚を減じつつ丸味をもつ口唇部へ至っている。頸部・脚部・裾部は欠損。	口—横ナデ 内面—ヘラナデ ヘラケズリ 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・橙・スゴリア黄橙	環部30%
8	土師器 高環	A (18.6) B (6.0)	環底部は厚手の器厚をもち平坦である。環体部はやや内彎しながら立ち上がり、口唇部でさらに内彎する。	口—横ナデ 内面—ヘラケズリ 外面—摩滅気味	普通・砂粒・明赤・スゴリアに赤褐色	環部50% PL 70-7
9	土師器 高環	B (7.5) C 11.6	脚部は器厚は厚味を有して、円柱状で、裾部は平坦な広がりを見せている。	外面—ヘラナデ 裾—横ナデ ヘラナデ	普通・砂粒・橙・褐色灰	脚部80% PL 71-3
10	土師器 高環	B (10.6) C (15.2)	脚部内側に輪積痕をもつ。厚手の器厚を有し、円柱状を呈している。裾部は大きく開き先端でそりかえりを見せて、丸味を帯びている。	内面—輪積のあとヘラナデ ヘラナデ 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・濃い褐色・スゴリア	脚部80% PL 71-4
11	土師器 高環	B (9.9) C 16.8	脚部内側に輪積痕を有し、脚柱部形は二等辺三角形を思わせ、裾部へ広く開いている。器厚はやや一定。	内面—ヘラナデ 横ナデ 外面—ミガキ 裾—横ナデ	良好・砂粒・明赤・褐色灰	脚部70% PL 71-2
12	土製品 土玉	2.8×2.75 孔径0.65 18.5g	球形を呈している。	ナデ		100%

#### 第45号住居跡（第100図）

本住居跡はF4g<sub>8</sub>・h<sub>8</sub>調査区を中心に確認されたもので、第33号住居跡・第34号住居跡の北側に位置し、長軸方向はN-57°Eを指す。規模は長軸6.74m・短軸6.68m・面積45.03㎡を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は14~30cmで一部攪乱を受けているものの、やや垂直に立ち上がり、壁下には幅15cmの壁溝がほぼ一周するようにめぐっている。床面は全体的に凹凸を示し、北西壁付近・南コーナー周辺はやや高く、かなり固く締まっている。柱穴は4か所検出され、それぞれの規模は径30cm内外・深さ60~83cmを測り、平面形は円形を呈し、断面は円筒形である。P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>は、支柱穴と思われる。

炉跡は3か所検出され、F1号~F3号とした。F1号は北壁コーナー近くに、長径66cm・短径50cmを測る楕円形を呈し、覆土には焼土ブロック・炭化粒子等が混入している。F2号も長径90cm・短径38cmを測り、F1号と同様に楕円形で、覆土には焼土ブロック・炭化物等が混入している。F3号は長径130cm・短径20cmの不定形の平面形で、確認面から13cmあまり掘り窪められた地床炉である。色調も極暗褐色土・暗赤褐色土が主で、焼土ブロック・炭化物少量が混入し、きわめて固い状況である。また、炭化材・焼土が本跡内にきわめて多量に検出されていることから、本跡は



第100图 第45号住居跡実測図



焼失家屋と考えられる。

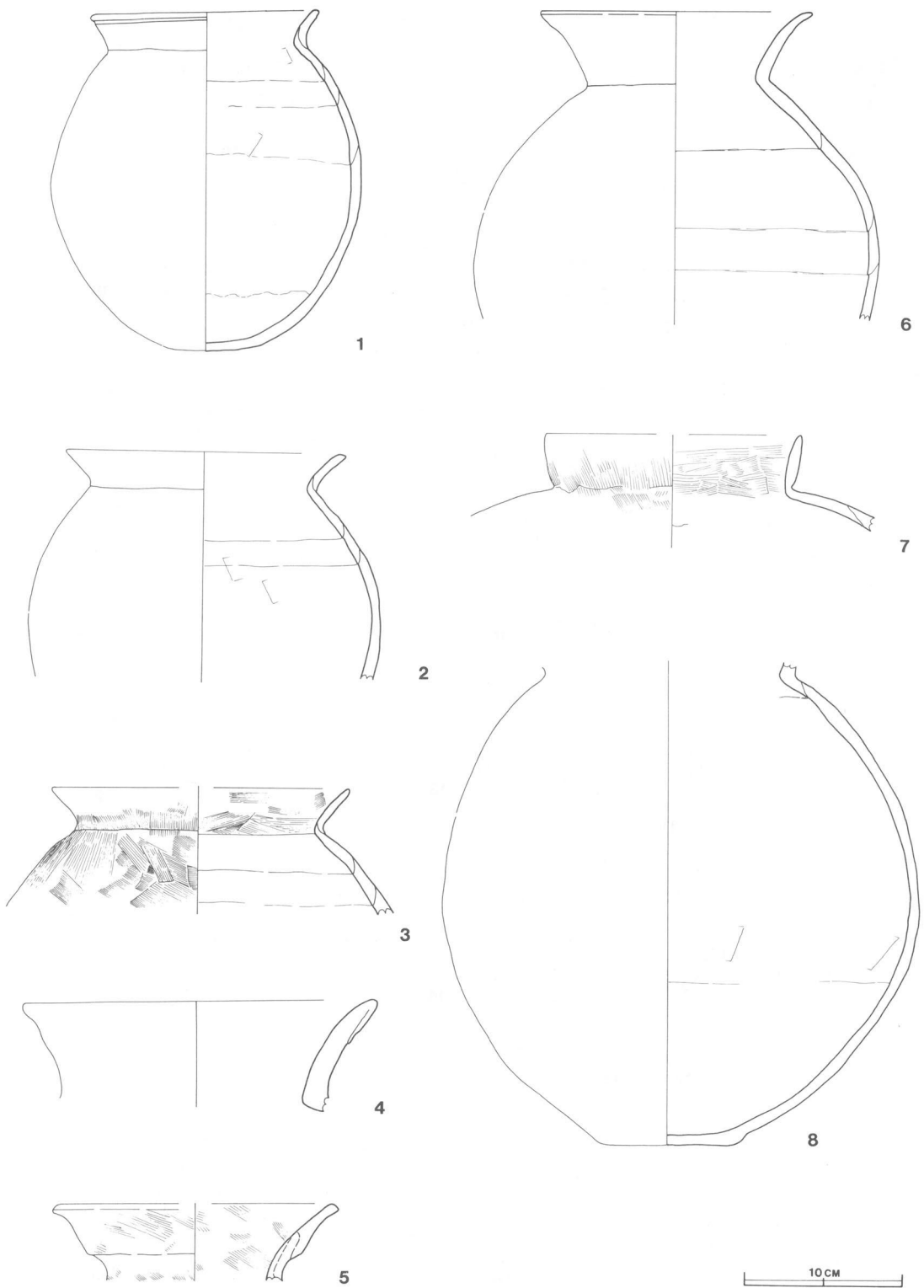
貯蔵穴は、南コーナー部より検出され、規模は径96cm・深さ49cmを測る。平面形は、円形を呈している。その覆土は主に暗褐色土の色調で、炭化物・ローム粒子が混入して自然堆積しており、底面はやや固くしまっている。壁は傾斜を示しながら立ち上がる。

本跡の覆土は、上層で一部攪乱を受けているが黒褐色土で、ローム粒子・ソフトロームブロック・ロームブロック・炭化粒子・焼土粒子等が混入し、しまりを帯びている。色調は主に黒褐色で自然堆積の様相を呈している。遺物は土師式土器の出土を見ている。

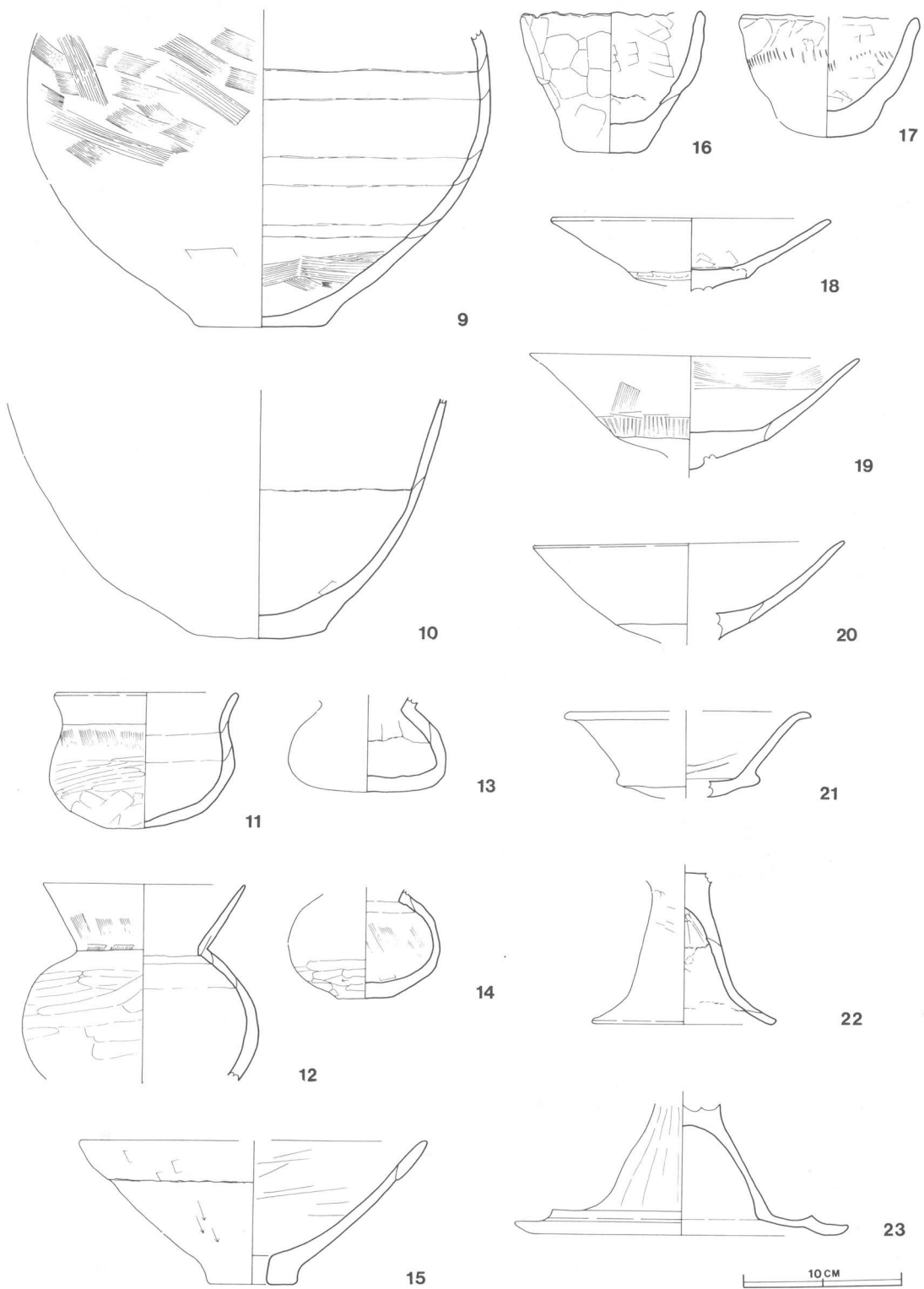
出土遺物解説表

SI-45

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器	A 13.7 B 21.5 C 5.6	頸部はやや厚手の器厚を有し、口縁部へ「八」の字状に立ち上がり、口唇部は丸味をもっている。胴部の肩部は最大径を測る中位へなで肩で移行し、内彎しながら平坦な底部へ至る。胴部器厚は一定。胴部一部に煤が付着している。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・明赤褐色	98% PL 71-5
2	土師器	A 17.4 B (18.4)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反を見せており、口唇部はさらに外反をしている。胴部の肩部は器厚を増しつつ、弧を描く様相で中位部へと移行し、さらに底部に向けて内彎を見る。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・明赤褐色にぶい橙	50%
3	土師器	A (18.8) B (8.0)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は「八」の字状を見せ、口唇部は丸味を帯びている。胴部の肩部は器厚を増しつつ、弧を描く様相で中位部へと移行する。	口一横ナデのあとハケ目 内面一ヘラナデ 外面一ハケ目	普通・砂粒・灰褐色にぶい赤褐色	口縁部50%
4	土師器	A 22.6 B (6.5)	器厚を増した折り返し口縁部で、開きは直線的で口唇部で大きく外反している。	内面>ナデ 外面	普通・砂粒・灰褐色にぶい橙	50%
5	土師器	A (18.0) B (4.5)	口縁は有段口縁でやや厚手の器厚をもち外反して立ち上がる。口唇部は角状を呈している。頸部から下位は欠損。	内面>ハケ目調整のあとナデ 外面	良好・砂粒・にぶい橙	口縁部40%
6	土師器	A 17.0 B (19.3)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁は「八」の字状で開き、口唇部は大きく外反している。胴部器厚は一定で、なで肩を呈し中位で最大径を測る。底部欠損。	口一横ナデ 内面>ヘラナデ 外面	普通・砂粒・にぶい橙にぶい黄褐色	50% PL 72-2
7	土師器	A (16.2) B (5.2)	口縁部は膨らみをもちやや垂直に立ち上がりを見せ、口唇部は丸味を帯びている。頸部から胴部の肩にかけて、大きく横に張り出す様相を呈している。	内面一ハケ目 ヘラナデ 外面一横ナデ ハケ目調整 ヘラナデ	普通・砂粒・褐色にぶい黄褐色(少)	口縁部20%
8	土師器	B 29.9 C (8.4)	底部は平坦で、器厚を一定に保ちながら胴部へと大きく弧を描いて移行し、中位部で最大径を測り、頸部へと向かっている。	内面一ヘラナデ	やや・砂粒・明褐色に暗赤褐色	60%
9	土師器	B (18.8) C 8.2	底部は平坦で胴部器厚を一定に保ち、中位部で最大径を測り、内彎し、頸部へと移行する。胴部内側に輪積痕を有している。	内面一輪積のあとヘラナデ 一部ハケ目調整 外面一ハケ目調整 ヘラナデ	普通・砂粒・橙褐色にぶい黄褐色	40%
10	土師器	B (15.0) C 8.5	底部は極端に厚手の器厚を有しやや平坦で、胴部は器厚を減じせり上がるように立ち上がる。	内面一ヘラナデ 外面一ナデ	やや・砂粒・にぶい黄褐色にぶい灰褐色	底部100% (30%)
11	土師器	A 11.6 B (8.5)	底部は丸底で大きく張り出す様相を呈し、中位部から垂直に立ち上がり、口縁部では外反している。口唇部でさらに外反し、丸味をおびている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ハケ目 ミガキ	良好・砂粒・にぶい黄褐色	100%(完) PL 72-2



第101図 第45号住居跡出土遺物実測図(1)

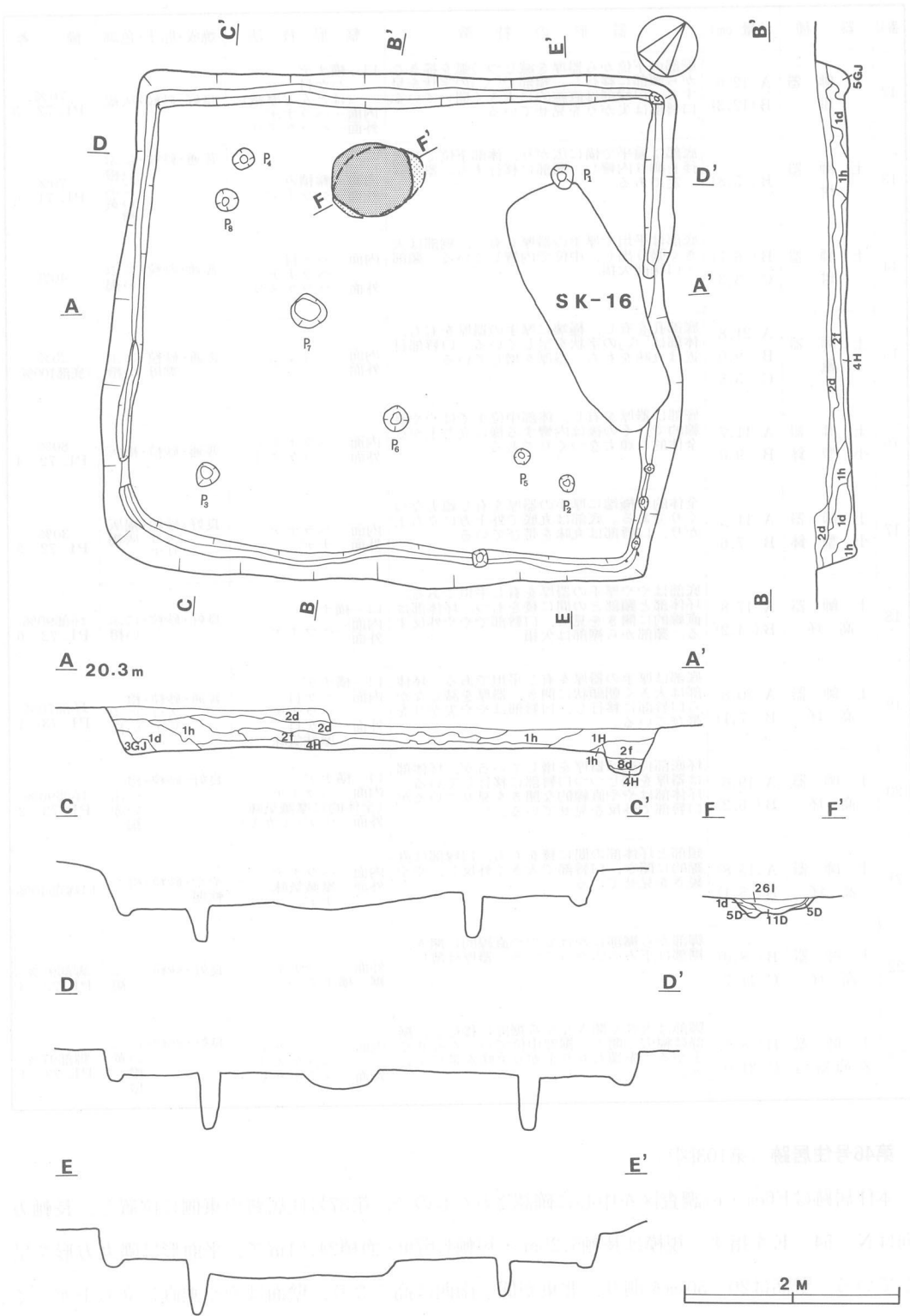


第102図 第45号住居跡出土遺物実測図(2)

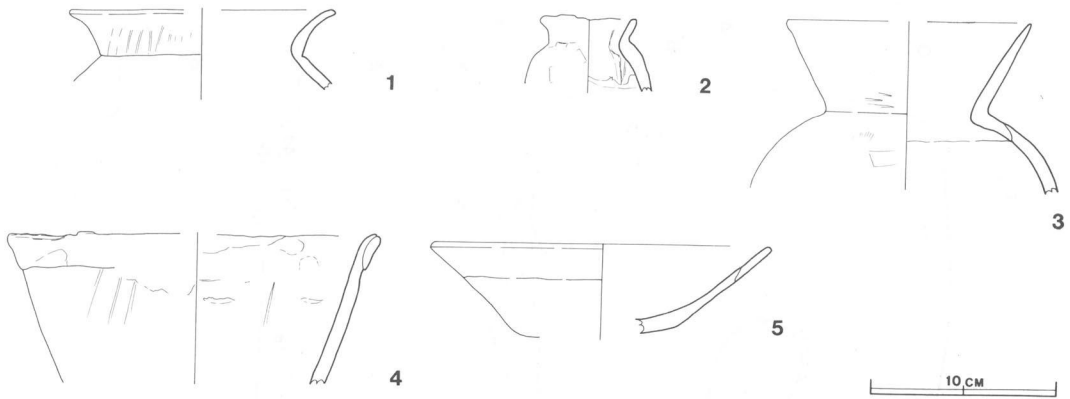
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
12	土師器 埴	A 12.6 B (12.3)	胴部の下位から器厚を減じつつ弧を描きながら頸部に移行し、頸部で「く」の字状を呈する。口縁部は直線的に大きく開いている。口唇部は尖がりを見せている。	口—横ナデ ハケ目 (ほとんど摩滅) 内面—ヘラナデ 外面—ヘラケズリ	良好・砂粒・灰褐	70% PL 72-3
13	土師器 埴	B (5.8)	底部は扁平で横に広がり、体部下位で最大径を測り内彎し、頸部に移行する。器厚は一定である。	内面—輪積み 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ い橙 にぶ い黄 橙	70% PL 71-6
14	土師器 埴	B (6.7) C 3.3	底部は平坦で厚手の器厚を有し、胴部は大きく張り出し、中位で内彎している。頸部・口縁部欠損。	内面—ハケ目 ヘラナデ 外面—ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶ い褐	40%
15	土師器 甗	A 21.8 B 9.0 C 5.5	底部孔を有し、極端に厚手の器厚をもち、体部は「八」の字状を呈している。口唇部付近は丸味をもち、器厚を増している。	内面—ヘラナデ 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ 雲母 い橙	25% (底部100%)
16	土師器 小型鉢	A 11.7 B 9.0	底部は器厚を有し、体部中位まではやや直線的で、その後は内彎する様に立ち上がる。全体的に頑丈なつくりである。	内面—ヘラナデ 外面—ヘラケズリ	普通・砂粒・褐灰	80% PL 72-4
17	土師器 小型鉢	A 11.2 B 7.6	全体的に極端に厚手の器厚を有し頑丈なつくりである。底部は丸底で外上方に立ち上がり、口唇部は丸味を帯びている。	内面—ヘラナデ 外面—ナデ	良好・砂粒・褐灰 スコ 灰褐 リア	30% PL 72-5
18	土師器 高環	A 17.8 B (4.2)	底部はやや厚手の器厚を有し平坦である。坏体部と頸部との間に稜をもち、坏体部は直線的に開きを見せ、口唇部でやや外反する。頸部から裾部は欠損。	口—横ナデ 内面—ヘラナデ 外面—ヘラナデ	良好・砂粒・にぶ い橙	坏部90% PL 72-6
19	土師器 高環	A 20.8 B (7.1)	底部は厚手の器厚を有し平坦である。坏体部は大きく朝顔状に開き、器厚を減じながら口唇部に移行し、口唇部はやや尖がりを見せている。	口—横ナデ 内面—ハケ目 ヘラナデ 外面—ハケ目 摩滅気味	普通・砂粒・橙 スコ リア い橙	坏部70% PL 73-1
20	土師器 高環	A 19.6 B (6.2)	坏体部付近は器厚を増しているが、坏体部は器厚を減じつつ口唇部に移行している。坏体部はやや直線的な開きを見せているが、口唇部で外反を見せている。	口—横ナデ 内面—ヘラナデ (全体的に摩滅気味) 外面—ナデ(ミガキ)	良好・砂粒・橙 にぶ い赤 褐	坏部90% PL 73-2
21	土師器 高環	A (15.8) B (5.1)	頸部と坏体部の間に稜をもち、口縁部は直線的に開き、口唇部で大きく外反し、やや鋭さを見せている。	内面—ヘラナデ 外面—摩滅気味 ナデ	やや・砂粒・橙 軟弱	口縁部40%
22	土師器 高環	B (8.0) C 11.7	脚部から裾部にかけてやや直線的に開き、裾部は下方へ広がっている。器厚は薄い。	外面—ヘラナデ 裾—横ナデ	良好・砂粒・にぶ い褐	脚部97% PL 73-3
23	土師器 装飾器台	B (8.5) C 21.0	脚部は大きく開きながら裾部に移行し、裾部は幅広く開き、裾部中位でいったんせり上がる。先端もせり上がり丸味を帯びている。	内面—ヘラミガキ ヘラケズリ 外面—ヘラミガキ	良好・砂粒・にぶ い黄 橙 橙	脚部97% PL 73-4

#### 第46号住居跡 (第103図)

本住居跡はF6e<sub>6</sub>・e<sub>7</sub>調査区を中心に確認されたもので、第37号住居跡の東側に位置し、長軸方向はN-54°Eを指す。規模は長軸5.25m・短軸4.67m・面積24.51㎡で、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は20~50cmを測り、北東が低く南西は高くなり、壁面はやや垂直に立ち上がっている。なお、北壁中央部には第16号土壙が切り込んでおり、切り合いから見てこの土壙は新しい遺構であると思われる。床面は硬くふみ固められた状態である。柱穴は8か所検出され、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>



第103图 第46号住居跡実測図



第104図 第46号住居跡出土遺物実測図

が主柱穴と考えられる。それぞれ円形を呈し、径22cm内外・深さ32~55cmを測り、円筒形に掘り込まれている。

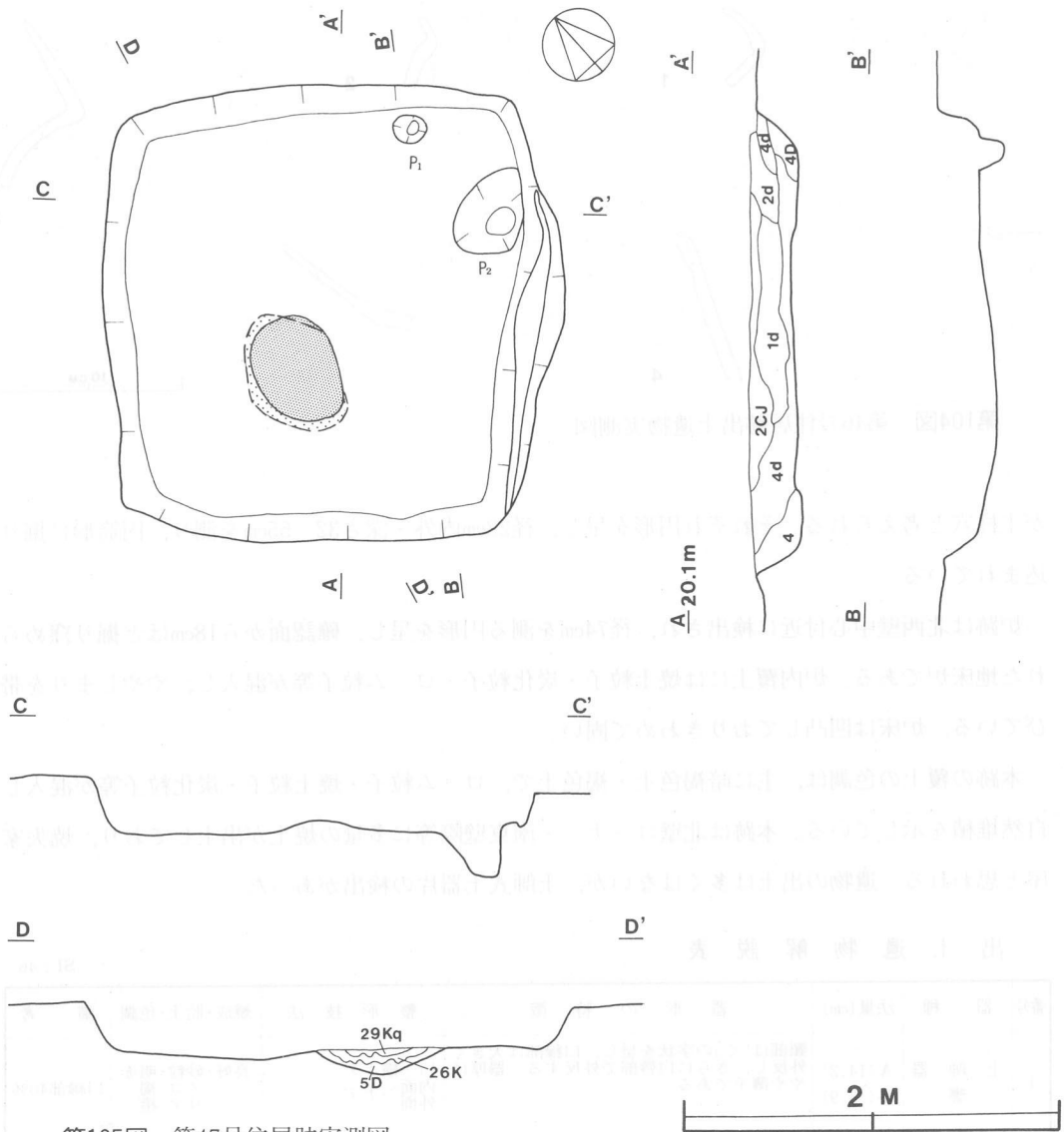
炉跡は北西壁中心付近に検出され、径74cmを測る円形を呈し、確認面から18cmほど掘り窪められた地床炉である。炉内覆土には焼土粒子・炭化粒子・ローム粒子等が混入し、ややしまりを帯びている。炉床は凹凸しておりきわめて固い。

本跡の覆土の色調は、主に暗褐色土・褐色土で、ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子等が混入し、自然堆積を示している。本跡は北壁コーナー・南東壁際等に多量の焼土が出土しており、焼失家屋と思われる。遺物の出土は多くはないが、土師式土器片の検出があった。

出土遺物解説表

SI-46

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (14.2) B ( 3.9)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は大きく外反し、さらに口唇部で外反する。器厚はやや薄手である。	口ー横ナデ 内面>ナデ 外面	良好・砂粒・明赤 スコ リア 橙	口縁部40%
2	土師器 小型壺	A 5.2 B ( 3.8)	胴部は厚手の器厚を有して、なだらかに下方向へ向かっている。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部でやや外反をしている。	外面ーヘラナデ	普通・砂粒・橙 スコ リア	50% PL 73-5
3	土師器 罎	A (13.0) B ( 9.0)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は直線的で「八」の字状を呈しており、口唇部付近で器厚を減じ先端は尖がっている。胴部は器厚を一定にし、弧を描くように張り出している。	内面ーミガキ 外面ーミガキ (摩滅気味)	良好・砂粒・にぶ い橙 黒	30%
4	土師器 鉢	A (19.4) B ( 8.0)	折り返し口縁で直線的であり、やや垂直に近い形で立ち上がる。口唇部は丸味をもっている。	口ーユビオサエ 内面>ナデ 外面	普通・砂粒・橙	口縁部25%
5	土師器 高坏	A 18.3 B ( 4.9)	坏部は直線的な開きを有し、口唇部で丸味をもっている。	口ー横ナデ 内面>ヘラナデ 外面 (全体的に摩滅)	普通・砂粒・にぶ スコ リア 橙	坏部90% PL 73-6

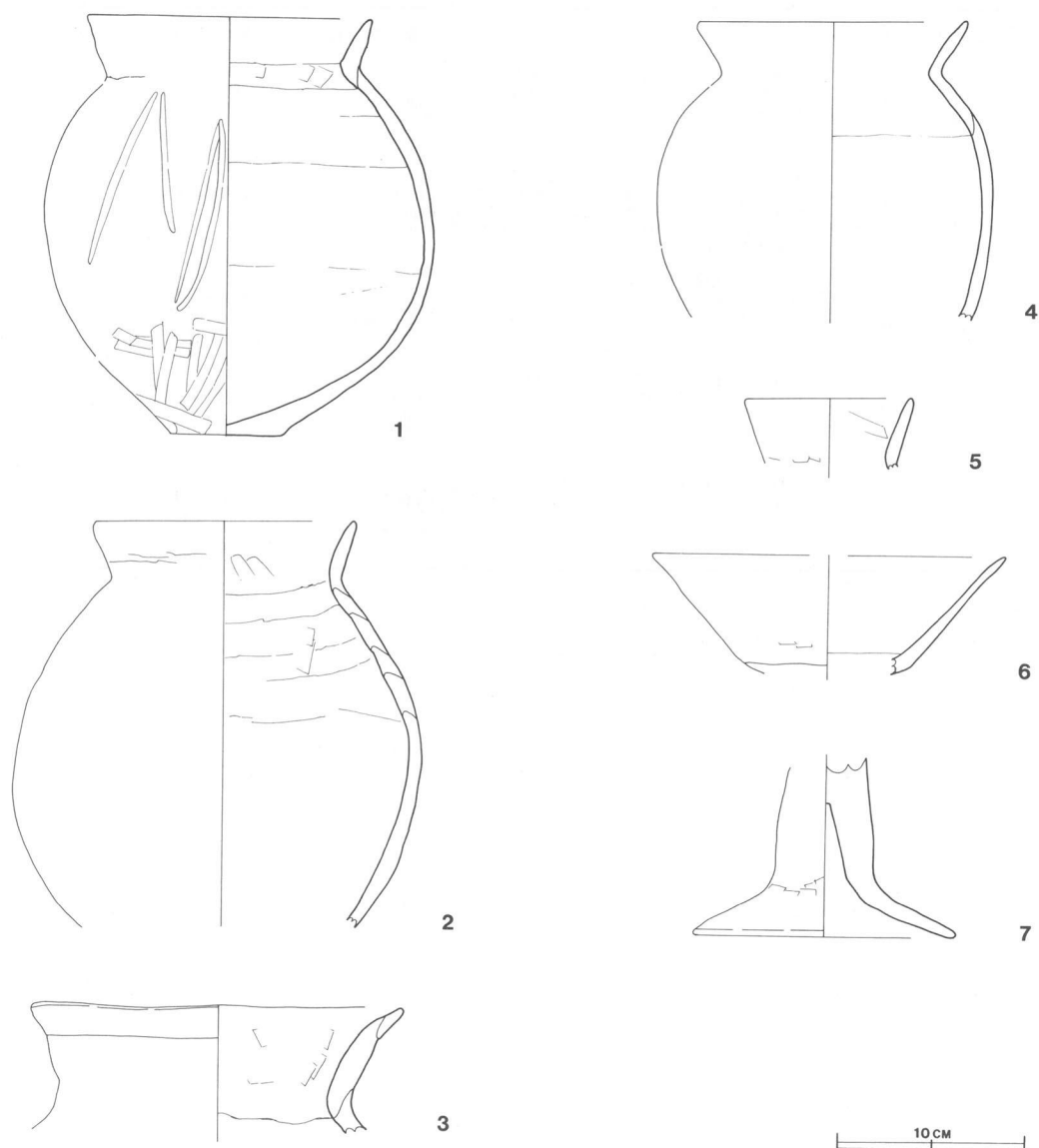


第105図 第47号住居跡実測図

#### 第47号住居跡 (第105図)

本住居跡はF6e<sub>3</sub>調査区を中心に確認されたもので、第37号住居跡の西側に隣接する位置にあり、長軸方向はN-47°Wを指す。規模は長軸2.45m・短軸2.4m・面積5.88m<sup>2</sup>を測り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は20~30cmを測り、壁はやや外反して立ち上がる。床面は凹凸してかたく踏み固められた状態である。柱穴は2か所検出され、平面形はP1が円形、P2が楕円形を呈し、径は17~50cmを測り、深さ15~23cmでV字形に掘り込まれている。

炉跡は床面のやや中央に長径68cm・短径50cmの楕円形を呈し、確認面から12cmほど掘り窪められた地床炉である。炉内には焼土と炭化粒子等が多量に混入し、炉床は焼けたロームで固い。



第106図 第47号住居跡出土遺物実測図

本跡覆土は主に褐色土の色調をもち、焼土粒子・炭化粒子（少量）・ソフトロームが混入し、自然堆積を示している。遺物は小型の住居跡のわりには多量に土師式土器片の検出がなされた。

出土遺物解説表

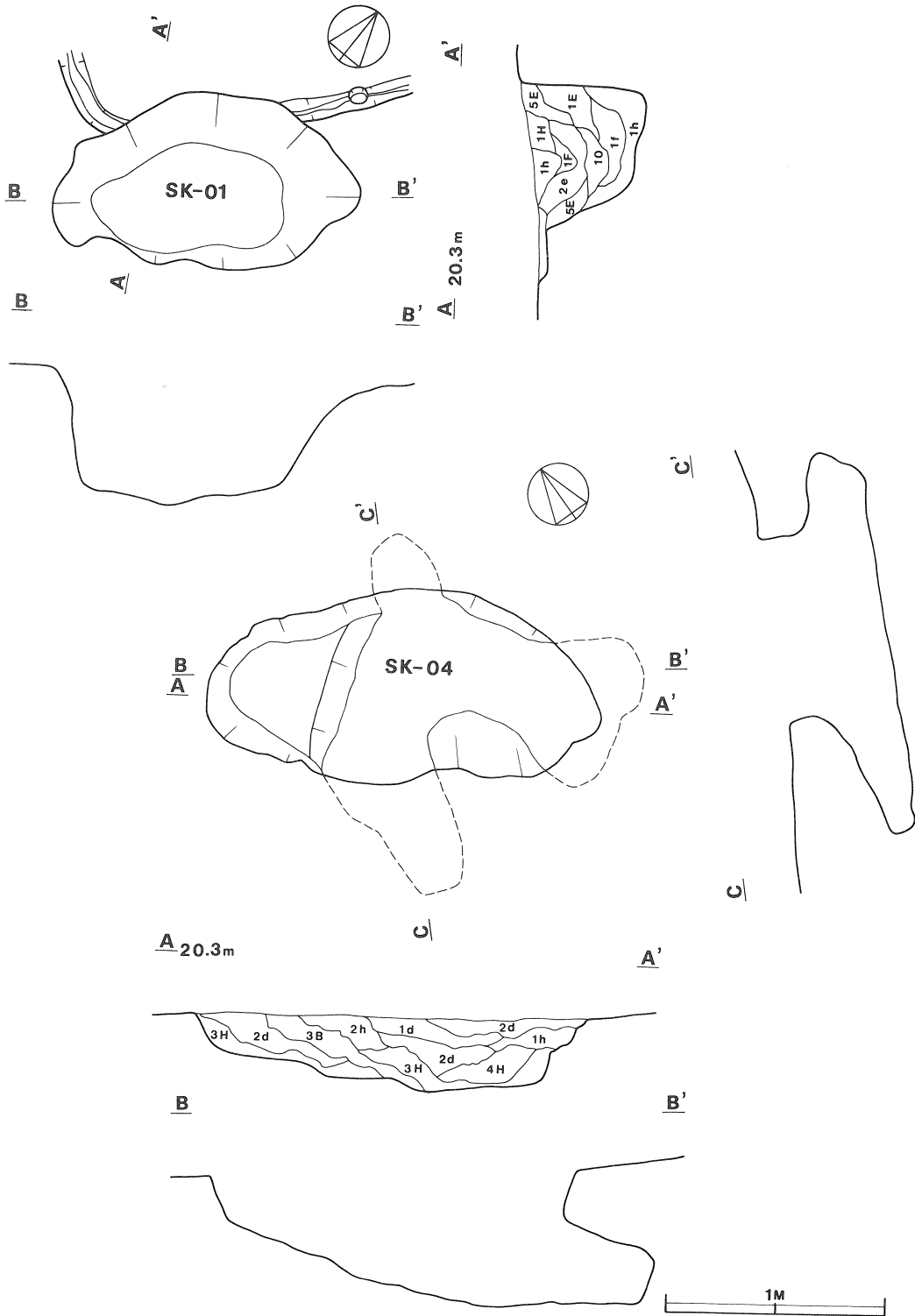
SI-47

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A 15.0 B 22.3 C 6.0	底部は厚味をもち、胴部は弧をもちながら最大径を測る中位部へと移行し、さらに内彎しながら頸部へ至っている。頸部から口縁は直線的に立ち上がり、口唇部でやや外反し尖がりを見せている。	口—横ナデ 内面—ヘラケズリ 外面—ヘラナデ ヘラケズリ	普通・砂粒・にぶ スコ リア 黒褐	60%
2	土師器 甕	A 13.6 B (21.5)	頸部から口縁にかけて直線的で、口縁から口唇部にかけてはやや外反して立ち上がり、先端は丸味をもっている。胴部はなで肩状で中位へ移行し、最大径を測る。中位から弧をもって底部へ移行する。	口内面—横ナデ 外面—横ナデ 輪痕あり 体部内面—ヘラナデ 輪痕あり 外面—ヘラナデ	普通・砂粒・にぶ 砂礫 雲母 スコ リア	40% PL 74-1

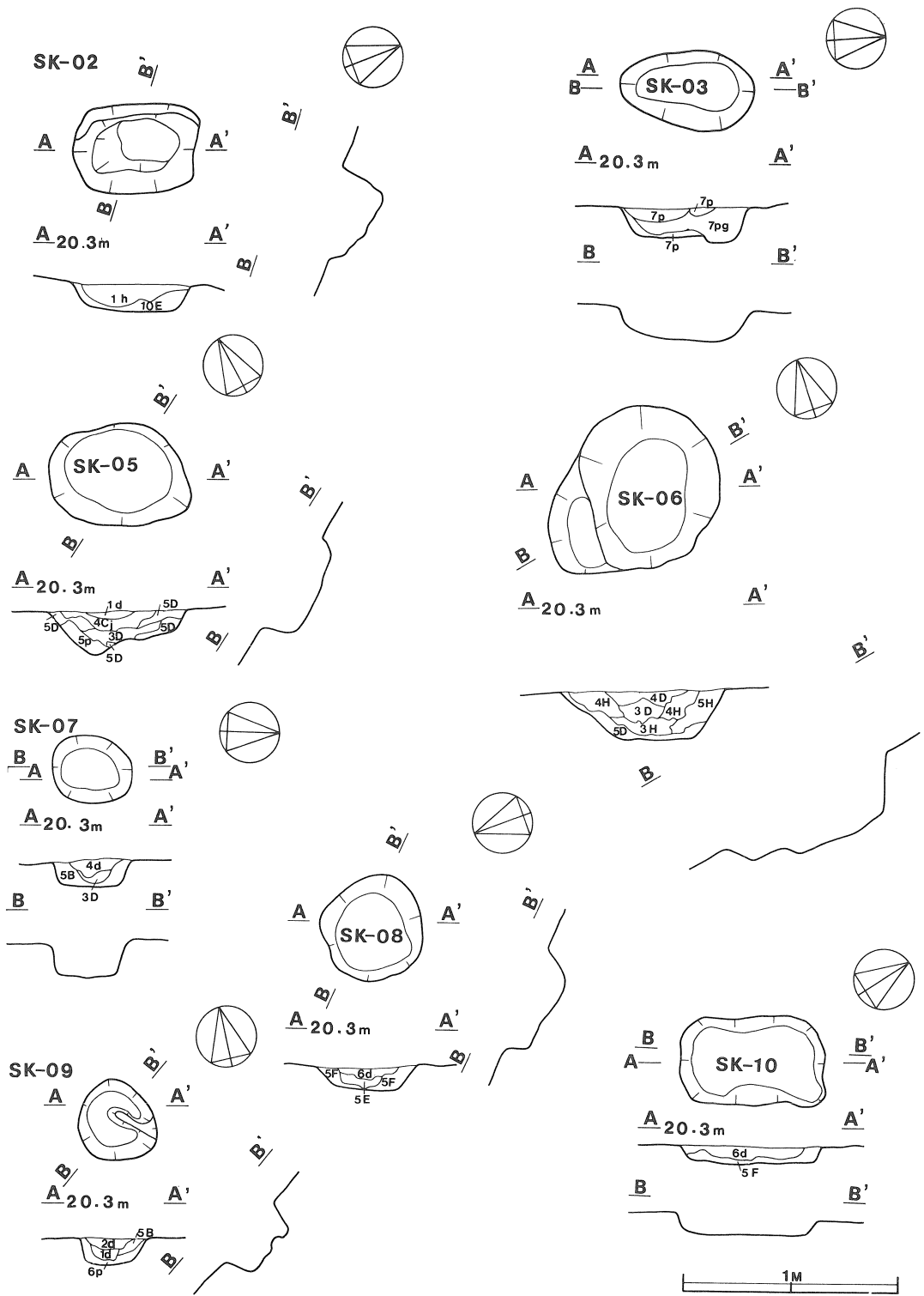


番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
3	土師器 甕	A 19.8 B ( 6.7)	口縁は折り返し口縁を有し、全体的に厚手の器厚を有している。口唇部は細身となり丸味を帯びている。	内面>ヘラナデ 外面>	良好・砂粒・にぶ い橙	口縁部100%
4	土師器 甕	A 14.2 B (16.8)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部は外反して立ち上がり、口唇部でさらに外反をみせ丸味を帯びている。胴部は器厚を一定に保ち、肩部からなで状に下方へ伸び、中位部で最大径を計る。	口ー横ナデ 内面>ヘラナデ 外面>	良好・砂粒・にぶ い橙	50% PL 74-2
5	土師器 埴	A 9.0 B ( 3.5)	口縁部は直線的に急勾配で立ち上がる。口唇部は丸味を帯びている。	内面ーヘラナデ 外面ー摩滅	軟弱・砂粒・橙 スコ リア	口縁部60%
6	土師器 高環	A 18.8 B ( 6.2)	環体部は朝顔状を呈し、口唇部付近で外反し、やや尖がりを見せている。	口ー横ナデ 内面>ヘラナデ 外面>	良好・砂粒・にぶ い橙	環部60% PL 74-3
7	土師器 高環	B ( 9.5) C 14.0	脚柱部は円柱状で厚手の器厚を有している。裾部は下方へ大きな広がりを見せ、先端はやや丸味をもっている。	内面ーヘラナデ 外面ーナデ 裾ー横ナデ	良好・砂粒・赤 スコ リア	脚部70% PL 74-4

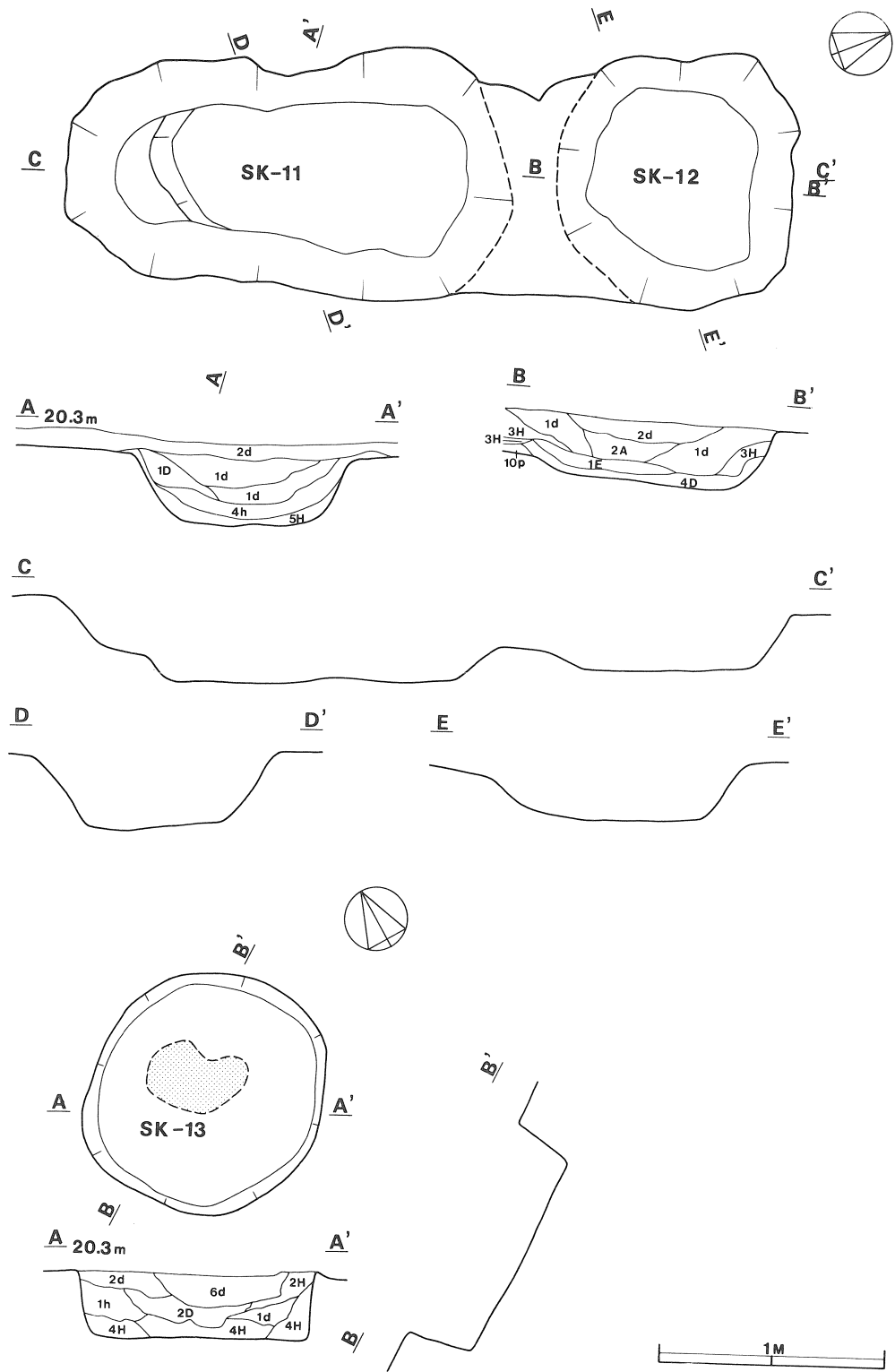
2. 土壤



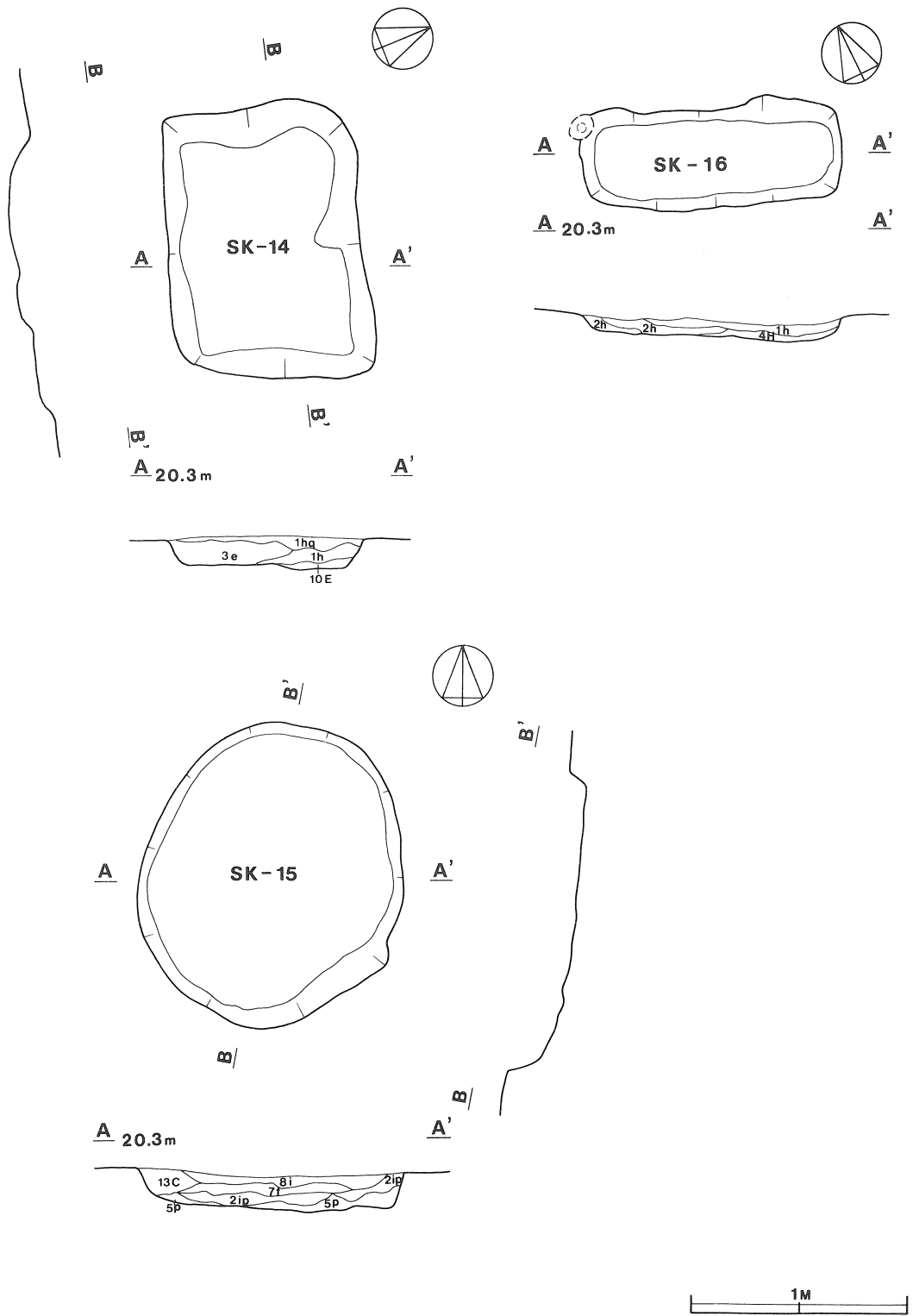
第107図 土壤実測図(1)



第108图 土壤实测图(2)



第109図 土 壙 実 測 図(3)



第110図 土 壙 実 測 図(4)

本遺跡で検出された土壌は16基で、遺跡の西、南側の位置に点在している。長径が1 mに満たない小規模のものが2基、1 mから2 mまでのものが6基、2 mを越す大規模のものが8基で、平面形もまちまちである。また、焼土粒子が少量含まれており、炭化粒子も検出されたものもある。

#### 第1号土壌 (第107図)

本土壌は、E2j<sub>6</sub>調査区に確認されたもので、遺跡の中心から南西部に位置し、第2号住居跡の南側で一部切り合っている。土層から観察して、土壌は住居跡より古い時期と考えられる。長軸方向はN-51°-Eを指し、平面形は不定形で、長径2.80m・短径1.55mと規模は大きい。深さは最深部で1.25mを測り、平坦な底面である。壁は底から外反して立ち上がり、覆土は暗褐色土・明褐色土が自然堆積しており、よく締まっている。

#### 第2号土壌 (第108図)

本土壌は、E2g<sub>2</sub>・g<sub>3</sub>調査区に確認されたもので、遺跡の中心から南西部に位置しており、第3号住居跡の北西壁のほぼ中央部を切って所在していた。長軸方向はN-20°-Eを指し、平面形は長方形で、長径1.14m・短径0.82mの規模である。深さは最深部で44cmを測る。底面は平坦で、壁は底からゆるやかに立ち上がっている。覆土はよく締まった暗褐色土・明褐色土が自然堆積している。暗褐色土には、焼土粒子・炭化粒子が少量攪乱して混入している。

#### 第3号土壌 (第108図)

本土壌は、E1j<sub>2</sub>・E2a<sub>2</sub>調査区に確認されたもので、遺跡の南西部第6号住居跡内に検出された。長軸方向N-11°-Eを指し、平面形は楕円形で、長径1.23m・短径0.74mのやや小規模なものである。最深部が25cmで、底面は平坦である。壁は底よりゆるやかに立ち上がっている。覆土は自然堆積で、各層とも黒褐色を呈し、ハードロームブロックが混入している。

#### 第4号土壌 (第107図)

本土壌は、D2g<sub>2</sub>調査区に確認されたもので、遺跡の中心から西側に検出され、東側12mに第9号住居跡が所在している。長軸方向はN-57°-Wを指し、平面形は不定形で、長径3.58m・短径1.77mの大規模である。深さは最深部が1.20mで、最浅部が40cmを測る。底は平坦であるが、壁は袋状に立ち上がっている。覆土は自然堆積で総じて暗褐色で、焼土粒子・炭化粒子・ハードロームブロックが混入している。

#### 第5号土壙（第108図）

本土壙は、E3c<sub>9</sub>調査区に確認されたもので、遺跡の中央部から検出された。第9号住居跡が東側12mに位置し、長軸はN-51°Wを指す。平面形は楕円形を呈し、長径1.35m・短径0.96mとやや小規模な土壙である。底面は平坦で、壁は底よりゆるやかに立ち上がっている。覆土は自然堆積で、暗赤褐色を呈し、炭化粒子・焼土粒子が混入してよく締まっている。

#### 第6号土壙（第108図）

本土壙は、D2i<sub>1</sub>調査区に確認されたもので、遺跡西側のSK-04から南へ8mの所から検出された。長軸方向はN-30°Eを指し、平面形は不定形である。長径1.50m・短径1.42mを測り、底面は平坦で、しまりがある。壁は底から外反して立ち上がっている。覆土は自然堆積で、褐色を呈し、ハードロームブロック・焼土粒子・炭化粒子が少量混入している。

#### 第7号土壙（第108図）

本土壙は、E2i<sub>7</sub>調査区に確認されたもので、遺跡の南西側SK-08の北西方向2mの所に検出されたもので、長軸方向はN-0°を指す。平面形は楕円形で、長径0.73m・短径0.63mと小規模のものである。底は平坦でしまっており、壁高は30cmで、底から垂直に立ち上がっている。覆土は自然堆積で、褐色を呈し、炭化粒子・焼土粒子が少量混入している。

#### 第8号土壙（第108図）

本土壙は、E2j<sub>7</sub>・j<sub>8</sub>調査区に確認されたもので、SK-07南東2m・SK-09西方側2mの所に検出されたもので、長軸方向はN-48°Wを指す。平面形は不定形で、長径1.0m・短径0.97mと小規模な土壙である。底は平坦でしまりがあり、壁高は26cmで、やや外反しながら立ち上がっている。覆土は自然堆積で、褐色を呈し、炭化粒子・焼土粒子が少量混入している。

#### 第9号土壙（第108図）

本土壙は、E2j<sub>8</sub>・j<sub>9</sub>調査区に確認されたもので、SK-08東側2mの所に検出された。長軸方向はN-47°Wを指し、平面形は円形である。長径0.78m・短径0.70mで小規模な土壙である。底は、凹凸状でややしまりを帯びている。壁高は27cmを測り、壁は外反しながら立ち上がっている。覆土は自然堆積で、暗褐色・明褐色を呈し、焼土粒子・炭化粒子が少量混入している。

#### 第10号土壙（第108図）

本土壙は、E3h<sub>2</sub>調査区に確認されたもので、SK-07の南東約1mの位置から検出された。長軸

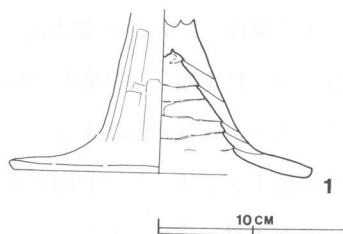
方向はN-35°Eを指す。平面形は長方形を呈し、長径1.33m・短径0.80mである。底は平坦で、やや軟弱である。壁高は19cmを測り、壁は底から東側でゆるやかに立ち上がっており、西側はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は、褐色・極暗褐色の自然堆積であり、炭化粒子・焼土粒子が少量混入している。

### 第11号土壙 (第109図)

本土壙は、E3e6・e7調査区に確認されたもので、SK-12の南側に検出され、長軸方向はN-21°-Eを指す。平面形は楕円形で、長径3.93m・短径2.25mと大規模な土壙である。底はやや凹凸を呈し軟弱で、褐色のロームである。壁高は最も深い所で63cmを測る。壁は底から外反気味に立ち上がっている。覆土は暗褐色・褐色を呈し、炭化粒子・焼土粒子等が少量混入している。

### 第12号土壙 (第109図)

本土壙は、E3d7調査区に確認されたもので、SK-11の北側に検出された。長軸方向はN-67°Wを指し、平面形は不定形である。規模は長径2.20m・短径2.10mを測り、大きい。底は平坦でやや軟らかい。壁高は浅い部分で25cm・最深部で50cmを計測する。壁の立ち上がりはなだらかであり、覆土は全般に褐色で、炭化粒子・焼土粒子が少量混入している。高坏土器の出土が見られた。



第111図 SK-12出土遺物実測図

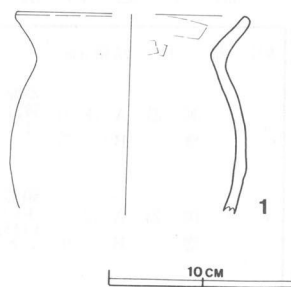
### 出土遺物解説表

SK-12

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 高坏	B(8.5) C 16.2	脚部は円錐状を呈し、裾部は広く開きをもち、脚部内側は輪積痕を有している。	外面-ヘラナデ 裾-横ナデ	普通・砂粒・にぶい橙	脚部50%

### 第13号土壙 (第109図)

本土壙は、F3b9・b0調査区に確認されたもので、SI-19の北側4mの地点で検出された。長軸方向はN-55°Eを指し、平面形は円形を呈する。長径2.14m・短径2.03mを測り、規模は大きい。底は平坦でややしまりを帯びている。壁高は55cmで、立ち上がりは垂直である。覆土は暗褐色で焼土粒子・炭化粒子が少量混入している。土師式土器の検出があった。



第112図 SK-13出土遺物実測図



出土遺物解説表

SK-13

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 小型甕	A (12.2) B (10.5)	頸部から口縁部にかけて直線的に開きを見せ、口唇部は丸味をもっている。胴部は肩部からなで肩でカーブをもち底部へ移行する。	口一横ナデ 体部一ヘラナデ	普通・砂粒・にぶい橙 スコリア 雲母	30%

第14号土壙 (第110図)

本土壙は、E2a5調査区に確認されたもので、SI-08に隣接した所に検出された。長軸N-78°Wを指し、平面形は不定形を呈する。長径2.57m・短径1.84mを測り、規模は大きい。底は平坦である。壁高は14cm前後で、外反しながら立ち上がっている。覆土には焼土粒子・炭化粒子が少量混入している。

第15号土壙 (第110図)

本土壙は、F5e4・e5調査区に確認されたもので、SI-40を切り込んで検出された。長軸方向はN-17°Eを指し、平面形は楕円形を呈している。長径2.80m・短径2.38mを測り、大規模土壙といえる。底は凹凸状を呈しており、壁高25cm前後で壁は外反気味に立ち上がっている。覆土は黒褐色土を主体として底面付近はロームブロックが多量に混入している。遺物は、底面に土師式土器が多量に検出された。

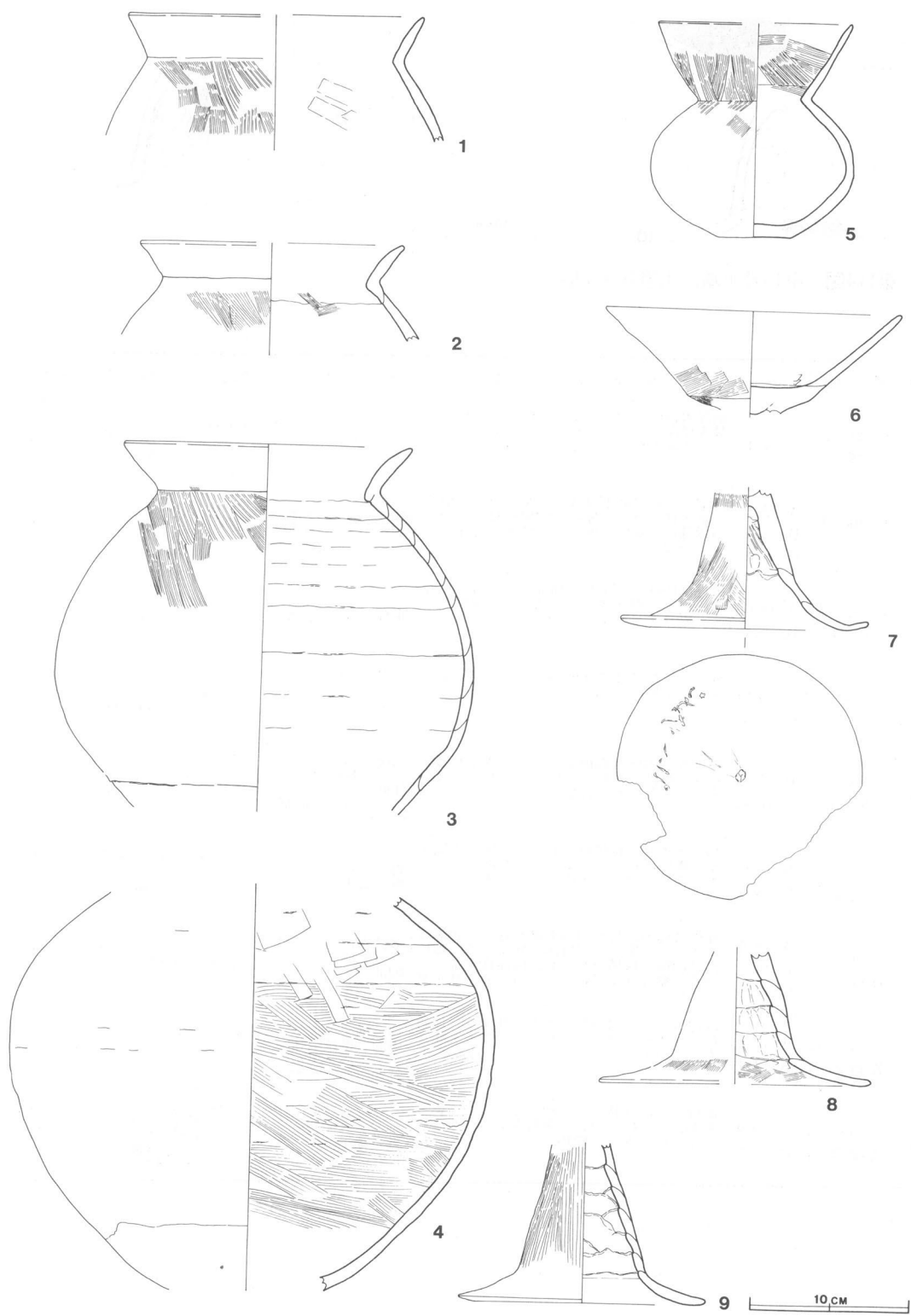
第16号土壙 (第110図)

本土壙は、F6e7調査区に確認されたもので、SI-46内のほぼ北東部の一部を切って構築されていた。長軸方向はN-64°Wを指し、平面形は長方形を呈している。長軸2.43m・短軸0.92mを測り、規模は大きい。底は平坦で、壁高14cmを有し、壁が外反しながら立ち上がっている。覆土は黒褐色で、焼土粒子・炭化粒子が少量混入している。

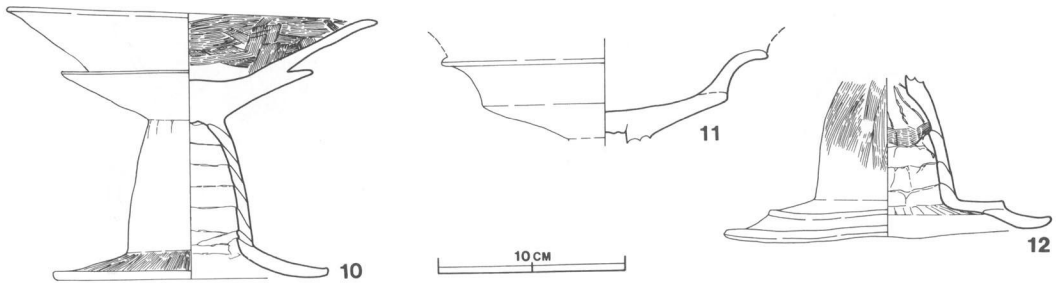
出土遺物解説表

SK-15

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
1	土師器 甕	A (18.2) B (7.7)	器厚を一定にし、口縁部はやや外反し、口唇部でさらに外反する。頸部から胴部上位はなで肩状である。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ハケ目調整	普通・砂粒・橙 スコリア い橙	10%
2	土師器 甕	A (16.1) B (5.9)	頸部は「く」の字状を呈し、口縁部はやや厚手の器厚を有し「八」の字状に広がりを持ち、口唇部で丸味を帯びている。胴部は肩部からなで状に下方に移行する。	口一横ナデ 内面一ナデ 外面一ハケ目調整	普通・砂粒・にぶい橙 にぶい褐	20%
3	土師器 甕	A 17.8 B (22.8)	胴部は弧状を呈して、中位部で最大径を測り、頸部は「く」の字状を呈し、口縁は外反をみせている。口唇部はなめらかであるが、尖がりを見せている。	口一横ナデ 内面一ヘラナデ 外面一ハケ目調整 ナデ	普通・砂粒・明赤 褐 褐灰	80% PL 74-5



第113図 第15号土壙出土遺物実測図



第114図 第15号土坑出土遺物実測図

SK-15

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	整形技法	焼成・胎土・色調	備考
4	土師器 甕	B (24.4)	胴部の器厚はやや一定で中位よりやや上で最大径をとり大きく弧状を呈している。口縁・底部欠損。	外面一ナデ	普通・砂粒・にぶい橙灰褐	胴部85% (70%)
5	土師器 埴	A 12.1 B 13.4 C 4.6	底部は平坦で胴部は大きく張り出し、中位で最大径を計り、頸部へ内彎を見せている。口縁部は直線的に開き、口唇部は丸味もっている。	口一横ナデ 内面一ハケ目調整 外面一ハケ目調整のあとナデヘラミガキ	普通・砂粒・橙砂礫	90%
6	土師器 高坏	A 18.6 B 6.4	脚柱は円柱状を呈し、裾部になだらかに向っている。裾部は器厚を減じ、先端近くでそり返りを見せている。	外面一ハケ目調整	良好・砂粒・にぶい橙	坏部90% PL 74-6
7	土師器 高坏	B (8.5) C 15.4	底部は平坦で坏部は朝顔状で器厚は一定である。口唇部は丸味を帯びている。	口内面一横ナデヘラナデ 口外面一横ナデナデハケ目	良好・砂粒・にぶい橙	脚部90% PL 75-1
8	土師器 高坏	B (8.3) C (16.8)	脚柱部の内側は輪積痕を有し、器厚を減じながら裾部へ移行し、広く開いた裾部は一定した器厚で、先端は丸味もっている。	内面一ハケ目輪積痕 外面一ナデハケ目調整 裾一横ナデ	良好・砂粒・にぶい橙	脚部60%
9	土師器 高坏	B (10.0) C 15.4	脚柱部内側に輪積痕を有し、円柱状を呈する。裾部は器厚を一定に保ちなだらかに下方へ開いている。先端はやや丸味もっている。	脚部一ハケ目 裾一横ナデ	普通・砂粒・橙にぶい褐	脚部90%
10	土師器 裝飾器台	A 19.6 B 14.6 C 14.5	受部は外面に裝飾用の突帯を有し、底部は平坦で広く開き、口唇部で外反する。脚柱部は内側に輪積痕をもち、円柱状を呈している。裾部はなだらかに下方へ広がりを見せている。	坏部内側一ハケ目 外側一ナデ 脚部一ナデ 裾一ハケ目	普通・砂粒・橙	80% PL 75-2
11	土師器 裝飾器台	A (17.4) B (4.4)	底部は平坦で口縁部は大きく外反し、口唇部ではさらに外反し、水平にのび、丸味もっている。	口一横ナデ 内面一摩減気味ヘラナデ 外面一ヘラナデ	軟弱・砂礫・橙スコリア	受部60%
12	土師器 裝飾器台	B (8.8) C 17.5	脚柱部は円柱状で割合頑丈なつくりである。裾部はやや横にのび、突起をもち一段下げてややせりかえる様相を呈している。	脚部一ハケ目 裾一横ナデ	良好・砂粒・にぶい橙砂礫(石英)にぶい黄橙	脚部ほぼ100%

## 第4章 ま と め

小貝川の下流域と利根川が合流するあたりは、広い沖積平野が形成され、自然堤防上に営まれた市街地が龍ヶ崎市中心部とその周辺である。この低地を南に望むいわゆる稲敷台地は、あたかも独立丘陵を連ねたような半島状の地形をなしており、その一部である駒馬の台地には、若柴・稲荷新田・駒馬の集落がほぼ一直線上に開けている。この駒馬の台地縁辺部は、成沢遺跡（古墳時代）が所在し、その南東の駒馬地区集落に接して、平台遺跡が位置している。

調査の概要及び遺構・遺物等については、前章で記述しているので、ここでは発掘調査によって明確になった事実をもとにしてまとめ、今後の古墳時代（中期）の集落跡の研究の参考に供したいと思う。

今回の発掘調査において確認された遺構は、前述のように住居跡47軒で、古墳時代中期の和泉期に比定されるものであった。ほかに土壌として分類したものが16基あるが、住居跡と重複して検出されたものが4基（第1号・第2号・第15号・第16号）で、大半が同時期のものであると思われるものの、第15号土壌以外は遺物の検出もほとんどなく、適確な資料が得られずその用途について明らかにすることはできなかった。

住居跡は、一辺5m前後のいわゆる同時代の通常形のものを中心としているが、調査区東側で、一辺7mを越す比較的大型の住居跡が多く、その最大は、第35号住居跡（長径9.62m・短径9.42m）であった。また、最小のものとしては、第47号住居跡（長径2.45m・短径2.40m）が検出されている。

大半の住居跡が炉をもち、多くが床面のやや北西よりの中央部付近に集中している。そのほとんどが地床炉であり38基を数える。平面形は、楕円形が主でその他は円形と不定形である。炉床はおおむね固くしまりをもち、焼土・炭化粒子等を多く含有し褐色土・暗褐色土の堆積が見受けられた。

貯蔵穴としては、概して、平面形が主に楕円形を呈している点、および住居跡のコーナーに設けられていることなど、この時代の住居跡としては、特別な差異を認めることはできない。前期の五領期では一方の壁の中央に近い床面に掘り込まれることが多く、やがて鬼高期に竈が出現すると、その傍に移動することが知られている。

炉と貯蔵穴の相関関係についても、炉跡に最も近い壁に対向する壁のコーナーに貯蔵穴が設けられていることから、今回の発掘調査でよく裏付けられたことと思われる。

住居跡の大半は四つの支柱穴を有しており、ほとんど規模が一定で、おおむね円筒形に掘り込まれていた。その中であって、第21号住居跡及び第37号住居跡は棟持柱と思われる柱穴が検出さ

れている。また、壁下には、壁溝及び壁柱穴が確認された住居跡もあった。

出土遺物については、土器のうち高坏形土器が多量に検出されたのも、和泉期の特徴をよく示していると思われる。古墳時代前期（五領期）とともに、供献とされているこの種の器形は、各住居に日常生活の上での必需品の一部とする見解があり、しかも、単体としてでなく複数で機能したと思われる。第32号住居跡の例に見られるように、高坏形土器23個体分以上が一括出土したことは注目に値する。その他の出土遺物として顕著なものは、甕形土器・壺形土器・埴形土器・埴形土器等が検出され、加えて土錘・石製紡錘車・鉄製品が出土している。また、土器の中には煤が多量に付着したのも確認されており、さらに、多量の焼土や柱等と思われる炭化材が検出され、屋根を葺く材料に使用されたと思われる炭化した茅の検出も見られている。

今回の発掘調査で、竪穴住居跡47軒のうち、少なくとも14例の火災による焼失と思われる住居跡が認められた点も特筆に値する。しかも、住居跡の上部構造等を考えるならば、火災を起こす確率そのものが高かったとも考えられる。また、この地方の冬季は乾燥した北西風が強くふき、夏季は晴天が続き雨量が少なくこれら気象条件から考察しても、他住居跡や野火からの被災率が高かったとも思われ、あながち無視することはできないのではなからうか。今後、多くの類例の研究を重ねて行くことが必要と思われる。

前述したように、当遺跡からは、遺構が台地の平坦面に東西に長く分布しており、遺構の遺存状態は東側のもほど良好である。また、遺跡の南側及び東側のエリア外にまで分布しているものと思われる。

龍ヶ崎市管内における、当教育財団の発掘調査で古墳時代に比定されている遺跡は、松葉遺跡をはじめ7遺跡あまりであるが、そのほとんどが前期にかかわっており、中期は当平台遺跡のみである。これからみても和泉式土器を検出する遺構は県内では割合少ないのではないかと思われる。五領期と和泉期との関係は出土した土器を観察すると、器形の上では、際立った変化が見られず、その意味からも五領期から和泉期へスムーズに移行していったことがわかる。

今後、古墳時代の集落跡を系統的に研究し、数少ない和泉期の住居跡と、その前後の五領期・鬼高期との関連性を探究し、さらに真間・国分期と深みを加えながら、それぞれの時代とその背景をとらえ、さらに流れを考察することも課題であると考えられる。